市嶋春城潜

春城談叢

千歳書房刊

春城談叢

市嶋春城著

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

春城談叢

市嶋春城著

千歳書房

春城談叢

市嶋春城著

小序

五六年前餘生「兒戯」一書を富山房から出して隨筆の最後としたが、昨年末、千歳書房が余の隨筆を出したいと云ふて來たので、應諾を躊躇したが、實は此の三四年間折りに觸れて書き散らしたものが相當堆をなしてゐる。それは閑耳目の筆錄で、公刊を期して作つたものでないから雜駁を極めた亂稿が少くない。殊に時事に關するものゝ如きは、走馬燈の如き變轉する此の世の中に於ては、今日書いたものが月を出ずして陳腐に屬するから、それ等は皆廢紙として還元紙料とせねばならぬ。殘る所は自家の遺忘に備ふるためのものが多い。世益にはならぬにしても自分としては棄て難いものもある。試みに目次を作つて見ると、大政翼贊に關するもの、藝苑に關するもの、回顧懷往に屬するもの、自然界の趣味に關するもの、書齋の掃き寄せたる雜俎が百件にも及ぶ。書房は此等を見て是非出版をと慫慂するから、若干舊隨筆からも取り入れて終に其囑に應ずることにした。自分は今老病に罹つて居り、文章改作の氣根もなく、印刷

校正の勞を取るにも懶く、亂稿を共まゝ書房に交付するを餘儀なくされた。恐らく他日の悔を招くことであらうとも思ふ。讀者幸ひに杜選を咎むる勿れ。

昭和十七年シンガポール陷落の日

著者しるす

春城談叢　目次

小序

時局雜感

近衞公と新體制……一

維新の革新運動を顧みて……五

七十年前の吏道の一班……九

新體制の今昔……一三

統制困難の一例……二一

日露の役を顧みて……二四
序戰の大捷に陶醉する莫れ……二八
興亞の大業……三一
大量趣味……三八
日本は至幸の國……四三
八十歳を迎へて……四五

藝苑叢話

維新の變革期を顧みて國畫の消息を語る……四九
外人の日本畫觀……五六
詩畫その本領を異にす……五九

竹田と山陽の交情……六一
立原杏所……六六
本居宣長……七〇
葛飾北齋……七一
葛飾北齋家居の圖……七三
畫家小川芋錢……七四
原久一郎氏の大トルスイ全集完成……七五
南方常楠氏……七七
墨場一家言……七九
詩歌の新體制……八八
名家私印の蒐集に就て……八九

醉印人……九七
家庭は合作藝術……九八
プロ階級と醫者……一〇一
寧ろ濫讀を勸む……一〇四
朗讀と話術……一〇九
セメント藝術……一一一

自然界雜話

富士山……一一五
岳麓の五湖に泛ぶ……一一八
黑部の溪谷……一二三

あこがれの詩の國讃岐……一二一
自然を愛する日本人の趣味……一二四
植物界の奇觀……一四二
本艸漫言……一四八
公孫樹……一五五
偕老同穴……一五七
馬……一五九

懷往瑣談

帝國議會開設當時の政情……一七一
我國最初の臨時議會の思ひ出……一七四

條約改正の斷末……一七六
大隈老侯の國民葬……一八一
記憶すべき逐鹿戰……一八四
早稻田大學の生れた頃……一八七
大震災の思ひ出……一九一
廣い避難所が欲しい……一九六
演說思ひ出譚……一九九
結婚叢談……二〇八
死線徂徠……二一五
川柳の語る尼寺……二一二
箱根の舊道に雲介歌を聽く……二二五

箱根の荷物……二三六
地方の家庭美（附失業對策）……二三一
講中……二四七
盆おどり……二四九
村居の爐邊……二五〇

書齋の掃き寄せ

西園寺公の葬儀と國民葬……二六一
松平賴壽伯……二六四
中村敬宇翁……二六八
大隈侯と操觚界……二五五
二五八
二五九
二六二

矢野龍溪……二六八
石黒子爵……二七〇
佐久間象山の遺事……二七五
臥虎山の故侯爵……二七七
小栗上野の事……二八一
田中正造……二八四
鈴木牧之翁に就て……二八六
山田奠南を憶ふ……二八九
同獄の友人を喪ふ……二九一
野口英世博士改名の由來……二九七
佐藤功一博士……二九九

伊原青々園……三〇〇
江部淳夫氏……三〇一
樋口一葉全集の刊行に際して……三〇三
山鹿素行……三〇五
河村瑞軒と越後……三〇七
吾郷の大數學家……三〇九
淡窓と旭莊……三一二
誇大妄想狂と思はれたヒットラー……三一三
ヘルン……三一四
キチナー元帥と陶器……三一五
釋尊の風貌……三一六

酒豪樽次の事……三一七
外人に日本の女性を語る……三二〇
復讐と宗教……三二七
自殺禁止の困難……三二九
三浦鳩村集中の三話……三三一
黄金……三三三
黄土……三三七
木綿……三三九
獄中の綿と木綿……三四一
石油の思ひ出……三四四
軍艦の紛失……三四六

雷……三四八
氷塊……三四九
瓢……三五一
枕に就て……三五七
酒意……三六〇
日々是好日……三六二
婦人は一家の碇……三六四
孤獨……三六八
燈臺守……三六九
明治天皇の御製……三七〇
初めをつゝしめ……

養生の要訣……三七〇
古歌を藉りて自ら嘲る……三七一
曙覽の歌……三七二
野村望東尼の和歌……三七五
幼兒を詠める和歌……三七五
坪內逍遙博士の和歌……三七六
尾崎紅葉佐渡の句……三七七
味ふべき警語……三七八
わかもと……三七九
嘲罵の稱……三八〇
城……三八一

校正難……三八四
活字因緣……三八六
太陽の監視……三八八
氣宇の大を欲す……三八九
陣中の隹癖……三九〇
田植唄……三九一
靖國神社の擴張……三九二
產兒奬勵……三九四
古るい銀座の回顧……三九七
銀座の懷古……四〇三
銀座暗黑面……四〇八

汽車中の國際醜……四〇八
愛馬デーの回舊談……四一一
力づくの品定め……四一三
小說の挿畫……四一五
大骨董……四一六
至言抄……四一七
旅舍と茶代……四二〇
溫浴雜談……四二四
歩け〳〵……四二六
スパイの今昔……四二九
說客へス虎穴に入る……四三三

探偵趣味……四三四

春城叢談目次 終

春城談叢

時局雜感

春燈叢

近衛公と新體制

近衛公は第二次首相として現はれ出た。公の人氣は強勢のもので陸軍を始め各黨も、公にあらずんば時局の收拾は出來ん。尙進んで革政を冀望することには萬口同音である。公は果して闔國第一の人物であらうか、門閥に於ては何人も爭ふことの出來ない人だが、政治家としてはマサカと思はれる。しかし政治家に尤も要するものは人氣である。衆望が一身に集まると云ふほど、政治家の强みは無い。公の門地は歷史的最高位を占め、公に於ても何等私に求むる所はない。公が滿腔の經綸を行ふに其の方途を誤らずんば、何を爲すとして成らざらん、庶政の革新は此人を待つて始めて成し得るのである。

公には獨自の革新案があり、それが大體時患を濟ふに適切であるこそ仕合である。第一は、軍の統帥が內閣首相の思ふ所と背馳したり、外交と摩擦を生じたりすることが、これらの內患であつて、先づ之れを救治することが、何よりも大切であるのに鑑み、公は組閣の初めに方り

陸海外相と協議して意見の一致を見、爾來此の四相會議を連續して開くに決した。これに據れば軍部と外交が扞格するごときことは先づ無い筈である。公は兼ねて保持する議會の改革を此の場合に行はんとしてゐる。何れ選擧法の改正も行はるべきであらうが、公は從來の政黨は弊害ありとなし、眞に國家を憂ふる政黨の樹立を欲してゐるので、各黨はそれに應じ皆解黨を行ひつゝあり、果して新黨は公の庶幾するごとく出來るや否やは、今後の實蹟に徵する外はないが、公の翼圖は決して從來の政黨を、名稱の變つた政黨とするのでなく、全く既成の政黨を葬り去り、新たの精神を備ふる人を以つて組織せんとするにある。政府の方針に從つて其の達成に努力する一黨を組織せんとするに在る。これまでの政黨は自由主義を基調として、國家の統制と干渉を最大限に縮少することを要求してきた。然るに今は計畫的統制經濟が强化せしめらるゝ現段階に於て、政治の基本原則は政治は自由に代はるに正義の實現でなければならない。卽ち公益優先の倫理を基調とするものでなければならない。此の新たなる國民的倫理觀によつて初めて國家的奉仕と人々の相互扶助の共同精神が、各自の行動に現はれてくるのである。卽ち政黨の革新は根本的であり、既成政黨を解くのは、全く其黨の葬式であらねばならぬ。其黨を公の意味する新黨に鞍かへするものではない。尙此の新黨は軍部を始めあらゆる階級を網羅

せんとするにある。卽ち國民全體を包羅して政府の國策を援助するに在るから、其範圍は廣く且つ選擧への心得も從來と全く異ならざるを得ない。之れを行ふにはある目標を立てゝ、それに基づいて立黨せねばならんが、從來の選擧法を改めねば其目的を達することが出來ない。近衞內閣の今後の仕事の大なるものゝ一は、選擧法の改正であらう。公が心腹の人を特に司法內務に置いたのも、此の目的の達成にあることを思はねばならぬ。

近衞公の聲明を聞くに、政治を明朗にし國民をして政治の實體を會得せしめんと云ふてゐる亦徒らに聲を大にして其事の擧らざるを非とするとも云ふてゐるが、これが尤も大切である。從來官僚の爲す所は政治に明朗を缺き、國民をして迷はしむることが多い。これは官僚の宿弊で、彼等が隱れる所はそこにある。彼等は互ひに其の奉仕の場所に割據して、徒らに成例を墨守し、それを破らざることを以つて一概に職掌に忠なるものとなし、他の局課と常に爭ふて徒らに日を曠ふし、事務に滯滯を來すことを寧ろ官吏の特色としてゐる。勿論政治の明朗など望み得べきでない。畢竟革新が斯る弊竇に及ばねば、政治は到底明朗を得ない、近衞內閣は此處に快刀を揮ふことを要する。

政治機關の甚だ多端複雜であることも政弊の一だが、之れを簡單化することは、有力なる首

相にあらずんば、出來難い事に屬す。例へば厚生省の如き之れを內務文部に併せ、經濟省に商工、農林、拓務を合し、遞信と鐵道を合するなど、實を云へば陸海內務外務の外は省を置かず、各部に長官を置くだけでも間に合ふのであるが、近來新たに事務が生ずれば必らず役所が起り、屋上屋を架して複雜に堪へざる趣がある。これが簡單化を圖ることも亦近衞公に吾等は囑せざるを得ない。

要するに今の世界に處する日本の主義は國防であらねばならぬ。何もかも國防にかけてゆかねばならぬ。國防と云へば軍備に相違ないが、經濟も亦國防に至大の關係がある。あらゆるものが國防の爲めに統制を要する。卽ち國民の思想も自由主義でなく國防の爲め統一されねばならぬ。從來の黨派は自由主義に立脚してゐるから、之れを改めて國防本位の一元にせねばならぬ。議會も亦然りである。政治の新體制を要すると云ふのも、此故であつて、昔しは軍のみが統制を要したが、今は軍備に關係ある思想・產業・經濟あらゆるものが統制を要する、其の統制が無ければ國防は充分でない、斯くなると從來の自由主義は寧ろ統制の敵である。國防の爲めにはあらゆるものを犧牲にしなければならぬ、これが則ち政治の新體制である。

維新の革新運動を顧みて

昨今の新體制運動、卽ち大政翼贊運動は、一種の政治的革命であり又社會的經濟的改革でもある。西洋文化を採り入れた結果として、種々行過ぎの爲め漸やく弊害が堆積して來たのを一掃して正に反さんとするのも、此の運動の目的の一つであり、支離滅裂の經濟を統制するのも又目的の一つであり、上下心を一にして國運發展に邁進せんとするのも亦目的の一つであり、其の革新の範圍は頗る廣汎で、一々列擧することが出來ない程多端で、且つ複雜である。小は各家庭の日常生活に及び、大は天下國家の大政にも及ぶ、斯る運動は、勢ひ舊來の因襲を變じ人の放縱を抑へるものであるから、最初は何人も苦しく感じ、隨つて非難も起るがこれは革新の道程に於て已み難いことで、其の落着きを見るまで是非ないことである。

併し我國に於て幸とすべきは、どんなむつかしい事でも、成し遂げられないことはなく、種々曲折はあつても結局成功する。維新の革新運動を振り返つて見ても知れるが、幾百年割據し

て根を張つた、藩籍奉還がよくもスラ〳〵と出來たものだ、佩刀の禁止や全國皆兵が、よくも圓滑に成つたものだ、と誰れしも思はざるを得ない。但し此の革新の道程に於て、面目を一新するに急なる餘り、舊物打破に行き過ぎも少からずあつた。神佛混合を廢した爲めに、佛像を不用として二足三文に賣却したり、城や寺の塔などを無雜作に拂下げたり、京都の皇居までも不用として拂下げんとしたり、殖産開拓の爲めにと云ふて山林を濫伐したごとき、後日に及んで悔いたことがいくらあつたか知れぬ。

今度の新體制運動に於て、誰れにも一番むづかしいと思はれた諸政黨が先づ自から解散したが、これは宛かも藩籍奉還にも比すべきものだ。しかしいつの革新運動でも、末節に觸れると意外の困難を生ずる、例へば食糧問題の如き人命の關する所だけに、これに觸れるとなか〳〵面倒が生ずる。食糧の制限は可としても配給が甘く屆かなければ、不平の生ずるのも已むを得ない。いつの世でも生活問題に觸れると其の行違が遂に騷亂を惹き起す基となる。要は大綱の刷新に重きを置き、末梢細微の事は苛察に流れないやうにすることが肝腎だ、昨今忌はしい流說の起るのも主として生活問題の苛察にありとせねばならぬ。統制もよし物の單純化もよいが、これにもおのづから限度があつて、餘りに行き過ぎては折角發達した日本特有の工藝を永

久に葬り去る如き不利が生ぜぬとも限らない。これは固より統制の本意とする所でないが、其の行違には此の處れがある。

兎角革新運動には目前の事に苛察がつきものである。維新の場合にも、末梢に觸れたことが少なくなかつた。例へば風俗上の事で云へば、遣警罪の取締が頗る煩雜で路上に放尿することを始め、放歌騷擾を過料に處したり、裸體で市上を歩することを禁じ、車夫が脚部を露はすことすら禁じた如き、餘りに末梢的の取締に偏したかの觀があつた。當時結髮を强制して散髮にしたことなども實はなかなかの困難を極めたもので、何から何まで日本の習慣を西洋風に改めんとして、遂には鹿鳴館でダンスまでやり、娼妓に自由廢業をやらせたりして、一概に西洋を崇拜して彼等の說に心醉し、個人主義が行はれ出して我儘勝手をやつて家庭の秩序を紊し、資本主義を過信して、公益を顧みず個人の私利を貪るのを經濟道德であるかの如く盛んに行はれたことなどは、皆西洋文化の行き過ぎで、日本の國體とは相容れぬ惡風で、これを掃蕩して正に復するのが、卽ち新體制運動の必要ある所以である。

我が古來の歷史に徵しても、支那或は印度の文化を容れた際に、隨分行過もあつたに相違なく、それに對して當座非難をしたり其弊を嗚らしたものもあつたであらうが、漸やく年を經て

日本化するまで歳月の摩擦を經ると、こゝに初めて落着を見た。上代の大化一新の改革の如き、六十年の歳月を經、大寶令が發布されて初めて完成されたと云はれてゐる。維新の革新は割合に早く落着いたが、それにしても落着までに少くも十年を要したと思ふ。十年の西南戰爭が恐らく完了期と見るべきであらう。今度の運動も今の處は混沌として誤解も起り或は歸趨に迷つたりして、何んでも窮屈のことを新體制だと云ふたり、氣に喰はぬことを新體制だと云ふて强いて我慢するやうなことがあるけれども、結局歳月の摩擦が淨化するであらう。兎に角斯る革新は、或る據どころない時機に起るもので、斯る場合で無ければ不成功に終るものである、卽ち昨今は未曾有の戰時で、支那を相手に四年越し大戰を交へて未だに片付かず、更らに新敵が現はれんとする時だから、誰れが考へても國防の爲めに一億一心、滅私の誠を致さねばならず、其の手段として百政を改革し、產業組織を改め一に諸般の事を國防の一點に集注して翼贊の效を擧げねばならぬ。此の改革の企は、例へば燎爛たる泡沫の如きもので、一泡が破れゝば同時に全部が破れるから、部分的の失敗に頗る注意を要する。餘りに末梢的の事に泥んで、人を倦ませるのは大局を敗るの基であることを、吾等は痛切に感ずるものである。

七十年前の吏道の一斑

大政翼贊運動が追々歩を進めつゝある折柄、思を維新の革新時代に馳せるのも、吾れも人も同じ思であらうが、此際或る遞信事務に關係ある人が自分を尋ねて來て、郵便の祖前島男爵の經歷を聽かんことを求めたから自分は知る所の大略を語つたが、其客の去つた後、自分はツクづク前島男の郵便開始時代を思ひやつた。郵便の制度は實に當時の飛脚制度の統制であり、爾餘の諸般交通上の事も皆な困難を極めた統制であつて、複雜で且つ支離滅裂であつた遞信事務がよくも統制され、百代の基礎となるまで能く整備したことを思ふと、一部行政上の事ながら今次の新體制の模範とするに充分であると、氣がつき、玆に郵便開始の經緯等につき聊か語ることにした。

郵便法の制定は明治の四年頃で、當時は遠方の手紙の往復は唯飛脚に由るの外無かつた。人間の脚力に托するのだから日子も費用も多くかゝつて不便を極めたことは言ふまでもない。そ

れを僅か三錢の切手を貼れば、ドンナ遠方でも間違なく極めて迅速に確實に達する郵便法は、當時外國には既に開けてゐたが日本には未だ行はれず、開創の祖と云はるゝ前島男も此法の發明者は誰れであるか、どんな具合に實施されてゐるかを知らなかつたが、男は維新前後頻繁に旅行をして、英學の教官として薩摩までも往つた經驗から、羈旅の不便を體驗し、殊に信書の往復の不便極まることを痛感しては、自然思へらく、僅か一通や數通の手紙を百里千里屆ける に多くの賃錢を拂ひ、多くの日子を費やすなどは實に馬鹿げた事だ、最少の賃と最速の法で信書の往復を圖る方法がありそうなものだとおぼろげながら郵便に勘づいたのが抑々始まりで、前島男の自白に由ると、此事の思案中洋行を命ぜられ、外國船に乘り、船中でポストを見たのが郵便に觸れた最初であると自ら語られたことがある。勿論外國に行つて正式に郵便を研究されたが、歸朝すると男の位置が變つてゐたが、自ら舊位置に復したいと願ひ出でゝ、驛遞頭として飽くまで郵便の實施に努力されたことほどそれほど男の此事に興味を有ち執着があつて終始熱心であつた。

當時庶政更始で、政府も金が無かつたので、郵便に對する豫算が僅かに三千圓に過ぎなかつたと云ふ、それを元として此の事業が始まつたのである。其頃の郵便の役所と云へば、江戸橋

あたりの民家の空き屋を假りの役場に充て、押入を拔いてそこに長官が机を構へると云ふありさまで、時の人は政府が飛脚商賣をやるのはおかしいと云ふた、役所とは心得ず、多くの人がこゝに來て湯茶を請求することもあつたと云ひ、又郵便箱を便所と誤認したなどの奇談もあつた位で、しきりに滑稽が演ぜられたが、前島男は此事業を行ふのに渾身の努力を拂ひ、馬二頭を配達用に購ふても役所には置き所がないので、自宅に飼つたりして間に合はせ、時には局員を自宅に招いて飲食を饗したりして勞をねぎらひ、宛ら自家の私の仕事であるかの如く一意成功に邁進した。

此頃の官務は、擔當者が自分の仕事であるかの如く、護り立てゝ熱中したのは、ひとり前島男に限らなかつたが、男の郵便事業などは最も著しいものであつた。段々郵便法が緒に就き、爲替事務を郵便局で扱はんとした時、政府は許さなかつたが、前島男は最初の試みであるから或は損失を招くかも知れないが、其損失は自分で辨償するとまで申出たと云はれるなど郵政には全く滅私的態度であつた。郵便法を手始めとして、海運事業、鐵道、電信、電話等あらゆる遞信事業は、追々前島男に由つて創業され、此等を行ふ手段として海上保險、海員救濟、新聞事業までにも手が延びた。男は後年後藤伯が遞信大臣であつた頃、次官として出仕されたのも、

電話事業其他郵便法の附屬事業の完備を期する爲めであつて、當時男の友人等は大臣とならば兎も角も、次官として任官さるべきでないと惜んだが、男は位地よりも遞信の完備が本意であつたのだ。

男は以上數多の遞信事業に幾度か種々の迫害にもあつたのである。郵便法の爲めに飛脚商賣が罷業となり、通運會社が起つて「助郷」と云ふ勞働も罷み、此等は一時職を失ひ皆な前島を仇敵の如く怨んだが、男は少しも顧慮する所なく、孜々として手を緩めず、遂に遞信事業の礎を築き上げるに至つた。其勞は頗る多とすべきである。男は至極憺淡の人で、政府が郵便を始め其他交通上の事は皆な自分に委ねられたから、美果を結んだと云ふて、一向に功を誇ることは無かつた。

明治の初期の新體制運動には何れも西洋人を傭ひ來つて、新文明を輸入するに急であつたがひとり郵便の一事は外國人を煩すことなく、前島男一人舞臺で、男は驛遞の頭であると共に驛遞の技師でもあつた。當時の役人は下僚や西洋技師の爲すに任して、唯だ喫煙して印を捺するのが上官の役目であつたのに、驛遞に於ては全く其の趣を異にした。

維新當時幕政の餘弊が尙存續してゐて、支離滅裂の諸般驛路の慣習を統制するに、如何に困

難であつたか、それに比すれば今次の百般の統制は寧ろ難事とするに足らない。唯だ男の如き公務を自家の私事の如く考へ、身錢を切つても其の達成を翼ひ百難を冒して終に成就した熱誠の能吏があるや否や、自分は範を此の先輩に倣はんことを庶幾するものである。

新體制の今昔

封建を廢して國を開き廣く知識を世界に求めた維新の革命は當時の新體制であつた、此頃の新體制に較べると一層强力のものであつた。前の新體制は舊物打破で新文明を取り入れるために、あらゆる舊制を打破した。今度の新體制は、新文化の行き過ぎを打破し合理的統制を行ふことが趣旨で、前のに較べるとたやすく樂であるかに思はれる、今試みに前の新體制を追想してみると、隨分困難の事が多く、滑稽な事も多かつた。何んにしても牢乎として拔く可らざる鞏固のものとなつてゐた。藩籍を朝廷に奉還することは、尤も困難の事であり、士分の佩刀を禁じたことも、なか〳〵難事であつたが、それが案外大した面倒もなく實行されたのは、上御

一人の命だと云へば、それに從ふことが臣道であると云ふので實行された。士族ばかりが軍務に與かるのでなく士農工商の別なく徴兵に服するのは國民の義務であると云ふので、此事も早く實施された。德川政府を倒すに尤も力のあつた薩長が、あとを受けて德川に代はる政府を作れば、薩長を以てして德川に代はらしめた丈では、新體制何れに在ると云はねばならんが、そんなこともなかつた。勿論保守的思想の功勞者と明治革新の當局者間に乖離もあつたが、保守派は不軌を企るに迨んで、皆剿滅された。當時政府が新體制を以つて立つたが、此の政策を行ふに金がなかつた。函館に據つた榎本等を擊つにすら、軍資が無つたので、光岡八郎は富豪に强制して金を出させた、此の金額は八十萬圓に及んでゐるが、これは政府の借金ではあるが實は威嚇して出させたものであり、斯る手段があの際だから行はれたので、實に非常手段であつた。何んでもかんでも舊物の存するのは新體制を行ふに不利であると云ふので、不用のものを二束三文に賣却した例は少くない、城などは大概二千圓位の相場で賣却され、京都に於ける皇居も本願寺も賣らんとしたが沙汰止となり、神佛の分離が唱道された結果、佛像は俵に入れて廉賣されても買手がない有樣であり、祇園の名高い塔を二三百圓で賣却せんとしたがこれもヤツト免れた。延曆寺や兩本願寺なども一時滅滅の事があつたのを助けた人が大隈參議であつた

と云ふて後年大隈侯が往訪の時歡迎したので其當時のことを知つた。佛像をやたら破壞するのを恐れて、佛師を賴むで佛像に冠をかぶせるなど變相をやつたことを曾つて高村光雲に聞いたこともある。何んでもかんでも舊時を思ひ起さしむるものは非なりと云ふて舊記錄を一炬に附した舊家や華族家もあつた。書畫や骨董類が海外に流出して失せたのも此の影響であつた。風俗上の事は目前のことであるだけに一段やかましかつた、結髮を散髮にすることが先づ强制され、新潟縣などでは楠本縣令が新潟の富豪を鮭漁の舟遊びに名を藉りて誘ひ出し船中いや應なしに斷髮して範を示した。街頭の風俗上の取締に就ては、途上の放尿が尤もやかましく、違警罪規則が幾十ケ條の繁褥であつたことにも知れる。此頃發布された法律は「新律綱領」と云ふもので明律の飜譯やうのものであつた。新聞も半紙版であつて、舊聞が多く記されたので政府は新聞は其日の出來事を記さねばならぬと敎へたり、木戸孝允などの政府者はみづから新聞を發行したりした。芝居が舊式で情事を演ずることは風敎に害あり、忠孝を主題とせねばならぬと座主を呼むで政府者が講釋をやつたやうのこともあつた。何事も西洋に則らねばならぬ、と、各官省で幾十のお傭外人がゐて其の師導を仰いだ。洋風の建築を奬勵する爲めに政府は銀座に洋風の建築を行つた。工學寮の建物などは模範的構造で、こゝに幾多文化的技師が養成された。

交通には京濱の汽車が通じ、東京の市中には馬車が走り、人力車が工風された。郵便も早く開けた。その爲めに飛脚が廢せられ街道筋の驛傳が改まり、電信も漸やく開けたが、其の發達するまでになか〳〵困難を見た。教育方面に就て見ると、南校が最高の學府であつたが日本文化の師導先輩である和蘭陀よりも英佛が重んぜられた。英語學校が方々に設けられた。それには必らずお傭教師がゐて、正則の英學が行はれ初め、日本の學問は一課も介在されなかつた。海外に留學者が早くから派遣され、中には妙齡の女子もあつた。佛國に派遣された留學生は西園寺公を始め猛烈の自由主義者となつて歸つてきた。文部大臣たりし森有禮が伊勢の大廟に無禮をした廉で、後年暗殺されたが、これなどは西洋かぶれ行過ぎの思想が禍したものに過ぎぬ。危險思想は維新の頃に早く萠してゐた。自由の本尊であるかのごとく單純思想の板垣退助が岐阜に刺されたのも、佛國思想感化の影響で、土佐では最もコンナ行過ぎの思想が行はれた。熊本に守舊的神風連の起つたのと好對照である。外國思想の流入につれて上下の相剋が行はれ、男尊女卑が論議され個人主義が追々家庭の平和を破り、各人の放縱我儘が增長し、資本主義が追々財界に行はれて、滅私奉公の念が去つたなど精神が歐化した爲め種々醫すべからざる瘡痍を生じ、それが今度の國策新體制を行ふの已むを得ざる主なる動機となつたのである。どんな革新

的運動でも舊を棄て新に就くものには附帶的に種々の弊害が生ずるもので、維新の革命にも行過ぎが多く、破壞せずに濟んだものを破壞し、採るべからざるものを採り入れた跡を浩算して見ると功罪半ばすとまで行かないにしても罪過は決して少ないとは云へないのであつて、此の革新が落着くまでには社會は頗る混雜を極めた。併し落着いた所で其の行蹟を見ると失ふ所より得ることが多かつたことは言ふを待たないが、その落着までの不便や混雜は各人心して忍ばねばならぬ。

書き漏らしたのは失業の問題である。士族が軍務と云ふ職を失ふたのを始め、佩刀を禁じた結果刀劍に關する工人が悉く職を失つた丈でも容易ならぬ事であつた。士族が追々商賣を營む樣になつたが、慣れぬ事だから皆失敗した。時人は「士族の商賣」を嘲笑の言葉としたほどである。佩刀並に其の附屬品の工藝家もなか〳〵轉職がむづかしく幾多名工も皆淪落して饑餓に瀕する悲哀の境遇に墜ちた。郵便、電信、鐵道の出來た爲めに交通上の勞働者が皆職を失ひ、それが轉業するまでには相當の時日を要したなどは澤山ある例の一二に過ぎない。

追想すると維新の革命は今度の新體制運動と比較にならぬほどの破天荒のものであつた。幕

府が三百年續けた政權が漸やく微弱に赴き、外國の脅威で開國を促された國難が動機で、久しく壓迫下にあつた皇室の爲めに、勤王に左袒するものが雲の如く起り、「攘夷」を以つて幕府を覆すの籌略とし、勤皇と云へば攘夷で、幕府に對して「攘夷」は如何にも苦がい運動であつた。幕府と薩長が抗爭した時に、英は薩摩を助けんとし、佛は幕府を助けんとしたが、何れも外國の力を藉ることを拒絶したのは、流石に日本政事家の大見識であつた。若し其力を藉りたとしたら、日本は英佛何れかのものになつてゐたかも知れぬ、實に危ない綱渡りであつた。幕府が倒れて、攘夷家は豹變して開國進取の爲め知識を世界に求めることになり、外國と手を握つたが、此の推移の爲め多く惜しむべき人物が刑死し、新を迎へる爲め舊を棄る經路に於て多くの犧牲を拂つたが、扨て馴致した新事態が落着くまでに少くとも十年の歲月を要した。十年の西南戰爭が終るまでは、內亂がいくつか起り、最後に起つたのが薩摩の內亂であつた。此等各地の大小の內亂は、政治の統一を害するものであつたが、鎭定されてから、新事體は益々發展の途に就き、漸やく手習を脫した新式の兵備で支那と交戰して勝ち、三國干涉で得たものを失つた事が、臥薪嘗膽となつて、十年を經て露國と戰を交へて又勝利を得た。こゝに於て日本も舊阿蒙でなく世界の强國の範圍に入り、再び支那に對して大戰を構ふに至り、五年に亘り戰

へば必らず勝ち、支那の土壤の七分通りは日本の戰勝區域に屬するに至つたが、强國が支那を援けてゐるので、事變はまだ治まらぬ。斯る場合に獨伊が英佛と戰爭を起し佛と小國は獨に屈したが、英は米國の應援を得て戰爭最中で、日本は英伊と同盟條約を結び、英伊が歐羅巴を統治せんとすると同樣日本は亞細亞を統治せんと其の方針を擴大したことに於て、こゝに國防國家を立てゝ目的の達成に邁往せねばならぬことになり、此の國防のため政治體制を改めねばならぬ事になつた。

新體制とは何んぞ。大政の翼贊運動で國防國家に應ずるためあらゆるものを統制革新せんとするもので、而かも一時的のものとせず、永久的のものとせんとするのである。一時國防の爲めにするなれば、戒嚴令を布き、國法を中止して國家の急の犧牲たらしめて可なり。唯だ然らず永久の爲めにする翼贊運動なるが故に、政治經濟其他百般の事に涉つての革命である。これに由つて國防の急に應ずるため、銃後の計をなさねばならぬ。國用を潤澤にするため國民進んで其の日常の衣食を節しねばならず、米炭の日用品を省くこと茲に於て生ず。綺羅錦繡の驕奢を廢すること茲に生ず。經濟產業より百般の事、其の區々多端なるを統一し、無駄を省くの計茲に生ず。これ一には統制に由り產業の開發を强化せんとする積極のもので國防の資金を得る爲

めには、硬貨並びに金塊を國有に供せざる可らず。各自の供給を減して國家の用に供せざる可らず。國債の募集に應ずるため貯蓄をなさゞる可らず。勿論重税も辭す可らず。献金も拒む可らず。國民はこれにより窮屈を感じ、或は富を減し、或は業を失ふことあつても大政翼賛の爲めに已むを得ずとなすもの此の新體制の一斑である。此の新體制に何が尤も大切かと云へば滅私奉公の精神である。維新の新體制運動に由つて生じた行過ぎの弊は多く滅私奉公の主義に反する。帝國議會の如き政權の授受を目的とする諸政黨に委すべきでない。幸ひに政黨も其の非を自覺し、自から解黨して此の翼賛運動に共鳴協同することになつた。自由主義個人主義資本主義等の行過も此の新體制範圍に矯正せられねばならなくなつた。幾萬の營利會社其の業務の何たるに拘らず、其の私權を棄てゝ滅私奉公の精神を以つて統一に參加するか然らざれば、其職を棄ることか止むを得なくなつた。

新體制運動は自治運動で官僚的の强制運動でないことを心得ねばならぬ。假令ひ窮屈の事があり失職の事があつても國の大目的を達するために國家の犧牲となることを已むを得ずとする運動で、實に名譽ある運動とせねばならん。統制と云ふても日本には始めての事で、日本のあらゆる事柄は、外國に比すれば何から何まで複雜である。實は複雜の發展に委して來たから、

拾することはなか〳〵容易でない。其の統制に當つては隨分不公平もあらん不平もあらんが始めての經驗だから辛抱せねばならん。衣食の切符制度も亦始めての事であり配給が規則立つてゐない爲めこれ又不平もあらんが、これ又已むを得ないと勘辨せねばならぬ。およそ斯樣のことは日月の摩擦を經て人と折合ふに至るまで不便を感ずるが漸やく慣れば何んでもない。維新の革命には切符制もなく統制も無つたが、あの時は敵に對する革新でなかつたが、今度は敵を前にしての自給自足であつて、前途八紘一宇の大目的を達するには是式の忍苦は當然と邁進此の大切の翼賛運動を助けねばならぬ。一億一心を要するは此の運動の達成にある。

統制困難の一例

今度の統制に就て困難を感ずることは一ト通りでない。日本の產業は封建時代に諸藩の奬勵に由り、それ〴〵相違があり特徵があり、特徵が特徵を生み、共用に隨つて種々なる工風を行ひ、それが發達したのだから、なか〳〵複雜を極め、何一科でも單純のものがない。此ほど放

送に聞くに、木炭だけでも其の種類は、千を以つて數へると云はれる。個様な多種多類であるものを、單純化しなければ大量製産も出來ず、不經濟であることは云ふまでもないが、一概に單純化を旨として、ある特色を沒却するのも考へもので、其の特徴の中には保存を要するものが多々あることを忘れてはならない。自分は今試みに紙の産業に就て、日本にどれほど紙の種類があるかを考へて見るとザツト左の五十餘種を擧げ得る。

特種の用途にそれ〴〵異なる紙を列擧すれば、先づ經文に用ゆる紙は麻紙が多いが紺紙があり香をすりこんだ紙もある。昔し綿の無つた頃紙で衣服を作り紙衣と云ふたが厚い紙ではあるが綿のごとくシナやかのものである。禮儀には奉書紙を用へた。これには大中小の種類があり、又檀紙と云ふシワのある紙もある。辭令や褒賞の用には鳥の子紙がある。襖を張るには大幅の紙があり、マニアイと云ふ紙が多く用ひらるゝ。障子を張るには美濃紙が主として用ひられ提燈や雨傘、桐油に用ゐる紙はそれ〴〵異つて居り、岐阜提燈にはテングジョウと名づくる薄紙が用へられ、藥を包むのに藥袋紙を用ひる。これは土佐藩のお留紙で煙硝の濕氣を防ぐ爲め出來たものだ、扇面や團扇を張るにもそれに相應する紙があり、歌など書くに色紙や短冊があり、錦繪の印刷には石州半紙が用ひられ、書物の標紙には種々の特定の紙

がある。帳面の表紙には板目紙があり、包み紙には糊入紙が普通用ひられ、反物を包むにも特定の紙があり、手紙を書くには半切があり、厠の紙には塵紙と唱ふる惡質の紙があり薄い紙には竹紙、薄葉、雁皮紙があつて、薄い割合に堅硬で頗る優等のものである。明暦の大火災に匆惶帳面を井戸や池に投げ込んだ揚句、字が消滅したので、濡れても字が滿足であるやうに工夫を凝らした紙も生じた。ナプキン代用の紙も出來、今現に行はれてゐるが初め出來た頃成島柳北は白雪紙と名を命じた。染紙には半紙を五色に染めたものがあり、千代紙と唱ふる彩色した文様のある紙があり、紙幣や靈種の紙にも各々特徴があり西洋風の紙が行はれてから擬革紙が堅紙として工風され、洋紙の外にボール紙ザラ紙馬糞紙など云ふ低級の紙も製造され、概して紙の品質は大いに低下し、藁を材料とした紙が盛んに行はれ、文明に逆行して、今は舊時の堅硬良質の紙が絶へんとして、石州半紙すら容易に入手が出來なくなつた。

以上は紙だけに就て云ふたのだが、如何に複雜であるかの一端がわかるであらう。用によつてそれ〴〵特徴があり地方に由つてもおのづから特徴があつて、どの紙もすべての用に共通するものは殆んど無い。そこが日本の長い間に生れた文化の結果で、或は世界に誇り得るものでもあらうが、一概に簡單化を欲し統一するとなると、段々に品質が低下して、さなきだに、紙

は文化に逆行して粗惡となるのに、亦一段拍車をかけて低級のものと成り了ることを思はねばならぬ。

日露の役を顧みて

吾等は奇しくも日清の役と日露の役とを觀、今又英米を敵とする東洋戰にも遭遇し以て、既往の二役を思ひ浮べて今次の大戰に、吾等の感憤を比較するのも强ち無益ならざるを思ふ。前二役は與に我生命線を防衞する爲め、止むを得ず起ちたる戰鬪にして、當時の事情を顧みれば、吾國力未だ進まず、兵備亦今日の如くならざるに、敵は清露共傲然宇内に冠たる大國なり、これと戰ふて果して勝算ありやと、世界も疑ひ吾等と雖も亦疑惧なきを得なかつた。幸に我陸海の戰略宜しきを得て、日清の役先づ勝利を得たるも、外交戰に於て遂に敗を取りたり、吾が莫大の犧牲を拂つて得たる遼東半島を還附するの已むなきに至つた。之れを拒んで漁夫の利を博したる三國と一戰を交へざる可らず、而かも當時我國は之れ爲すの力なく、涙を呑むで屈し

たり。彼等三國の內露國は特に日本を與みし易しとし爾來暴慢を極め、吾れを制服せんとして吾生命線韓國を侵壓するに到り、吾れは已むなく初めて起つた。此の戰役は日清戰役十年の後に在つて、露は此間旅順を租借して堅固の要塞を構築する等、日本と戰ふの準備を着々進めた。日本も前年の屈辱に血を沸し、臥薪嘗膽、復讐を念としたるも、國力未だ以つて敵に優越するに至らず、唯だ頼むは我將兵の敢死奮鬪のみ、或は遼陽の會戰に、旅順の戰鬪に、或は日本海の海戰に、其の勝敗に我國を擧げて如何に憂慮したるかは、到底筆舌に現はし難きものがあつた。此戰は何んとしても勝たねば國亡ぶの悲愴の感が國內に澎湃し、將士を勵ましたればこそ其盡忠の精神を鼓舞し、遼陽の大戰に捷ち、難攻不落の稱ある旅順要塞に屍山鮮血を流して之れを拔き、海戰に於ては東鄕提督の勇戰に由りバルチツク艦隊を殲滅したり。實に思へば此の戰は、百難不屈の精神力の勝たるなり。當時敵味方とも、戰車、飛行機未だあるなく、又戰を持久するゲリラ戰法も行はれざりしが故に、勝敗は案外早く決し、露は降服したりと雖若し長期戰となり、國力のあらん限りを盡し、力を角したらんには我國必ずしも勝者にあらざりしならん。實は日本は極度の力を用ひて既に力盡き、彼等の捲土重來に對して再び戰ふの餘力なかりし。此事を早く推知したる小村大使は匆皇歸朝して講和の已むなきを政府に勸め、辛ふ

じて克服を全ふし得たれども、戰勝の結果は僅かに樺太の一角を獲得し得たるのみ。國民は此の結果に不滿を抱き、公憤天を衝き、所謂日比谷の燒打事件起り、滿都の警察署は皆燒失するの內紛を生じ、小村大使は歸朝に臨んで無事國內に入る能はざるべしと悲愴の覺悟をなしたと傳へらる。

併しながら、此の一戰に於て我國が如何に武威を中外に輝かしたか、日本が世界の强國の班に伍したるは此の戰勝に由るのである。若し此の大戰無くんば焉んぞ今次の東洋戰に英米を敵として起つを得んや。吾等は日清の役、衆議院に議席を有してゐた爲、廣島の臨時議會に參するの光榮を擔ひ、又日露の役後大隈軍人會長に隨つて、旅順出征將士の故鄕越中富山に赴き、會長が親しく戰歿者遺族の會合に臨み、懇到悲愴の弔慰演說を聞き、滿場肅然只々四邊聲を呑むですゝり泣く遺族と共に流涕を禁じ得ざりし當時を追憶し、其後支那に游んで古戰場を遍歷し、特に旅順の戰蹟を訪ねて戰死者の忠魂を弔ひたることを追懷し、感慨に堪へないものがあつた。事皆な過去に屬し、今は只夢中夢を辿る如くなれども、吾人の骨に徹して忘れ難きは我將兵は如何なる戰役にも敗を取ることなく、前二役共に善戰善勝の榮譽を贏ち得たりと雖も、終局に於て或は外交に敗れ、或は戰勝の果充分ならざるものあり、是れ深く憾みとせざるを得

ない。

今次吾等は前二役より遙かに大なる戰鬪に遭遇したり。此の戰は五年前日支事變より端を發し、其の戰局の收まらざるは嚴として背後に英米二大國の後援あるに由り、終に其の背後の敵と戰ふの段階に入りたり。此の戰鬪の前役と異なるは唯だに自國の生命線を防衞するに止まらず、兼ねて亞細亞諸國をして西歐の懸倒を解き、亞細亞をして亞細亞の亞細亞たらしめんとするの義擧に出づ。吾邦固より毫も侵略の意圖なく、唯々世界平和の爲め此の聖戰を敢てしつゝあるに、支那は頑として覺らず、吾れと共に和して喜んで亞細亞の大業に參ずべきに、飽まで西歐に依存して其の呑噬を顧みず、是を以つて今は支那依存の敵と開戰せざるの已むを得ざるに至れり。支那依存の英米二國は東洋諸國の敵たるのみならず世界の公敵なり、世界の禍根は此の兩國に存す、彼等を制壓せずして如何んぞ平和の來るを望まんや。彼等の强大なるは、皆侵略の結果にして、彼等の歷史は盜賊史と云はんこそ寧ろ適切ならん。彼等は今尙ほ侵略盜賊行爲を改めず、其の桎梏の下に搾取に委する者は皆亞細亞民族なり。彼等をして其の處を得せしむるは、先進日本國の天の命じたる大使命なり、吾邦如何んぞ此の大業を完遂せずして已むべけんや。日本は今や日淸、日露當時の舊阿蒙にあらず、開戰後僅かに一週日にして敵の根據

を衝いて再起不能ならしめた。其の戰は周く內外の耳目に在り、吾人の絮說を要せず、これからも連戰必勝を期し得可し。只々前二役の覆轍に鑑み最後を愼むべきのみ。

序戰の大捷に陶醉する莫れ

去年十二月英米に對する宣戰の大詔渙發と共に、聖弓の矢は弦を離れたり。吾等國民の此時を待ちたるは一朝一夕にあらず、國民三斗の溜飲は初めて快下したり。抑々蔣政權と戰を交へてより既に四年有半を數ふ。百戰百勝して尙ほ且つ戰局の收まらざるは、偏へに背後英米あるが故なり。此戰に熱血を灑ぎたる幾萬の同胞將士の爲めにも、此讎滅さゞる可らず。況んや英米の暴慢我れに無禮を加ふること三十年の久しきに及ぶ、彼等は吾が宿敵なり。戰ふべくして戰はず今日に至りたるは偏へに世界の平和を重んじたるのみ、我國の忍耐思ふべし。

一朝戰端を開くや、卽日布哇の海戰に米艦六隻を擊沈し、ガム、ヒリツピン、マレー、シンガポール等の根據を衝き、或は敵前上陸して其の首都を占領し、或は幾百の飛行機を屠り、香

港天津等に進駐して敵兵の武裝を解く等、快速の神技を現はしたる中にも、英の主力艦二隻を擊沈し、僅かに三日を出でずして、英米の賴みとする根據地と海軍力を覆滅したり。是れ英米の扇形敷陣の「カナメ」を覆滅したるものにして一擧敵の根據を支離滅裂に歸し、早くも最後の勝利の礎を築きたるは、世界の齊しく瞥愕措かざる所なり。

抑々兵家の重しとし亦誇りとするは、緖戰の捷利にあり。皇軍は開戰匆々快速の神技を以つて既に敵の兵力七分を殲滅したり、其の敵味方に及ぼす精神上の影響果して奈何んぞや。勝つものは心氣昂揚し、敗れたる者は神氣沮喪す、最後戰局の勝敗が緖戰の如何に關するや實に大なり。見よ此の緖戰の打擊に敵が如何に狼狽したるか新聞の報ずる所に據れば、ヒリツピンは狼狽の餘り、味方の艦艇を敵艦と誤認し、其の搭載の飛行機八十臺を砲擊して殲滅し、其の乘組員をも亡ぼしたりと。亦米本國に於て、己が飛行機演習を敵機襲來と誤認し笑ふべき狼狽の醜態を演じたとか。メキシコは形勢を見て遽かに對日攻戰の聲明を取消し、米國は早くも援英の不能を鳴らす等、赫々たる戰蹟は日本の聲名を忽ち世界に九鼎大呂よりも重からしめたり。

英米は世界の强大國なり、然れども其の架空の舊套政策を固執するに於て既に老廢國たるを免れず。彼等は今に於て尙世運の變化しつゝあるを顧みず新立國を企圖する日本を妨害せんと

す彼等の沽券刻々に墜落しつゝあるを知らずや。試みに我往年清露に對する二戰役を顧みるに、兩國は遠く望めば、當時實に鬱然たる大國であつた。其沽券に對して人皆恐怖を抱きたるも、戰ふて見れば、朽木であつて彼れが如き敗を取りたり、最早舊來の沽券の賴む可らざること見るべし。顧ふに英は獨と戰ふて今其の半途に在り、獨は蘇國の積雪に阻まれて膠戰狀態に入り、其矛を轉じて近く英と雌雄を決すべく、英は既に疲憊したる上、眼前獨と戰爭を續けざる可らず、東洋に對し餘力ありとも覺えず。米も金力のあるに任せて、軍備に熱中すれども、其の軍機の增設は尙數年の後に在り、內には國民の和を缺き、統領個人の野望に不平を抱くもの少からず。而るに自國の防衞の名に隱れて東洋を侵略せんとす。之れを吾が東亞の獨立を圖り弱小國をして各々其處を得せしめんとする光風霽月の仁俠義戰と同日に論ずべきにあらず。彼等何んぞ正義に敵せんや。

皇軍先制の作戰が妙を發揮したる影響は忽ち世界に及び、我同盟國の獨伊は逸早く米に宣戰を布告すると共に、英米を共同の敵とする協定ここに成り、泰國も亦英國を振り棄てゝ我邦と攻守同盟の約を結び、佛印も亦軍事協定にわが提議を全面的に受諾したりといふ。東亞新秩序建設戰は着々歩を堅め、歐洲新秩序と相和して世界の樞軸勢力は、愈々其の威力を增大しつゝ

あり。勿論目的完遂までには長期戰を覺悟せざる可らざれども、日本に與するもの單に以上に止まらず、既に滿洲あり、國民政府あり、物資の有無を通ずる友邦これより益々多からんとす。蓋し東亞に國する諸國の英米の桎梏に苦しむものこれより來つて日本に投ずるは必せり。日本は今こそ興亞完遂の本舞臺に上りたり。英米に依存するものは皆我敵なり。顯然先づ蔣が背後を驅逐し蔣下塗炭に困しむものを解放せよ。尙ほ幾多彼等の搾取に委したる諸邦を援けて、其處を得せしめよ。恐らく彼等も其の援助を待ちつゝあらん。此等は皆他日の我友邦たることを記せよ。

剛勇なるもの持久に短なり、我邦の短所は持久戰に在りと云ふ如きは、我等は信ずる能はず。英米の暴戾を制する爲め、吾が辛苦經營の數十年の今日に及びたるを思へば、我邦豈持久の忍耐なしと云はんや。然れども終局の捷利を博するには、武力と忍耐の外に之れを支持する國力を要す。銃後は益々建設に邁進せざる可らず。此一戰は實に本邦が東亞の救世主たらんとする千載一遇の秋なり。曾つて敗戰の記錄なき我二千六百餘年の史上、更らに光輝ある幾頁を加へんとする今次の擧は、何を犧牲にしても終局の捷利を博せざる可らず。徒らに序戰の快勝に陶醉するを許さず。天惠は決して賴む可らず、自から助くるものにこそ天惠あり。一億の國民邁

進せよ。

興亞の大業

近頃毎日のやうに南太平洋諸國の地理を聽く。或は新聞に戰報にラジオに、其内知らざることが多く、其の地名すら始めて聞くものが少からずある。其民情風俗の初耳にして興味を感ずるものもあり、虎吼へ龍躍るの深林其の樹の高きは天を摩し、奇鳥あり綺花の耳目を驚かすものがある。吾等亞細亞の住民は何故之れを耳にして爾かく珍らしく感ずるや。我等亞細亞の人が亞細亞を知らざること久し。吾等は曾つて西洋教育を受けたり。西洋教育に由り吾等の知る處は西洋大陸の地名のみ、吾等は世界に國する大國に就て略々窮めざるなし。單に地名を知るのみならず。其歴史に通じ其種族慣習にも知る所少からず。何んすれぞ亞細亞に於ける諸國を知るの甚だ疎なる。我に隣なる支那こそ數千年熟知の邦なれども、他は殆ど知らずと云ふも誣言にあらず。必竟文化に後れた諸國は歐米の領有に屬し、他の植民地なるが故に閑却された

りと謂ふべきか。此等諸國は英米等歐洲强國の頤使に任し、其の搾取に委して、暗黑面に居り自立し得ざる窮境にあるもので、眞に憐れむべきものである。而かも吾れと其の種屬を同ふし、共に太平洋上に伍し、其の國民の數を問へば十億にも及ぶ。何が故に之れを閑却し得ん。吾等は開國の方便として一時彼等を征服したる本國の敎を受け、其の附屬國を窮むるに遑あらざりし也。實は彼等が呑噬厭くなきの妖魔であり、彼等は附屬國を敢て同化せしむることをせず、寧ろ未開の儘に存せんことを冀圖し、暴戾到らざるなきは天下の普く知る所也。彼等は實に人の國を盜みたるもの、其の歴史は卽ち侵略史である。彼等は幾回か我邦をも呑唾せんとしたが、幸にもそれを免れた。今にして思へば慄然たらざるを得ぬ。如何に開國の一時の方便としても、此等盜賊國に文化を倣ひたることおぞましき限りであつた。吾國當初攘夷を以つて彼等に臨んだ。只々當時物質文化の到底彼れに敵する能はざるを以つて、且らく屈して文化を彼れに採りたるも、國體明徵を微塵も損ふことなく、其文化はすべて日本に適應すべく咀嚼したるを以つて、我に得る所は多かりしとは云へ、彼等が唱ふる所の個人主義に由つて、民俗を害し、固有なる敦厚の長を害ふに至りたるは遺憾とすべきも、彼等より持來りたる文化は彼等の壘を摩するに至りたるを思へば、得失相償ふものなきにあらず。但だ改善を要するもの社會

上、教育上、經濟上、國策上幾多あるも、それ等は今後の事に屬して居る。

我國が英米二國から妨害を受け、我生命線を危ふしたること一再ならず、日清日露兩役の如き皆な我生命を衛る爲め已むなき戰鬪であつたが、日本は幸ひに捷を制した。最近日清の役に連戰連勝敵を重慶に追ひつめたが、英米の後援するあつて、四年餘を經るも未だ收局を見るに至らず、日本は昨年十二月八日を以つて遂に英米に向つて宣戰を布告し、こゝに始めて宿敵と戰鬪を開くに至りたり。これぞ日清事件の結收を庶幾する戰であるのみならず興亞の爲めの一大義戰であつて、實に吾國に於ける未曾有の大戰であるのみならず、有史以來世界の曾つて知らざる大役である。其の勝敗は、英米の蓄積の施設を覆滅し、其の桎梏の間に長く搾取された る亞細亞諸國をして其處を得せしめんとする大業である。皇軍は宣戰と共に英米の主力軍艦を殲滅し、其基地を占領し、早く空海の二權を制し、破竹の勢を以つて香港新嘉坡を奪取し、マレー、ビルマ、ヒリツピン、グアム等の要地を僅かに二ケ月を出ずして攻略し、敵をして援助に由なからしめた。印度其他に遍るの日も應さに遠きにあらざるべし。此等太平洋の諸國は皆な亞細亞に邦を建て、軍需物資に富むの故を以つて、久しく英米侵略下に立ち桎梏倒懸に呻吟しつゝある、不幸の國土である。同じく亞細亞に國して民俗を同ふする日本が、之れを側らに

觀て氣の毒に感じつゝも、今までそれを救濟する機會を得ざりしが、今や其機會到來したり。日本は屢々聲明したる如く、幾萬の同胞の鮮血を流しても、寸毫も土地を獲るの欲望あるにあらず、唯互ひに相扶けて共榮を得んとする公正の冀望あるに過ぎない。日本は神の使命を帶びたる救世主である。太平洋諸國は此時こそ英米より其の桎梏を脱すべき時である。彼等は躊躇することなく決然起つて我邦の大業を成就せしむべきである。之れを爲さしむるは乃ち自己の獨立を達成する所以にあらずや。到る處の占領地が歡呼我れを迎ふに吝ならざるは當然の事である。日本は英米本國を屈服する迄決して矛を收めざるべく、其の占領の地に或は防衛の爲暫らく保留することあるべきも、獨立の意氣ある國土には直ちに其爲すに委すべしとは首相既に明言せり。日本は一方に戰ひつゝ一方に構作經營に當らざる可らず。此の大業を大成するまでには、多くの歳月を要すべし。解放されたる國土は、日本と共同して其煩と勞とを頒たざる可らず。要約するに諸國は日本を勝たしめざる可らず。諸國の强味は豐富の軍需資源を有するに在り。此の資源なくして如何んぞ英米戰鬪を持續するを得んや。

日本は端なく廣大なる海域に國する亞細亞十億の國民を師導する地位に立てり。是れ日本が文化に於て一日の長たるが故とは云へ、正義に由りて立ちたる所以にあらざらんや。天の大任

を下さんとする、必らず其の國土の正と義とを選ぶ。日本は謙抑以つて師導の任に當らざる可らず。苟めにも傲慢なるを許さず。亦共榮を損ふあらゆる、經營を斷じて愼まざる可らず。凡そ未開豐饒の處には私利を營む、所謂る山師者流の横行するを常とす。天業の大任に膺る者、差當り之れを取締るの要あり。若し此等財利の徒の横行に委するあらば天業の聖旨は全く失はれん。我國民は今後其の氣宇を大にせざるを得ず、一島内に局促する志を改めて世界に濶歩するの大志を抱かざる可らず。乃ち廣汎の太平洋を我が庭園の池としヒマラヤを築山とし、大小の島嶼を飛石としジャングルを園林とし、熱帶地を以つて遊客の樂土とするの概無る可らず。南地諸國また曾つて我が長政の雄蹟もあり、海國男兒何んぞ其の先蹤を繼ぐに躊躇すべけんや。彼等民俗の内には、マホメット教を奉ずるものあり、亦吾れと傳統を同ふする佛教國が殊に多い。英米諸國が彼等を同化し得ざるは、此等宗教の異なるに坐せん。人種民俗宗教を同ふする邦人こそ彼等と和して同化することが始めて行はるゝであらう。我等日本は久しい間或る少數者の外、諸國を閉却したが、今は昨非を悔へて立ち擧つた。非道暴虐の英米がかく苦杯を啜らせた日本は諸國に對し善處するには充分の經驗を有してゐる。我等は溫かい情を以つて諸國と手を握らんとする。それに就ては先づ以つて諸國の實情に通曉せざる可らず。今後の施設は百

端にして實に百年を要する大業なれども、差當ては警備と交通が最も急務で、軍政は最も忽諸に附す可らず。交通頻繁なる爲め充分の船舶を備へざる可らず。追つては資源開發のために諸般の技師を送る必要あらん。若しそれ百年の經營を案じては、我將來の指導者を養成する爲め國民教育の改善を要す。即ち今後の我國民は亞細亞の結束と振興を以つて立ざる可らず。八紘一宇の大度量を有せざる可らず。同民俗に對して慈仁の心なかる可らず。從來のことも歐洲本意の說に耳目を傾けず、如何にせば興亞の目的を達すべきやに意を注がざる可らず。之れが爲めには深く亞細亞諸國の事情に通ぜざるを得ず、行政官技師を派遣するに於ても必ず特別の教育を要す。今後興國に臨むで善處すること固より容易の業にあらず、然れども此の難業は天の我れに課したるもの、吾れ焉んぞ完遂せずして已むべけん。歐洲諸國は彼等を奴隷とし彼等を愚昧に導くに一世紀を費し幾百億の財を投じたり。我れが彼等を解放し其途に安んぜしめ、其の自然の發達を遂げしむるに、亦一世紀と幾百億の散資を要するものあらん。奮起せよ。共に天日を仰ぐの日は來た。努力せよ。これよりの努力は己れの爲めにするの努力なり、亞細亞の爲めにする努力なり、暴戾搾取に委するの努力にあらざる也。

大量趣味

自分は曾て既刊の隨筆に「大量趣味」についていさゝかいひ及んだが、重複を避けてこゝに再說したいと思ふ。

大量趣味といへば新しい言葉のやうに聞こえるかも知れんが、事實大量を趣味とするものはいくらもある。學者でいへば哲學者がある。かれ等は宇宙萬有を飜弄し、無限を說き無窮を詮ずる。大量趣味家の巨擘はこれであらう。同じく大數を說くものは印度の佛典である。佛典には大數に就てそれ〴〵特種の名があつて、他國に億兆以上は何千何萬と冠するのと異つてゐる。大數をよく研究したものだ。日本は久しくこの哲學の感化を受けながら僧侶といへども敢て大量に趣味を有たない。經文にある大數をさながら、釋尊の出鱈目であるかの如く、徒らにこれを誦するに過ぎないのは惜むべきではあるまいか。

日本は環海の島國で久しい間國を鎖してゐたからいくら印度哲學の感化を受けても氣宇が狹い。分量についても圖ぬけて大きいものは少ない。例へば生產などでは何物もハンド、ウオークだから美術品は世界に誇るものが出來たにしても其分量は甚はだ小なるものであつた。耕耘すら機械に多く賴らず手で稻を植ゑ手で刈るといふ始末であるから大量生產など起るはづはない。戰爭をするにしても梅干一個を副食物として握り飯を食ふのだから事は簡單である。工業は多く個々に營まれ、大工場といふものはなかつた。但し長い間日本に大量の趣味の發現は絕對になかつたとはいへないが、餘り多くあるともいへない。佛敎の影響から壯大の寺院が多く造られたり奈良の大佛の如き印度にもないほどのブロンズの大きな塊りが出來たなどは大量のうちに數へてもよからう。封建制度の關係から多くの城が營まれた中に大規模のものもあるがそれも少數である。人物についても日本を狹しとして海外に踏み出したものはある。豐太閤は朝鮮征伐を企て明まで征服せんとした。また戰國時代に日本の國境を越えて隣邦を侵したいはゆる倭寇もある。これ等はともかく大量に趣味を有つたといへるであらう。大量的戰爭は支那や露國のやうな大國を相手にして戰つた事で、維新後の著しい大量戰爭である。その結果として朝鮮が日本に併され臺灣が日本の領土となり滿洲が日本の租借地となつた。國土の大量擴張はこゝに始めて見る事を得た。併し大量について大なる敎訓を得たのは世界の大戰である。こ

の大戰の現はれは獨のカイゼルの野心……世界侵略の大量趣味から源を發し有史以來始めての大戰が起り參加の國々は國力を盡して數年の間鬪つた。兵數でも軍器の數でも死傷の數でも物資の消費額でも國費國債の額でも實に莫大なものでその量の大なる事は邦人の如き小なる頭腦にはグラスプの出來兼ねるほどのもので、しみ〴〵大量についての教訓を得た。世界大戰の擧句國際聯盟が出來、軍器の制限が起り平和を將來に企圖する計畫はさま〴〵あるけれども、事實は遠からぬ未來に戰禍を豫期するところから兵數軍器は大量となるばかりだが日本で世界に誇り得るものは實に軍備の大量なる點にある。世界の列强に伍して二三位に躍進が出來たのも軍備が優勢であるからの事であつた。かゝる人殺しの機關の大量であるのはめでたい事ではないが、今の物騷なる世界に立つてはこれもまた已むを得ない。世界戰爭の擧句一時景氣の好かつた事もあつて大量の金の動きを見たが、國債もいく十億の大量に進んだ。大衆の動きが社會的に現はれ終に普選が實行された。皆大量を意味するものであるけれども、大量であつてよいものとわるいものとがある。

大正年度の地震は半世期の文化を全滅に歸したほどの大規模のものであつたが、そんな災厄の再來は誰も望むまい。輸入が年々甚だしく超過したり失業者が盛んに殖えたり國債が追々嵩

むなどは、大量になればなるほど困りものであるが、實は大量趣味は興國の根本でこの趣味がなければ國は進展しない。個人としてもこの趣味を缺いては規模が大きくなり得ない。今日の日本は最早何につけても小量で滿足すべきでない。然るに自分の最も不滿を感ずるのは生産の上に大量のない事である。窮竟大量生産を誇るやうにならねば國は進まないのである。自分は何人も小量をもつて滿足せず大量を趣味とするやうありたいと思ふ。さらに進んで大量趣味を國民共有の風尙にしたいと思ふのである。

思へば日支戰爭も長びき開戰以來既に五ケ年に及んでゐる。連戰連勝で支那の土地を略する、日本の本土の十倍するほどのものがあり、それが爲めの軍費も莫大のもので、其の大量なることは恰かも自分の說く趣味慾に合する。邦人は其の長期戰に屈托してはならぬ、其の軍費の嵩むに辟易してはならぬ。其の終局をこそ待つべきであるが、こゝに幾層大なる敵があらはれて來た。それは支那の背後に隱れて操縱した宿敵英米であつて、昨年の末終いに之れに對して皇國は戰を宣するに至つた。彼等を敵に廻はして戰ふことは、大量に於て數歩を進めたものである。彼等は富を以つて世界を壓する國であるが、吾等は此の二大國を敵とするのを愛ぶものである。彼等が重慶を尻押するから支那事變が收まらないのである。宣戰の大詔は吾等の久

しく吐かんとして吐くを得ざりし流涎を始めて痛快に一下せしめたものである。彼等は單に支那に與して我が東亞の大業を妨げるのみならず、他の亞細亞の諸國を久しく侵略して其の富源を私占して居るものである。彼等を倒さゞれば亞細亞の諸國は其獨立を復し得ず、日本の大業は彼等を倒すにあらずんば其の目的の達成を得ない。幸ひにも開戰以來即日米の艦隊を屠り踵で英の主力艦を沈め、香港、シンガポール、マレイ、ヒリツピン、ビルマ等皆な覆滅に歸し、制海制空の二權早く皇軍に歸し、彼等は手も足も出ぬ窮境に陷りつゝあり。原來彼等の自ら誇る豐富なる軍需資源は皆な太平洋の嶋國に存し、彼等の軍備は此の資源を基本とするものであるのに、それを失ふては、彼等如何に大量の軍備を經營するとも、何れより其の資源を求めんとするぞ。持つ國と自ら誇つた夢は早く破れ持たざる國の制下に歸した。此の資源は如何にも大量で、之れを始末するに、今後苦心を要する程である。勿論これはゴム、石油、其他軍需品であるが、其他の者に今後之れを培養すれば、其の產地を富ますのみならず、亦我國を富ます共榮のもので、日本は長く英米と戰かはねばならんが、此の長期戰も敢て辭する所でない。日本は今持てる國に轉じた。英米の桎梏を脫したる諸嶋國は皆な吾友邦で將來吾れに供給する國だ。何んぞ長期戰を憂へん。

要するに大量を滿喫すべき時は來た。吾等の氣宇は大ならざるを得ぬ。幾千萬哩の太平洋を池とし、絕高のヒマラヤを築山とし、無數の太平洋上の嶋國を飛び石とし、ジャングルを林園とするの日が列着した。日本は十億の多種民族を統率師導するの地位に立つことになつた。吾等大量趣味を鼓吹するもの、如何んぞ快哉を叫ばざるを得んや。

日本は至幸の國

外國人が日本に來て驚いて云ふ事には、日本といふ國は如何にも日本人の多い國だ。一寸聽くと馬鹿らしい事をいふやうであるが、實は日本ほど異民族の交つてゐないところは世界のどこにもない。近く支那の上海へ行つて見ると、世界のあらゆる人種が街頭を往來してゐて、宛から人種の博覽會にでも臨んだやうな心地がするとは誰も、云ふ事である。世界の諸國の異種民族を圖して色別をしたのを見ても、その複雜なるに一驚を喫する。異民族の混合して國民を形造つてゐるところは、大體統治上に困難がある。いざ外國に對して戰爭でもする事になると、

日本などでは直に擧國一致となつてなんの面倒もないが、外國ではそうはいかぬ。敵國の民族が多く交つてゐるところには、命令が行はれぬ、亞米利加が世界の大戰に參加した時などは、獨逸種の人民の操縦に頗る苦んだ。大戰終了の後亞米利加の努力しつゝあるのは國民の統一にあつて、必ず國旗の下に人を會する事を例としてゐる。ハンガリーなどは異民族の最も多い國であるが、現在國王を闕いてゐる。元首のない事はもち論、政治上に大なる不便の事だが、異民族が多いために國王の推擧が甚だむづかしいので、必要を感じながら、無元首でその日暮しをやつてをる。どの民族でも滿足するやうな人物ならば元首に推し得やうが生憎そんな人物はゐない。またそんな人物はあらうはずがない。そこに至ると日本などは萬世一系の天子を戴いてゐるので、少しも面倒がない。日本の有がた味は日本にゐてはわからないが、外國に出かけて本國を振り返つて見ると、初めてうなづく事が出來るとは洋行者の歸朝談に毎々聞く事である。

八十歳を迎へて

ことし昭和十四年自分は八十歳を迎へた。顧みれば本年は紀元二千五百九十九年で今一年經てば紀元二千六百年、西曆は千九百三十九年で、來年は千九百四十年となる。明治元年から算しても、ことしは七十二年を經ており、八十年を迎へる迄の經過は強ち短かくない。いつも除夜になると、唯々漫然ことしも無事に經過し一年歳を重ぬるのかと思ふだけで何等感ずる所もなかつたが、昨年の除夜にはいつものやうに氣輕に過し得なかつたと云ふ譯は、同甲の友人が昨年可なり歿してゐるので、近火の感があり、殊に自分は久方振り、歳ごし病牀に臥したから、病友の跡を追ふのではないかと云ふ氣もさした。新年は眼前にあるから、僅かに十數日の辛抱が出來ず、亡友の跡を逐ふのも馬鹿らしいと云ふ氣も起つて、始めて氣苦勞の除夜を過した。幸ひに無事に新年を迎へて見ると、先づよかつたと氣も緩んだが、よく考へると妙なことだ。八十と云ふも七十九歳の延長に過ぎぬ。在官の人ならば宮中に杖を許さるゝ光榮もある

が、自分の如き野人にはそんなことは何もない。八十の齡を迎へたからと云ふて何も喜ばしい譯でもないが、何となく大勳章でも授かつたやうな氣がするのは、人間として先づ稀有であるからと云ふの外はない。勿論自分の交つてゐる人に九十臺の人もあるから、それを思へば八十の齡は云ふに足らないが、自分のやうな若い時から不養生で、曾つては大患に罹つたこともあるものが、よくも此年齡に達したと思ふ時、自祝の念がない譯でもない。自分は曾つて生涯中に意外に感ずるやうなことを書き立てゝ見たことがある。實は眞に意外とするやうなことは幾んど無いが、此の八十歳を迎へたことが自分の生涯の眞の意外の事であらう。自分の系譜に就て見るも、曾祖母が八十八の齡を重ねた一例はあるが、他には八十に達した例はないのであつて、自分が稀れに長壽の例を出したなどは誠に案外千萬である。

日暮れて道遠しとは老境の悲哀を云ふのだが、自分の年輩は最早黄昏期に入り、夜十二時に近づいて前途尙幾里の旅程を剩すの感なきを得ない。不思議に耳も聾せず、目も明かで腰も曲らないが、年輩を思ふと何んとしても老を打消すことは出來ない。兎角老を感ずると煩悶が生じて老を打消すやうな言動をなすのは人情で、大隈侯なども八十歳頃になると、しきりに强がられた。侯は常に人壽の百廿五歳說を唱ひながら、事實悠々たらなかつたのは自から老を感ぜ

られたからであらう。吾等素より侯に比すべきでない。吾等は此期に及んで自動車と疾走を競ふやうなことをせぬ、唯だ〳〵天の許しを得て閑人となり得たことを喜こぶの外はない。自分の末期に曠古の大演劇が展開されて耳目を聳動してゐるが、最早國家は吾等から見れば、青年の荷ふ時である。吾等は關心を要せぬ。唯だ戰局が如何に終結するか、國運消長隆替の岐かるゝ所、これのみは有態に云へば關心なきを得ない。吾等は徒らに生を貪ぼるの意はないが、此の大劇の大詰めを見るまで生を保ちたいと思ふてゐる。自分が以上の文を書いてから、烏兎匆々歳月は速かに流れた。此の間世界の國際紛爭は、走馬燈の如く移り行き、眞に目ぐるしいものがあつた中に、我が同盟國獨伊は歐羅巴諸國を席卷して、終に蘇聯と戰鬪を開き、露都モスクワ近かくまで進んだが、遂に雪候に阻まれて膠着狀態に入つたが、我れも日淸戰爭は百戰百勝で赫々たる戰績を擧げつゝも、終局を見るに至らざりしもの、畢竟背後に英米二國の後援がある故で、之れを擊滅するにあらずんば、重慶を亡ぼし得ざるのみならず、興亞の目的も到底達すること能はずと、焦りに焦つて一日一日とつらき日を送つたが、果して吾が待ちに待つた日に到達した。それは昨十六年十二月八日英米を敵として開戰の大詔が煥發された。吾等は此の大詔を拜して大旱雲霓啻ならざる思ひがした。吾々は此時の來るのを千秋の思ひをして待ち構

へてゐた。果して大詔が煥發されると、直ちに戰鬪が始まり、忽ちに米の根據地爪哇に於て其の防衛艦隊を一朝にして殲滅し、越へて翌々日マレイに於ける英の主力艦二隻を擊沈し、踵で、グワム、ウエキー等の要衝を攻略し、香港、新嘉坡の堅壘も其後陷落するに至り僅々四十餘日にして、英米が百年の經營難攻不落と誇りたる各要地を宛ども枯葉を拂ふ如く擊滅し去り、早く制海制空の權を吾れに握り、彼等をして防禦に由なからしめたのは、實に曩古の大捷にて、持つ國として誇りたる彼等は忽ち其の地位を吾國に讓り、吾國をして興亞の大業を達成する目的の幾分を既に成就せしめた。如斯は吾國史に絶無の事で世界史に於ても亦類例の無き所、吾等は何んの幸ぞ日本に生れたるが故に、此の痛快限りなき偉績を見る。吾等こゝに於て、生き甲斐ありたりと知り、徒爾に死す可らざるを知り、長壽の初めて報ひられたるを知り、國慶を祝して抃舞措く所を知らない。

藝苑叢話

維新の變革期を顧みて國畫の消息を語る

頃日しきりに維新志士遺墨や懷古美術の展覽會が開かれるが、それに臨んで縱覽するに自然思を維新革新期に馳せ、能くも我邦の美術が當時の混沌期を乘り超え、活き殘つたかに感ぜざるを得ない。今も新舊體制の代謝期であるが、維新の革新は遙かに根本的であつた。三百年の鎖國を開いて廣く知識を世界に求むる大運動であつたから、舊物は何から何まで打破され、新文化を迎へる爲には上下熱中して唯だ及ばざらんことを恐れた。之れが爲に歐化主義が盛に行はれ、舊物を維持することが頑冥とされ、宛かも罪惡を潛匿するかに思はれた。此間に在つては諸家累代の寶物も二束三文の價なきものになつた。多くの城趾は僅かの價を以て拂下られ、寺も無用長物として燒かれんとし、佛像は俵につめて拂物となり、諸家に藏する文書類も或は燒かれ或は還魂紙料となつた。利用厚生の爲とあつて森林樹木は濫りに伐り斃され、後日水害の起るを顧念するの暇がなかつた。恐れ多くも舊皇居を始め兩本願寺の如きも、存在を危くす

るに至つた。如斯は維新革命の半面であつたが、此間に於て美術の存廢など或る少數の識者の外何人も意とするものは無つた。歐化颱風の吹き荒らすに任かせ、此等も一掃し去らんとする危險に遭遇したことは勿論である。

此の狂瀾怒濤の間に立つて、繪畫の運命は如何であつたらうか。日本美術の精を極めた武器刀劍等の裝飾の諸藝のごとき、其本幹たる武器が根本的に變じたからには、それに附帶する諸藝の同時に滅びるのも已むを得ないとして、娯樂本位の繪畫類の如き實生活に關係ないものは、一層存在が危ぶまれざるを得なかつた。然るにそれが不思議に廢絶を免かれた。勿論一時此等の藝術家は其職を離れて皆屏息して或は生活の爲職人の事とする陶磁器の文様を描くまでに身を變すものもあつた。他にも心ならず不慣の業務に轉業するものもあつた。此等の名家の淪落、名寶の價の地に墜ちた時は、名家は滅亡し、名寶は海外に流れ出づべき時であつたが、當時名寶は多く貴族に由つて藏せられたのと、外人が日本繪畫を理解しなかつたために、濫出を免かれた。事後の調査に由ると、名畫の輸出されたのは、殆ど仕込物であつた。

ボストン府の博物館に多く集められた屏風の如きは皆贋物であつたと云ふ。勿論濫出の美術の內、惜むべきものも入り交つてゐたに相違ないが、それが想像よりも遙かに少かつたのは何

よりの幸であつた。此間意外に多く流出したのは繪畫の內では浮世繪であつた。これは本邦に於て餘り尊敬を拂はず、高貴の階級には顧みられず唯だ低級の社會の婦女子小兒のみ玩ぶ所のものが、多く外人の賞翫に入つた事は不思議な現象の如くであるが、夫は不思議ではなく、實に外人の日本繪畫を理解するの初步であつて、浮世繪ほど我風俗を有りのまゝに描寫し、鮮麗目を悅ばしむるものは無かつたからである。國內に於ても貴族の範圍に於てこそ行はれなかつたが、國民何人にも理解された彼等自身の描寫で謂はば國民藝術とも見るべきものであつたから、彼等は先づ着眼したのであつた。

歐化主義の盛んに行はれた當初、繪畫も外人に倣はんとし、外人の繪畫技師が傭はれて來たことも事實で、教育上にも外國の畫の初步を教育し、博物局にも特に外國風に則る寫實の畫を描かせたりした。勿論油繪も漸次に入り來り、浮世繪などで其の感化を受けたものもあつた。併し外國の畫が、日本畫を壓するほど發達せざる前、早く反動が起つて國粹保存の潮流が到來した。それは日本固有の國畫を保持するの運動であつた。當時識者は皆心窃かに一概に歐化の非なるを知り、我固有の繪畫を亡はんことを歎じながら、勢に制せられて沈默屏息してゐたものが反動に乘じて遽かに崛起するに至つた。

此の反動の最中大なる刺激を與へた外國人がある。其人は東京大學の教師として傭はれ來つた人で、哲學や社會學などを擔當した若い人で、繪畫專攻の人ではなかつたが、天品に日本繪畫の鑑賞眼があつて、各所に埋もれてゐる古畫を鑑賞し品隲し其の揚ぐべきを揚げ、傍ら新畫にも及び、頗る節に當つたので、邦人は一齊に日本畫の尊きを知り、之れを棄て去るの惜むべきを漸く覺つた。此人はフエロノサと云ふて、吾等が東大に學んだ時の先生であつた。其門下に我が繪畫界に忘る可らざる人が出た。それは岡倉天心である。此人はフエロノサの美術教育を受け國粹の保存に熱中すると共に、國畫の發展を庶幾するために日本美術院を起し、國畫の名流を其の院に包羅して、其の發展の端を開いた。こゝに於て一時屏息した名流は初めて蘇生の思をなした。

狩野芳崖、橋本雅邦などが院に迎へられて指導者の位地に立つたのは此時である。彼等二人は狩野派より出た畫家だが、同派末葉の人に似ず、頗る傑出した人物であり、久しく雌伏の位地に居たが、初めて其處を得て、其の指導に由り國畫の向ふべき所が定まり、所在の畫家は殆どこれに投じた。假令院に加はらざる者も雅邦に倣ふて奮起した。岡倉天心は元來洋學者でしば〳〵外國にも遊び西洋の文物を熟知の人であつたが、此院には西洋畫を除外して、一意國畫

の保護發展に力を致し、追々多くの名流を出した。

岡倉天心等が設けた畫壇は流派に拘泥せぬ自由畫壇で、各自の自由研鑽に任じ、個性の發揮を促し羈束する所がなかつた、これが國畫の進運を促した所以である。以前流派にはそれ〴〵守る所があり、苟くも逸出を許さず、逸すれば邪道として破門をした。亦世襲の制度もあつて、某某の畫派は門葉相踵き幾百年も、或る保護の下に立ち、生計の保證を得た爲め、技藝は追々墜落したが、斯る舊體制は維新の革新と共に葬り去られたのは、寧ろ慶ぶべき革新で、美術院が自由競爭に任じ得たのも此のお蔭と謂はざるを得ぬ。尙ほ西洋の自由主義が行はれ出したのは或る意味に於て議すべきであり、現下は其の思想に困んでもゐるが、國畫の進運を促すには寧ろ喜ぶべき思想で、各流各派にそれ〴〵の特徵もあり長所もあるが、それを任意に銘々の藥籠中のものとしたのは寧ろ喜ぶべきことである。尙ほ維新の革命以後國が初めて開けて畫界の視野が大いに擴がり畫材が豐富になつたことも、又畫界の幸として逸す可らざる事實である。

上來叙する所の如く、維新の革命は國畫を抹殺し去らず、却つて其潮流に乘じて進展した。岡倉に依つて設けられた美術院にもいろ〳〵の沿革があつて、後に美術學校も設けられ、外畫も其一科とされて追々進歩を見たが、自由競爭の結果、其優秀の人を帝室技藝員に擧げたり、

官府は、賞典を與へたりする制度も設けられたが、何の科にも偏倚することなく優勝者を拔擢するに至つたから、正路に進んで發展することを得た。

尙ほ此の變革期に起つた先輩もいろ〳〵ある中に、讀書人や士大夫の內で南畫をよくした渡邊華山や立原杏所、富岡鐵齋などがあり、國事に殉じた惜しい人物には藤本鐵石、浮田一蕙などがあり、長崎では木下逸雲其他の南畫一派があり、京都には楳嶺、景年、松年、米僊等があり、東都には田崎草雲、奧原晴湖などがあり、美術院派では、芳崖、雅邦、廣業を始め、觀山、大觀、栖鳳、十畝等方今の名手續出するの盛況を呈したが、此等を一々列擧することは、此の小稿には不能で、割愛することは已むを得ないが、明治大正の新國畫を叙するに方りては、多くの先蹤あることを思はざるを得ない。

何物も舊物を打破せざれば已まぬ變革期に抹殺を免がれ、漸やく氣運が落ちつけば、純眞のまゝ國畫が舊に復して、尙ほ大いに進展しつゝ行くことを自分は世界の史上稀に見るものと驚歎せざるを得ぬ。凡そ革新變化期に臨むと、極度に馳せて何もかも舊物が一掃され一切殘らないことは、どこの歷史にも有り觸れた事實であるのに、我邦の異なる所以に就ては聊か臆說なきを得ない。顧ふに是れ偏へに日本繪畫が世界のそれとは異なり、幾百年の培養と研讃を積ん

で、根柢が深く堅く國民に喰ひこみ拔かんとするも拔く能はず、滅さんとするも滅し得ざるものがあるに由るのであらう。これは繪畫のみでなく、日本文化の他のものも皆同樣で日本は他より如何なる文物を取り入れても、其の模倣のまゝ存續するでなく、それを陶冶して遂に我物にアシミレートせずんば已まぬ國民性があるからであらう。若し模倣其まゝであつたとしたら、爭で變化の颱風に堪へ得べきや、鎖國三百年の間、鍊りに鍊つた美術は繪畫其他皆堅實に發達して、孰れも國民的の堅實性を有してゐるから、どんな大風が襲ひ來るもビクともしないのである。

要するに日本文化は積年積み上げた固有の文化を其儘に据置き、更に歐風の新文化を採り入れたのであつて其の新文化も段々に陶冶された。よく國民に調和され、舊文化と併立綜合一體となりつゝあるのは世界文明史上に類の無いことで、日本が萬邦に超絕せる文化國であることは日本の天惠であり、亦日本の誇りとする所でもある。

外人の日本畫觀

横山大觀が前年他の畫家と共に、世界美術の最古の國、多く不朽の名作家を出したあの伊太利の羅馬へ押し出して、日本畫の展觀をやつたことは日本開闢以來の痛快さである。大觀歸朝の後かの國諸新聞紙が、日本畫に對して評論したのを譯して、報告書に添へて出したので、かの國人が如何に日本畫を感じたかの一端が知れわれ等の興をそゝるものがある。近年外國でも日本畫を特に研究してゐるものがあつて、中には案外日本畫を理解し、ともすると邦人の及ばぬ觀察をしてゐるものがあるが、それはもち論極めて少數で大體まだ〳〵日本畫を理解するまでに到つてをらぬ。無理もない事である。かれ等伊太利人の目には日本畫は原始的のものとされ、あどけないものとされ、極めて單純で物足りないとされてゐる。かれ等はあらかじめ西洋流の寫實の畫と異なる事を思つて、展覽場の入口で全然コンペンションを去つて見ねばならぬ、と特に身構をしたもあるといはれてゐるが、そこまで用心して這入つても果して理解が出

來たか、甚だ覺束ない。かれ等のあるものは富士山や瀧などの畫を見て、相當繪のかけるものなら、誰でもこの位の事は出來やうと評したとあるが、繪は單純ながらかれ等の考へるやうに容易でない。形は似せもし得るであらうが、形以外の風韻などはとても外人の能くし得ないところであつて、形似のみで評したかれ等は決して日本畫が解つてゐない事を自白するものである。しかし伊太利人もいろいろの理窟をつけて、理解をつとめてゐる事が種々の評論によつて窺はれる。ある人は云ふ、日本美術は精神的藝術であり、魂の藝術である。魂が象徴を藉りて外に發するのだなどいふてゐる。これなどはいさゝか日本畫の眞髓に觸れたかにも見へるが、魂の籠らん藝術がどこにあらうか。この評者も到頭人種的に異つた畫だからその本質において、われ等は完全に理解が出來ないものだと兜を脱いでゐる。どの評者にも畫の餘白に意が注がれ、それについての評論がいろ〳〵ある。或る人は云く日本美術の趣は餘白に在る。すなはち物質的に表現せずして暗示を與へんとするに在るといふてゐるは朧氣ながら、日本畫に幾何の理解があるかに見へる。割合に理解に庶幾い評論は左の如くである。

日本美術は常に精神的雰圍氣の中に高まり、不知不識のうちに夢の國に遊ぶものである。色の渦卷や線の變妙によつて、人を感壓する藝術ではない。實は正確な暗號を持つ藝術であり、

わけて自分の職分を知り、魂に達する寫道を心得てゐる藝術である。何んとなれば藝術家が物體なり、風景なり、動物なりの前に立つて、その外形を細心に描き出す事よりも、その魂を如何に描き出さんかと苦心するのである。かるが故に實在の色彩は全く餘分のものとなり、黑白濃淡の配合一つで春の爽快の空なり、盛夏の輝く空の印象を與へるのに十分なのである。

先づこんな評が理解に近いともいへ得ようが、暗號藝術だの、魂に達する寫道を心得てゐる藝術だなどいふてゐるのは、面白い觀察である。水墨の遣ひ方の巧みなる點に付ても、かれ等は意を留めて妙を稱してゐるが、かれ等は單調に見へると自白し、墨繪が國民的藝術である日本人にとりては、決して單調とは思へないだらうなどゝいふてゐるところを見ると、到庭日本畫の長所などが理解されてゐるとは思はれない。しかしそれにしても、お世辭にも魂の畫だといひ、餘白に含蓄が寓するといひ、墨一色で揮灑するの妙をいふに至つては、かれ等も可なり解りかゝつて來たといふ事が出來よう。とにもかくにもわが藝術を提げて遠く、かれ等の目前に展開して見せる事は、世界に日本畫を紹介するの最もよい手段として、自分は大觀らの舉を多とし、其進出の徒爾ならざりしを信ずるものである。

詩畫その本領を異にす

詩を有聲の畫、畫を無聲の詩と誰でも云ふてゐるが、今より二百年前この說がレツシングに破られてから、今は學者は此語を取らない。レツシングの說に據れば、畫と詩とは其本領が全く異なるもので、兩者が重なり合つて同じことを描すべきでない。詩は畫の能はざる所を描くを本領とし、畫は詩の言ひ及ぶ能はざる所を描くのを本領とすべきだと云ふてゐるが之が幾ど定說となつてゐる。今說明の爲め一例を擧げると、船が靜かに繫がれてゐる有樣を描くのは畫家の本領で詩人は之を描くを要しない。而るに船が動き出して波の上にゆら〳〵する有樣は畫家の筆にし難い處で、詩人の描寫を待つ所である。去れば畫に詩を題する場合に於ても、畫に重複することは避けねばならぬ。畫筆の及ばない所を詩で補足し若くば詩で發揮してこそ初めて題詩に意義があるのだが、實際は贅詩が多く、支那でも明淸あたりから、漸く畫によくはまる詩や識語を錄することが行はれ出し、日本でも山陽などが僅にその呼吸を呑みこんで、相當

の題詩や題語を錄した。

小說の中の人物を描くに、その服裝まで細かしく書かねばならぬことのやうに久しく信ぜられ、それが長く實行された。今日でもそれが小說家の大切の務めであるかの如く思はれてゐるやうだ。婦人の服裝などに就ては、縞柄から色合半襟、帶地に至るまで、吳服屋の番頭でも顧問に賴まねば書けないほどの微細な所に及んでゐるが、前述の詩論からすると寧ろ餘計なことゝ云はねばならぬ。つまり服裝を描くことは畫家の本領に屬するもので、詩人の本領ではない。殊に日本の小說のやうに口繪を挿むものには、その繪に讓つてよろしいのである。外國の小說は抵ね挿畫が無いから、幾許服裝の說明をする必要がないでもないが、それにしても畫家の爲すごとくに細述するを要しない。文豪サカレーの如きは這般のデテールを省筆することを主義としてゐるが、これも前の詩論に基いて居るのであらう。嘗て坪內逍遙博士とこの事を語り合つたこともあるが、博士も矢張りサカレーに左袒する方で、斯るデテールに苦心するのは、詩人の本色でないのみならず、幾んど無益の業であると思ふ。その譯は、今日のやうに頻繁に流行の變化する時に、折角時の風俗を細かに描いても、その小說の出るか出ないかに、早や變るといふ有樣であるから、幾んど描き甲斐がないと博士も言ふてゐた。

竹田と山陽の交情

「竹田と山陽」は相對の語となつてゐる程に、山陽と云へば竹田之れに從ひ、竹田と云へば山陽を聯想する程に、離れ難い關係のあるのは、何故であらうか。山陽は書の人であり、竹田は畫の人であつて、兩者の司る所が異つてゐる。勿論山陽は六法に通じ素人ながら畫を書く。竹田も詩を作り文を賦すけれどもそれは本色ではない。唯だ山陽は竹田の畫を愛し、竹田は山陽の詩文を愛するので、互ひに交はり、その交情の刎頸啻ならざるものがあつたと云へば、兩者の關係は朧ろ氣ながら分るやうであるが、兩人が互ひに許すやうになつた其の眞相は右のごとき簡單なものでなく、モツト深い處に其原因があつたであらう。卽ち山陽の詩文は當時一般の文墨の人の爲すごとく、徒らに麗言綺語を駢べて、空疎の思想を現はすものでなく、必らず何等かの主張があつたから、其詩は詩人の詩でなく、其文も文人の文で無かつた。だから、山陽自らも詩人を以つて居らず、文も昌平黌では惡文の標本とされたが、山陽の氣取は士太夫の詩

文は此の如くならざる可らずと自得してゐた。竹田の畫も南宗の眞骨頂をねらつたから、當時餘り賣れなかつた。彼れは時流に媚びる畫を作る莫れと門生に毎々誨へてゐた。彼れの畫は錢を取る俗畫でなく士太夫の畫であつた。彼等兩人の標持する所が個樣に高かつた爲めに此點に於て互ひに相投じて、刎頸晉ならざる交を結ぶに至つたと云ふのが恐らく眞相に近かいであらうと思はれる。

山陽の當時交つた畫家には米山人があり、竹洞があり、海仙があり梅關などもあつた。併し其の何れに對しても竹田に對するごとく、深く許さなかつた。當時名を博してゐた某々畫家に對しては俗畫師と罵倒してもゐる。竹田も亦當時の儒者や文人に詩文の相談を爲すことを欲せず、必らず詩文の添刪は山陽に請ふを例とした。當時山陽の交つた文人には小竹、星巖、敬所、雲華等があり、亦茶山淡窓などもあつたので、竹田は皆交際があつたが、其の心友と許した者は此内に無かつた。山陽竹田の提携が彼等死後に於て相扶けて聲價を發したのは、敢て竹田の畫に多く山陽の題識があつた故のみでなく、其の俗流を拔き超然嵩高の風趣に默契する所があつたからであらう。兩人の書畫は莫大の價をあらはし、隨つて贋作の甚だ多いのも怪むに足らない。

山陽が竹田の畫に傾倒してゐた一例とも見るべきは、嘗つて竹田が人の爲めに刻苦して畫した畫帖を山陽に示すと、山陽は激賞して遽かに食指動き、個樣な好畫は人の有に歸するは惜しいと云ふて横奪した。竹田は此の爲めに更らに再寫を由義なくされた。山陽は此帖に序して、人の樂しむのを横奪して自ら樂むのも亦一快だと言ふて、一樂帖として傳はつてゐることは餘りにも有名の話だが、親しく交はる間柄にはおのづから相手の作を粗略にするもので、如何に名作でも、又それに涎を流しても多くは褒めそやすまでで、それを横奪する程の熱を起さないのが普通の例であるのに、之れを横奪するまでに惚れこんだのは、ヨク〳〵の事であつたと見へる。事實、此帖は竹田の傑作で何人も食指を動かすものである。竹田は平素山陽を己れの畫を理解する第一人者と許してゐたから、斯る横奪に遇うても、喜んで與へたであらう。

竹田京寓の日には山陽の家に泊りこんだことが一再ならずあつた。竹田が山陽の爲めに畫を作つたのは斯る折であつたであらうが、山陽の室の梨影が氣を利かして、竹田の起き立つ前に早く書室を掃除して、毛氈を布き紙をのべ筆硯を具へて置くのを例とした。これは多分竹田に書かせる方便であつたらしい。斯る場合に書き殘した畫は、山陽の家に藏せられ、それには抵ね山陽の題讃があつて、他日書畫界の珍とする所となつた。竹田は漫りに他人の題讃を許さな

かつたが、山陽の題讃は喜んでやらした。實は山陽の題讃ほど竹田の畫によく折合ふものは無かつたのである。竹田自身の題識も多くは山陽の雌黄を經て居るから、竹田の多くの畫に山陽が題讃や題識を透して與つて居るとも云ひ得よう。山陽家に傳はる逸話に據ると、竹田は畫を作り終り、イザ題讃となると、寢後推敲に苦心し、同室に寢ておる山陽がいつ目を覺して見ても竹田は睡りもせず苦吟してゐたと云ふ。竹田はコンな逸話に附いて見ても、藝術には殫身鏤骨の人であつたことが窺がはれる。

竹田の藝術に就ては、竹田自身から語る所のものが無いでもない。それは、愛弟子高橋草坪に與へた手簡（十二通）が加賀翠溪氏の家に藏せられ、其の複製が出來てゐるので、それに由つて一端を窺ふことが出來る。只だ遺憾なのは、こゝに其原文を引くことが出來ないことであるが、今は其要領を左に擧げるに止める。

勉むべきは好畫を見て工夫をすることで一枚の好畫を見れば一等進み二枚見れば二等を進む、自分などは長崎で多くの畫を見た爲め、幾許か進境を見た。

仕込ものでも一概に棄つべきでない。流石にあちらの人の書いたもの丈に、どこかにおもしろい處がある。

京攝は米薪も貴く、畫を賣るとなれば、自然世間一統の間に合はせものとなるを免かれないから、篤と唐風に足をかためてから上京するがよろしい。

只今三都共に眞畫はなし、江戸に於ても所謂る江戸風にて薄氣が多くして面白からず、雲室上人なども最早老衰に及びたり、眞實の唐を學ぶことは、餘程難儀の事で摧身粉骨を要する。

南畫には詩が添はねばならんから詩作も怠つてはならぬ。

竹田が草坪に與へた手紙の內藝術に關する心得を要略すると以上の如くである。就中竹田は錢の爲めにする畫を作るまじきことを力說して、草坪に眞劍の研究を勸め最早若い人の世の中である、君などが勉めずして誰れか畫界を縱斷するものぞと激勵してゐる。

竹田は多方面の趣味家で、山陽と同趣味でもあつた。其詩作に專門詩人程の多量のものがあつて、自分は曾つて國書刊行會で其全部を刊行した。著述には山中人饒舌の有名な畫評がある。編著には今才調集がある。煎茶にも趣味があつて特に木米の作器を愛した。香川景樹に交つて、和歌にも造詣が深く、自畫に和歌の讃をしたものが多く傳つてゐる。骨董にも趣味があつて曾つて南朝の年號のある銅鈴を獵たので、山陽に興國銅鈴歌の作を請うて珍重した。時々

俗謠を作り酒席に唄はせた。山陽が之れを賞して自ら扇子に揮毫したのを自分は所藏してゐたこともある。竹田は音曲に通じて自身三絃をも彈じた。山陽と竹田が旗亭に酒を飲みかはした其際の逸事も少からずあるが、酒席では竹田の風流才は山陽よりも一等地勝れてゐたため、狹斜の巷には竹田が持てたと云はれてゐる。

立原杏所

水戸には種々多能多角の人を出してゐるが、風流の人では立原杏所を第一に推すであらう。杏所は大儒立原翠軒の嫡子として生れ、通稱を任太郎と云うた。此の人嘗て我鄉國越後に來たことがあるが、何の目的で來たか、たゞ漫遊であつたか、傳ふる所に據れば、到る處越後に散在してある烈公の書を集めて持ち歸つたと云ふが、其の意味が解し兼ねる。亦あれほどの文人が、越後に來て書でも畫でも書き殘したものが見當らないのも一奇とすべきである。何分にも杏所の來越に關し、文獻の存するものが甚だ少ない。自分の一族の市嶋士協（俗稱次郎八）が

家の富むに任して多くの書畫を藏してゐたので、杏所はそれを見る爲めに新發田に訪うたことが、士協の碑文の內に見えてゐる。杏所は其の書畫を閲覽して喜んだが、藏者の歿後であつたので、眼福を得たのは仕合だが、藏者に遇つて鑑賞を共にしなかつたことを遺憾に思ふと云うたことが、碑文中にある。これが自分の知る唯一の文獻でこれに由つて杏所が新發田まで來たことが知れる。亦新潟にどれほど滯在したか、誰れと共に遊んだかも分らないが、新潟の酒樓に妓の追分節を聽いて深く喜び、其の節を習つて、水戸に歸つた後、醉後之れを謳うて自から興じたことが、水戸人の書いた傳中に見えてゐる。

杏所は南畫を能くし、渡邊崋山と共に藝苑の珍とされてゐる。杏所の畫は所謂る士太夫の畫で、斗米の爲めに揮毫をしなかつた爲め、崋山の作に比すれば一段高いと稱せられてゐる。杏所は又鑑定の術に長じ、明淸の畫を多く鑑定した。あの人自己の畫も恐らく、明淸の多くの畫に親炙した餘りに成つたものであるまいか。杏所は常に書齋に鎌倉彫の笈形の篋笥を置き、その中に酒と下物を納め、人定まると、鑑定すべき多くの畫幅を四壁に揭げ、杯に親しみつゝ樂しみながら觀賞し且つ鑑定するのが常であつたと傳へらるゝ。杏所は其の頃支那畫の第一の鑑定家と稱せられ、水戸を始めその他から持込まれた書畫は常に累々として堂に滿ちたと云はれ

てゐる。

杏所の畫の諸方に傳はつてゐるものは、概ね精細のものが多きを占めてゐるが、大作の名高いものは加賀の前田家に存してゐる。それは金屏風一双に畫いた雲間望龍圖で傑作と云はれてゐる。これに就いて一挿話がある。前田家と水戸家とはもと親戚の間柄であつて、杏所は其の長女春沙を奥仕へに差上げてゐる關係もあるので、兼て杏所に何か畫くべきやう前田家の冀望があつた。ある時杏所が旅を重ねて加賀に着すると、前田家では此の時こそと金屏風を出して畫を需めた。杏所は諾して多量の墨をすらせ、自分はいつ迄も饗應の酒に飲み耽つてゐたが、漸く醉郷に入ると、起ち上つて布巾を滿盤の墨に染め、咄嗟屏風一杯に塗抹し去つた。坐にあつた前田家の家職達は、其の豪放の擧に驚き狂亂の行爲でないかと訝つたが、徐ろに筆を把り、あちらこちらに點綴したのを見ると、忽ちにして片鱗閃き、忽にして爪牙現はれ、遂に龍頭が現出するに及んで坐にあるものアツと絶叫激賞した。この畫は杏所が旅次大雨に遇つて、黑雲天に漲る實景を胸臆より呼び起したもので、此の人の作中の逸品と云はれてゐるが、知らず前田家に今尙ほ珍藏されてゐるか。

杏所は畫のみならず書も能くした。書品は遒麗にして氣格が高く雅趣に富むでゐる。恐らく

明人に私淑したものであらう。水府に書を能くする人も少くないが、杏所は多分其の第一に推さるべきであらう。藤田東湖の書は一時廣く行はれたが、あれは筆者の人格を崇敬しての流行で、書道に於ては杏所と比較にならぬ。尙又杏所は篆刻に最も造詣が深かつた。彼れは印聖と稱せらるゝまで妙を得た。其の作風は明の汪敬淑に私淑してゐるが、多分『飛鴻堂印譜』に枕籍して其の骨法を得たものであらう。其の作品は多く存してゐないが、自分の親族に水滸傳中の人物の名を刻したものが數十顆珍藏されてゐる。これは水戸出身の某司法官が越後に在勤中割愛したもので、戲作ではあるが、飛鴻堂の印譜に加へて決して遜色のないものである。家藏に一幅に收めたものがある。

杏所の子に二人の女子があり、共に父に習うて畫を能くした。長女は春沙、妹を秋沙と云うた。姉は曾て崑山に就いて學んだこともあるので、其の作は藝苑に傳はつてゐる。春沙は曾て加賀侯の奥殿に奉仕した折、襖に千禽を畫いたと云ふが、今尙保存されてあるや否や。彼女が奉仕中、若殿の御手がかゝつて懷姙したので思案に餘り、密かに母に相談に及ぶと、杏所は返事の代りに、懷劍を文箱に入れて送り自殺を諷したと云ふ說もあるが、此の事實は疑はしい。何となれば、春沙は後に水戸の家に還つてゐると、烈公が一日立原家へ遊びに來られた時、春

沙が御慰みにと月琴を彈じたのがお氣に適ひ、强ゐて迎へられて大奥に奉仕することになつたと云ふから、前說が誤傳であらうと思はれる。

本居宣長

本居宣長は國學の權威なれども、其の少壯時代松尾寺の傑僧等空に就て密敎を學び、其の姓とする「本居」の二字は、空海の書「心任鍵祕」の中にある「三界如客舍、一心是本居」より取りたる居士號に由來するもので、世人は普通姓として怪まざれども其由來は如此である。佛學を極めざれば皇學の本旨も極めがたく、本居の皇學は佛敎を一概に排斥するものでない、宣長を以つて佛敎に通じないとするものがあればそれは間違つてゐる。本居の門人平田篤胤も亦佛學に精しく、其の著述に佛敎に涉るもの〻多きは皆人の知る所で、儒者が一概に佛說を排斥するのと、其の選を異にする。神佛絡らみつきたる日本の皇道思想をよく諒解するには勢ひ佛敎を極めねばならぬ。

葛飾北齋

畫師の傳の中で、最も卓拔なるものは蓋し北齋傳であらう。北齋ほど種々の流派を學んだものはない。かれは春章の門にも入り、また狩野融川の門にも入つた。菱川師宣の畫風をも慕ひ、住吉廣行に就て土佐風を學び、また支那畫を習ひ司馬江漢に西洋畫をも學んだ。かれが縱横の筆を揮ひ得たのは偶然でない。かれは最初木版彫刻を學びそれを業とした事もある。かれが版下を書くに一種他の畫家の到り難い呼吸を心得てゐたのは、この故であらう。かれは早くから西洋と交涉があつた。和蘭陀のカピテンが日本に來たときかれに請ふて、日本の風俗を描かせ、それを本國へ持ち歸つた。かれが歿後、西洋で北齋熱を生じた端は旣に生前に發してゐるともいへ得よう。かれは時に非常の大畫を作つて人を驚かした。名古屋で書いた大畫は轆轤仕掛けで、やつと某寺の山門に吊るして大衆の覽に供した有名な話がある。そうかと思ふと煙草入の前金具の圖案を細寫してその長を認められた。九十の高齡を重ね、一生九十三回居所を

替へたなども外の畫師にはない。またかれほど多くの別號をもつてゐるものもない。數へ來れば二十近くもある。かれの筆に成つた繪本（黄表紙、合卷、讀本、狂歌等）實に二百卷を數へる。この長い生涯にかれの畫風もしば〳〵變じてゐる。しかし北齋の眞面目は名を北齋と署した、寛政の末四十歳前後より享和を經て文化の末五十四五歳までに、現れてゐるといふが妥當であらう。爲一と改めてからは一種の癖を生じて來た。妙に筆を屈曲して勁刻の畫を作るやうになつたのは、爲一と署してから晩年益々甚だしくなつた。人は一目して北齋の畫をこの癖で判ずる事になつたが、實は惡癖である。或る批評家は北齋の描く禽鳥の多くは背目過大、羽翼勁短、猛惡の相を專らにし優美可憐の態を闕くといふたが、人物も概ねその通りで、兇奸獰猛のところに最もその長所を見せてゐる。これは三國志や水滸傳などを書くために、かうなつたのかも知れんが、晩年の諸作には力は見へるが優美は乏しいともいへ得よう。かれは老ても氣魄は衰へず、百十歳に達したらば畫は始めて神に達せんといつたといふ位である。もしさらに天壽を保つたら、畫境はまだ變じたかも知れぬ。とにかく浮世繪師中この人の繪ほど異彩を放つてゐるものはない。

葛飾北齋家居の圖

家藏に會つて、竪一尺幅四五寸の北齋の家居の狀を圖した反故があつた。北齋門人の北馬のものしたものであつたやうに覺へる。それには北齋が狹い室に寢てゐる。その隣室が臺所も兼ねた茶の間とも云ふべき疊二枚位を敷くほどの處に、一婦人が長烟管で喫烟してゐる。これが娘のお榮で、其の側らには、飯器や二三の食器などがあつて、そこに蜜柑箱を佛壇に間に合はせたものがある。食物を包んだ竹の皮などが雜然と散亂してゐて、見るかげもない佗住居の光景で、机や書物などは更らに無く、北齋は寢ながら筆を把つてゐるが、彼れの覆ふてゐる夜着には袖が無いので一寸變に思ふたが、北齋は夜着の袖を不要としたと言ひ傳ひがある。多分此圖は寫實であらうと思ふてゐたが、あれほどの名匠もその磊落の性格から貧居を更らに氣にかけず、一旦他へ嫁した娘も良人に慊たらず、家に戻つてきて貧乏生活の仲間入りをしてゐるなどは、北齋の面目が躍如として現はれて面白ろく思はれた。偶々其雜誌に、お榮を中心として

北齋の生活を小說にしたものを讀んで見ると、挿畫は可なり文飾されてゐたが、北齋も娘も生活に無頓着で、衣類なども父子共通であつたことなどを云ふてゐるが、大體自分の持つてゐた圖に近かい材料を取つてゐるので、此圖を思ひ出した。小說に據るとお榮の嫁した良人は油屋佐助と云ふて畫名を等明と云ふた。餘り上手でもなかつたと見へて、北齋はいつも罵倒した。娘が離緣となつたのも、北齋が例の調子で畫の拙劣を罵つたことなどが原因であつたらしく、お榮自身も親の仕込でいくらか畫がかけたから、北齋と較べて良人が劣つてゐるので慊たらず遂に世話女房をやめ北齋も寧ろ贊成したらしい。

畫家小川芋錢

近頃の畫家に小川芋錢と云ふがあつて、脫俗の畫をかき人の賞讃を博してゐる。此人は常陸の牛久に生れ、永らく貧乏生活をつゞけたが、此人に芋錢の名のある來歷がおもしろい。これは徒然草にある芋喰ひ坊主、眞乘院の盛觀僧都に倣つたのだと聞き、自分の興味を惹いた。此

僧は芋が大好きで、讓り受けた坊も賣り飛して芋にかへ、終生芋ばかり喰つたと云ふ奇僧であるが、小川芋錢は俗稱茂吉だが、此僧に私淑して早く芋錢の名を命じ、一時は「いも錢」と稱した。或は「いもの助」とも云ふたとある。盛觀僧都に私淑しただけに、脫俗の生活を送つて、其畫にもおのづから脫俗の飄然たる所があり、非常に酒を好んで、或る時は泥醉して途上に睡つたりした。幸德秋水と懇意であつた處から、嫌疑を受けて警察に拉致された時、風呂敷包から出たものは爆彈ではなく芋莖の罐詰であつたなどの逸事もある。

原久一郎氏の大トルストイ全集完成

大トルストイ全集は完譯を了した。此の集は每冊一千頁の巨冊で二十二冊となつてゐる。頁數を算すると實に二萬二千の大數である。これが一人の譯者で四ヶ年を費して完成を告げたのは、眞に驚嘆すべきである。恐らく廣く世界に求めても、斯る短時日に完譯を成就した例はなからうと思ふ。坪內博士が沙翁全集四十卷を全譯したのと一對の話で、本邦文學界の誇りとな

し得るものだが、沙翁の一卷は頁數も三百に過ぎぬ、而も坪內博士は其の完譯に幾んど全生涯を委ねた。是れと彼れとは譯するに難易の差があるにしても、一年五冊五千頁を期を愆たず發行することは事實容易な業ではない。自分の經驗に據ると、往年計畫した國書刊行會に於て未刊の古書を出版した時、反譯に比すれば樂な仕事であつたが、それですら全部完了するには豫定よりも一年間延びた。

斯る大著の出版には其の經過中意外の故障が譯者に生じて、兎もすると挫折することが有り勝ちであるのに、譯者の氣根はよくも續いたと感服せざるを得ない。此の四年數ヶ月は全く世緣を絕ち一途完譯に沒頭し、あらゆる障碍を克服した其の熱心と勇氣とに驚かざるを得ない。

此全集の譯文等に就いて批評がましい事は自分は避ける事を妥當と信ずる。其譯は譯者と自分は餘りに親近であるからだ。譯者は吾等の大學から生れた人で、亦自分と同縣同鄕の人である。設令ひ讃辭を呈したくも、それを遠慮する方が妥當であらう。但だ氏が此の事業を成就するに如何に勤勉であつたか、懇親の間柄であるのに五年間に僅か一回しか訪はれたことが無く、已むなき用はいつも北堂が訪ひ來つて辨ぜられた。それほどに氏は時を吝んだ。

南方常楠氏

南方氏は紀州和歌山の酒造家で、前年大隈侯に代はり酒銘を撰んだことがある。其家の主人は我早稻田大學出身で相識る人であるが、其弟の常楠氏とは面識がなかつた。併し其の著述はいろ〳〵讀んでゐる。頗る博學の人だが、專ら植物學者として知られてゐた。常楠氏と交はりの深かつた三村竹清氏の談に據ると、常楠氏は一切經全部を諳誦したと云はれるが、諳誦はどうか分らないが、確かに全部涉獵したに違ひなく、其內容は何を問ふても知つて居つたと云はれる。いつぞや氏が發見した植物は、印度の佛典にある、催淫の奇草で、釋尊が門弟子に其の草に觸れることを戒めたと云ふ何がし草だが、其名を忘れた。其の種子が印度から輸入された食物の袋に附着したのを發見して培養を試みた事實がある。これなどは佛典の涉獵から獲た結果であらう。

常楠氏の學術研究の談は專門家に讓るとして、二三其の性格に就て語つて見ようが、氏は學

者として有勝の世事に無頓着で、細君に對しては頗る駄々子で、酒が大好きで、飲むと人を罵倒する癖があり、處も人もかまはずに發するので、人は警戒して東京へ來た時など、或る知人の家に宿泊したが、其家では禁酒を標榜して一滴の酒も許さなかつたのを、其家の婦人が氣の毒に思ふて、祕かに小量の酒を與へたのを、非常に喜び其の婦人を激賞したと云はれる。その博學の故を以つて宮中に召された時、知人は謁見の際に或は平素の如く、官吏侮辱でもやらねばよいがと、皆々氣づかつたが、意外にもそれは無く、徹頭徹尾妻の有德婦人であることを奏上に及んだと云ふ。これなどはあの人が童心であることを表白したので、專門の研究以外全く小兒の如き人であつたらしい。家事萬端は妻に任かせて其の爲す所に從つてゐたが、往々夫婦間に口論が起り、それが熱すると、常楠氏は古るぼけた日記帳を取り出して或る處を夫人に讀み聞かせるのが常で、夫人は合掌してそれだけは御免と云ふたとあるが、氏は夫人の嫁した夜中の閨語を細かに認めた一節を讀んだからであつた。コンナ事もあの人の童心を語るものであらう。あの人の失策話はいろ〳〵聞くが、皆な天眞爛漫で愛嬌がある。多くの研究に浮き身をやつし昨年歿したのは惜むべきであつた。

墨場一家言

卷菱湖の書は一代を風靡し、幕府時代から書を能くするものと云へば菱湖風で、今尙ほ其風が行はれてゐる。いつぞや浪華の旅舍に滯在中、或る支那の書道に精しい人に訪はれた時、自分は坐右にあつた米庵、菘翁一六などの書を出し示したが、其人は一向感心しない態度であつたが、菱湖の草書を出して示すに及んで、其人始めてこれは秀逸だと激賞して云ふのに、他の書は皆な支那の某々の書に倣つて未熟の點があるが、菱湖の書は全く模倣を脫して自家の書となつて居り、運筆、縱橫自在無理の無い處に、大なる價値があると褒めたことがある。

菱湖も或る時代說文の研究を積まず、某地の旅館に說文學者山梨稻川と同宿した時、旅館の主人が隣室に菱湖先生が宿泊して居らるると稻川に告げると、稻川はあのうそ字かきかと罵つた聲が端なく菱湖の耳に入り、終に本人相對して書道を論じ、稻川より說文を調べない人の字がうそに陷ると、種々の實例を擧げて語るを聞き、菱湖も我を折つて、それより說文研究に沒

頭したといふが、菱湖が書道で一代を風靡するに至る道程には斯る逸事が潜んでゐる。

菱湖の書は一代を風靡したが、世人の餘りに注意しないことが一つある。それは菱湖の細楷が書物の版式を一變したことである。從前の版木は大體お粗末のものであつたが菱湖が細楷で自ら版下を書くことになつてから、初めて支那の明版などに比して、餘り遜色のないことになつた。勿論菱湖自身の書いた版下は幾らもないが、其の門流の細楷が版下に續々用ひられ、版下の書の全く整ふたのは、菱湖の書の普及のお蔭である。

貫名海屋も書壇に名聲が高いが、あの人も書道に刻苦したもので、嘗てあの人の反故が京都に出た折、一見したが、長持一杯の多量のもので、多くは種々の臨書であつた。貫名は書道研究の爲め高野山に住んでゐたことがある。それは空海の書を學ぶ爲めであつた。此人は元來武門出身であるのに、劍を棄てて文事を專らにするに就いては、是非とも書道で名を爲さねばならぬと、姓を貫名、名を省吾と改めたが、これは其の發憤の記念であることは、嘗つて自分の手に入れた書簡に明記されてゐる事實である。貫名は終に書で大名を博したが、其の辛苦の蹟は、其の臨書の數多い反故が物語つてゐる。

菘翁の書は幾回か變化してゐる。これも恐らく書道に深い造詣のあつた現はれであらう。嘗

つて日下部鳴鶴翁を訪ふた時、翁は菘翁の事を語り出てゝ云ふに、大概書道の人は初め筆鋒雄健にして動もすれば霸氣を帶るが、漸く熟すると平淡溫藉に趣くのが通例である。即ち年輩の若い時の書は、豪健であつて、老境に入ると平淡になるのが常であるのに、貫名の書だけは順序が逆で、老境に入つての書は如何にも剛健であると云はれた。成る程其の評の如くで、或は此人晩年中症にかゝり筆が自在を缺いた故であつたかも知れないが、此人の書の妙味は最も晩年にあると想はれる。

自分は曾つて王鐸の擬山閣帖を需めんとしきりに搜索した折、圖らずも一帖を獲た。それは王鐸の書齋に貼りつけた、古人の贊を隷書に書いたもので、其箱に富岡鐵齋の題識があり、蓋裏に小傳が錄してあつた。自分は之を見て、初めて石川丈山が三十六僊の讚を隷書に書き、其の書齋に置いたことが、王鐸に倣つたものであることを識つた。古人を讚したことも書齋の具としたことも王鐸と同じであるのみならず、隷體が頗る王鐸に似てゐるので、何から何まで王鐸に私淑してゐることを面白く感じた。王鐸は丈山と同時代の明の忠臣であるので、其人を景慕するの意を寓したことが想像された。

禪僧の書には往々俗氣を見るが、高僧の書に成ると、どこかに高雅の處があつて自然頭が下

がる。良寛は自分の鄕土の産で、今はしきりに崇敬されてゐるが、鄕里では餘り尊敬を受けなかつたのは、其の草體が讀めなかつた爲めで、良寛自身も己れの生活の糧を得んとする手紙には、特に分りやすい假名で書いた。あの人の懐素流の草體に感服を拂ふた人は、當時吾鄕土に來てゐた龜田鵬齋であつた。彼れは良寛の書を學んだ。鵬齋は良寛の最初の門人である。だから良寛の書を江戸に紹介した人は先づ指を鵬齋に屈すべきだが、明治になつてから第二の紹介者がある。その人は會津出身の佐瀨得所で、此人が私の鄕里の水原に來た時、小田島なる舊家に就て、良寛の書幅を示された時は、越國に斯る能書あるかと驚ろき切りに割愛を望んで、旅中金が無いからと云ふて佩刀を脫して價に換へんとしたと云ふ逸事が存してゐる。得所は東京で一時書で鳴つた忘れ難い人であるが、恐らく明治になつて良寛を東京に紹介した最初の人であらう。

曾つて長崎に遊んだ時有名な禪刹を二三訪れた。皆な隱元木庵等を開祖とする寺であつた。流石に寺にはいろ〳〵隱、木、卽の字を刻したものがあつたが、それ等は臺所や雪隱などに掲げられてゐる刻字の板額の類で肉書は幾んど無かつた。寺僧に就て見んと欲したが寺僧は眞面目に答へて、澤山にありましたが皆托鉢に出かけたきり歸つ來てませんと云ふた。蓋し寺僧は

寺の維持費に苦んで質に入れたこと言ふたので、自分は一笑したことを想ひ出す。

毎々近頃の書道展に臨んで氣のつくことは楷行草の書には、多く敬服を拂ふほどのものを認めないが、假名と篆書だけには、なかなか頭の下がるものがある。これは何故かと考へて見ると假名に就ては從來松花堂や千蔭などを手本としてゐたのが、上代假名を學ぶことになつた結果であらうと思はれた。昔しは道風を始め貫之、公任行成などの墨蹟は容易に手に入らなかつたが、近年寫眞作用で多くの法帖が流布し、それに由つて假名を學ぶものが多くなつた爲であらう。亦篆文も今は素人藝術として篆刻を試みる人が多くなつたことは、篆書の參考書が容易に手に入ることになつた故であらう。どうせ學ぶなら高い處をねらうべし。古人の糟粕を嘗めた松花堂や千蔭を學ぶは、假令彼等に優つても、賞鑑するに遠い、上代を學んで及ばずとも尙ほ高致を得る丈の事はある。兎角手本は擇ぶべきである。

近年書を學ぶ者の幸と云ふべきは、支那の古碑が交通の開けた爲め、續々發見され、それが嘗つて拓摺を經ない爲め磨滅を免かれうぶに存在しゐて、中には從來貴重視された法帖よりも幾等貴重のものもある。此等の多くは寫眞作用で複製されてゐるから、今日程たやすく好手本が得らるる時は無い。現代に名筆と呼ばるゝ人が追々凋落して居る世の中に一方支那で古碑本

の續出するのは書道のために賀すべきである。自分などは時々人から碑文の類を誰れに囑すべきやと相談を受ける場合には、いつも以上の古碑の内から集字して寫眞にうつして用ふべしと勸め、之れを實行したことが幾回かある。其材料は現今廉價で得らるゝから甚だ調法である。

昔しは神社佛閣に掲げる額面の類は天子の宸筆か然らずんば必らず當時第一の能書家に書かせたもので、神社佛閣のみならず、醫者の看板の如きも亦然りであつたが、近來は書は拙でも勳爵の高い人の書を珍重することゝなつた。支那でも此風が行はれ、李鴻章の廟祠にもいろいろの額が掲げてあるが、皆勳爵本位で可なり拙き書も交つてゐる。書が墮落した一徵として悲しむべきである。百代に傳ふべき碑の文字を始め、額や牌の類は苟めにすべきでない。拙劣な書を掲げるのは故人に對する冒瀆とも云へよう。或は云ふ無位無官の者の書こそ寧ろ冒瀆であらうと、これは書を本位としない論で、如何に當時に時めく大官でも久しからずして其人亡び世に忘れらるれば、其の書は看板師の書と選ぶ所がない。名筆こそ世は幾度替ても長く人に仰がるゝもので、故人を後世に偲ばせるには永久性の能筆を藉ることが大切で、昔しの人が第一流の書を物色するに苦辛したのは此點であつた。

西洋では書畫のコピイ(副本)を珍重する風があるので、其の副本に多くの價を拂ふことを辭さぬ。隨つて眞に近い副本が作られ贋物は少ないが、日本にはコピイを重んずる習慣が無く、直ちに原物を獲んとするから贋物が續出する。贋物を排除する一案はコピイで滿足する習慣を起さねばならん。如何に眞を亂るほどよく出來てゐる書畫でも贋物となると人に顧みられない。若し贋作とせずに、複製の印でも押されてあつたら、人の厭忌を免かるゝであらう。某寺某家の寶物となつてゐるものゝ如きは、如何に欲しくともそれを得ることが絶對不可能である以上は、コピイで滿足する外は無い。明かにコピイを歡迎するとなれば、贋作者は一轉してコピイを作るであらう。

近來寫眞作用で光筆版と稱する複製本が出で、往々眞を亂るものがあつて、鑑定家も惑はされるが、其の複製であることを看破する法は、表裝を剝いて裏に墨のニジ味の有無を檢する外に道は無い。いつぞや安田善次郎氏の宅で、貫之の歌切の正本と複本を並べて示されたことがあるが、どう考へても何れが正本であるかを判じ兼ねたことがあつた。其際坐中の一人、其人は盲目に近い眼疾に罹つてゐるものが、判じ當てた。其人は目がきかないから鼻で紙の香を聽きかびくさいのを原本だと云ふて判別したが、鑑定には眼ばかりではダメ、鼻も亦大切な道具

であることを感じた。

光筆版がまだ行はれなかつた前に、眞を亂るほどの巧妙な模本を作つた人に、西村乘文がある。此人は奈良の古刹から古紙の斷片を得て、寫眞作用で模本を作るので、當時尙古家が多く騙された。嘗つて此人の模造した、良辨の心經が三千圓で井上侯の手に歸したことがある。それを耳にした自分は同じ模本を三圓で手に入れ、侯は金持だから三千圓、俺れは貧乏だから其の千分の一だといふて戲れたことがある。亦ある時重野博士が岩崎家の爲めに集められた幾百通の古文書を西村に示されたことがあり、西村は見畢つて博士と別れると、あの文書の內には自分の製したものが十數枚あつた、博士は興みし安い人だと豪語したと云ふ逸事がある。

模倣は藝術上强ち困難でないが、古るい時代の調子を自作で出すことは甚だ難い。曾つて今は故人となつた光雲翁に聞いたことがある。或る時代に相應する佛像を彫刻せんとする時は必らず先づ其の時代の佛像を幾つか、よく觀て其の作風や調子を充分腹に入れて、それから刀を下すのが常であるが、出來上つて見ると、どうしても時流のものになつて、腹に入れたことと背馳して愛憎がつきると云ふた。兎角一代の風氣に支配を受けることは免かれない。然らば模倣はどうかと尋ねたら、それは容易に出來ると答へられた。書に於ても同じことで、模倣に長

ずる贋作者は多いが、書を自分のものとして高い調子で作ることは難い。明治の時代に空海流を書く人、光悅風を書く人もあつたが、皆模倣の域を脫せず、どこにも個性の認むべきものが無かつた。しかし自分の人格や自分の意氣を現はした書も絕無では無かつた。水戸烈公の隸書などは、其の巧拙は兎も角も著者の烈々たる意氣が現はれて居る。土佐の容堂侯の書は頼山陽に私淑したものだが、山陽に比すると品位が遙かに高い。伊藤春畝公の晩年の書などは、宰相的の風格があつて如何にも堂々としてゐる。書法に於て此等の人々に駕するものがあつても、品位は筆者の人格の現れだ、これ丈は到底及ぶべくもない。

畫を能くし兼ねて書を能くする人があると世間は畫の方を採つて書を閑却するが常である。畫家で書の重んぜられた人は池大雅であらう。大雅は書に自負もあつたらしく、多くの書が世に流布してゐる。自分などは大雅の長所は寧ろ書にありと思ふてゐる。大雅は亦篆刻にも長じ、それも堂に入つてゐる。彼れの友人に高芙蓉があるから、芙蓉から師承したのだらうかと推測するものもあるが、芙蓉に比すれば大雅の作が寧ろ優勝を認むべきものがあつて、芙蓉を印聖と稱し得べくんば大雅も又其の列に入るべきであらう。兎角大雅も畫名に掩はれて、書の方が閑却されてゐるのは、畢竟書道の非運に據るもので、書道の振興を希圖する所以はこゝに存

する。

詩歌の新體制

自分は漢詩にも和歌にも門外漢で、他人の作を批評することは出來ないが、詩歌に對して心窃かに思ふてゐることがある。それは何かと云ふと、詩歌も時代の作であるから、其の時代の聲であらねばならぬと思ふ。詩も歌も嚴格なる規則に束縛され、唐宋の調で無ければ漢詩でないと斥けられ、和歌も昔しの萬葉や古今の調で無ければ和歌でないと思はれ、用語までもあるものに限られては、其の作品は時代を離れたものたるを免かれない。勿論これが詩歌や歌の本體でなく、詩も歌も追々專門家に因つて斯くされたもので、其の弊たるや言ふまでもない。今の言葉で云へば舊體制であつて、新體制に於ては之れを改めて、現代の風俗習慣言論等、其作の時代と離隔してはならぬ。詩歌は必らずしもむづかしいものでない、之れをむづかしくしたものは舊體制の羈縛に因るのである。

名家私印の蒐集に就て

家藏の印の内で數の多いのは名家の私印である。故人の私印は流用の利かない所から、大抵印材を活して他の彫刻用に供するため、磨するのが常となつてゐる。然るに自分は之れを保存することに多少努力し、往々重價を拂つて蒐集してゐるのを、人は怪んで何故であると問ふ。之れに對する自分の答は、段々後に說くことで分明するが、單的に云ふと、故人の私印は其人の位牌のやうなもので、漫りに磨り潰すべきでない、故人に對する儀禮としても斯くすべきで無い、と云ふのが自分の答である。

印材漁りをやつてゐると、誰れの名とも知れない私印に頻々と接着するが、其中には相當の名家の印もあつて、一顆二顆拾ひ上げるのもあり、一家で十顆若くは數十顆に及ぶものもある。此等私印の主は必ずしも文壇や畫苑などで名聲のある人でなくとも、相當世に存在の聞へてゐる人の私印であつて見れば、一概に磨銷し去るべきでないと惜しむ氣が起つて、段々に蒐

めて數年に及んだが、どんな良材でも曾つて嚥して改刻したことがない。實は自分をして名家私印の保存を思ひ立たした原因は他にもある。それは何かと云ふと、自分の性癖である圖書漁りが其の原因をなしてゐる。自分は圖書漁りの爲め長い間坊間の書肆を訪ふてゐるが、ある時つく〳〵圖書漁りの業は全く故人の展墓のやうなものだと感じた。所謂墳墓は人の形骸を埋葬する所で、それには墓石が立つて其の氏名や事蹟等が刻されてあるけれども、其人の精神の置き所でない。其人の精神は著述に就て求めねばならぬ。其の著書が其人の精神上の墳墓で、書肆の架中に折り重なつてゐる。これが形骸の墳墓よりも遙かに尊むべきもので、書物の前には自然に頭が下る。遺骸の墳墓は遠近に散在してゐるが、精神上の墓所は書肆を訪へば、一擧幾百家の靈に對することが出來る。自分は長い間の圖書漁りで書肆の店頭に種々の書物を見る毎に、著者の展墓をやつてゐるやうな心地がして、敬虔の情の起るを常とした。

圖書には刻本もあり寫本もあり、寫本の中には著者の自筆もある。自筆本は特に敬禮を拂ふべきもので、此等の内には著者自身の藏書印のあるものがあつて、又他の持主の藏書印の捺してあるのが多く、其の藏書印の中には世に知れ渡つた高名の人も少なからずある。自分は最初藏書印記を蒐集することを試みたが、藏記を圖書から切り取ることが書物を傷付けることになるので、非を覺つて之れを廢し、著者の藏書印並に私印の實物を蒐めたいと發意するに至つた。これが私印蒐集の動機であり、書物漁りを展墓の心得でなしたことも、私印を故人の位牌のごとく考へたのも同系同脈の思想に由るのである。

私印は其人單獨專用のもので他人に通用せず、之れを作品に捺すれば、其人の眞蹟なるを證し、之れを所藏品に捺すれば其人の所有するを證し、之れを貸借の證券に捺すれば其の權利義務を證明するもので、其人に大切な關係がある。およそ文房などの類で其人の手澤を經るものと云へば、これより以上のものは無い。其人の指紋の最も多く存するものはこれであらう。世俗は概ね雅印に理解は無いが、自家の作を證するに印を用ゆるは宛ながら貸借關係に實印を捺すると一般、實印が盗用されれば借金證書が異をなし、雅印も惡用されれば贋作が流布して不名譽となる。其の大切さは絮說を要しない。印は常にその人に隨伴し、これほど執着のものは無い。人の死後浮屠氏は法名を位牌に書して佛壇に置くが、それよりも故人の手澤を經て故人の精神の籠つてゐる此者こそ、眞に故人を偲ぶの位牌と目すべきであつて、支那では、現に天子皇后などの印を位牌としてゐる例もある。

私印は其家で大切なものでありながら、無理解の家では無用の長物とすることが常で、僅か

に理解ある家では父祖の手澤品として珍重してゐる處もある。或る家では其人の死と共に棺に納めるものがあり、或は棺に納めることを惜んで印面に一刀を加へて保存するものもある。或は菩提寺に納めるもの、或は門人の手で保存することもあるが、永い年月の間には散じて骨董店頭に出るのが常であつて、殊に美材の運命は概ね銷磨を經て他人の印に改刻されるが多い。斯る次第であるから、名流の多くの印が如何に亡びたか想像に餘りある。ただ木竹の粗材、若くは銅、鐵、陶、氷晶の如き銷磨の出來兼ねるものが改刻を免れてゐる。

單に私印と云ふても其範圍が茫漠としてゐる。普通は氏名や雅號を刻したものを云ふのであるが、實は私印と見做すべきものにいろ〳〵ある。則ち藏書印も私印である。官名や出貫を刻したもの、年齢、居所、職業、經歷を刻した者等皆私印の部に入る。例へば「家在賜書」「曾經滄海」「曾經御覽」など其の經歷を刻したものは皆私印である。或は「祖先……第貳代」とか「漢高苗裔」「越國世家」などゝ其系統を刻したもの、或は書齋の號閣號城號庵號などを刻したものも私印の部に入るから、實際に於て可なり複雜である。尙ほ爰に斷つて置く一事は、私印と云ふのは其人實用の印を云ふので、他の私印を模造したのは除外である。例へば蒿春齋の赤穗義士の氏名印、立原杏所の水滸傳の人物の印などは、私印とは云へ其人の實用でないから此

內に入らぬ。

眼を轉じて私印の鑑賞價値如何と案ずるに印の趣味は私印にもおよそ共通するが、私印に限る趣味を云へば、私印の主が著名の人であることが第一に鑑賞の的となつてゐる。例へば高名の武將謙信とか信玄とか、緇流では天海とか榮西とか、學者では丈山とか徂徠とか、藝苑では雪舟とか光琳とか云ふものになると、その道々の何人でも重んずるもので、拱璧啻ならざる骨董値がある。尙ほ私印には史的趣味があつて、古るければ古るい程其當時の好尙や印の持主の性格までもほのめく。古るい時代には印刻の專門家が無かつたので自刻の印が多く、友人などが刻したものもあつて、印人傳を補ふの材料ともなる。非印人の作を求めるには私印に就て見るのが一法である。自分の貧なる架中の私印に就て云へば川路聖謨の印の內に佐久間象山の刻があり、秋月種樹の印の內に、山內容堂侯の刻印がある。樂翁侯の印の內に增山雪齋の作がある如きは其例である。名家の私印で種々の變に遇ふて亡び、僅かに一顆存するものゝ如きは、其稀なる點に於て特に珍重さるべき價値がある。此の類のものは自分の架中に少なからずある。

自分の架中にある諸名家の私印はどれほどあるか、曾て委しく調べたこともないが、多分五

百顆位あるであらうと思ふ。一家に就て僅かに一顆だけのものもあるが、多いのは一家で數十顆に及ぶものもある。勿論中には遊印も若干交つてゐるが、大略は私印である。

今左に數の多い諸家を擧げると、

川路聖謨	十六顆	西嶋青浦	十八顆		
池田孤村	三十四顆	中井敬儀	十顆		
林鶯溪	十三顆	高嵩谷	十二顆		
淺野楳堂	四十五顆	細井九皐	十顆		
高橋泥舟	十三顆	重野安繹	十二顆		

計　百八十三顆

以上十家の外に、一顆乃至四五顆の諸家は五十九に及び、其の氏名は左の如くである。

大原重德	可亭刻　石印	松平樂翁	增山雪齋刻　木印
東坊城實原聰長	石印	橘正定	銅印三顆　此人未詳
片桐不偏齋	石印	板倉勝明	吳篠刻　二顆
石州濱田侯松平武脩	石印	木戸松菊侯	二顆

長洲	二顆	高嶋秋帆	水晶印		
市島肅文	下馱印　高芙蓉刻	中村敬宇	石印		
市島縱里		榊原玄圃	紫檀印		
間部松堂	石印　二顆	橋南谿	木印　兩面印		
卷菱湖	石印四顆　水晶印一顆	辻元菘庵	竹根印		
卷菱潭	二顆	篠崎三島	小竹父		
尾藤二洲	銅藏書印　芙蓉刻	山本梅逸	石印　林谷刻		
狩谷掖齋	石印二顆　一顆藏書印	吳雪	石印		
秋月種樹	二顆　山內容堂刻	大倉雨村	石印　徐三庚刻		
牧野康哉	長岡支藩主日谷刻	細川林谷	木印　自刻		
丹羽伯弘	竹根印	古川鐵畊	銅印　自刻		
源頼寬	水府支藩「觀濤閣」三顆　本印	圓山大迂	牙印　石印一顆　鄧完白刻		
中島子玉	銅印	高久靄崖	木印　自刻		
會津正志	石印	藤田吳江	石印		

永井禾原　石印　筌廬刻
阪口五峰　石印　敬所　藏六刻
森槐南
中山信天　自刻印
日柳燕石　石印
俳人鶯笠　石印　敬所刻
田必器　高芙蓉刻
大島堯田　石印
三好秋畝　大石印
田島任天　石印　二顆
河鍋曉齋　大石印
熊倉翠原　菱湖刻
高安紫山
三浦鳩村　二顆
三浦桐陰　二顆
中林梧竹
藤本鐵石
林則徐　石印　二顆
吳大徵　石印二顆　自刻
前島鴻爪
安田善次郎
高田半峰
春木南湖

以上　六十九家

醉印人

印を刻する人に種々の癖のあることは、日本も支那も同様であるが、論印絶句を見ると、左の一詩がある。

飲酣晉白意縱横、雅韻終輸善次生、夜半打門眞快事、一枚印換酒千甕。

其註に云く、蒲田晉白は善く水晶印を刻す。醉後任意縱横、目に水晶あるを知らず、往々其鈕を擊ち壞つて曰く、飲まざれば則ち腕殊に力無し、奏刀遂に昏き俗心あるのみと、蘭溪善次生亦酒を縱まゝにす。侍御某と公署を同ふし、署中の酒、生の爲めに罄くと云ふ。一夜深更門を叩くものあり、侍御驚ろき起き趨迎へし何用と問ふ、生曰く、我適公の爲めに一印を刻す。殊に自から意に滿つが、且明朝を待つ能はざるなり、事いづくんぞ此れより急なるものあらんやと、遂に出して示し、且つ曰く如此印は、一醉に値ひせざるやと夜半に飲んで曉に及ぶと云ふ。

印人の奇癖本邦に於ても二三稱すべきものあり、高芙蓉印を刻して意に滿ざれば前庭に印を拋つて外に出づ、細君印を拾つて摩し之を机上に置くを例とす。高芙蓉外出から戻つて來て平氣で刀を把つて再刻したと云ふ。芥津や水石などにも行動に習癖があつて、歩くにも運刀の法に倣ひ、物の布置の亂雜を厭ふて、客の下駄を自ら直したなどの挿話がある。醉中印を彫る例は無いでもないが、夜深く人を訪ふて印で酒に換へた例は初めてきく。

家庭は合作藝術

家庭は銘々の安全地帶である。小なりと雖も一城廓である。清い樂しい家庭を有つ程幸ひのことは無い。

家庭はどう形づくらるゝものであるか。或る建築技師の談に、吾々は物の安定（スタビリテー）を求めるに、三點を欲する。例へば一本の棒を立てもグラ〳〵して安定しない。二本立て互ひ〳〵で支へると輙々安定を得るが、しかしまだ充分でない。三本立てゝ互ひに支へることになると爰に初めて充分の安定が得らるゝと云ふたが、如何にもその通りで、家庭に就て云ふても、一人だけでは家庭を爲さぬ。夫婦があつて初めて家庭を爲す。更らに子供が生れゝばこゝに三點となるので、家庭はシツカリして來る。家庭を形づくることは、家族の共同動作に據るものである。若し家庭を形づくることを藝術と呼び得るならば、それは合作藝術であらねばならぬ。藝術には一人で爲すものと、數人分擔して爲すものとがある。例へば彫刻などで云ふて見ると、馬上の人物などでは、甲は人物を作り乙が馬を作る。これが合作である。亦畫に就て云ふとあるものは樹を描く、それに配するに或るものは石を以てし、若くば家などを以てする。これが卽ち合作である。合作藝術の難いのは縱令手が幾人かに分れても、宛がら一人の手に成つたごとく、ピツシリ呼吸が合つてよく調和しなければならぬ。調和を度外に措いて、銘々勝手な手法を弄することあらば、その作品は總合一體となり得ない。如斯は醜穢見るに堪へない惡作である。數人寄つて一句一句附け合ふ詩などで、前句をよく承けて、縫目の分らないやうに甘く附けねば、藝術品とは言ひ兼ねる。合作は或る意味に於て一人が全部を作り上げるのに較べて、寧ろ難いとも云ひ得るのである。諸般の藝術で一人一手に成るものは少なくないが、家庭を形づくる藝術は、その性質上どうあつても合作で無ければならぬ。必ず分擔して作

り上げねばならぬものである。昔から云ふごとく男子は外を司り女子は内を司る。そこに分擔がある。子の撫育はどこでも女子の務と極つてゐる。平和な幸福の家庭を形づくるには、各々の分擔に就てベストを盡さねばならぬ。散じては銘々の擔當に立働くが、統れば立派な一體とならねばならぬ。宛ら詩や彫刻や繪畫のやうに、幾人かの手に成つても縫目の分らないほど、よく調和したものとならねばならぬ。それに就ては家族は同心一體であらねばならぬ。古る臭い言葉だが、夫唱婦隨が大切である。一家の秩序を保つには家長が號令して、妻がそれに隨はねばならぬ。夫婦は同身一體で、一つ體の前面が男でその背面は婦であると譬へたら妥當であらう。なぜなれば男は外部を司り女は内を司るからだ。而るにその一身同體の前面が右せんとするのに、背面が左りせんとしたら、どんなものであらうか。それは半身不隨と同樣で、何事もトンチンカンに成つて仕舞ふ。どうしてちまい家庭の合作が出來よう筈はない。

家庭の合作には愚作もあり、濫作もあり、駄作もあり、亦傑作もある。これは常々何人も見て知る所である。一家夫婦が和合せず、互ひに疑ひ互ひに猜み、嫉妬憤怨で始終風波の絶えない處に傑作の家庭が成り立ちやうがない。朝夕夫婦喧嘩の聲四隣を驚かして、動もすると他人の調停を待つ醜態を演ずる。これが濫作愚作駄作の家庭であつて、藝術品ではない。斯かる家

に生れる子女も恐らく駄作で氣の毒な不幸に運命づけらるゝであらう。要するに家庭を形づくることを藝術と見做し得べくば、尤も高尚で且つ尤も六かしい藝術であらねばならぬ。多くの人々は種々の藝術に精進するが、大切な家庭を閑却して、愚作駄作を毫も意としないものがあるけれども、尤も傑作を欲するものは家庭であることを思はねばならぬ。

プロ階級と醫者

誰やらが醫はすなはち威だと云ふた。これは强がち牽强附會でない。病魔に對して醫法は威壓で無ければならぬ。醫は祛魔の劍である。しかし病魔はなか〳〵醫を恐れない。或る疾患は醫を少しも威とせず全然平氣である。今日不治の病と云はれてゐるものに對して醫は全く權威がない。併し醫者が自覺せずしてその威力で病を治することがある。それは大なる門戸を張つて大家らしく氣取り、典藥とか博士とか云ふ大看板を揭げると設令本尊は庸醫であつても患者の疾病が輕快に赴くことがある。これは患者その人の心理作用で、飽まで醫者を信じ、所謂鰯

の頭も信心からと診にいふごとく、患者自身が醫を威たらしむるからで、實は自分が自分で治療してゐるのである。多くの疾患は精神作用で治し得ること今更云ふまでもない。プロレタリヤ禪頭の今の世の中プロ相應の醫師が出なければならぬ筈だ。醫は仁術だと云ふが、施療施藥まで敢てするで無ければ仁とは言ひ難い。醫者が段々偉くなつて自動車で回診し、少なからざる車代や藥料を取るとあつては、プロ階級は濟はれないのである。昔は町内をテク〳〵歩いて病家を訪問する醫師があつたが、今はトント見當らぬ。この流の醫師こそあらまほしいものである。昔から言ふことだが、醫者の格式が上ると同時に病家が減ると。これは貧戸の病者が謝金の多きに恐れて、足を絶つからである。昔の御典藥なんどは籃輿に乘つて多くの供勢をつれて歩く。その往診を請ふとなると、五七の供勢にまで手當を要するから、到底プロ階級の相手にならぬ。これに就て可笑しい話がある。戯作で名高かつた二三治は脚本家で有名な南北と懇意の中であつたが、此頃には惡戯が流行して往々人を困らせた。ある時南北が病んで臥してゐると聞き二三治は懇意な典藥があつたのを幸ひに是非駕を枉げて、南北の爲め一診をと賴んだので、諾して出かけて見ると、陋屋にゐた南北は、驚くまいことか、大醫の來診は病氣の爲めにはこの上のない喜びだが、さて待遇に困り、供勢の手當などに嘗を絞られて、時ならず頭痛を

覺え後には惡戯と感づき二三治に對し復讐をしたとあるが、兎角大家は大なる門戸を張るかち、貧人は閾が高く恐縮して入り兼ねる。多數の貧者に對しては、いくら名醫でも一向役立たぬのである。醫に仁の一字を許すことの出來るのは大家でありながら、貧者に施療するのと、毎日腰を低ふしてテク〳〵病家を訪問するものである。淺田宗伯などは大家であつたが、毎日貧病者を近づけた。兎角醫者には博士號が濫授され、博士となると俄に高調子になつて、プロ階級を相手にしないから都門には調法の醫者が段々に減つてプロの病者は困つてくる。プロレタリヤ藝術と唱ふる者まで出る世の中に、プロを標榜する醫者は何故まだ出ないのであるか。

吾鄕國に生れた長谷川泰といふ人は自から本鄕の立ん坊だと云ふたが、あの人は自から治療の出來る醫者では無かつたが、今考へるとこの人が丁度プロレタリヤ式の醫者を養成したと云へ得るのである。濟生學舍と云ふ學校は隨分貧弱な下宿屋に似たやうな學校であつたが、貧乏人で醫に志すものは多くこの學校に這入つた。こゝを足場にして他の高等の醫學校に進んだものも勿論あらうが、濟生學舍卒業丈で全國に散つて醫業を營んだものがどれほど多くあるか知れないほど出身者が多い。寒村僻地に洋醫のあるのは全くこの學校のお蔭である。醫學の程度は高くないにしても、プロ階級の爲めの多くの醫者を作り出した功はこれを長谷川氏に歸さね

ばならぬ。濟生學舍は庸醫の製造所だなどゝ罵るものもあつたが、洋法醫術の全國に廣がつたことを考へると、其功績は決して少なるものでない。自から立ん坊と名乘つた長谷川氏は流石にプロ階級に對して涙があつた。

寧ろ濫讀を勸む

讀書には其形式に於て其の讀む場所に就てさま〳〵の名がある。昔しの教育には、義理を說く前に、漢文を棒讀に讀ませて之れを素讀と云ふた。聲を發して讀むのを則讀と云ひ、其反對を默讀と云ふた。學生を集めて繼ぎ〳〵に讀ませるのを會讀と云ひ、時には暗誦もさせて之れを暗讀と云ふた。

讀書の場處に就ては成語はないが自分が其事實に就て勝手に名を命じて見ると、今のラヂオで聞く講說などは耳讀と云ふべき歟、寢後蓐中に讀むのは臥讀、圊に入り、痔疾の人が時を惜んで書見をするのを圊讀と云ひ步行しつゝ書を讀む人もあるが、之れを步讀と云ひ、船車に長

い時間を讀書に費すのを船讀車讀とも云ふべき歟、昔し相當の地位ある醫者は轎中に讀書した之れは轎讀で、馬上に讀書するのを騎讀と云ふも差支なからう。陣中に六韜三略を講說せしめた家康の如きは陣讀の一例であり獄中に讀書して悶を遣つた例は澤山にあるがこれなどは獄讀と申すべきか。

以上の外に讀方の精粗と範圍に就ても二三の成語がある。精讀、心讀、汎讀、卒讀、濫讀などが卽ちそれである。諸般の方法に就て各々得失もあるが、自分が今云はんとするのは、專ら精讀、汎讀、濫讀の三點にある。

精讀はどんな書物に對しても必要條件で、幾んど絮說を要しない。別して蘊蓄に富む前賢の書物に對しては、精讀せざれば、充分理解がつかぬ、唯々一寸讀んだ丈では其の皮肉に觸れることを得ても眞髓には達しない。其蘊奧を極めるには、幾回も幾百回も讀返して讀まねばならぬ。昔しの漢學者が一生を學に沒頭したのも此故であつてキリスト敎の牧師が、夙夜聖書を手に離さないのも亦此故である。或る研究家、例へば考證家などが、微に入り細に入り他人の看過する所を摑むのも精讀の結果である。實は卒讀は唯々影を捉めるのみ、或は影すら捉らへずして多くは止む、其の心髓に觸れんとするには、書を離れて心で研鑽せねばならぬ。讀書の地

位を離れて著作者の位置に立ち、百方味讀して著者の心持とまでならねばならぬ、これを心讀と云ふので、書物を離れて心讀までせざれば其書に通じたとは言はれない。

多くの學究が先輩の著述を精讀して其の蘊奥を極めるとなると、多くは其先輩の說に同感して、其の說に心醉し其の說に成り切つて仕舞ふ、其の結果天上天下此說以上可なるもの無しと自信するに至る。斯るは多く勤學の途上にある人で、斯く自得することが往々偏見に陷る。どんな先輩の說でも苟くも一家をなす程の學者の議論は、必らず首尾釣り褄が合ひ、他人の指彈を許さない迄に出來上つてゐるから、學徒などの學力では心醉を博することが出來るが、世には上には上があつて、其弱點を擧げ缺陷を指摘する批評家があり、亦全然反對の學說を主張する人もあるから、その說を併せて考究した上でなければ、決して萬全と云はれない。玆に於て汎讀が必要となつてくる。他の說殊に反對說を訪ねることが必要となつてくる。卽ち偏見を免がるゝには廣く書物を讀まねばならぬ、こゝに於て汎讀が大切である。

汎讀に往々陷るの弊は、濫讀であり卒讀である。汎讀にも精讀を要するのだが、幾百幾千の書をすべて精讀することが困難であるから、或は自分の研究に役立たぬ處を棄てゝ役立つ所のみを拾ひ讀することも起る。或は全卷を一氣に卒讀することも起るのだが、多數の書籍を涉獵

する上に於て實際已み難いことである。

卒讀若くは濫讀は精讀の反對で、古來讀書家に對して戒める所である。百の書物をそそかしく讀むより、少數の書物を詳細に精讀する方が得る所も多く、よいことに相違ないが、一概に濫讀を否とする譯にゆかない。極端を云へば、濫讀も徒らに多くの書物を積んで藏書の豐富を誇るに較べると、確かに優ることがある。日本では書物を重んずる所から、古來一種の讀書戒があつて其一二を云へば、聖賢の書を讀むには必らず机案の上に書物を置き敬虔の禮を以つて讀むべき事とされてゐる。かりそめにも書物を足に踏んではならぬ、寢ながら讀んではならぬ、厠の如き汚穢の所に讀んではならぬなどの戒があるので、其結果として邦人の讀書力を抑制したことは掩ふ可らざるものがある。

今日こそ種々の雜誌や携帶に便なる縮冊の種々の廉價のセリースが出來て、人は汽車や汽船や電車の中でも書見する事を往々認めるが、從前は旅行者などは地圖や案內記を携へても書物など携へる事は幾んど無かつた。長い退窟の時間を徒らに欠伸の間に過した。これを西洋の男女がどんな場合でも必らず小說などを携へて、僅かの時間をも惜み、讀書をするのと較べると、風俗上に著しい差があつた。そして今でも尙ほ此の差があるのは汽車や電車に乘る人々の

齊く認むる所である。

尙ほ日本で讀書に就て誤解とも見るべきことが他に一つある。それは讀書は何等かの利益を得る爲めに讀むべき事としてゐることである。實はどんな本を讀んでも、縱令直接には何も得る所がなくとも、間接に得る所が無い譯でないから、何んでも手當り次第讀むべきであるが、實は書物は何等得る所がなくとも讀むべき者である。娛樂の書物乃ち小說などの類は、レジュアの爲めのものであつて、强ち智識や利益を與へる爲めのものでない。ある時間それを讀んで興を覺へ娛樂に役立てばよいので、此等の書物は決して精讀を要しない。繁劇の境界にある人が、旅中に何等かの書物に親しむのは精讀の遑がない。多くの場合濫讀に墮することは已むを得ないが、それでも讀まざるに優る。無默に光陰を費すよりも遙かに賢明である。況んや濫讀も卒讀も智識の榮養を與ふるに效なきにあらざるをやである。

酒を飲む人は醉處が卽家と云ふてゐるが、書物を讀む處が卽ち書齋であると心得ねばならぬ。その場所が船車の中であらうが、馬上であらうが、寢所であらうが、獄中であらうが則であらうが、處の如何に拘らず讀書の處が卽ち書齋と考へればこそ、どこにでも本は讀める。日本人は落着かないと讀書をする氣を起さないが、讀書の處が卽ち書齋であると考へればおのず

から、落着きも生ずるであらう。此の忙々なる繁劇の世の中に、一室に閑居する時で無くば讀書は出來ぬとあれば、恐らく讀書の時が無くて墓に入るであらう。自分も繁劇の人々に精讀を强いて勸めるものでない、濫讀でも卒讀でも拾ひ讀でも敢て妨げない、唯だあたら光陰を欠伸と退窟で徒消せざらんことを望む者である。

朗讀と話術

或る夜ラジオで落語家が狩野芳崖と橋本雅邦の貧乏時代の夫婦喧嘩などを交へた諸諺物語を放送したが、落語家も野卑の話をさけて追々上品に赴いてくるのが近頃の傾向で、物語本を拔き讀することも流行で、近來朗讀で世を渡つてゐるものもあるらしく、いつぞや大隈會館で其の樣な人物を傭ひ來り余の隨筆「大隈侯一言一行」の拔き讀みを聞いたことがある。下手な落語より朗讀の方が時勢に寧ろ相當するかに思ふた。今でも所謂る落語家は動もすると野卑な紋切形をやるが、實は話材を得ないからでもあらうが、話題はいくらでもある。近頃讀んで見て

朗讀や落語の話材となると感じたのは、普門院の僧が著はした、小栗上野傳の内、上野の首を切つた原保次郎翁がまだ存命で、僧が訪ふて當時の事を應答した記などは確かに話材となると感じた。いつぞや故圓遊を招いて落語をやらせたあとで、自分の云ふのに、ナゼ、いつも夜這の事や田舟をコグ話で持ち切つてゐるか、話材はいくらでも持つてゐるから吾々に求めてはどうかと云ふたら、圓遊の云ふには、他人から戴いた材料ではドウモうまく出來ません、矢張り自家の體驗の話でなければと云ふたことがある。伊藤痴遊などはいくらか頭もあつたやうだが、矢張話材の選び方が頗る不滿足であつた。まだ代議士などにならぬ前にある席で維新志士の賴三樹や吉田松陰を語つたが、いつも紋切形で吾等にはおもしろくなかつた。私は其節痴遊にナゼ三樹が腕を或る士人に持ち去られたこと、其腕が後に前島密に由つて葬られた事實を語らないか、吉田松陰の處では浦賀で米船を待つた時、宿屋の屋根に上つて遠望したことなどは面白い處だが、それをナゼ云はぬかと詰つたら、共に始めて聞く事實だなど云ふたが、其の話材の不詮索であるのに愛憎をつかしたが、ラジオなどで放送する落語はいくばくか識者を聽手にするから相當材料の選擇に意を用ひねばならぬと感じた。

セメント藝術

戰爭が長く續く結果として物資が追々缺乏し、輸入に由る物資は種々代用品が工夫され、或はすでに過去のものとして葬られたものを復活するやうな事も行はれ出した。斯る時代においては、慣用のものが他のものに代ると、誰しも不便を訴へ代用品といへば一概に粗惡のものとして、代用品は粗品を意味することゝ考へるのも一應無理はないが、大體コンウエンションに由るのであつて、代用品の全部が必らずしも粗惡にして取るに足らない譯のものでなく、一時間に合せに急遽工夫された物の中には彼是議すべきものがあるにせよ、それが改良的工夫を重ねれば、立派に役立つものが少くない。

別して化學作用で作られたものの如きは、決して間に合はせを以つて目すべきでない。斯る物資窮乏の時こそ種々有益の發明が生ずる時で、その發明品が長く世界に重んぜらるゝことのあるのも、斯る場合に起るものと考へねばならぬ。

物資の統制は藝術界にも及び金銀銅鐵などの類は當分藝術上に用ひ得ないことになつたため藝術界においても、その材料について代用的工夫が無くてはならぬ。近來美術工藝界に選ばれた材料にセメントがあり、すでにセメント藝術といふ語すら行はれてゐる。金屬の代用にセメントを用ひるから斯る新語も生ずる筈で、東京美術學校では現にこのラボラトリーが出來てゐると聞いた。

セメントといへば、一概に建築などに適するものとなし、これを高級藝術の材料としてこれまで餘り注意を拂はなかつたが、實はセメントを藝術の材料として取り上げたことは奇異とさるべきでない。すでに立體的の藝術品を鑄造するに、その型は石膏を材料としてゐることを思うて見るがよい、石膏は鑄像の型となるけれども、雨露に堪へないから、金屬の代用となすに足らない。

セメントはこれに反して金屬の代用として一段の長所がある。卽ち堅牢で雨露に耐へる。土に較べても火力を藉るを要しない長所があり、その色澤においても高雅の澁味があり、適當に彩色も施し得るし、彩色を施さずとも雨露に晒されゝば自から老蒼の古色を生ずる木の如く朽腐の難がない、どんな大きな像も造り得る。奈良の大佛以上の佛像を造ることも容易である。

昔佛像を造る材料に乾漆を用ひたことを思ふと、立體藝術の材料は木石金屬に限るべきでない。藝術品の貴さは實は材料の如何に由るのでなく、その製作技術の巧拙如何に由るのだから、セメントを卑しむべきでない。勿論セメントには精粗いろ〳〵の段階があるから、工業用セメントは最も精品を要する。英國のポルトランド產などは最も高雅の優品として知られてゐるから、斯る優品を採用すべきだ。セメント藝術も追々發展したら、支那事變が產んだ不朽の藝術として長く我美術界に輝くものとなるかも知れない。

自然界雜話

富士山

一月の元旦に富士山を望むのは東京にゐるものゝ特權とも云ふべきである。此日は子午線の關係で、概ね好晴で、崇高の雄姿を望むことが、年と共に改まる人心をして肅然たらしめる。此意味に於て毎年富士が新年の問題となる。和歌などでも新年の富士に題したものが最も多い。「元旦や一系の天子富士の山」と云ふ句は內藤鳴雪の作だが、單句にてよく元旦の氣合を詠じてゐる。空鑑の句に「元朝の見るものにせん富士の山」とあるが、昔しから富士が元旦の呼び物であつたことが知れる。

富士山は日本の大名物で、西洋あたりから來る外人でも之れを見ることを樂みに日本に來る。日本の人でも富士の見えない所の人には珍らしく思ふて、昔し三百の諸侯が江戸に集まつた時代、本國の土產には何をもつて行つたかと云へば必らず富士の繪であつた。狩野探幽などは富士の繪を求めらるゝ爲め門前市をなしたと云はれる。

富士山の現はれたのは孝靈天皇の第五年で、大沼秋山は左の如く詠じてゐる。

維孝靈皇第五年、名山湧出駿中天、玲瓏八朶千秋、雪照到紅洋墨漢遊

此山の湧き出た爲めに琵琶湖が生じた。卽ち富士の實家は近江で「近江へ藪入もせで二千年」と一茶の句にあるが、二千年來曾つて一たびも實家を省みたことがないとは、一茶の諧謔である。一概に支那や印度あたりの大山に憧憬した頃、秋山玉山などは富士の本地を崑崙として

帝掬崑崙雪、置之扶桑東、突兀五千仞、芙蓉挿碧空

と詠じたが、賴山陽は、之れを不見識とし本地は寧ろ日本にありとなし、左の如く改竄した。

帝掬芙蓉雪、拋作崑崙山、雪汁卽黃河、却向東海還

と云ひ又、

帝掬芙蓉雪、置之赤縣西、凝作崑崙山、敢欲較高低

と云ふて玉山の詩と抗爭した。

日淸戰役が三國干涉で局を結んだ時、勝海舟は、富士山を畫して、「三國にふみまたがれよ富士の山」の俳句を題した。これ等は皆富士を藉り吾が國の地歩を正すものである。浮世繪師北齋の句に「八の字のふんばり强し富士の山」と云ふたが、此のふんばりは三國を壓するの趣

がある。

富士の語原は或はアイヌ語であると云ふが詳かでない。普通富士と書き不二と書き區々であるけれども自分の鄕人で富士山麓を國立公園と爲すべしと主張した人々は「普慈」の名を選んだ。自分は佳名を得たと思ふてゐる。これまで富士の美を形容する人は、或は芙蓉に比し或は倒まに懸る白扇に比してゐるが、富士の崇高犯す可からざる「サブリミテー」を形容するには甚だ憾たらぬ感がある。某外國の詩人は世界を漫游して美の崇高なるを探し歩いて、終に我國の富士を見て、これなりと云ふて喜んだ。この人は富士の形を「合掌」の如しとした。これは邦人の思ひつかない形だが、兩手を合すれば如何にも圓錐形をなし宗敎趣味を寓した處に嚴肅もあり信仰もあり、普慈に對する恰當の形容であると思ふ。

富士は蹈屈十三州より見ることが出來る。其の姿勢は國々より見ていくらか異なれども、秀艶の間に嚴肅の姿勢を有し、人をして敬仰の威力を有する。津輕香川其他に形の似寄りの山はあれども、其大さは富士と比較にならぬ。諺に富士の見へる國には美女がないと、これ或は秀艶の氣が山に奪はれてゐることを意味するのであらうか、如何にも富士を見得る十三州は美人系でないのは確かである。

自分は二十歳の頃富士に登攀し、五十年後富士山麓の五湖に泛んだ經歴は左の如くである。

岳麓の五湖に泛ぶ

數年前岳麓の五湖巡りを思ひ立ち、印刷四社の幹部同僚十六人一團となり東京驛を發し、御殿場に下車して、先づ山中湖を訪ふて湖畔の旅亭に一夜宿り、翌日各湖を見る豫定で、御殿場より自動車に同乘した。この日は朝來雨しきりに到つたが發程の刻に逮んで一天拭ふが如く晴れ渡つたので、一行は仕合せよしと悅んだ。御殿場より山中湖まで約六里、自動車で一時間を費し、途次須走驛を過ぎ、少壯時代富士登山のときはこの口より登り、風雨に出遇つて山中艱難を嘗たことなどを追憶し、思ひを五十年前の舊に馳せた。山中湖までは段々上りで籠坂峠の嶮がある。これが甲駿の分水嶺で、海拔三千六百九十尺の高地である。五湖は皆三千尺の高地にあるけれども、この峠は尤も高く、山中湖も隨つて五湖中尤も高地にあるのだ。流石に斯る高地には霧深く閉ぢ込めて、前程を辨じ兼たが、車道がよく開け居るので、敢て危險を感ずる

ことは無かつた。絶巓の國境に達した頃は、霧も晴れて、銀盤の如き湖水を脚下に見た。即ち山中湖である。山上より湖水を下瞰する風趣は、なか〳〵のもので一同、快哉を叫んだ。自動車は瞬間に馳せ下つて、湖畔の旅館に投じた。この旅館には日本館、洋館共に備はり、意外の好旅館であつた。一行は日本館を選んで、落ち付いた。時既に五時を過ぎ、暮色蒼然たるものがあつたが、試みに居室の戸を推して展望すると富嶽は殆ど咫尺の間に屹立し、さながら庭中のものとなつてゐるので吾等をして勿體ないやうな感を起さしめた。流石に此處は最高地だけあつて、樹木も凡ならず、皆霜枯れて黄葉し、荒涼たる景色に一段の寂寞味を添へ、四邊閑として一禽啼かざるの風趣には、吾等をして別天地に在るの思ひあらしめた。食饌に酒を呼び縱談時を移して、なほあきたらず二三子を拉して階下の社交室に移り、暖爐に白樺を焚き、パチ〳〵の聲を下物に、且つ談じ且つ飲んで、十二時に到り漸く寢に就た。

翌日の旅程は先づ吉田に出で、川口湖西湖を素通りして精進湖に泛び、歸途西湖川口湖に泛んで、吉田に戻り大月驛より歸京の途に就かんと豫定し、早朝自動車を促して旅亭を發した。車は山中湖に沿ふて馳せ、坐して湖景を賞し得るので特に船に乘るの煩を省いた。湖は周圍二里十二町、水深五十三尺と云はれてゐる。車は無遠慮に疾走して早く淺間神社に達した。こゝ

が富士登山の吉田口である。一同社前に下車し、一拜すべしと幽邃境を行く。境内老杉天を摩し、白晝薄暗く、陰欝の氣人を襲ふて凄慘の感に堪へざらしめた。社殿は建久の昔營まれたと傳へられ、大華表大水盤皆見るに足る。特に社側の老杉は千二百年を經ると傳へられ目を驚かす程の巨木である。境内風氣清古にして思ひを千歳の舊に馳するものは獨り自分のみで無かつた。吉田口より登山するものは必ず先づこの社に參詣するが例で、境内に登山の第一歩を進める道がある。富士山麓に最も多く大樹の存するは蓋し此處であらう。亦車を驅り船津に到る。これは河口湖畔の小繁華地である。船を艤してこの湖に泛ぶは午後再來の時に讓り、更に車を馳すれば廣き平原に出づ。矮松簇生里餘に亘り滿目皆絲の奇觀を呈し、高處に立つて見ればさながら綠海を望むが如く、「樹海」の名のあるのは偶然でない。確にこゝは岳麓の一勝區である。亦この附近に風穴と稱する所あり、それを探らんとて一行下車し、道傍より折れて、溶巖亂離の小徑を辿り二丁計りで道の盡る所に板舍があつて、梯子を懸け、岩穴の洞門に下るやうになつてゐるが、銘々皆燭を携へて入る。一行中余は和服を着してゐたので入るには不便である爲め洞口に立つて内部を覗ふに止めたが、皆々は若干の距離に進み探檢して歸つて云ふには、窟中寒氣甚だしく且つ露滴り落ちて永く居るには堪へずと。亦車を馳せて赤池に到る時十時三十

分。

赤池は精進湖畔の一村落であるが、直ちにモーター、ボートに乘つて湖に泛ぶ。この湖は往年或る外人が旅館を設けた關係から、最も早く知られ、五湖と云へば先づ指をこの湖に屈するのが常となつてゐるが、實は湖の規模が小さく、且近年渇水して洲が露はれてゐるので風致よからず、一見評判ほどでないのに失望した。豫てこゝに晝餐を喫することに豫定されてゐたから、これに船を寄せて崖路を攀ぢホテルに入つた。此ホテルこそ外人の創設した所である。これより展望すると湖を隔てゝ高い丘陵が見へる。これは精進湖面を拔くこと千三百五十尺で羊腸たゞ坂路二十町を行き絶頂に達し得るので、その頂點から周圍の風景を望めば、この邊の勝槩がパノラマの如く眼界に入ると云ふので、パノラマ臺の名がある。騎馬の設備もあるけれども一行は判愛してそれには行かず、洋食で晝餐を果して亦ボートに乘り赤池に戻つて直に自動車を驅り根場（ネンバ）と云ふに着く。こゝは西湖湖畔の一村落で、こゝより舸を卸して又湖上の人となる。この湖は規模小なれども、精進湖に比すれば風致あり、水の深さは三百尺と云ふてゐる。もとこの湖は精進本栖二湖と共に大なる一湖であつたのが、太室山噴火の爲めに熔巖流れて湖を堰留め、三湖となるに至つたと云はれてゐる。この日遺憾を感じたのは富士は目

前に在りながら、白雲に包まれて僅にその腰部を見るに過ぎざりしことである。舸は間もなく、前岸に達し、それより八丁徒歩にて長濱に到る。途中に近年穿ちたる隧道あり大正洞と稱してゐる。それを通り抜けて阪路を下れば、出口湖眼前に展開し來る。長濱は乃ちその湖畔の小村落である。亦舸を卸して湖上の人となる。この湖は五湖中最も大なるもので、風景も亦第一である湖の形沓に似て、湖中に鵜の島と云ふ一島あり全島紅葉を以て飾られ、美觀言語に絶す。石器時代早く爰に民族の住した痕跡があると云ふを聞いた。舸は疾走して前岸船津の人家を見る頃に、白紗に蔽はれた富嶽は始めて全身を露はし湖面にその倒影を落とした光景はこの名區に絶大の光彩を添へ、滿船の人をして覺へず快哉を叫ばしめた。吾等が湖上に富嶽を見たのはこれが始めてゞ亦終りであつた。湖の一邊船津に近い處に富家の別邸があつて景勝を占めてゐる。亦この湖より遠からぬ處に、近く早稻田大學の經營に係るグランドがあるが、それを訪ふの時間がなく二時四十分飽かぬ眺めの湖に別れを告げて船津の茶店に小憩し、又自動車を驅つて前日經た吉田驛に達し之で五湖巡りを終つた。吉田より大月に達する甲州街道に谷村町と云ふがあつて、甲斐絹の集散はこゝを中樞としてゐる。すべてこの街道は桂川に沿ふてゐるので、水の奔流して村を過ぐるもの隨所にあり、殊に桂川の崖上より落下する一勝區は特に旅

客の目を怡ばしむるものがあつて、偶々橋上にこの景を見て、空しく去る能はず、車を駐めて玩賞したが、猿橋に比すれば絶壁の高さは讓るが各體の飛瀑が相競ふて落下する壯快さは夏かに猿橋の上にあるやうに思ふた。五時四十分大月驛に着し直に歸京の途に就いたが、大月驛に就ては既に漫談に掲げたからそれを參照されたい。この旅行は極めて繁忙で自動車とボートの乘り詰であつたが、よく連絡が取れてゐたので一刻の無駄もなくそれからそれへと澁滯なく連絡したのは忙中の一快であつた。殊に鐵道省が近頃發行を創めた遊覽切符は至極便利のもので、幾んど現金を仕拂ふ必要なく、徹頭徹尾切符で旅費を辦じ得たことも爰に附記せねばならぬ。

黑部の溪谷

近年電力會社の爲めに開けた、富山縣の黑部の谿谷に紅葉狩に招かれ、一日の清游を試みたのは昨年の秋であつた。此の黑部は昔しは餘り名も聞こえない僻地であつたのが、今は電力經

營の爲め立派な部落も出來て、追々殷賑の所となりつゝある。探勝當時書いた紀行もあるが、管々しいから、それは略すとして爰には唯二三の所感を錄する。

凡そ山水を賞翫するの好時節は、新綠か紅葉の時となつてゐるが、實は新綠も紅葉も山水を輕重するに足らぬ。新綠や紅葉は山水に美を添へるに相違ないが、それ等を藉りずに賞玩に値するもので無ければ奇勝と云ふことが出來ない。此の見地より黑部を評すると、少くとも北陸第一として推奬することを躊躇しない。甲州の御嶽、豐後の新耶馬溪などは山勢の雄偉な點に於て黑部には讓らざるを得ぬ。黑部は立山の脈を曳き屹立の山勢が多く、高さは二千尺乃至二千五百尺に及んでゐる。山骨の露はれた所は割合に少ないが、其の露はれた所は最も崇高の感じがある。妙義、耶馬のやうな怪巖奇石は乏しいが、雄大の氣は全峽に溢れてゐる。釣鐘山と名くるものゝ如きは形貌鐘のごとき巨然たる大塊であるが、其の高さ二千尺あつて、全山が大理石であることを思ふと、造化は此の區域に小細工を廢し特別の大趣向を凝らしてゐるかに思はるゝ。今は此の山下に隧道が出來て、自在に通行が出來る。尙又山嶽の逼つて、千尺の斷崖相對する處は山水中にあらねばならぬ要件であるが、黑部に於て最も雄大なるものがある。卽ち今鐵橋が空に懸つてゐる所、そして一方に水路橋の高く架してある所がそれで、鐵橋を通過

しながら下瞰すると、粟然毛髮を竪たしめる。想ふ、此の橋のまだ架されなかつた時、如何にして一崖より他の一崖に到つたであらうか。中間の激湍を徒涉するにしても、彼れが如き絶壁を如何にして攀ぢ登つたであらうか。恐らく一縷の藤蔓を便りにする外はなかつたであらうが、全く生命を賭しての業であつたに相違ない。かやうなことを思ふと、吾が邦人がアルペンの危峰を征服したと云うても不思議はない。邦人には素質が備はつてゐると言ひたくなる。百貫山といふが二千五百尺の直立した山で、飛行機を射落す練習には斯る直立の山を要するのだが、かほどのものは他に無いと云はれて、此の山がいつも練習に役立つと聞いた。黑部の部落から約七里ばかり、トラツクで遊覽の出來るやうになつてゐるが、宇奈月より尙八九里行くと、猿飛と云ふ奇勝は全峽の誇とする所で、山の風致と谿谷の幽邃と相待ち、湍激し淵躍るの勝は人の魂魄を震はしめる。私はそこまでは往かなかつたが、併し凡その事は想像に難くない。最早や遠からぬ內に猿飛までトラツクが通ずることになるであらう。兎に角、十五六里にも涉る規模の溪峽で、長い繪卷を展べたごとくに奇勝が連つて、人をして應接に暇あらざらしめるは、實に天下の偉觀と云はざるを得ぬ。たゞ水電事業の爲め溪水が或る地點に堰き留められて水量が乏しく、瀧などは幾んど落下してゐないのは、此の谿谷の瑕瑾である。そして紅葉は少しく

氣候が早く、滿山紅一色の景は無かつたが、紅瘦せ綠肥えて、友禪染に喩へれば、年增の柄にふさはしい趣があつて、却つて風景の俗化を免かれてゐるやうに思はれた。

私は此の大景物を觀賞しつゝ、利用厚生が、風景美を人間に紹介するに、如何に大切であるかを今更ながら感ぜざるを得なかつた。如何に山河の好風景があつても、神機坤祕が全く鎖されて人間の眼に觸れぬとあつては、風流も何もあつたものでない。絕好の風景が、人の風流趣味を滿足せしめるため、天惠で眼前に展開されるものと思ふなどは大なる間違で、利用厚生の爲め交通を開くより生ずる副產物に外ならないのだ。勿論、交通と云うても、一概に旅客の往來を便にするのみでなく、深山に埋沒されてゐる材木や石炭や、いろ〳〵の鑛物を採集し、それを運搬する爲めに交通が開けるのである。水力電氣も西洋で白炭の名のあるごとくに、之れを作り之れを運ぶ爲めに交通を要するのである。斯樣の事から道が開けて、自然旅客の往來に便するのであつて、風流氣があつて、あたら奇景を埋沒に付し去るを惜んで開發する譯ではない。(但し多少の除外はあるけれども)日本は、風景美は實に於ても量に於ても世界に冠たりと云はれ、まだ隱れてゐる奇勝がどれほどあるかも知れぬ。併し、その風景美をあらはす爲めに道を開く事は幾んど不可能である。概して山水の美なる處は嶮岨な處で、之れを開くには莫大

の資を要する。設令ひ幾百千萬幾億の巨資を投じても收益があればこそ、五十露盤づくで開發が出來るのであるから、何と云うても風景は副產物に過ぎない。

右の次第であるから、事業の性質に依つては風景は全く事業に殉し、メチャ〳〵に蹂躙さることがある。兎角、文明と自然美は兩立が難かしい。大體の趨勢を云ふと、文明は時々刻々自然美を破壞しつゝあるのだ。これは我が日本にも目前に見る事實であるが、西洋の如く文明が高度に進んでゐる所では、自然美の破壞は尤も甚しく、日本人の喜ぶ樣な自然の風景は、都市近く幾んど見ることが出來ない位だ。然るにそれを難ずる聲が聞こえないのは、外國は文化の烟に捲かれて、日本の如き風流論は全然ないのかと云ふと、强ちさうでもなく、詩人などは殺風景を厭うて歎息してゐる。歷史家で有名なフルードやラスキンなどは、自然美の保存に就ては頗る熱心であつた。

エマーソンは文化と自然美に就て一種の調節論を唱へてゐる。曰く、風流と云ふも實は一種の習慣である。明媚の山水を中斷して、鐵道が蜿蜒、百足の如く走るのを見て無風流と考へるのは、畢竟、眼が慣れないからである。追々眼がそれに慣れて來ると、鐵道も亦美觀となるのだと。成るほど、日本などでも寺院の五重の塔などは、今こそ自然美を助くるものとなつてゐ

るが、最初此塔が印度から傳來して建つた時は隨分目障りで、さながら今日の鐵道を見るが如くであつたのが、年を歴て眼に熟し、却つて美觀となつたことを思ふと、エマーソンの說も一應尤ものやうに思はるゝ。

しかし美は、實用を離れたもので、さうして理想を追ふもので無ければならんとの說も考へて見なければならない。樹木なども、實用を離るゝほど其美を增して來る。檜や杉は良材として珍重さるゝものであるけれども、くねり曲つた松の樹に其の美を讓らねばならぬ。くねり曲つた松は實用から遠ざかつてゐる。又すべて臥床しい景色が美感を與へるのも、畢竟理想を追ふからである。斯樣に考へると、實用本位の鐵道を美感の要素とすることは疑問である。五重の塔は鐵道とは異つて、實用のものでないことも一考を要する。

丁度此稿を筆して居る時に、新聞紙は報じて云ふのに、黑部峽谷に自然美保護論が起り、營林局では、水力電氣會社が追々二期三期の工事を進めるに於ては、世界的名勝が全く亡びて仕舞ふと云うてゐるが、其の理由として說く所を聞くに、

水電工事の必然の結果として、淙々たる原始以來の溪谷の流れが、次第に赤褐の川床を見せて乾上り、トンネルを穿つ結果として、土砂が各所に流れ出て、瀨を埋め崖を削り、自然の

景觀を害することが甚だしい。ことに同工事第三期計畫となつてゐる十字峽、及び第四期計畫の平の小屋附近までは、豪宕幽邃な大黑部の眞面目を保つてゐる地帶なので、このまゝ工事の進捗を手を拱いて看過すれば、世界的名勝をムザ〳〵見殺しにするものだとの意見で、工事に對し制限を加へて、風景を保護する必要がある。

と云ふので至極尤もの說である。

全體、木材、石材の伐採、鑛物の採堀、製錬などは、觀面に山河の風趣を害するものであるが、水電の工事は比較的風景を破壞せないとは云へ、此の工事の必然の結果として、水を堰き留める爲めに、溪流が渴水する。瀧となる水までもしぼり取るから、其の落下を遏めて、風景美を損する。尙營林局の說の如く、トンネルを多く穿つ結果として、追々土砂が流れて瀨を埋めるであらう。又堰を設けたり、大小の鐵管を引いたり、種々の機械を据ゑつけたりすることも、風致の上の障害となるに相違ない。併し鐵管や機械は到る處に人目を遮るほど多くある譯でなく、且つ水電事業は徹頭徹尾水を操縱するものであるから、他の蕪穢のものを取扱つたり、樹石を採り去るものとはおのづから選を異にする。そして此の事業の爲め十數里の山奥まで道が通じ、曾て人間の窺ひ得ざりし溪谷美が世に紹介され、それと親しみ得ることになることを

思ふと、水電事業の功德も決して小なりとは云はれぬ。自然美も保護を要するが、さりとて此事業を阻止する譯にも行くまい。結局は兩全の道を講じて、自然美を害せない程度に工事を進めしめるより外はあるまい。これが爲めに水電會社の負擔が嵩むとしても、風景保存の爲めに、忍容せざるを得ないであらう。兎角、文明と自然美は衝突を免かれ難い。文明の爲めに多少自然美を犧牲に供することも已むを得ないと思ふが、成るべくは、兩全の策を當林當局に望まざるを得ぬ。

自分は近頃大量趣味の皷吹を試みてゐるが、日電の黑部の經營を見て可なりに大量の趣味を感じ、自から快とした。此峽谷の規模もなか〳〵大量である。殊に富山縣下新川の一郡から見ると、非常の大量を感ぜざるを得ない。日電の現在の資本金は一億二千萬と云ふが、兎も角、億を拔くの數は大量と云ひ得る。尙會社が他日二億の增資を行ふに於ては益々大量の感なきを得ない。水力が將來三十六萬キロに達したとしたならばこれも大量と云ふことが出來よう。此行、幸ひにおなじ會社の經營に係る庄川水電の設備を見た。庄川は飛驒より發する河で、堰堤の大設備のある所は礪波郡の景勝地で、風景が京都の嵐山(らんざん)と似てゐる所から礪波嵐山と呼ばれてゐる。堰堤の高さは二百六十尺で、幅が千尺ある。二百六十尺の高さは、都下の丸ビルの高

さに比して二倍半以上である。世界に一番高い堰堤は三百幾十尺といふから、それには及ばないにしても、先づ大量と云ひ得るであらう。之れを築くに砂利の築品を多量に要するが、セメントの量だけでも四十五萬樽、壹樽五圓としても二百五十萬圓を堰堤に埋めるのだから、此量も決して小なるものでない。兎に角、日本も相應に事業の幅が擴がり、私共に、かりそめの漫談にも趣味を感ぜしむることになつたのは、國運の爲めに喜ばねばならぬ。

あこがれの詩の國讃岐

讃岐は自分が「詩の國」、「繪の國」として憧憬れてゐるところである。曾て松平賴壽伯の客となつて往つたことがあり大隈老侯に隨伴して往つた事があり、屋島、壇の浦、金比羅神社等は皆御馴染である。大正三年に游んだのは第三回目で今より十數年前であるが、前年訪問の時に比すれば面目の改まりたるものが、一にして足らなかつた。

乃ち築港の成りたる、水道の出來たる、玉藻城門內に松平伯の邸宅の築かれたる、栗林公園

の擴張されたる、市内にある松平邸が變じて讃岐館(クラブ)となりたる。前回宿した可祝旅館が場所を變じて新築されたる、皆な自分には目新らしく覺へた。自分は香川縣の風景は大概見てをるが、津田の松だけを見落してゐた。幸ひ松平伯は近年この勝區に別莊を設けられそこへ招待を受けたので宿志を滿たすを得た。津田は海岸一帶の地で、この松原を一名琴林といふてゐる。津田町東端から鶴羽村の西端に接し、松平家の別莊のある所は鶴羽村で、殊に好風景を占めてゐる。近頃國鐵高德線が開通して德島縣へ通じてゐる。津田へ赴く途中志度を過ぎ、平賀源内の舊里である事を思ひ出した。その家もまだ存してゐるだらうが、訪ねる時間がなかつた。また茶人のやかましくいふ蘆屋釜の產地も、志度浦眞川だといふ說もあるので、一行の讃人に質したら、それは筑前遠賀郡の蘆屋であつて、讃州のは同名異地だとわかつた。

いろ〳〵風景談も出たが神懸(或は神駈)を唐めかしく、寒霞溪と稱へてゐるけれども自分は、寧ろ神駈の方がよいといふたのに對し、土地の人も溪といふのは當らない、あそこは危峰絕壁の地ではあるが大溪流などはないから、といふ說も出た。栗林公園はどう擴張されたかと尋ねて見ると、近く經營したのは北門すなはち正門を入り、南へ奧深く見へるやう作つたのだと聞いた。俗說にこの園は東海道五十三次に倣つたなどいふが、それは全然違つてゐるそうだ。近

頃開けた勝區で自分のまだ知らない所はないかと聞いてみたら、三霞洞は讃中自然の風景に富む所だがこれまで地が僻遠で世に知れなかつた。今は高松から電鐵自動車で二時間で達し得ると聞いた。この地は綾歌郡美合村にあるそうな。高松はいつ行つてもいろ〳〵趣味を感ずる所だが、この行には恰も大典を記念する產業博物館が開けてゐた。この州自慢の三白、砂糖と米と鹽を始め豐富の物產が陳列されてゐた。また公園內には美術展覽會もあつて、平生見る事の出來ない象谷や古理平の名作、平賀源內の陶器なんどをふんだんに味ふ事の出來たのは、この上ない仕合せであつた。附け加へて置くが、この地に文墨の人漆谷竹谷、などいふ名家があつたゝめに、支那から書畫が輸入されると先づ讃岐へ持ち込み、讃岐の品題を得て初めて京や江戸へ出したといはれてゐる位、讃岐は鑑賞家の淵叢であつたから、讃岐には名畫が多く存してゐる。

讃岐は實に風流國だ。この地から多くの名流が輩出してゐるが、傑僧空海もこゝの產だし、山や西鄕と薩海に投じた月性忍向もこゝの人だし、篆刻家の林谷、任俠家の日柳燕石もこゝの產で、一々僂指の遑がない。これも亦自分がこの地にあこがれる所以である。

自然を愛する日本人の趣味

外國人は無暗矢鱈に自然々々と云ふがその實日本人ほど自然に親しみ自然を敬し自然を愛するに忠實でない。外國人の家屋は穴居其ものゝ如く、密閉した構造である。日本の家屋は紙を張つた障子がどの室にもあつて、空氣は自在に流通する。夏時は明放して涼を納れる。雲煙が遠慮會釋なく室内に去來するのを日本人は喜んでゐる。日本人は非常な貧乏人でない限り、家に附屬して庭を有つてゐる。其庭は自然の風景に形どつたもので、西洋のそれの如く草花を植ゑるだけの簡單のものでない。庭には自然の石が置かれ、それが珍重されてゐる。自然石に幾百圓幾千圓の價があるのは西洋人の知らないことである。夏目漱石が何かに書いたのを讀んだことがあるが、あの人が洋行中ある人の邸内に立派な自然石のあるのを見て、しきりに賞玩して褒めた所が、其家の主人はそんな邪魔なものはどこかへ運び出して棄る筈だと云ふたとある。日本人は詩人でなくとも月を賞したり雨を賞したり雪を賞したりする。これも外國人の理解し

兼ねることで、漱石もこの事に言ひ及び日本人はなぜそんなものを賞玩するぞと不審を打たれたと書いてをる。日本の民衆は寺宮參詣を兼て風景探討の爲めに遠方に足を運ぶを辭せざる慣習がある。之も亦西洋人の意外とする所であらう。要するに日本人ほど自然を愛するものはないのである。日本人は自然を愛するから自然の風景を庭に模作するだけでは滿足が出來ず、室内にも自然のものを取り入れてそれと親しむことを欲し、挿花、盆栽、盆景のやうなものが、それぞれ藝術となつてゐる。今試みにこれ等に就て少しく語つて見よう。外人は日本の婦女に花を活けることを家庭の必要教科として習はしめるのを見て妙な顔をして驚く。如何にも西洋のやうに庭から草花を摘んできて、無雜作に花瓶に挿しこんで、それを喜んでゐるその習慣から考へたらば妙に感ずるかも知れん。別して花を瓶に挿むごとき簡單な作用を藝術呼ばりをするのをおかしいと思ふかも知れんが、實はそう簡單ではない。元來華道は茶道に從屬して長く研究され工風され、終にいろ〳〵の流派を生ずるまでに至つたもので、頗る歴史がある。華道の或る派には擬工に失して不自然に墜ち、俗に流れて忌や味を感ずるものもあるけれども、本來華道は自然を範とするもので、樹や枝や葉や花をその地上に生じてゐる自然のまゝで且つ最も趣致ある姿態を選ぶのがその本旨で、折り曲げたり斷つたり添へたりして形を作るのではな

い。足利頃の華道の書物を讀んで見ると、小枝一本でも切ることを許さないと書かれてゐる。瓶に挿したその姿態は、小さくこそあれ自然そのまゝであらねばならぬ。斯く云へば、何れよりか花木を拔き取つて來て、そつくりその儘、瓶にさせば、それが自然で雜作もないことのやうであるが、挿して姿態のよく見えるのを選ぶことが決して無雜作に出來るものでない。流派に依つては多少鋏を入れることが許されてゐて、贅枝を去つたり、込み過ぎた葉を除いたりもする。僅に一ト鋏、二タ鋏入れるばかりで見違ふやうに姿態が美化する。そこに華道の藝術がある。勿論他に花木を添加して一層美化せしむることもある。細い枝を多く寄せて巧に姿態を取ることも、花や葉の均勢を保ち、粗ならず密ならず、調和を保つことは、畫のやうなものだが、畫よりも自由が利かないから一段むづかしい。なほ花や葉の萎れを防ぐにも相當の苦心が要る。全體華道も茶道のことも精神的のもので、精神の籠らない挿花は死華だと其道の人は云ふてゐる。去れば數寄屋に置かれた花には、客も尊敬を拂つて茶室に入るものは、先づ跪いて花を見、而る後主人に挨拶をする。必竟花に主人の精神が籠つてゐるからそれを敬するのである。茶人の法として花と調和を缺くものは幅でも香爐でも、皆取除くことになつてゐるが、これもまた花を尊敬するからで、花を引立てるやうな幅を特に選ぶのに茶人は常に思ひを焦すも

のである。茶人石州は水盤に水草を生けて湖沼の景を思はせ、壁には鴨の空を飛ぶ幅をかけた。紹巴は海邊の野花と漁家の形をした香爐に配するに、海邊の淋し味を唄つた和歌の幅を以てした。斯の如き工風は皆花を引立ると同時に掛物をも生かすもので、そこに精神があり藝術があるのだが、茶が藝術であることすら理解し得ない外人は、恐らく華道の藝術たることを理解し兼ねるであらう。

盆栽も挿花と似た樣なものだが、之は根があつて永久性のものだから、趣味は挿花よりも一段上で、うまく作ることが決して容易でない。此場合に於ても自然を範とするので、出來得べくんば全然自然其儘のものを取り來り、それを鉢に移して坐玩に供するのが最上である。榛柏なども矮少ながらその姿態が大木の相を備へてゐるものを盆栽家は搜し出して、それを珍とするが、かゝるものは高山の絕壁などに僅に見出し得るもので、搜すことも容易でなく採集にも危險があるから、實際姿態のよく整つた自然そのまゝのものを得ることは困難である。隨つて盆栽家は較々趣致のある樹を取り來り、それを畑に培ふて二年も三年も苦心して育てあげる。勿論花を發する蘭その他のものもあつて、種々雜多であるが、これを培養するには其植物に相應する土質も考へねばならず、肥料も選ばねばならぬ。盆栽の約束は小さくなければならんか

ら、培養もその心して大きくならぬやう肥料や、水の加減を要する。樹木に對しては色々の注文があつて、老樹の趣きを愛するもあり、樹に多く瘤のあるのを喜ぶものもあり、或は落雷で木の劈けた趣きなどを愛するもあつて、それに應ずるには挿木や接木の方法に依らねばならぬ。そして接木にも種々の術があり根分にもいろ〳〵の方法があつて、苦心の結果人を驚かすやうなものが生れる。盆栽家の得意がるのは此處にあつて確にそこに藝術がある。

何人も旅行などの場合に氣のつくことであるが、どうかすると田舍道に勿體ないやうな枝振りのよい姿態の整つた樹に出遇ふことがある。或は深い溪間などに氣の利いた面白い松などを見ることがある。あれを自分の庭に移し植へたら、どんなに風致を添へるだらうと誰も彼れも思ふけれども、それを如何ともすることが出來ない。勝手に持つて行けと云はれても辭退の外はない。これは何人も遺憾に感ずることだが、盆栽家は丁度そんなものをミニアチユアにして人間に供給せんとするもので、運搬も出來ないやうなあこがれの樹を咫尺の坐間に置いて樂み且玩ばしむる、それが藝術でなくて何んであらうか。或は斯樣な培養をなすことを自然を損ふものとして排斥するものもあるが、どうせ人間の用に供するには、樹木の生理に從つて人間に役立つやうにせねばならぬ。大和の杉を樽材にするにも赤色を帶びた酒の行はれた時は、赤色

の材を育てたものだ。併し赤色の酒が流行せぬとなれば、その赤味を樹から去る工風が培養上起らねばならぬ。そして現にそれが行はれて杉材は白色を帶びてゐる。唯だ自然にのみ任して置けば、矮少の植物などは優勝劣敗の數に漏れず多くの優勢植物に壓せられて枯死するかも知れぬ。それを取立て救ひ上げそれを保護して姿勢を直したり、動もすれば枯木に花を發させたりして人間の趣味に投ぜんとすることが、何故に自然を害すると云ひ得ようか。多くの藝術は大自然を弄ぶものであることを思ふと、盆栽藝術も下に置けない高尚のものである。彼等は往々にして大自然の缺陷を補ふて一層美化することすらある。そしてこれも外人の理解し兼ねる趣味であり藝術である。

盆景も古るくから作られいろ〳〵流派があつて藝術となつてゐる。これは盤や盆の上に山川湖海さまざまの風景を作り出すもので、作庭と較々工風が似てゐるが、或る流派は石と白砂の外は絶對に他のものを用ひないからそこに作庭と異なる所がある。庭は坐中に移すことが出來ないが、これは坐間に置くものである。前年の歌の御題社頭の雪などは盆景家が最も得意として作る譯は、白砂が雪に擬するには最も適當の材料であるからである。この藝術にも自然が貴ばれ、巖石なども泥土で作つたものよりも自然石が重んぜられてゐる。流派に依つては寫實を

避けて大體の趣きを現すことにしてゐるが、また或る流派は寫實を旨とし、家屋や橋や水車や舟など小模型をあしらうのもある。砂も白色に限らず他の色を採用するものもある。或は泥土を以て庭のごとく樹を植ゑたりするものもある。近年外國の式とかで、重なる山や連らなる山の形貌を泥土で作り適當に彩色を施したものがあるが、寫實は寫實だが盆景家はこれを俗として排斥してゐる。どうも高雅の趣きは餘りに寫實がない方に存するやうだ。丁度南畫家が寫實を避けて大體の風格を描き出すと似てゐる所に妙がある。根本は石の選び方に在るので、盆石家の好む石は、大體玩石家の喜ぶ石で、紀州の古谷石、甲州の昇仙峽の油石、鴨川石、鞍馬石などが珍重せられ、春夏秋冬期節により石の色に相違のあることを法としてゐる。即ち春の景には綠石、夏景には黑石、秋は赤石冬は白石となつてゐるが、實は景色によく適へ姿態がよければ必ずしも色に拘泥するに及ばないと思はれる。盆景家磯野友道と云ふ人の書いたものから敎へられたのだが、吾越後の鍋ケ浦の石が盆景の用に立つと特に指摘されてゐる。この場所は自分はまだ知らないが、こゝに龜甲石牡丹石などがあり、それは斷崖から海に入つて久しく激浪にもまれ、海岸に打寄せられたもので、その形は珍重捨て難いものがあると云ふてゐるが、他日尋ねて見たいと思ふてゐる。兎角石を選ぶことが專一で、その組合せでいろ〳〵の風景が出

來る。自分のやうな無性ものは込み入つた盆景には手入が要るのでとてもやり切れない。去年の夏人から寄せられた大きな盆景は樹の植ゑてある寫實のもので、暑候に床に置くには適當のものであつたが、手入がわるかつたので、樹は皆枯死して仕舞つた。實は盆景も適當の場合に應用すれば、人を喜ばせるものである。一例を擧げれば、例へば客を招く時、その客人の鄕國の誇りとする景色紀州の熊野とか木曾川のライン等を盆景に作つて接待の裝飾にするなどは氣のきいた趣向である。要するにこれも大自然を摸し小形にして玩弄するもので、日本人にこんな工風のあるのも必竟自然を喜ぶからの事だ。都會地に追々庭園も無くなり、自然に無交渉となり行く將來を思ふと、乾燥を潤ほす具として歡迎すべきであらう。

これも夏目漱石が、曾て英に游んだ時の記錄であるが、讀んでみて如何に外人らに自然愛の乏しいといふ事が知られた。

嘗て彼地(イギリス)にありし頃雪見に人を誘ひて笑ひを招きしことあり。月は憐れ深きものと說いて驚かれたる折もあり。或時は知人に何故庭中に石を据えざるやと問ふて、「据えてくるる人があるとも、直に庭外に運び棄る覺悟なり」との返答を承はつたる事もあり。或る時は路傍の松樹を指して、同行者に時價若干と尋ねたるに、その男五磅位と答へたりし故、

日本にては王侯の邸宅を飾るに足るを、安きものかなと感じたり。あとにて聞けば、五磅とは庭樹としての價ならず、材木としての價なりし由。數回に招待を受けて逗留せるは宏壯なる屋敷なり。ある日主人と果園を散歩して樹間の徑路悉く苔蒸せるを看て、よき具合に時代がつきて結構なりと賞めたるに、主人は近きうちに園丁に申しつけて、皆苔を搔き拂ふ積りなりと答へたるを記臆す。

植物界の奇觀

自分は植物學者でもなく、植物通でもない。しかし專門家からいろ〳〵の植物の研究を聞くことに趣味をもつて居る。植物界ほど造化の奇工を藏して居るものはなく、今は學術の威力で、從前解釋のつかないものを征服しつゝあるけれども、卒然見ると不思議を感ずるやうなものが少なからずある。高山植物などは登山者が見慣て居るから不思議とは思はないが、一萬尺の高い山地、そして荒天荒地何物もない處に、花毛氈でも敷いてあるかのやうに、矮少の植物が綺

麗に花を發して居るなども一奇と云ふべきである。登山者はこれを花畑と稱して目を怡ばしめることの上のないものとしてゐる。この花は一萬尺の處にはどの山にもあると限らぬ。現に富士などには無い。尤も麗はしく咲いて居る處は白馬山だ。植物學者はこの花のある所を草本帶と唱へて居る。この地帶より高い所には地衣(コケ)より外に植物は生へない。いくら寒氣の激甚である高山でも、それ相應の植物があると思ふと、造化も拔け目が無い。これ等の植物は雪の下に早く芽ぐんで、夏が來ると直ちに花を發するから、如何にも强い植物である。山中の霧などが水分を供給するので、その生活を助けるのだが、融雪の爲めに水がくぼんだ地に流れ込んだり、前年の植物が枯れてそれが肥料となつて、その繁茂を助ける。これ等無數の植物に、それ〳〵名のあるのも妙なものだ。物あれば名もある筈だが、昔人跡の到らない所に、よもや本草家がつけた名でもあるまい。恐らく登山熱が盛んになつた近頃の命名であらう。草木の內で哀調のあるものがある。柳などはそれだ。人情は何處までも同じで、邦人が哀調あると感ずるものは他邦人も亦同じく感じ、哀れな名が命ぜられて居る。日本では幽靈を描くに、柳を背景にする事が定例であるが、支那では離別の詩には必らず柳を詩材に取入れ或は柳を折つて手を別つ時に贈る事もある。英語では垂れ柳をば、Weeping willow(泣く柳)と云ふて居るし、ド

イツ語では Traver weide と云ふて居る。トラウエルは悲哀の義である。亡友横井時冬は古歌に「思ひ草」とあるのはどんなものかと、可なり面倒して調べてやつと搜し當て、畫家に描かせた事がある。これは花がうなだれて物思ふやうな姿であるから命名されたものだが、これも哀調を帶びるものゝ一つであらう。

大震災で評判のわるくなつたものは、ヲレゴン、パイン普通米松と云ふ材が、脆弱で柱などが折れたと云ふにある。これに反して耐火力があつて驚かれたのは、街樹のスズカケであつた。赤坂の溜池あたりで自分の目擊したのは、火の爲めに葉が皆燒け落て居たのに、それが季節になると皆青々と發芽して居た。桐なども火に强い樹である。それに和名キリと命じたのは生長を促進するため、根本より切つて放芽せしむるからだと云ふ說がある。印度の貝多羅葉は椰子の葉で、それが經文などを鐵筆で書く料となつて居る。この貝葉が何んの樹の葉とも知られなかつた頃に日本にたらえふ（多羅葉）と命じた樹葉があつたのも一奇だ。それは印度のと全く別種のものであるが、矢張經文に因緣がある。乃ちこの葉を火の上であぶると梵字のやうな斑紋が現れる。これは植物學者は分類してもちの木の類に入れ、貝葉とは全然違ふと云ふて居る。

不思議な思ひを爲すものは、植物が枯死してから巖石を崩す事のある一事だ。淺間山に「天狗の麥飯」と云ふものがあり、信州の小諸附近の味塚山に「長者味噌」と呼ぶものなどがこのクセ物である。全體植物には破壞作用がある。それは根が擴大して、その力で石を壓したり割つたりする事もあるが、根から岩を溶かす酸液をば分泌するのでその力が馬鹿にならない。植物が枯死すれば、その根がなんの働きもなさないと思ふのは間違ひでその根から腐植酸と云ふ酸液を生じ、それが岩石を崩すものである。「天狗の麥飯」、「長者味噌」などもこの酸分で、火山石を分解する。そして分解の結果ボロ／＼となる乾いたのは麥粒の如くで、水氣を含めば麥飯のやうになる。それが天狗の麥飯である。長者味噌も浮石（カルイシ）を分解したものである。そして味噌塚は現に內務省から天然記念物として保護されて居る。

樹木の分泌する液には種々のものがあつて、中には酒の味のあるものがある。樹幹に切り目を入れると、それから流れ出る。學名は知らないが、普通酒樹と云ふてゐる。越後邊にもあると聞いた。既に酒の如きものを分泌する樹がありとすると、甘露を分泌する樹もありそうなことで、いつぞや金澤で甘露が降ると騷ぎ立つたことがある。段々調べると、ある樹から露が葉に傳つて、宛ども織糸のやうに滴つてゐる。嘗めて見ると味が較々甘い。或は樹の腺から分泌

する液ではないかとも疑はれたが、實は寄生蟲の仕業であることが分つた。卽ち蚜虫（アブラムシ）の分泌物であつた。南米の熱帶地方には雨樹と云ふものがある。旅行家の記する所に依ると、或る樹から水が葉を傳つて垂下する狀は雨の如くであると書いてゐる。一時植物學者は樹からの分泌液であらうと云ふたが、これも追々研究して見ると、矢張り蚜蟲の分泌液であることが知れた。この樹は荳科の高木でピテコロビウムと云ふものだと云ふ。

世界中で最も堅い木と云へば、チークであらう。この木材は日本でも早く宇治の黃蘗山の建築に用ゐられてゐる。乾燥すればひぞつたり、曲つたりする虞のない良材であるけれども、乾燥することがなか〳〵困難で、伐採に先だち樹皮を剝ぎ去り、立木のまゝに枯らし一兩年乾燥してから初めて伐採すると云ふ。斯くせねば、川に流して運ぶに重量のため水中に沈むと云ふ。斯の如きは他の木材に無い取扱ひである。チークの堅いのに反して軟かい木は琉球や小笠原島にある學名ビスヲニス、エクスレサと云ふ喬木で、直徑三尺以上もあるが所謂ウドの大木で、質が頗る軟かで、鎌などで容易に伐ることが出來る。輕い木は栓などに用へるキルクであるが、これにもいろ〳〵あつて、西印度產のキルクウードは普通栓用のものに較べると比重が半分位だと云ふから、甚だ輕いものである。この材で舟などを作るが、冷藏庫の材として尤も

適してゐる。この材で作つた箱に氷を貯へると一週間位氷は融解しないとのことだ。

果物の尤も大なるものと云へば、ダブル、ココーナツト（雙子椰子）の實で、樹の高さが百尺位と云ふが、その實の長さは一尺五寸許りで、形は扁平で、中央に凹線があり、二個の果實を抱合したやうになつてゐる。その重量は五貫目乃至七貫目もあると云ふから實に重い。この果實は往々印度洋に浮びあちこちに漂着したことはあつたが、久しい間その母樹が知れなかつた。近頃漸く雙子椰子の實であることが判つた。熱帶地方にはいろ〳〵ヘンてこの果物がある中に猿壺、砲丸などいふものは椰子の實などに較べると、負かに珍なものである。いろ〳〵の種類もあるが、多くは天然に器具の形を有し殼が甚だ堅牢で、瓶に似寄つてゐて、蓋まであるものがある。實が熟すると自然に蓋が開いて脫出するそうだ。猿壺と云ふのは玉蘂科に屬する果樹で、實の高さは七寸乃至八寸で、土人はこれを拾ひ取つて、砂糖などを容れる調度に充てゝゐる。猿が瓶中のものを盜み取らんと手をさしこむと、口が狹い爲め、物を攫んでは手が出ず、その機會に猿を捕獲するのでこの名がある。砲丸樹も同科に屬し、果實は砲彈の形をなしてゐる。皆頗る重量があるので、その落下の聲は轟然として遠くまで聞こえるそうだ。

植物の中には性慾に關係あるものも樣々ある。支那の性慾家が若返り劑として喜こぶ「何首

烏」と云ふものなどは、草の根であるが、本草の圖を見ると、宛ら睾丸のやうな形で、纖毛の如き細根が附着してゐる。必竟そんな形から滋强劑としたものであらう。何首烏といふ名は何氏がこれを服用したらば、頭髮が烏の如く黑くなつたと云ふ所から來てゐるのだ。印度には性慾をそゝる植物があつて、ある時釋迦が門人を戒めて、その草を手にしたら、警戒せねばならぬと云ふたことが佛典にもあると聞くが、紀州の南方常楠氏は妙な事から倉庫の隅よりこの植物を發見し、ひどく苦心して研究した所、それが佛典にあるものであることが知れたと云ふが、これは日本にこれ迄無い植物で、印度から輸入された貿易品にその種子が附着して來て、藏の隅に發芽したのだと聞いてゐる。

本草漫言

本草のことに就いて聊か思ひ出るまゝを書きつけて見ると、蓼は辛いものであるのに、それを喰ふ蟲がある。諺にも「蓼喰ふ蟲もすきゝ」など云ふてゐるがこれは古い諺で、文選に始

めて現はれた諺である。又ワサビの生へてゐる處に多くは蟹がすんで居るので、蟹がワサビを喰ふものと人は思つてゐたが、蟹は清水が間斷なく流れてゐる所を好むので、ワサビと其の居所の致味が同一であるので、蟹はワサビの生へてゐる潺滴の水に住するので、ワサビを喰ふものではない。ワサビを害するものは別な細菌であることが近年科學で分つたので、蟹の寃は漸く雪がれた。芸と云ふ草は殺蟲劑で書齋の窓などに多く植へるので芸窓などの語もある。いつか故横井時冬博士から贈られたこともあるが、菊の葉の如きものであつた。アケビと云ふ字は知らなかつたが、開の字であると知れた。開は婦人の陰部で、アケビはそれに似てゐるから、それに草を冠らせて植物の名としたのだと一笑した。蕎麥に藪そばの名があり、そば屋の看板に竹を植へて居る所もあるが、あれは藪そばであらう。ザルと、ヤブ、とでは竹冠と草冠と違ふので誤り易いから來た間違であらう。ネムの樹は青裳とも云ひ又枝とも書く、共に夜分眠ると云ふ意を寓してゐる。その葉はユヅリ草によく似て、日が暮れると、葉が一齊に垂れる。それが裳の如くであるから青裳の名もある。ムベと云ふ蔓草は日除けの爲め棚を作つてハワせるが、此の葉は七五三に着いてゐるのが特色で、小兒の七五三の祝に此の蔓草を寄せ來つた人があつて初めて氣がついた。蓮が花を發する時多少音があると云ふのは、水中の魚類の喰喝の音

で、發花の音でないとは、近來漸やく知れた。雁來紅は葉鷄頭の代表名稱でなく、雁來るとき紅色を呈するのが雁來紅であり、其の葉の色に由つて老少年があり少年老があるとは植物家の云ふ所で、總稱は十樣錦であるそうな。茗荷を喰ふと物忘れをするといふが、果してどうか。釋迦の弟子の「槃特が呆痴で、それが茗荷を喰つた爲めだと云ふて、彼れに配するに茗荷を以てしてゐるのもおかしなことだ。ナメクジの吐き出す液は不思議の作用をなすもので、蠅などに接着すると、蠅身がその液の爲めに、亡びると云ふは事實である。それが爲めにナメクジは多く工業用に貴ばれ、象牙の如きものをやわらげたり、屈曲したりするにはナメクジの液を用ひることが祕法とされてゐる。尙ほ支那の文字を案外に間違つてゐるのは鮎は支那でナマヅであるのを日本では似ても似つかぬ香魚に用ひてゐる。高山植物と云ふものは寒氣のため發育が充分でない爲めか、如何にも小さいが花も木も葉も平均してすべて小さいから愛らしいものである。いつぞや日光の山奥で尺楠の盆栽が如何にも愛らしいので割愛を得て東京へ持ち來つて見ると數日にして段々樹が伸びて形が崩れてきたので愛憎がつきたことがある。この高山植物を大きくしないやうにするのは溫度を低くし、時々霧を起して山と同じやうに取扱かはねばならぬのでナカ〳〵厄介である。高山の樹木に垂れ下がつてゐる一種の苔があるが、畫家は高山

に限るものとは心得ず、兎もすると山下の樹木に配して書くなぞは植物學者を笑はせる。柿を愛する人が其の長所を七ツ數へて其の莊を七絶山莊と云ふた人がある。柿の葉を脫し樹の枝も一種の風味があるが、赤色を帶びた果實や鬱蒼たる密葉などを數ふれば七絶と稱し得るかも知れぬ。蓮の研究學者大賀一郎博士は五百年を經た蓮の實を滿洲の普蘭店に得たと云ふて五顆を割愛して余に贈られたが、蓮の實も或る條件の地底に置けば、幾百年も死せず眠つて居ると見へる。蘭は幽谷の君子と褒めてゐるかと思ふと、支那では宗教家は淫猥の植物として遠ざけてゐる。其花が婦人の陰部に似て居るからであらう。蘭は兎角女を好むと見へて、其葉を磨くには女の手に限ると云はれる、柔かで脂氣があるからであらう。或る外人は我邦の庭園を見て植物の病院と誹謗したものがあつた、實は他山の石だ。陰樹も陽樹もメチャ〳〵に植へたり、害蟲が横行するなど、專門家から見れば、皆病樹かも知れない。よく樹木花卉などの性質を見て適所に植へねばならぬ。驅蟲の事は勿論である。或る外國では盆栽の輸入を禁じてゐる所もある。害蟲の移ることを虞るゝからの事だ。みさごと云ふ鳥は海魚をくはへて巖窟に貯藏するが、肉の腐敗を防ぐ爲め、酸質の唾を吐き注ぎさながら鮨を作ると一般である。故に之れに倣ふてすしやの看板にみさごを書いたものを日本橋邊で見たことがある。此の鳥の貯藏を往々人

間が失敬する。丁度海燕が海草で巖窟に巣を作るのを人間が失敬して燕巣と名づけて食卓の珍とすると同じである。自分はある雜誌の標題をみさごとしたことがある。他人の作を集めて賣るからの意を寓したのであつた。德川賴倫侯は本草の趣味家で多くの竹を集められた。亦た特に稱すべきは大磯の別莊高龍園に百草を寄せ集められたことである。別莊の周圍三十町の圈内にある雜草を氣根よく集めて園内適當の處に培養せられた。莊の入口から屋後の山地まで雜草に充ちてゐた。尙座敷廻りの襖にも雜草が描かれてゐて、皆學名が附されてあつた。此の高雅の科學的道樂に感服を拂つたことがある。麝香は性慾的のもので、其の香氣で雄麝を惹きつけるものと科學者の研究で知れた。實物を見るに生殖器附近の毛に包まれた圓形のものだ。それとも知らず、婦人連は此の香氣を珍とし、昔し香水のまだ行はれなかつた時、臆面もなく、之れを藉りて、身の飾りとして、體臭を去る用に充てたり、或は纖人を惹きつけたりしたが、偶然麝同樣の用に充てたことがおかしい。薑は辛味のものだが、段々長じて愈々老ると、益々辛竦の度を加へる。京都の藏六が六十一の賀詞をと需めて來た時、自分は薑に喩へて、老いて衰へず益々辣を加ふと云ふたことがある。上田秋成であつたか鶉居を號とした。それはしば〳〵居を轉ずるからだと云ふ。うづらは頻りに居所をかへると見へる。自分も移轉頻要の時代に、每

日書く隨筆を鶉居錄と題したことを思ひ出す。日本には樹木の種類が豐富だから、外國から移植することは餘り無かつたが、其の移植は津田仙の學農社から創まつたと云ふてもよからう。「アカシヤ」だの「ユカリヤ」などは皆津田の移植したもので、街樹は抵ね津田の移植を元とするものだ。古るい諺に「若か木の下には笠をぬげ」と云ふがある。若か木は人の丈にも及ばない短弱のものだが、他日は亭々雲を凌ぐ大樹となる、後世恐るべきものだと、人事にもひつかけ青年を侮るなとの敎が寓されてゐる。此の戒で思ひ寄ることだが、日本の慣習で、每年の始めに門松を結んで祝ふことは甚だ無駄なことで、全國で伐採する若樹の幾千萬本は皆大木とならずに棄てらるゝ。それに就いて自分は嘗つて一町内に代表的の松飾りをやるべしと云ふたことがある。昨今節約の世の中再びこれを主張する。植物の中で日本の文化に大切の關係あるものは櫻であらう。長い間日本の製版は皆な櫻の板で刻したものであつた。櫻ほど彫刻に工合のよいものは無いと云はれた。硬軟過不及なく亦ムラもなく、どんな纖細のものでも彫れる。殊に伊豆に產する櫻が尤も佳とされてゐた。支那では此良材がないので、日本の版木の古るものが、支那に輸出され改刻の用を足したことも少くない。製版の術が開けてから、どれほど多くの櫻の枝が彫刻されたか、實に夥しいものであらう。櫻の花さく國人が擧げて喜び、國花と

してゐるが、材の文木と稱して日本文化の溫床と云ふべきものだ。石炭は昔から日本にもあつたが、元祿頃には「うに」と云ふたと露伴は芭蕉の句から調べて云ふてゐる。石炭と云ふ言葉は無かつたらしい。今は水力電氣が熱を生ずると云ふので「白炭」と云ふてゐる。文化の媒妁をしたものに櫻の外更らに大なるものがある。それは茶である、茶は鎌倉時代榮西禪師が支那から將來したと云はれる。當初寺に行はれたが、段々に廣まつて全國的に行はれ、酒は睡眠を買ふの料で、茶は睡眠を避ける反對の料として僧徒に珍重せられたが、此の飲料は唯だ茶粉を湯と和するまでの作用に過ぎないが、追々之れを司るものが生じて珠光や利休などゝ云ふ巧者が出て、足利時代から織豐時代に豪奢のものとなつた。茶は實は奢侈のものでなく何れかと云ふと奢侈に反するゥどたものであつたが、高級の武將達が之れを玩ぶに至つてから、茶器を初め茶室などにも追々好みが生じ、それに關するあらゆる工藝も影響を受け、文藝でも陶工漆工鍛工木工織工香道撰法などでも皆な茶道を中心として種々の發達を遂るに至つた。結局百科工藝は茶人の好尙を主とし、茶人が其權を握るに至り、あらゆる趣味方面は茶人の支配を受け、茶人は最もそれを指導するに才幹があつたので、今日尙日常の衣食住にも茶人の工風が及んでゐるものが多い。これが茶を喫することから導かれたものと思へば、意外の感に打たれるが、

實は茶道に依つて日本の文化がどんなに進んだかを想はねばならぬ。

公孫樹

日本の風景美を外國に紹介する必要が起つて、一文を草して英譯せしめた中に風景美の要素があつて、外國に無い樹木を指摘し松、杉、竹などを擧げたが後に公孫樹を逸した事に氣が附いた。この樹は外國に絕對に無いわけではないが、稀れにあるものでもとは日本から、移されたものといはれてゐる位だから、これを逸してはならなかつた。公孫樹は威容ある靈木で姿勢が如何にも堂々としてゐて葉の形がおもしろく、秋になつて黃ばむとます〳〵風致があり、それが地上に落ち敷くと風情があり葉を脫した枝にも一種の風味がある。寺や宮の境內には必らずこの老樹があつて風致を添へる點においては松や杉に讓るものでない。植物學者の說によるとこの樹は前世界の遺物だといふてゐる。如何にも太古を知つてゐるかの如き姿態で、崇高の感を起さしめる。友人新村出博士はこの樹が大好きで、その隨筆琅玕記にいろ〳〵の事が書かれ

てゐる。それによるとこれほどの威容を具する樹に、古くから詠歌がないとあつて、それから推して上代には無つたのではあるまいかとの疑ひを發してゐる。それはどうかわからないが、とに角この樹に注意を拂ふやうになつたのは近年の事であるかに思はれる。街樹として東京市中へ植ゑ初めたのも公園や學校の庭に植ゑるやうになつたのも、近年の事であるし、若い文士達が詩や歌に入れる事が頻繁となつたのも亦近頃の事といふてもよい。獨乙の文豪ゲーテが公孫樹を藉りて戀を寄せた詩は有名なものだが、或はこんな事が刺戟したのかも知れない。日本特有のものを外人から敎へられてその美を禮讃するでもあるまいに、とかく邦人にかゝる事のあるを耻ねばならぬ。實は銀杏の實は久しくわが幼女のお馴染のものでかれ等はお彈きのスポーツにつかつてゐる。その葉に趣味があるのみならずよく蟲害を防ぐので、久しく讀書子に喜ばれ、落葉は拾ひ上げられて珍藏の圖書に挿入されたものだ。この事が因となつて書物の表紙に文樣として銀杏の葉が描かれ、それが好意匠として賞翫された。流石にこの樹が日本特有のものであるだけに、世界の植物學者を驚倒するの發明がわが邦人によつてなされた。それは明治廿七年に平瀨作五郎氏がこの樹の生殖機能を研究して精蟲の存在を發見した事である。この樹が靈木である事が如實に立證されたのも國の誇である。右の次第であるから何も外國で珍重

がるといふて遽にこの樹を有難がるにも當らんのだ。日本人は妙に柳が好きで明治初年に銀座の柳を取拂つた時、風流人はひどく惜がつたが、實は街樹に適當のものは寧ろ公孫樹にあつて、風致においても決して柳に讓るものでない。大震災後は特にこの樹が珍重され街路公園校庭などに植ゑられて、その數は實に夥しいものだが、これ等がだん〳〵に生長した曉は東京は多分公孫樹の都、銀杏の市といはるゝ事であらう。

偕老同穴

公孫樹

「偕老同穴」といふ語は、睦まじい夫婦の間柄を形容するに用ひられ結婚の場合にもよく出る語だが、海中の生物に「偕老同穴」を名としてゐるものがある。英語では「ウエーナスの花籠」と名づけてゐるそうだが、內外とも佳名を附してゐる生物である。

その生物はどんなものかといふにそれはスポンジ（海綿）である。その形は筒狀をなした籠のやうなもので、普通浴場などに用ゐてゐる海綿はフワ〳〵して軟かであるが、あれは軟かい

部分をとつたもので海綿全體の形を具してゐるものではない。海綿にはいろ〳〵種類があつて、硅質のものとなると骨格が硬く、針のやうに光つてゐるから觸れると刺されて指や、手を損ふ事がある。他に石灰質のものもあつて、これが日本の特産だといはれてゐる。すなはち相模灘がその產地で、それが澤山に採れるやうになつたのは二十年このかただと、專門家は言ふてゐる。このものは二百尋、三百尋の深さに存在するので採集が容易でなかつたから、從前は頗る珍しがられた。歐羅巴にはもとなかつたが、八十年前ヒリツピンの海洋で採つたものが傳はつたのだと、これも專門家の說である。

これが水中にあると白色で甚だ奇麗に見へる。海水が自在にこの籠の目を通るので、いろいろの養分を吸收しそれで生息するのであるが、小海老なども水の流る〻まゝ自然この中に入りこむ。さて入りこんでみると誠に安全地帶で、大きな魚類などに襲はれたり、食はれたりする事もないからそこに、寄生して海綿の食餌となる養分が入つてくると、先づその上は前を刎ねて小海老が自家の養分としてだん〳〵に生長する。終には四面を圍んでゐる針のやうな網目から脫出の出來ないほど、大きくなるので、到頭そこを永住の處とするのだが、不思議にも雌雄一對の海老が多くの場合一所になつてゐるところから「偕老同穴」、の名も生じてくるのである

が、それは寄生物をさしての名であるのに、遂に海綿をもかく呼ぶやうになつた。九州の福岡邊では古るくからこれを目出たいものとして、婚禮の儀式には裝飾として缺くべからざるものとされてゐると聞いた。

偕老同穴

馬

昨年の四月七日に代々木で馬事大會が催された。聖上も御臨幸に成り未曾有の盛事であつたが自分は病中觀覽を斷念して書齋に引籠つてゐた。フト馬に因んだものを書きつけて見ようと、アツトランドムに、思ひ出るまゝを錄して見ると、半日を費しても尙ほ盡きなかつた。それに就いて思うたことは馬は久しく家庭の一員に數へらるゝまで人間に親近である爲め、社會のあらゆる方面に喰ひ入つて、常識となつてゐるから、馬に因んだことの多いのも怪しむに足らないと感じた。以下は匆卒に書き散らした漫錄の一斑である。

馬はもと野獸であつたらうが、早くから家畜になつた。猫は人間に近づき且つ愛されてゐる

が、まだ家畜になり切つて居らぬ。馬ほど人間の氣合を知るものはない。愛すれば必らずなつき、人間の命ずるまゝ、ドンナ事でもやる。重量を遠く運ぶことは勿論、軍馬となると兵士と死生を與にする。人馬一如と云ふのも馬の愛撫に由つて、此域に達する。

馬が人の心をよく知ることに就いて思ひ出すに、　明治天皇の御製である。

のる人の心をはやくしる駒はものいふよりもあはれなりけり

とある。又馬の老いて廢馬となるを憐れみ玉ふ御製には

ひさしく我が飼ふ馬の老いゆくがをしきは人にかはらざりけり

とあるが同情の深い御製である。

騎馬は「禮樂射御書數」六藝の一として戰國時代は勿論、平時でも馬術は大切とされ、古來馬術の鍛錬に憂き身をやつし、巧妙の域に達した騎手が多く出た。傳へらるゝローマンスでは百段もある石磴を上下した名人もあり、出水の墨江を渡つた名手もあつた。此等の事を思ひ出せば數限りもなくあるが、ある文豪は特に落馬の法を研究した。落馬しても傷害を受けないことも實際に於て大切な騎法で自分などは落馬の法を知らなかつた爲めに苦い經驗がある。自分の幼少の頃村に獸醫がゐたので、それから教はつた馬の毛皮の名を今も幾らか記憶してゐる内に、鹿毛、烏黑、栗毛、葦毛、月毛、月額、戴星などがある。

戰國時代に如何に名馬が重んぜられたかは想像にかたくない。久しく草莽に隱れて貧乏生活で日を送つてゐた士が時を得ていざ鎌倉と云ふ場合に、瘠せ馬に乘つて參加することが恥辱とされたのも無理はなかつた。細川忠興の妻が鏡背に潜めてゐた小判を良人に與へて良馬を調へさせたごとき、ローマンスは當時色々あつたやうに、此頃の第一の戰利品は敵の良馬であつたらう。ステツセルが旅順に敗れて乃木將軍に其の愛馬を贈つたことはまだ耳新らしい事實である。又昔し武將が大饗應を行ふ時の引出物は馬であつた。特に良馬を選んで何匹も贈つた。此頃軍馬の重んぜられたことは今日飛行機と一般、大將の身體は托して馬背に在つて、戰鬪の勝敗も馬が半分もそれ以上も擔任してゐたので、駿馬を選んだのも偶然でなかつた。去ればこそ源平時代の名馬の、磨る墨や池月などの名が今も人に知られてゐる。無論軍陣で將士を賞するに名馬を以てした例はいくらもある。

馬は古へより數量の標準となつてゐる。支那では馬の數を以つて國の階級を定めて、諸侯の國を千乘の國と云ひ、王の國を萬乘の國と云うた。馬を以つて貨幣の數に應用してゐるのは我邦で金百疋金千疋など云ふ例がある。又馬を力を圖る標的としてゐる例は、蒸汽などの力でも

今もつて何馬力と云うてゐる。又時刻も干支の馬から割出されてゐて、正午が十二時で、十二時前を午前其後を午後と云うてゐる。又支那の貨幣に馬蹄銀があることは周知の事實である。

馬に關する漢語で比喩的に普通用ひられてゐるのが頗る多くある。中には訓戒の意を寓したものもある。試みに其の四五を擧げて見ると、天馬空を行くは意氣の盛んなことを意味し、駿馬痴漢を乘せて走るは、賢妻が凡夫の配であることを云ひ、一馬兩鞍を被らずは、婦の貞節を意味し、馬相家の伯樂のしば〳〵人物を鑑別する人に用ひられ、脾肉の歎は太平無事に用ひられ、馬耳東風だの風馬牛などは無關心のことに應用され、將を射んとすれば馬を射よとは、捷徑の手段としていろ〳〵の場合に用ひられ、駟も又及ばずと云ふは時機を失する莫れとの慣用語であり、牧民や民を御するなど云ふも馬の御法を民に應用したのである。又馬を波濤の形容に用ひた語は「潮驕貝闕千吼起勢捲雪山萬馬來」などの秀句もある。塞翁の馬や萬物一馬などの仙語禪語があり、馬齡を重ねるとか馱作など云ふのは皆謙遜の詞である。牛頭をかけて馬肉を賣るは商家の詐欺手段で牛飲馬食は大食の形容に用ゐらる。

己れの生れた干支に因んだ物を集める人が世の中にいくらもある。坪内逍遙なども羊の年に生れたので小羊とも號したが、羊の玩具を相當に寄せ集めた。巖谷小波は午年の生れで、大規

模に午の繪や玩具などを蒐集して其數千にも及んだので、遂に厩を作つて陳列所とし、それを千馬閣と名づけたこともあつた。

午の玩具は三原の馬の玩具其他にいろ〳〵あるが、それよりもこゝに擧げたいのは、竹馬である。竹馬の友と云ふ語さへあつて、久しく少年輩の玩ぶ所であつた。竹竿に足を載せる臺を木で造り、自ら操縱して歩くことが都鄙に行はれた。操縱の巧みな子になると、竹馬で疾驅も出來、少年輩はよく競爭をした。他に影繪から發展して多くの家庭に用ひられた走馬燈がある。これは馬に限らず行列の繪が、燈内に裝置されて間斷なく回轉する所に趣があるが遂には目まぐるしく變轉するそれを走馬燈を以つて呼ぶやうにもなつた。

借馬が一時流行した時代がある。騎馬の心得ある人々は此借馬で郊外へ遠乘をやつた。借馬に就て思ひ出す一笑話は、此頃歿した石黑子爵と長谷川泰がまだ志を得なかつた頃、一日兩人借馬で遠乘りを試みたが、正午になつたので、郊外の茶店に立寄り、團子の串に差したのがあつたから、それを晝飯代りに食はんとした處、茶屋の婆さんが、遮二無二、其團子を馬に食はして仕舞つたので囊中餘裕のない兩人は饑をこらへて歸途に就いたといふ話を長谷川から聽いたことがある。

借馬が流行の頃東京では馬車鐵道で市中を往來した。又千里軒と云ふ馬車屋があつて、旅行用に供した。自分も寒中郷里に歸へるのに、信州路を乘合馬車に乘つたことを思ひ出す。信州は雪はあまり降らないが寒氣は非常にはげしく、ブランデーを一本傾けても些しも醉を發しない位であつたが、無情の馭者はしきりに鞭をあてるので、馬は喘ぎ〳〵疾走し、背上の流汗は看る〳〵凍結して、宛ながら雪を被つたごとく全膚白化したので、馬の虐使をつく〴〵氣の毒に感じた。

神社佛閣に大概繪馬堂といふがある。奉獻の繪馬額を掲げる處だが、後世いろ〳〵の繪の額を掲げることになつたが、繪の如何に拘らず、すべて繪馬と唱ふることになつた。狩野家の某名人が畫した馬が如何によく出來たのか、夜中綱を放れて遊びに出て、草を食つたなどのローマンスもある。これに就て川柳子は吉原歸りの句に「朝歸り田圃で狩野の馬に遇ひ」とあるのは此の繪馬のことを云ふたのであるが、吉原では無錢遊興をやつたり遊興費の拂へない客には樓丁が附き添うて其家に就て勘定を受とつた。これを馬を牽いて歸へると云うた。此の川柳は兩者を結び付けた句であらう。

昔は馬を畫して繪馬堂に獻ずる習慣もあつたが、今はそれが無くなつた代りに馬上の人を銅像にすることが多く行はれてゐて、馬の彫刻で名を博した人に後藤貞行といふ人がゐた。この人は美術學校の教授であつたが、馬の彫刻となると、多くの場合此人が與つた。宮城前の楠公の像など曾つて高村光雲から聞いた話しに、高村は人像だけを作り、馬は別人の作と云うたが或は貞行の作かも知れない。亦馬を畫する名人は誰れであらうか、支那では馬遠だの輯幹などが名人と云はれたが、自分の知る所では先頃歿した野澤如洋なども名人の列に入るであらうか。此人は馬を畫することが得意で、容易に百馬を畫したが、筆は奔馬の如く神速で、見てゐると何を畫すのかと思うてゐる内に直ちに馬となる。馬の百態を描いて各々其の神に入るのは、よく馬の性を知りぬいてゐることでなければ出來ぬ。如洋は弘前の人で特に馬に親しみがあるので、其技が熟したのであらう。

いつぞや或る好事家より、武陵金氏の壁畫の拓本だと云うて、馬淫刑を圖した拓本を寄せられたことがある。これは婦人に對する刑で、馬が陽器をあらはして平臥してゐる婦人罪囚に臨んでゐる圖で、其の圖繪が如何にも武陵金氏の壁畫の手法によく似せてあつて、其の技工の巧妙なのに驚いたことがある。

馬に因んだ地名は東京市中でもなか〳〵多い。其二三を擧げると駒込、駒形、馬道、厩橋、

馬喰町、傳馬町、目白、目黒も元と馬を牧した名殘りの地名であり、駒井町馬場下などもあり、國名には但馬があり羣馬があり、馬關があり、勝樂地には耶馬溪などがある。更らに馬を姓名としてゐる人は、咄嗟に左の十數を數へ得る。上代には厩戸の王子、曾我の馬子などがある。今の姓名には馬越、馬屋原、相馬、馬場、馬淵、司馬名、江馬などは姓で、名には龍馬、靜馬、一馬、東馬、馬治、嘉治馬、九馬などがあり、號には馬城があり馬角亭（松浦武四郎は馬喰町の角に住したので此戯號がある）俳優には成駒屋があり、戯作者には曲亭馬琴、式亭三馬がある。文晁門人には北馬などがある。

京濱鐵道の開通の時、某外國から献じた馬車に、明治天皇乘御あらせられて臨幸になつたが、此時、御者に選ばれた人の名は記憶にないが、馬術の名人と云はれた人であつた。其人の服裝はヲークションから俄かに購うた、肋骨のあるだらりとした、寛かなものであつた。それを外國人の寢衣と氣がつかず、着したので、滑稽であつたことが後日の一笑話となつたが、此の御者の後に語つて云ふに、あんなに氣の揉めたことは無い、前には畜性があり背後に至尊があるやうな取り合はせだ。萬一失敗があつてはと戰々兢々であつたと云うた。名騎手すらも馬車の好御者でないが、名騎手を當時御者に選んだのも、初めて馬車を使うた時代のさまが偲ば

れる。

上野の不忍池の周圍は今電車が走つてゐるが、自分の少年時代には、こゝに競馬が行はれたことがある。馬見場なども設けられ、ナカ〳〵盛んな景況であつたが、自分の友人松平康國と云ふ人が、いつぞや笑つて語つたことを思ひ出す。松平は曰く、徳川慶喜公に草履を取らせたのは、天下に俺一人の外あるまいと。當時幼少であつた松平は棧敷の上段に座して競馬を見てゐたが、誤つて穿てる草履の片側を落した。それが下段に居られた慶喜公の側に落ちたので、公は自らそれを拾つて此の小兒に與へられた事實があつたのだ。

馬が戰陣の要具とされた時代に、馬具の裝飾に當時の工藝の粹を盡したのも無理ならぬことであつた。鞍などは金銀を鏤した蒔繪のものが多かつた。自分の珍藏した馬鞍は、天正頃のもので、騎馬の南蠻人が疾走してゐる。其の後ろから犬が追ふ所を蒔繪で畫したものであつた。自分はある人の熱望で割愛したが、實は馬具などで所持した唯一の物であつた。手綱なども特殊の型模樣があつて、それが今でも手綱染として行はれてゐる。

支那の漢時代の銅印に往々司馬某の印文を見るが、司馬は大將格の官名であつた。日本の官名にも右馬頭左馬介などが歴史に見えてゐる。役所には馬政局主馬寮の名は、今現に行はれて

ゐる。

熱海の坪内逍遙の二階の書齋の机に坐して窓外を臨むと、隣家の厩から馬が首を出してゐるのを見て、をかしく思うたのは、小羊と號する此の書齋の主人が、常に馬と相對してゐることで、ある時坪内に此事を語つて笑つたこともあつたが、此人も白玉樓中の人となつて今は昔しの夢となつた。

筆を收めんとして一二のことを思ひ出して附け加へる。誰人やらの詩に「僕夫與馬各通語、兩脚隨人同渡河」と云ふがある。「各語を通ず」と云ふのに面白味がある。馬は物を言はないが以心傳神で人語を解する。又「意馬心猿」と云ふ語があるは馬琴時代の小說家の慣用語であつたが、心のときめくことに用ひられた言葉である。又馬鹿と云ふ語ほど日常頻繁に用ひらるゝ言葉はない。人が怒れば一喝「バカ」と叫ぶ、「バカ」は大略愚を意味する、馬鹿にされた、馬鹿々々しい、馬鹿くさい、などいろ／＼に使はれてゐるが其の語原は、支那の宰相趙高が鹿を指して馬と呼び人を愚弄したのが始まりかどうか知らないが、日本殊に關東で、これほど人にフアミリヤルの言葉はない。又干支から導かれた迷信の內、丙午(ひのえうま)ほど人を禍するものはない。此干支の年に生れた女子は、良人に不幸を生ずると云はれ、誰れも避けて妻に迎

へるものがない、今でも此の迷信を一掃し去ることが出來ないのは困つたことだ。

懷往瑣談

帝國議會開設當時の政情

一昨昭和十五年十一月廿九日 聖上の親臨を仰ぎ帝國議會の創立五十年記念會を開くにつき、會つて議席を有した自分にも案内が來たけれ共病の爲臨場を斷つたが、議會草創の頃の生存者が今は極めて少ないので、東京日々新聞から、當時の狀況と所感を聞きにきた。自分は第一、二期とも當選しなかつたから、其際の事はよくも知らないが、頻繁に解散があつた爲め、議會の幼少時代に自分も議席に就き、およその事はわかつてゐる。何んにしても鬱積してゐる國民の不平を一時に吐き出す所が、出來たのだから、初期の議會はなか〳〵氣勢が揚つた。當時議員となつた人々は、各地の第一人者で、人の無い處は東京から輸入し、國士として恥かしからぬ人物を議員に擧げた。だから第一の議會は人物揃であつたと云ふことが出來る。當時の選擧も理想的で、候補者が自ら金を出して投票を買う樣のことは無つた。此の初期の調子で議會が成長したら立派な議會になつたであらうが、議員が多年鬱積した氣を吐くと政府者も、極力對抗

して喧嘩腰になつて、豫算の削減には一錢一厘もまからぬと、終日商人の口吻で議員に對した り、或る大臣は議場に於て藩閥の高慢をやつたりして、甚だ大人氣ない行動が多かつた。時の總理大臣は誰れかと云ふと山縣で、此人は立憲國家の第一回の首相としては不適當であつた。しかし第一期は解散なしに濟んだのは案外であつたが、實は土佐派が政府と闇取引を行つた爲めで、妥協と云ふことが早く此時から初まり、議會は幸ふじて解散を免かれた。第二期には解散が先づ行はれた。其時の首相も又餘り立憲的でない松方であつた。此時の解散に由る選擧は政府が大干涸を行ふて立派な國士型の候補者に妨害を加へ、某々地方の如き流血の慘を現して、選擧の結果有力の人は多く落選した。第一期以來政府が議員に對した態度は如何にも大人氣のないものであつたので、頗る議員を刺戟した。若し政府に雅量があつたら、解散を繰り返すこともなかつたであらう。民論を左まで激することもなかつたらうに、政府者は決して立憲的でなかつたことは確かで、喧嘩兩成敗と云ふけれども民論を益々激せしめたのは、政府で其の責を甘んじて受けねばならぬ。當時政府側で立憲思想のあつたものは、伊藤侯であらう。侯の憲法の欽定に關係もして居るのに、何故議會開設の當初首相として現はれなかつたのであるか、彼れは樞密院に潛んで其の責任を避けたらしい觀があつた。第三期の議會にヤツと首相となつ

て現はれたが不慮の事から負傷したので、充分議會を收攬することが出來ず、遂に又解散となつた。此の解散の後の選擧にも政府は干涸の手を收めなかつたので、有識者は皆な逐鹿場裏に立つことを嫌忌して、漸やく議員の品質の低下を馴致するやうになつたのは返す〳〵遺憾の事であつたと云はねばならぬ。

帝國議會の開くる前、政府が治安を名として施した民論の壓伏は種々あつたが、政黨の發達の前途に政社法を以つて拘束し、事實政黨の成立を妨害し、改進黨の如き其の首腦の皆退却するの止むなきに到つた。新聞條例に極度の苛制を行ふて瑣細の事にても罪に問ふた。民間有志の運動を抑止する一方便として保安條例を施し、多くの志士を帝都より放逐もした。如斯きは治安の爲めとは云へ、此等は皆な心あるものを刺戟して政府に反抗するの因をなさしめた。斯くして激したものが、帝國議會に臨んだから、勢ひ其の爭は猛烈ならざるを得ないが、冷靜に考へれば政府は藩閥の功に誇つて血迷つた感なきを得なかつた。若し政府が寛容の態度を持し、議員に對し幾許假藉する所があり、無益の壓迫を差控へて、國家百年のため議會を善導する大人氣の見識があつたら、頻々たる解散の不祥事も無かつたであらうと、自分は今更ながら遺憾に思ふてゐる。

我が國最初の臨時議會の想ひ出

我國最初の臨時議會は明治廿七年十月十五日日清戰爭開戰に當つてのそれであつた。あの頃は伊藤博文公が總理だつたが、何しろあの當時は支那は世界に冠たる大國だと云つて日本もむやみと怖れてゐた者だ。其支那を敵とするのは、その當時としては非常な冒險で、廣島に大本營が置かれ、　陛下が其處で御起居遊ばされると云ふ未曾有の事柄だけでも、如何に非常時的なものだつたかゞ解るだらう。大本營がある上、而もその十月臨時議會が廣島に開かれたので廣島の市は大變な混雜だつた。議事堂は適當な場所がないので空地に新しく建てたものだつたが、やつと議員が入れると云ふだけで至つてお粗末なものだつた。屋根には藁を敷いたが、之はトタンにすると雨の時音がしてよく聽きとれぬ爲だつた。會期は一週間の豫定だつたが、五日で終了したと記憶する。伊藤さんが例の如く漢文くづしの樣な强硬な演說をされた事が今にも思ひ出される。

政府案は何の紛擾も起らずに通過した。衆論一致で戰に臨んだのは誠に目出度いことだつ

た。ところで議員連中は廣島は寺が多い所なものだから、皆お寺に宿割りになつた。一部屋に二人も三人も入れられる。食物も何處かで請負つたものだつたが馴れない者は大部困つた樣だつた。入浴すると云つても庭の中に風呂桶を据ゑて入ると云ふ有樣で如何にも戰時下らしい風景だつた。廣島在留中に大本營で一夕慰勞の會を設け御招待を受けたことがあつた。淺野侯の名高い泉亭が會場で　陛下から一々お盃を賜つたのは終生忘れる事の出來ない感激だつた。その時は列席者一同文字通り意氣天を衝くばかりで、東京の宴會などとは全く違ひ所謂陣中の會とも云ふ可きものであつた。

なほ大本營に御起居遊ばされた　陛下の御生活は、如何にも御質素なもので、陛下には終日軍服で其處に御出でになつた。餘りにも勿體ないので近邊に新らしく建物を御造り申し上げようとしたが、これは　陛下の御命令で取り止めになつた。大本營の御部屋は御調度品などもほんの御間に合せのものばかりで、お部屋に花を活けるにも花いけがなく、砲彈を以て花いけに代へた程であつたと拜聞した事があつた。何十日と云ふ間　陛下には斯くも嚴肅な御態度で居られるのに下々の他の官僚達は勝手な事ばかりして當時評判になつた程亂脈を極めたのは遺憾な事だつた。

前にも云つた通り議事は何の騒ぎもなく進んだので、議會に就いては餘り語る事もないがその時私は初めて廣島に行つたのでついでにあちらこちらを見て歩いたので、その時の思ひ出の方が寧ろ殘つてる位だ。嚴島や紅葉谷に泊つたのもその時だつた。廣島は元から藩政がやかましく妓樓なんかは一切置かず、皆紅葉谷の方へやつたので、其處は繁昌な狹斜であつた。

議會が濟んでからもあの當時は軍隊の輸送や何かで鐵道がひどく混亂し荷物と一緒ではお斷りと云ふので幾日も乘れないのには驚いた。

あの頃は私も元氣だつたが、あれから既に五十年、あの時の議員で今殘つてゐるのは尾崎行雄、内藤久寛の兩君と私ぐらゐなものだらう。考へて見れば私も今年八十三だ。うたゝ今昔の感に堪へないものがある。

條約改正の斷末

今でも思ひ出すと無念で耐らないのは、大隈侯の條約改正の悲愴の斷末である。私はその頃、

鄉里新潟の新聞に筆を執り、大隈侯を仰ぐ政黨を率ゐてゐた。これより先き井上侯の條約改正の時も、私は鄉里にゐたが、あの改正案はすこぶる缺點が多かつたので、反對黨である自由黨と連衡して、私が反對の建議を書いた。其の時は自由黨の根據地に陣を張り、自由黨の面々は私の身邊を擁護してくれて萬端樂であつた。實は如何なる場合でも反對は容易で辯護は難事である。井上案は破竹の勢で敗れたが、さて此の難事業を繼承して大隈侯が衝に當らるゝと、形勢は一變して自由改進の連衡は破れ、自由黨は攻擊の位地に立ち、吾等は辯護支持の衝に當る立場となり、前の共同者は忽ち吾等の敵となつた。乃ち前に私を警護した面々は今度は矛を逆まにして、ある時は僞書を作つて私を某所におびき出し、暗中に私を襲ふて、乘車もろ共濠の中へ投げこむといふ暴を爲すに至り、實に物騒を極めた。島田三郎君が應援の爲め越後へ來られた時などは、私の遭難地で演說會をひらく都合で自分も臨んだが、前に自分を襲ふた暴漢は此土地に名のある劍客で、それが罪に問はれたので、乾兒共は私に復讐するといふ意氣込み頗る不穩であつた所から、警察でも非常に警戒し、多數の警官に包圍されて演說會場に入つた樣な仕末であつた。そんな殺氣の滿ちてゐる所に、冷靜に條約案を細說せねばならなかつたから、苦心は一ト通りで無かつた。

大隈侯の案は井上案に較べると餘程進んだものであつて、先づ當時の日本の文化程度から見て、假令ひ幾分不滿足の所があつても、忍ばねばならぬと識者が認めたのだが、何んといふても當時の國民はまだ幼稚で、外國を畏怖することが甚だしく、第一內地雜居をいやがり、外人に土地を購ふことを許せば、日本の全土は直に外人の占有に歸しはせぬかと漫りに心配するやうな仕末で、それを然らずと會得させるだけでも容易の業では無かつた。殊に國民の畏怖に乘じて疎枝大葉の反對論で保守氣分を煽る氛氳裡に立ち、條約案の細目を說明することは頗る難事であつた。當時吾々が如何に平易に內地雜居の恐るゝに足らぬことを說明するに苦心したかの一例として、演說の一節を記憶から呼起して、爰に笑資に供するが、それは左の如くであつた。

內地雜居を畏るゝは謂はれない事だ。試みに婦人の頭髮を見よ、髮を飾る珊瑚樹は地中海の產であり、櫛に作られてゐる玳瑁は南洋の產であり、指頭に燦たるダイヤモンドは亞弗利加トランスヴアールの產であり、細腰に纏ふ帶は支那產の繻子であり、肌に着ける唐縮緬も亦外國製でそれが女の股の間にまで喰ひ込んで、外國品は旣に最もか弱い女の躰に雜居し、女子に寧ろそれを喜ばれてゐるではないか。外人に雜居を許すことがなんで恐ろしいのだ。

といふごとき、今考へれば吾ながら稚氣……を愧づるやうな事をひねり出さなければ聽衆の會

得を博し得ないほどに一般が幼稚であつたのである。

知識階級でも其頃は保守氣分が頗る盛んで、條約遂行にはこれが暗礁で結局それで破れたのであるが、外人を延き來つて日本の法廷に立たせるでなければ、外國人は安心しないので、已むなく外人を日本に歸化させそれを法廷に立たしむるといふが大隈侯の案であつた。これは窮策には相違ないが、憲法違反を避け、外人の滿足を博するには、當時已むを得ない機宜の案であつた。然るに保守派の政治家達は理不盡に憲法違反を高調して侶衆を煽起し、終に內閣中にも離反者を生じて、大事去るに至つたのである。

私は當時を追懷して忘れ難い事の一は、矢野文雄君が大隈外相の背後に在つて極力この事業を翼賛された事である。條約案の成行に就ては君自から筆を把つて、每日郵書を寄せられた。私は地方にゐても時々刻々の推移を知ることが出來たのは矢野君のお蔭である。危急の場合に臨んでは、日に二三回も君の手書に接した。よくも筆まめに報道せられたものと、當時感激して、その手簡は危機一髮錄と名づけて今も保存してある。その書狀に據ると實は敵は外にあるのではなく、寧ろ閣中にあつた事も分つた。後に大隈侯の八十五年史を編するに當り、大隈家の文書を調べると、當時閣中の人であつた榎本武揚氏が侯に寄せた書簡が出た。それによると

國家の重事を藩閥の私心より破るとは何事ぞと憤慨してゐる。それが宛ら當時の事情を語るものであつて、矢野君の內報を裏書してゐるのである。

私は鄕里で矢野君から櫛の齒を引くごとく相踵で來る刻々の推移の報道を見、どれほど焦慮したか知れなかつたが、大勢如何ともする能はず、遂に斷末が來た。それは頗る劇的シーンで、私と私の同志の最も大切の慶事をメチャ〳〵に蹂躙し、私をして無念の涙を滂沱たらしめた。その仔細は外でもない。私等同志の會館が建築の工を竣つて開館式を行ふた日が、恰も大隈外務大臣遭難の日で式の半ばにその悲報が達したので、吾々は爲めに色を失つた。幾十日間ほとんど晝夜を分たず慘憺たる苦心をした自分に取つては、實に終生經驗のない打擊であつた。私は席に溢ふる會衆にこの悲報を傳へた時は、幾んど歔欷聲を發し得なかつた。而るに爰に私の悲憤を更に刺戟したものがある。反對黨から使者が會館に來て、私に面會を求めるから、何氣なしに出て接すると貴黨の會館の落成を祝するため疎末ながらこの品を獻するといふて三寶に堆く水引かけて積み重ねたものを出した。卽座にそれを改めて見ると、それは彼等の機關紙が發行した、侯遭難、條約改正頓挫の電報を印刷した號外であつた。私は憤然としてそれを突き戻したが、彼等もあらかじめそれを期したもの丶如くで、三寶を引取つて戻つたが、門外には

示威運動の爲め大衆が集まつてゐて、使者が門外に出るのを合圖に、萬歲を喧しく唱へて號外を撒き散らしながら市中を横行したことが私を極度に刺戟して無念骨髓に徹せしめた。

大隈老侯の國民葬

私の經歷中で最も感激したことは、大隈老侯の死後、私が主任となつて、その葬儀を營んだ事である。長い間薫陶を受けた老侯が世を去られたことが國家としては言ふまでもなく、私に取つてもこの上ない大事件で、私をしてどんなに緊張させたか知れない。老侯の葬儀は、誰れ云ふとなく國民葬と一齊に呼ばれた空前のものであつた。葬儀長は物故された宮內大臣子爵波多野敬直氏であつたが、私が子爵よりも、大隈家よりも一切の葬務を任された。これが私の經歷中最も光榮とする所である。第一に葬儀の形式を如何にすべきやが問題で、私は窃かに故加藤高明伯に相談をして、英吉利のグラツドストーンの葬儀に倣ふことが、國葬よりもヨリ以上侯にはふさはしいと考へた。侯が國民を友とし始終國民景仰の的であつた點からも、英國のグ

氏同樣國民の面前にその柩を据ゑて、告別の式を行ふのが至當であると感じた。この事が大隈家の快諾を得て成り立つたことが、私に取つてこの上の無い喜びであつた。併し短時日にあらゆる準備を整へてこの事を遂行するのは決して容易の事でなかつた。日比谷公園にあれだけの式場を一晝夜に作り上げることも容易でなく、葬儀當日の朝先づ大隈邸で告別の式を行ひ、勅使を初め各宮家の御臨場を辱ふしたその上に、柩を日比谷に移して數時間公衆に參拜せしめ、更らに護國寺に柩を移して、形の如く埋葬を終ると云ふことを、一日に成し果さねばならぬ事であるからなか〳〵の事で、一歩を誤ると一日に完結を告げないやうな失體が起る。だから非常に苦心したが、それが豫定の時間の通り略んど一分もあやまたず進行したのは、偏へに葬儀に與つた千餘の委員が何れも緊張して衆心一體であつた結果に外ならん。柩が老侯の邸を發する前に、早稲田大學並に附屬諸學校の學徒二萬の大衆は豫じめ通路の兩側に堵列しその前頭は九段坂の上に及んでゐた。柩が儀仗兵に護られて自動葬儀車に運ばれ、九段下を通る時に堵列の學生は行列の後へに尾して日比谷まで駈け足で一分の休息もなく行進した。儀仗兵を督された堀内將軍があとで語らるゝのを聞くと、あれだけの距離をあれだけの大衆が一氣に駈けつけることは驚異と云ふてよい、軍隊には迚も出來ない事だと云はれたが、ここにも大衆の緊張があ

つたから出來たと云ふより外はない。日比谷の式場は前面に百六十貫の重量ある柩が置かれ、場内は花と旗とで飾られ、左右兩側には參拜者の大なる通路があつて幾十萬の人が流るゝ如く入り込むのを棺前から左と右に吐けるやうにしたので、少しも混雜を見なかつた。寒い季節であつたが、場に入るものは皆嚴肅の態度で脱帽して敬意を表した。中には柩に向かつて賽錢を投ずるものも無數にあつた。この光景を見ては私も實に感激に堪へなかつた。この場に臨んだ大衆の内には、内閣大臣を始め朝野の名流多數の官吏もありましたが、些しも階級的臭氣が無かつた所にこの國民葬の特色があつたのです。斯る大衆の運動には幾百の警察官の手を借りるのが通例であるが、千餘の委員が斡旋して遺憾なく秩序を保つたのと、學生が警官の爲すべき任務を軟かな禮儀ある態度で行つたことは特記を要する。斯くして幾十萬の大衆の告別が終ると、柩は護國寺に移され、爰に埋棺の終りましたのは夜の九時頃であつたが、全く豫定通り些しの故障もなく濟ましたのは、私が生涯忘れ難い銘心の大事件です。斯く筋丈を書きますと、何んでもないことですが、葬儀が無事に終る迄にはいろ〳〵の困難があつた。併しそれが刀を迎へて解けるやうに、どん〳〵運んだのは、偏に老侯の遺德と多くの委員を始め早稲田大學並に關係諸會社、政黨、市廳等が全力を擧げて援助せられた結果である。

記憶すべき逐鹿戰

自分の體驗した最も大規模の選擧は、大隈侯が首相で議會を解散したその揚句の總選擧、とに石川縣の金澤市に於ける選擧は永く選擧史に記錄さるべき價値のあるものであつた。自分はその節大隈伯後援會の會長で、別働隊の選擧長であつた關係から、金澤市の選擧には出張までして特に干與せざるを得なかつた。この選擧は民政側横山章氏、政友側中橋德五郎氏が候補者で、猛烈に競爭をした。當時の横山氏は盛んに資力のあつた頃で、多くの會社に關係があり、常に市に住してゐるだけに大なる聲望があつた。中橋氏も金澤出身であるけれども平素土地に居ない爲めに金力があつても、横山氏ほどの聲望はなかつた。そこで中橋側では、しきりに人物論を宣傳に擔ぎ出し横山氏と比較をやつて勝を制せんとした。それを打ち破るために自分と若槻禮次郎氏は演壇に立ち、若槻氏は財政演說をやり自分は「大隈か原か」といふ題を掲げ候補者の人物論は抑も末で、大隈侯の政策と原氏の政策如何で勝敗を決するのであるといふて本

流に棹さして、その比較をやつて散々に政友會を攻擊した。この演說は確に反響があつたので、中橋側は急に三宅雪嶺氏を東京から迎へて、自分の演說を反駁せしめた。その演說筆記は機關新聞三頁に渉つて四號活字に組んであつたが。それを讀んで見ると辯駁が餘程苦しく、市島君は加賀の如き大藩に生れないから、人物のことなど分らないと言ふてゐたが、本流に就ての辯駁は頗る貧弱であつた。新聞も演說もたがひに精根のつゞく限りをやつた。自分は五六日間足を留めて總參謀をやり、しきりに新聞を指導した。むかし猛烈を以て聞えた盈進社は横山側であるのだから、働き手は充分にある。横山氏を推薦する實業團體は三十もあるやうな譯で、夫が新聞に列署してゐる。中橋氏はそれに對抗するために各地にある石川縣人何百名を書き集めて推薦者と爲すごとき窮策に出た。中橋氏が市中の商人それ〴〵に關係を結ぶ方便として要もないものを盛んに買ひ集めて急に得意となつた。其物を收めておく爲めに土藏を借りねばならぬことにもなつた。手當り次第いろ〳〵の物を買つたから相當金もかゝつたであらう。コンナ鹽梅に双方の對抗運動はすべて大袈裟であつた。一時双方の勢ひは殘んど伯仲の間に在つたので自分も内々終局を氣遣ひ、參謀會議の際に萬一の場合に處する苦肉策を立てた位であつた。自分が誤つて名參謀の名を博し、後に永井柳太郎氏が候補に立つた時加賀の有志者が大隈侯に市

島を參謀にと望んだのも此故であつた。併し自分は應じなかつた。この選擧の際に大隈首相は應援の爲め關西へ出張され到る處車中よりプラットフォムに群がる選擧人に演說された。二分でも相應に何か呼びかけられた。其際自分も會長として同行したが、何故か激戰地である加賀へ侯は行く事を欲せられなかつた。然るに大阪に着すると加賀から委員が出て來て是非に侯の出張を望むと申して出た。巡回の日時が既に定まつてゐたのだが、侯は自分に時間割の都合がつくかと問はれたのを機會に自分も委員に加勢をして、曲りなりに日程を作つて急に加賀へ回らるゝことゝなつた。これが勝敗を決するに此上ない力となつた。金澤の同志は老侯を車に乘せて金澤市を引き廻はした。丁度雪が降つてゐて、老侯は堵列の市民に挨拶の爲め脫帽してゐられたが、禿頭に雪がチラ〳〵かゝつてそれが爲めに風邪に罹られたけれども、この引廻はしが演說よりも功を奏して大勢を決したことが數日後に分つた。侯の金澤入は眞に大なる應援であつた。自分は侯に隨つて金澤を去つてその後の形勢如何と聞くと、確に横山側に勝算があることが知れた。唯警戒が最も必要となつて、開票間近には不寢番のもの二百人に懷中電燈を持たせて辻々に立せることもやつた。開票の前夜中橋側が各戸に撒いた名刺などは翌朝までに悉く取り去られて、扨當日の朝になると小學の兒童でもうば車に乘つてゐる赤ん坊でも横山氏の名

刺を身につけぬものはないといふ有樣で滿市横山氏の名刺が、溢るゝまでに手配が屆いたなどは實に驚くべきことで、開票の結果は千票も横山氏の勝つたのは、大隈侯の金澤入りが如何に有力であつたかを物語るものである。選擧には可なり經驗のある自分にこれ程痛快味を感ぜしめたものはない。

早稻田大學の生れた頃

早稻田大學は創立後半世紀を突破して、ことし六十年を迎へた。この間驚くべき發展を遂げ今は堂々たる大學府となつたが當初呱々の聲を揚げた時を思ふと、眞に今昔の感に堪えないものがある。

早稻田の地は今こそ其名世界に通じてゐるが、當時は茗荷の產地として靑物市場にのみ知られてゐる所であつた。されば開校の時入學志望者を早稻田へ申出よと云うても分らないので、雉子橋に在つた大隈邸に假事務所を設けて取扱つたやうな譯であつた。今の大隈講堂並に大隈

會館のある所が大隈侯の別莊で學校のある所が當時大隈家の茶園で、元伊井家の所有であつたあそこは小高い土地で始め校舍を設けた時、地續きの背後は丘陵地で、其の丘陵の土で校門前の田畑を埋めてから平地となつたのである。今の鶴卷町通りも大隈侯が開かれた道路で、開校當時の早稲田は郡部に屬し、やつと人力車を通すやうな田圃路が往來であつた。夏は蛙の聲が囂々と鳴り、白晝狐が横行し、森の中には杜鵑を聽くやうな寂寞閑靜の地で、飲食店などは赤穗の義士堀部に緣ある蕎麥屋一軒あるのみであつた。

斯かる不便の地に學校が大隈侯に依つて設けられ、土地が邊鄙のため最初から寄宿舍の設備もあり、追々大講堂も建ち、私學としては立派なものであつたが、今の大學に比すれば規模においても機構においても勿論見劣りする小なるものであつたが、それにしてもこの經營は全部大隈侯の獨力に成る。且つ一時學校の經常費も補給を受けた、今に迨んで考へると實にあの當時よくもこの經營をされたと思ふ、と云ふのは、實はこれより先劃期的政變に遇ふと、冠を掛け野に下られた時で、侯を繞る藩閥者流は、種々の陰險手段で侯に壓迫を加へ、諸銀行に內命を下して侯の糧道を絶ち、侯は自家の生活にすら困られた時であつた。この困難時代に敢然萬難を排して困苦を突破し、他日の大學府の基礎を築き上げられたのは眞に驚異に値するものがあ

る。

開校の結果來り投じた學生は四十名ばかりで追々增加もしたが、ナカ〳〵經濟が困難で、毎月大隈家から若干の補給があつたが其の補給が二三ケ月も後れることが間々あつて、それが爲め經常の仕拂が出來ず、月給渡も月を越へるやうなことが頻々とあつた。此の窮苦の時に大隈侯は横濱の平沼專藏から學校の爲め二三千圓の借財を起された。平沼は當時名高い高利貸で世人は蛇蝎の如く恐れて不評判のものであつたが侯は其頃言はるゝのに「世間では平沼をわるく云ふが、自分には恩人だ無擔保で金を貸して呉れるものは彼一人である」と、此借金は長く學校の負擔であつた。自分の幹事時代に毎年二期に利子を齎して横濱に平沼を訪ふのが年中行事であつた。此の借金は或る年所を經て平沼は半額を學校に寄附して決濟したが、實を云へば、蛇蝎視された斯人が早稲田大學に對する第一號の寄附者であつたのだ。

右の一話は反面に大隈家の內政の困難を語るものであるが、學校の當局高田氏や吾々は思へらく侯の困難時代に補給などを仰ぐべきでない宜しく收支相償ふの計を立て斷然補給を辭すべしと斯くして立てた案は頗る簡單なものであつたが實行には難儀をやつた案であつた。卽ち月謝一圓を八十錢增額して一圓八十錢とするので、之は今日から見ると如何にも瑣々たる事のや

うであるが當時何れの學校でも月謝は一圓と相場が極まつてゐる時に、倍額近く增額することは實に大英斷であつた。僅八十錢の增額で兎に角經濟が獨立したのは學校の經濟が如何に小規模であつたかを物語るものである。勿論教授連の多くは幾人も無給で銘々一週三十時間乃至四十時間の教科を受持つやうな仕末で、專任教授以外の學者には僅に車代を給するに過ぎなかつた。

斯かる窮苦の間に追々校運が進展したが藩閥者流は尙ほ壓迫の手を緩めなかつた。彼等は此の學校を薩摩の私學校と同視し謀叛人を養成するものと誤認し警戒はおさ〳〵嚴格で、校内の演說にも警官が臨檢し、寄宿舍にはスパイを潛入させて、法科の一角を崩さんと畫策したり、官祿を食むの學者が友誼的に教へに來るものを禁止するなど、迫害にあらゆる陰險手段を盡したが、それにも拘らず學校は追々發展した。

早稻田大學の創立は、以上の如く風霜凜烈の間に呱々の聲を上げ、百難と戰つて發育したので、決して室咲ではなかつた。所謂「梅は寒苦を經て淸香を發す」と云ふごとく、又「天の大任を下さんとするや先づ窮地に置いて試む」との古語の如く、吾校は生れたときから苦がい試錬を經て、屈せず撓まず始終健實の歩を續け、終に芳香の華を開き大任を負ふに至つたのは、

窮苦の間に育つたからである。

後年明治大帝は侯の教育事業を嘉賞あらせられ三萬圓を賜はり、先帝亦東宮に在らせられた時、特に臺臨あらせらるゝ等の光榮を荷ふに至つたのも、苦辛の經營が漸やく實を結んだ時で、伊藤公も亦或る祝賀式の折に、初めて來校せられ、學校の成績を深く賞讚せられ、且つ若干の寄附金を寄せられた。其際大隈侯は吾等に向つて「伊藤も終に降參した」と言はれたが、侯の流涎は此時始めてさがつたので、侯は快然一笑されたことが恍として尙ほ目に在るの想ひをなす。

大震災の思ひ出

青天霹靂などの形容では足らぬ、天柱裂け地維摧くとでも云ふべきか、往年の大地震の事を思ふと、今尙ほ餘悸を感ずる。時は大正十二年九月一日の正午の二分程前であつた。早大に何事か重要の相談があつて、高田總長坪內博士と會談の後、大隈會館の食堂で三人食卓に就き、

正さにフォークを執らんとする刹那、卒然大激震が起つた。しばしの地震には經驗を有しながら、あんな大激震は初めてゞあるので、三人は匆惶フォークを投じて、跣足で庭の草生に降り立たが、最早や草生に大龜裂を認めた。餘震が甚しいので、直立が出來ず、草生に偃れ伏して、恐る〳〵會館の屋瓦を見ると、這般の大動搖にも一枚の瓦も落ちず、障子も一枚も外れず、如何にも堅固なるに驚いたが、草生に避けた三人は不安を感じつゝ、身を起して築山に辿り就き、巨木の下に立つた。これは樹根の蟠屈で、地の龜裂がないと庶幾したのであつたが、樹の動搖が甚しいので、身を寄せてゐても無氣味で溜まらなかつた。其内に大學方面に火災が起つたが、あとでそれは理科のラボラトリーから、藥劑の動搖から發火したことがわかつた。愈々容易ならぬことゝ推量し、銘々の家庭は果して無難かどうか、兎に角早く立去るべしと、稍々動搖の薄らぐを機會に、會館の門を走り出ると、幸に自動車があつたので三人打ち乘り馳せると、鶴卷町の道路には家の潰れたものが二三軒あるを認めた。江戸川筋に出ると、沿道に大なる龜裂があるのに驚ろき、漸やく兩人に別れて、自分は先づ家に辿りつくと、家族は皆な無事であるので安心したが、家はあちらこちら破損して、玄關の屋根が崩れて居り、座敷の椽の硝子戸が悉く庭に倒れ、床の間の壁は破れておるなど目もあてられぬ慘狀であつた。相次ぐ餘震が

激甚で屋内に居るを危險と感じ、疊三枚ばかりを前庭に布き、こゝに家族が寄り合つたが、近隣から避難の爲め露營の席を借りん爲め來るものが數家族に及び、庭前は宛ながら田舍芝居の棧敷の如き觀をなした。其内に市内各所に火災がおこり、都下全部は火の海と化したとの報道がしきりに到り、天を仰げば大火の爲す業か、宛ながら北洋上の氷峯は斯くもあらんかと想像さるゝ、白炎峰狀をなして天半に聳へ、嘗つて見ざる奇觀であつた。吾家も到底延燒の免れがたきを早く覺悟を決したが、扨て何れに避難して身を托すべきやに案じ惑ふた。追々時刻が移り、晩食も庭前で濟ましたが、夜に入つては、露營も出來かねて屋内に入り、不安の一夜を明かした。

翌日も餘震が止まらないので、朝から庭前の假席に就いた。横濱から危險を冒して徒歩で歸つた人が横濱の慘狀を語つたが、同地の火災も既に全市を嘗め盡したであらうと云ふた。都下の火災もまだ終息に至らないが、徒らに坐して延燒を待たんより、差し當り身を托する所は早稻田大學の外なしと、勇を鼓して大學を訪ふて見ると、學校創立の頃大隈侯に由つて建られた大講堂の四周の煉瓦の崩壞してゐるのに一驚を喫した。他に森村の寄附に係る理科のラボラトリーが、炎上した外に格別大破したものを認めなかつたが、歸途には大隈邸の町に添ふて設け

られた石垣が散々に崩れてゐるのを認めた。此時手輕の大八車が路上に遺棄されてゐるのが目につき、これぞ天の與ふる所と、此車を自分自から家に引き歸つたのは延燒の際荷物を運搬せん爲めと考へたからであつた。生れてから車を引いて市内を歩いたのは此時が始めである。それから更らに神田邊まで出かけて見ると、到る處焦土で、唯だ電柱と焚餘の土藏が存するのみで、どこ迄行つても滿目焦土で、よくも一日の間に迅速に燒き盡したものとあきれたが、路頭には葫座など布き、烟草や麵麭などを賣るものもあつたが、滿目樹一本なく蟲も鳥も啼かず、烟のまだ絶へきらぬ荒凉たる景色の中に行人の絡繹たる雜沓は驚くばかりであつたのは、昨日來避難者が都外に去る延長で、幾十百萬の人が、都をあとに出てゝ行くのであつた。自分は胸中東京の回復がどうなることかなと思ひながら足に任かせて日本橋邊に至り見ると、こゝも見渡す限りの燒け野であるが流石に大煉瓦の高屋は勇士の如く生き殘つてゐたが、丸善書店は煉瓦建ながら、崩れて鐵筋はクネリ狂がつて幾千の焚餘の圖書は散亂に委してあるのを見た。足もつかれたから、歩を歸路に回はしたが交通機關は全滅して、久方振數里を歩いて家に歸つたが、種々懇意の人々が見舞にやつてきたが、それ等の傳へた話の中で最も恐ろしい報道は、江東の住民幾萬は本所の被服廠に避難したが、其の生死が氣遣はしいと云ふことであつた。尙ほそれ

よりも動心の一報は○○が此の都民の大厄に乘じて不逞を爲すとの流説で、初めは信せず聞き流してゐたが、此の噂が都會を通して一般に擴がり、甲の地方は何十の○○が攻めて來た、此邊も遠からず五十人許一隊をなして來るべし、各町村共今は警察で防ぐの餘地なく、各家自衞の外に手段なしと云ふので、流説とのみ打棄て置き難く、各戸皆警戒に就き、刀や棍棒をもつて門前に立つやうな騷ぎとなり、吾家でも家の娘が拔刀で町内多勢の衆に加はつたやうの始末で、或る一人の○○はそれと疑はれて町内の若者に散々に打たれたのを自分も目睹したが、果して○○に不逞行爲があつたか否や今も解けやらぬ疑問である。各所に○○の横行と之れに對する警戒とは、人騷がせに拍車をかけたことは事實であつた。

斯る大混亂の際に吾等の住する牛込區は幸ひに火災の延燒を免かれたが、追々耳に達する悲話は酸鼻の極で、豫て氣づかはれた、江東被服廠境に入りたる幾萬の逃避者は無幾にも全部窒息致死したと驚くべき哀報の達した時には眞に哀傷禁じ得ないものがあつた。尙ほ横濱鎌倉伊豆諸地の別莊地享樂境は皆な東京市と運命を與にしたとの報も續々入り來り、被害方面の廣汎であることを理解した。此の大厄は安政度のそれと比してどれほど大きいかは調べる暇も無かつたが、被害者は天を恨むよりも自身に引き受けて、近年餘りに銘々享樂に流れ天譴を蒙むつた

と早く諦らめるに至つたのは我民族の澹泊なる特有性に因るとは云へ復興の爲めには、眞に貴むべきこゝろ根であつたと、賞讃せざるを得ない。此の自責の念こそ大都の復興を早成せしめたものである。

實に此の大災に會して木造家屋の頼りないことを感じ、大火災の場合避難の餘地の少ないのに感じ、警視廳消防署の頼む可らざるを知り、家什珍寶の惜しむに足らざるを覺り、幾十年積み重ねた文化を亡すは必ずしも戰爭に由らざることを悟り、文化と原始其相反するに拘らず實は合璧兩隣であることを會得し、恐るべきは暴政よりも刼火なることに心づき、破滅あつてこそ復興もありと意を强ふし、燼餘には貴賤もなく貧富もなく皆同等であることを敎へる等、此の大災が一般に與へた敎訓は實に大なるものがあつた。

廣い避難所が欲しい

人間は地上の動物であるから地に親しみがある。否々人間は地と水とで出來たものであるか

ら、尙更のことである。數月雪に埋もれてゐるものは土が戀しくなり、市街に出でゝ風が土烟を颺げるのを愉快に感ずるといふが左もあるべきことだ。日本の漂流民が外國に漂着して、病に罹つた時、外國の醫師は治療の劑に病者の本國の土水を要すとなし、日本より持去つた植木の鉢より土を取つて用ゐたと言ふことも漂流譚にあるが、合理の法と思はれる。斯くも人生に必要である親しみの土地も追々と建築物の下になつたり、土上に種種の築材を張つて道を作つたりして親しむことが出來なくなつてゆく。文化といふものは人の土に親しむことを妨害するものであらう。昔は震火水の災厄に備へて、遊び地を澤山に剩したものだ。川端に廣い地を存して假建築の外許さなかつたのも、水の汎濫の時に備へる爲めであつた。市中に幾個所も廣小路を設けたのも、あちらこちらに植木溜と唱へて空地のあつたのも、みな火災の避難に備へたのである。三百の諸侯はそれぞれ大なる屋敷を有し、中にはすこぶる廣い土地を包有したものもあつた。普通の家でも、家前と家後に庭があつたし、その頃には家を建てずに空地として所有した土地も少なくなかつた。土一升金一升と言はれた江戸時代で斯の如きものがあつたのだ。勿論家康の入府以來江都の人口の繁殖は年を逐ふて盛んなるものがあつたが、それに伴ふて海や沼を埋めた面積も頗る大なるものがあつた。今日繁華の市街となつてゐる多くは昔は水

中のものであつたことは地圖が證據立てゝゐる。江戸時代は人口が稠密となつても右の次第で土に親しむに事を闕かなかつたのが、今は土地が新たに生れることはなく人口のみ非常の速度で增加するから、土地はます〳〵狹隘を告げ屋上屋を架し五層六層の窓に住して土と全く緣切れとなつて來てゐる。大震災の敎訓を得て道幅を廣めたり公園を作つたりしてゐるのは結構でもあるが、都會に存する土地はそれ丈である。若し他日非常の火災が起つたとしたら、今の復興計畫の規模で、果して難を免れ得ようか。三萬坪の被服廠跡ですら火に包まれては避難地にならなかつた。上野公園位な規模のものが始めて避難地として役立つた。明治神宮の內外苑位は相當役に立つであらうが、小規模の公園を起したとても、恐らく大變の場合に被服廠跡の二の舞を演ずるかも知れない。考へて見れば隨分心細いものである。地震を知らない國土に於ては土地が狹くともよいかも知れぬ。土に親しまずとも辛抱が出來るかも知れんが、日本は事情が異つてゐる。土地に親しむ事がやがて災禍を免るゝ事になるのだから、此意味に於て西洋に模倣してはならぬ。委しく言へば人口の稠密を節度する工夫が無ければならぬ。同時に大なる空地を幾個所も備へねばならぬ。或る地區を定めて絕對に家屋その他の造營を許さないことにしなければ、帝都の不安は到底除き得ない。之につけても田舍の人に告げたい。何故親しみある

土地を離れて土なき都門に來り、危地に身を置くことをするのだ。都門は土なき修置場と知らずや。

演說思ひ出譚

私も長い間大雄辯家の大隈老侯に追隨し、其の演說を何百回も聞いた。それだけでも演說が上手になりさうなものだが、生來無器用で一向に上達しない。老侯に就ての思出を語ると、私は幾回か老侯の前座をつとめたことがある。老侯が始めて演說を蓄音機に吹込まるゝ時、流石の大雄辯家も慣れぬ事とて躊躇された。そして私に先づ始めよと云はるゝので、據なく旁頭に大隈侯を紹介する詞と演說の題を吹込んだ。レコードの冒頭にある言葉がそれである。このレコードの存する限り、大雄辯家の演說、殊に總選擧に就ての大切なる場合の演說と共に簡單ながら私の聲の傳はるのは私の光榮である。

侯は、演說の材料の持合せのない時には、必らず君先づやれと私に前座を勸めさせた。侯は

傍らに聞いて居られて、さて御自分が登壇されると、私の說をコツパ微塵に駁擊して、案外に演說が面白く纏まることもあつた。侯は演說が濟むと、私に、君には氣の毒であつた、お蔭でどうにか責塞ぎが出來たと笑はれることもあつた。

私共の學生時代は概して演說が幼稚であつた。帝大在學時代でさへ、今の高等學校の學生の技倆にも及ばなかつた。其頃同學年の友人が會を結んで演說の稽古をやつたものだが、皆草稿を作つてきて、殆んど朗讀的にやつたもので、隨分覺束ないものであつた。其の演說の草稿を會の幹事が纏めて置くことになつてゐたから、今日三冊ばかりが尙保存されてゐる。四十幾年も經て之を讀んで見ると、說は兎も角も演說は殆んど成つて居らぬ。それは獨り自分計りでなく、今は東京帝國大學の老敎授となつてゐる。各專門大家の草稿とても感服するほどのものは一つもない。と云へば同窓を侮辱するやうであるが、それが全くの事實である。私は自家の草稿に對して忸怩たらざるを得ないが、他の博士達も多分同感で、そんなものは焚いて仕舞へといきまくであらうけれども、實は面白い記念物として早大の圖書館に保存されてゐる。

吾々の帝大時代には、同學年生でも寮舍が異つた關係から、二つの會があつた。私や田中館愛橘君、藤澤利喜太郎君、先年歿した中原貞三郎君、大屋權平君などは共話會といふに屬し、

高田早苗君、坪內雄藏君、關直彥君抔の人々は晩成會といふに屬した。今存してゐる草稿は卽ち共話會に屬する人々のものである。此の演說の草稿に就て可笑しい話がある。前年上野の櫻雲臺に同窓會を催した時、晩成共話二會の連中が多く會した。皆鬢髮半白の年輩で、學界に時めく人が多かつた。此の同窓會の幹事を自分が勸めた爲めに、此の草稿に思ひつき、祕かにそれを携へて席に臨んだ。酒酣にして銘々が隱し藝をやり出す場合となり、私が起つて「自分は無器用で隱し藝を有たないが、列席諸君の演說の假聲をつかつてお聞かせする。」というて、例の草稿を取り出し、一々誰れ〳〵と吹聽して草稿の初部を五六行演說句調で讀んでゆくと、皆々案外の事に驚き、それは自分に覺えがないと叫ぶもあり、頭を搔きながら默聽するもあり、一時場を賑はした迄はよかつたが、爰に注意の足らなかつたのは、自分の草稿二三篇を拔き去つて置かなかつた爲めに、私が席に着かんとする刹那、誰か、背後から草稿をヒツたくつて、「これから市島君の假聲を遣ひます。」と吹聽して、まづい草稿を聲高らかに讀まれたのには閉口せざるを得なかつた。

學生が政談を聽くことを禁ぜられてゐた時分の事である。早稻田大學の前身東京專門學校の大講堂に演說會を催した時、私は政談をなすべく登壇すると、警官がサーベルを鳴らして臨監

にやつて來たので、倉皇早變りをせざるを得なかつた。丁度其頃外國の煙草の歴史を讀んでゐたので、取り敢へずそれを話材としてお茶を濁したことがある。所謂警官を烟に捲いたとは此の事で、私は忘れてゐたが、其折り傍聽した當時の學生、今は老境に入つてゐる友人達から、此頃聽かされて一笑を禁じ得なかつた。

私が鄕里新潟にゐた頃である。私は同好會といふを組織し、多くの同士を抱擁した。それが後に改進黨となり憲政黨ともなつたのであるが、遊説のため縣下の各所を巡回した時の忘れ難い思ひ出がある。刈羽郡の椎谷（しひや）といふ驛から、山手に入つて二里ばかりの僻村に演説會を開いた。會場は小さな山寺で、鹽入太輔といふ東京から應援に來た辯士が前座をつとめて、私の番になると、日は暮れたが、燈火の用意が無いと云ふから、已むなく暗中に演説をやつた。さて立去る時に、傍聽者の一人のいふには、山路は危險である。殊に此邊は反對黨が多いから物騒である。自分の馬に乘られるがよからうと勸めるので、其意に任かせた。道々馬夫と話を交へて見ると、其人は村會議員であることが分り、私達が新潟縣で組織した同好會に屬する人であることが知れた。そこで私も興を催し、實は白狀するが、その同好會は私が起したのである。幸ひの折だから、會の趣意を語らうと馬上で二十分間程演説を試みた。馬上演説はあとにも先

にも此外に無い。馬夫はよく諒解したらしかつたが、私は説演中に、馬夫も會員であるからには同等である。殊に村會に議席を有して居る者に粗略の言葉を使つてはよくないと氣がつき、初めにお前と云つたのを、後には君と改め、段々言葉遣ひを丁寧にし、椎谷の驛に戻つて別るゝ時には先方は菅笠をぬぎ、私は帽子を脱して互ひに對等の挨拶をした事を、時々思ひ出す。附け加へておくが、此邊の寒村で馬を所持するものは可なりの資産家であることをあとで知つた。

大隈侯が外務大臣として條約改正の衝に當られた時である。私は「新潟新聞」の主筆をやつてゐて筆に舌に此の改正を辯護したが、地方の人にこれを理解せしめるには頗る骨が折れた。ある夜反對派が僞書を以て私をおびき出し、路で私を要して、乘車もろ共濠へ投り込んだ。要擊者は警察の手で捕はれたが、それは新發田に聞こえた劍客であつた。私書僞造の廉で其人が罪せられた處、門弟等は激怒して、私が再び此地に來れば無事には通さぬといきまいた。そんな物騒な時に亦此地で演説をやらねばならぬことが起つた。其時警察で私を擁護したことが如何にも仰山であつた。私は演壇で開口第一に、「私は此地で甚だ意氣地のない事蹟を殘した。それは腕力の弱いといふことである。併し私は之れを恥辱と思はぬ。私の誇は腕力でない」と

喝破したので、要擊事件が評判になつてゐたから聽衆は盛んに喝采した。私の弱武者を白狀したことが今一回ある。それは肥塚龍氏や名古屋で實業家として聞こえた上遠野富之助氏と富山縣に遊說に出かけた折である。越後地から富山へ入るには例の親不知を通らねばならぬ。こゝを通る時に、親不知の難所を見おろす新道で、上遠野氏は得意の石投げをやつて、私達を後へに瞠若たらしめた。丁度其日富山縣の入口泊町（とまりまち）の演說會に臨んだ。此の時分は物騷な頃で、聽衆が動もすると辯士目がけて石を投げると云ふ事を耳にした。自分は瀾踏の爲めと自ら進んで第一番に演壇にあらはれ、傍聽席を見廻すと、噂のごとく石を袖にしてゐるものがチラホラ見える。中には石を潛めた重い袖を振り廻はして威嚇の狀をなすものもあつた。そこで私は先づ途中にあつた投石競爭を細かに語り、此地には石投げがはやると聞くが、自分などは其道には大の弱武者で迚もお相手に成りかねる。石投げの名人は樂屋に控へてゐるから後刻見參に入れる。お相手は其人に讓るといふと、滿場は大いに笑つた。石を袖にした者も此の哄笑の爲めに氣を拔かれて、終に何事もなく一行の演說が濟んだ。私の弱武者の白狀は偶〻氣先を制したものであつた。所謂る柔よく剛を制するものであらう。

富山の各所に於ける演說會場は如何にも騷擾を極め、傍聽席で反對派が妨害を試みると味方

が怒號して對抗するから、演說者は割合に樂であつたが、到底條理の井然たる演說は出來かねた。私はそれを看て取り猾計を案じ、敵を攻擊するの奇警の語を工夫し、それを一發放つと敵味方が二三分騷ぎ立つ。それを傍觀しながら、更に次ぎに放つべき奇警の語を考へ、矢つぎばやに痛罵し去つたのも一快であつた。

大隈內閣が解散を行つた時、大隈伯後援會の會長に擧げられ、不得意の演說を辭しかねたことが三四回あつた。京都での演說は聽衆を甘く見たから、當座の思ひつきで掃除演說といふをやつた。御卽位が京都に行はれる。それに先立ち總選擧がある譯だから、私は御卽位大典の行はれる京都の地を光榮あるものとして盛んに揚げ、京都人の責任として此地を淸淨にせねばならぬ。若し汚穢があらば丁寧に掃除せねばならぬ。總選擧といふも實は事前の大掃除である。京都に於ては特に腐敗の醜類を掃除して政治の廓淸を圖らねばならぬと論じた。此會には多くの反對者もゐなかつたが、困つたのは石川縣の金澤であつた。橫山章氏對中橋德五郎氏の對戰は選擧史上に特筆さるべき大戰で、私の交りある中橋氏を敵に回はしての選擧演說であるから、內心甚だつらかつた。中橋側の作戰は專ら人物論で橫山側を壓せんとしてゐるのを見て、私は先づ人物本位で人を擧げるのは政黨政治にあるまじい事だと論じた。中橋氏は人物が偉いとい

うても原敬氏麾下の人たるに過ぎぬ。横山氏が如何に有力者だと云うても大隈侯麾下の人に過ぎぬ。優劣は黨首と其の政策にある。區々たる候補の人物論は抑〻末で、天下は大隈に委すべきか原に委すべきかゞ大切の問題であると、漸く候補を離れて、大隈、原の比較に移つたから、あとは極めて樂であつた。到頭私の演説が最高調に達し大隈侯に軍配を上げた時聽衆より喝采が起つたから、それを機會に、諸君、大隈侯を優るとなさば、其の麾下の横山君を擧げるが當然と結論した。

此の總選擧に大隈侯の令嗣信常氏が前橋から候補に立つことになつて、始めて候補者が土地の有志に面接する時に職務柄私も隨伴した。某樓を會場として三十名程の有志者は席を列ねて ゐた。そこへ候補者を伴うて私から紹介する時に、フト考へると此席が嘗て大隈老侯と來た折の同じ席である事に氣がつき、其時侯の述懷談があつたことを思ひ起した。侯の云はるゝのに、前橋侯は自分には再生の恩がある。幕末に危險の手が延び、將に捕はれんとして遁るゝ處なく、飛び込んだ所は江戸の前橋侯の屋敷で、そこに救はれて辛うじて關西へ遁るゝことが出來たと云はれた。私は此の事實を會衆に告げ、若しあの際に老侯が捕はれたとしたら、維新以來の老侯の勳績は全く無かつたかも知れぬ。前橋は老侯に深い緣因がある。老侯をして國家に大勳を

立てしめたのは前橋であると云うても差支へなからう。今度令嗣が此地から候補に立たんとするは偶然に似て偶然でない。老侯に厚い前橋の諸君は其の令嗣にも厚い事は言ふまでもなからうとは私の紹介演説であつたが、居並ぶ人々の内には始めて此の緣因話を聞いた人もあつたらしかつた。令嗣は豫期のごとく當選されたのである。

私は大隈侯に隨伴して足利町の招待會に臨んだ事がある。侯は支那公使をも伴はれて例の宏辯雄辭を揮はれた。私は其夜自分の宿と定められた料理屋に戻り、寢卷に着換へて寛ろいでゐると、有志が迎へに來て、一杯獻じたいから階下に來れと云ふに任かせ、寢卷のまゝ導かれてゆくと、そこに重立つた數十の人々が席を正してゐるので、服裝を換へなかつたことを悔いたが、既に遲かつた。席上是非にと一場の演説を賴まれたが、別に腹案もないので、フト思ひ出して「足利で有名である孔子の釋典を、足利文庫の暗い所で少數者が行はんより、宜しく之れを町祭として、堂々と行ふべし、お祭は歴史的の古風のものがよい、其祭日には皆々一同休業して東京あたりから學者を迎へて演説でもさせるがよい」と、當座の思付きを云うて責を塞いだ所、其年の暮れんとする頃足利から態々委員がやつて來て、あなたの勸め通り町會で釋典を町祭とする事に決したから、どうか演説に來てくれと云はれて、私は驚き且つ喜び、吉田東伍

氏を誘うて出かけると、果して町端れから屋並に國旗が飜つてゐた。老侯の堂々たる演說よりも、私の寢卷演說が却つて效を奏したなどは不思議のことである。

結婚叢談

結婚は人間の最も大切な事で、最も目出度いことゝなつてゐる。如何にも結婚は男女の結託であり、家と家との結合であり、戀愛もあり冀望もある。それによつて形づくられた家庭が幸ひであると否とは一に繫つて此の結婚にあるのだから、一生の大典として粗略にしないのも當然である。全體男女結託して家庭を作るのは一種の藝術と見てよろしい。一人で此の藝術品を作り上げるのではなく、夫婦の共同動作に因つて作らるゝのである。其の家庭から生ずる合成事業も夫婦の間に生るゝ兒孫も亦藝術品である。旣に藝術品であるから傑作もあれば又駄作もある譯で、夫婦の結託がシツクリ行かないで乖離があると、傑作は起り得ない。常に夫婦間に風波が起つて、互ひに信賴を缺いては、家庭は形こそあれ、實は家庭が無いのである。兒孫が

生れても、平和に健全に撫育の出來る筈がない。どうして傑物秀才の出づることを期し得ようぞ。どうして一家の繁榮を期することが出來ようぞ。家庭の凡作傑作駄作佳作は繫つて夫婦の結託合同の疎密による。愛が夫婦の間に尤も大切である所以は、愛が兩間の楔であるからである。人は個人で何事もなし得る人がある。しかし個人で事をなし得る人は必らずしも他人と力を併せて事を就し能ふとは言はれぬ。別して異性と力を併せて事を就すは、何人に於ても始めての經驗で、結婚がそれを行はしめることであるが、案外、個人獨自に相當の能力のある男女が、合同結託となると、うまく行かぬ例がある。畢竟合成事業は高級に屬するから、青壯の男女が之れを難んずるのは一概に無理とも云へないが、他の合同事業に無い愛が、これにのみあつて、其の力が卽ち神の力で、無驗者をして直ちに共同動作を意外に巧みに行はしめ、人をして驚歎せしめる傑作を生ずることも敢て珍らしくない。要するに、愛は家庭の根本で、結婚と云ふも此の愛を堅固に結びつける誓約に外ならないのである。

諺に夫婦者、獨身者を氣にすると云ふが、これは結婚生活の幸福を自から感じて、他に其れを移し、それに倣はせんとするのである。兎に角結婚生活を行うて、それに依り幸福を感するものが多く、之れを悔いるものが絕對にないとも云へぬが、それは寧ろ除外例に屬する。實に

結婚は他人の場合でも喜ばしいものである。しかし結婚披露の席に招かれて祝辭をと頼まれて、それがうまく行く場合は甚だ少く、多くは平凡に墮ちて仕舞ふのが多い。或は教訓じみた事に渉つてかたくるしく、又しかつめらしく、陽氣の場面を沈鬱ならしめるものもあれば、滑稽諧謔を巧みに弄しても遂に急所に觸れないで畢るのもある。實は結婚席上の祝辭は達辯の人と雖も難んずる所で、儀式と云ふ重い空氣や結婚當事者の階級が高い爲めなどで、抑制を受けることが難いことを一層難くする。いつぞや雄辯社の記者が訪ひ來ての話しに、婚禮席上の演說はどなたも困るとおつしやるが、何かおもしろい演說の趣向を聞かせよと請はれたことがある。私などに勿論之れに應ずるやうな趣向も何もあつたものでないが、演說の趣向は兎もあれ、結婚の本體に風の變つたことが往々あつて、それが興味を惹くことはある。恐らく誰れの經歷にもあるに相違ない。私がある雜誌に强ひて請はれて忽卒に一二を語つたことを爰に記憶から呼び起して見ると、

今は故人となつた小山作之助氏、これは洋樂界に重きをなした人で、私とは同鄕の緣因がある。此人が後妻を迎へる時、私は聊か與つた。勿論間接に口を利いた位なことで、當事者がそれを知つてゐるとも思はなかつた。其結婚の際には祝宴があつたか無かつたか、それも氣に掛

けずに無心に過してゐると、二三年程後に小山氏の先妻の嫡子が妻を迎へると云ふので、高田博士がわざ〳〵私を訪ねて來られて、小山氏の再婚の時には君を煩はしたが、あの際は再婚であるために祝宴を略したが、小山氏は平生それを氣にしてゐて、今度息子の結婚には是非君から祝辭を陳べてもらひたい。これは氏の熱心なる冀望だと云はれたので、辭退もしかねて之れを諾したことがあるが、此の事實それ自身が面白いので、いろ〳〵趣向を凝らすよりも、此の事實を陳べることがよい趣向であつた。

亡友岡山兼吉氏が辯護士界に打つて出て、始めて辯護事務所を構へた處は日本橋の西河岸で、今某旅館のある處だが、氏が新婦を迎へて披露した其席は事務所の二階で、私が友人總代の格で祝辭を陳べた。當時書生擧句の自分が勝手な所感を陳べたのだから、固より體をなしてゐなかつたに相違ない。然るに岡山氏が歿してから、十數年を經て、嫡男が日本橋の魚河岸の豪商の娘と結婚する時に、自分も慶んで披露の宴に臨んだが、此時も私が祝辭を陳べることゝなつた。私は此時位感慨に堪へなかつたことは無かつた。私の座席の眞向うに母堂が坐して居られた。西河岸に於て十數年前私が祝辭を陳べた新婦は卽ち此の婦人であることを思ひ、老友既に去つて再び其の繼嗣の結婚を祝するのは如何にも奇緣であると感じて、私の祝辭は飾らざる卽

時の所感で、いろ〳〵の緣因話をした中に、新婦が魚河岸の富豪から來られたと云ふのも奇緣であると云うた。故人岡山氏は、青年時代房州のある家に養子にやられて、手づから網を操縱して漁業に與かつたこともあるので漁業に因緣がある。そして君が發祥の地は日本橋區で、其の事務所と新婦の家は呼べば應へるほどの距離にある。逗子に於ける兩家の別莊も頗る近いと聞くが、斯る家庭の結託は誠に自然で、恐らく故人も地下で微笑を浮べて喜んで居るであらうと云うたことを想ひ出すが、この場合なども事實それ自身が興味があるので、勿論私の祝辭などは言ふに足らぬ。

私の政友に富山縣の漆間民夫といふがあつた。其の長子が早大に學んで、卒業後結婚の時には、私もその披露の宴に招かれた。其際私をして何よりも興味を感ぜしめたのは、新郎がある同窓のために奇拔な戀の媒妁をやつた經歷であつた。近來よくある例だが、學校時代に男女が戀に落ちる。それを双方の親達が許さないので難澁をする。それを救ふのは多くの場合友人である。漆間も、ある暑中休暇を利用して友人の戀人の家をはる〳〵尋ねた。何縣であつたか忘れたが、東京から百里もある東北のある田舍で、其家を訪うて見ると如何にも堂々たる舊家で、其の娘が歸省してゐたので其紹介で款對を受けたが、さて本問題に入ると、物堅い老夫婦は承

知しないので、已むなく其の家を去つて、村はづれに來ると、一軒の茶屋があつた。そこに四五の車夫が客待ちをしてゐる。そこで漆間は一計を案じ、其の茶屋に腰を掛けて酒肴を命じ、車夫共に酒を振舞つて、醉心地で一場の演說をやつた。それは、此村の第一の富豪の娘が東京に遊學してゐる間に、某と云ふ好男子とラヴに落ち、追々熱烈になりつゝあることは自分がよく承知の事實だが、その女の兩親が結婚を許すのは尤も賢い道だなどと、獨語のやうな宣傳をやると、狹い土地だから、パツト其の噂が村内に行き渡つたので、娘の家でも分別して、遂に婚嫁を諾したと云ふがあら筋で、漆間の機略は圖に當つて效を奏したのである。此の機略を弄した其人が新郎で結婚をする席だから、私も妙に面白く感じ、新郎に對し、君は通人だから結婚後の心得などは特に言ふにも及ぶまいと云うて笑つたことを思ひ出す。

婚禮の席の祝辭は多く新郎新婦の行く末に關して前途を祝福するに過ぎぬが、多くの親族などが集まる場合であるから、他家から行く嫁や養子の爲めに親族に苦言を呈し、他から行くものを大切にせねばならぬと注意することが肝腎であるのに、大抵は氣が付いてもそれを云はぬやうである。私などは、養子が他家へ行く時、結婚の席に於て、自分が男子であるだけに、それを言ひたくなる。諺に小糠三合有てば養子になるなとさへ云うて、養子のつらさが告白され

てゐる。畢竟養子を虐待する風があるからの事だ。上方筋では養子を重んずる風があつて、家は兒孫に相續させ、事業は然るべき養子を納れて繼がせる習慣がある。畢竟事業の經營には相當の人物を要するからで、よい習慣である。十數年前紀州に游んだ時、多くの校友が新和歌の浦に迎へてくれたが、其席で感じたことは、その地の有力者は大抵養子で、現に養子倶樂部が設けてあると聞いた。成るほど、紀州は蜜柑の產地で、蜜柑の培養には接木が最も肝腎であるとも云ふから、養子を迎へることの盛んであるのも無理がないと思つたが、私は其の席に、養子を迎へるのは人材を迎へるものであることを說き、他人の生んだ將來ある子弟の內から、特に粹を拔いて聟とするのであるから、血統に餘義なくされる相續人とは違つて秀俊のものが多い筈である。もらひ受けた其家には家寶として珍とせねばならぬと云うて、世上に時めく名流に養子が多く、それが家聲を揚げてゐることなどを擧げたことがあるが、これも畢竟養子を輕蔑したり虐待したりする地方のあるのに憤慨して、養子倶樂部の會員に同情を寄せたのであつた。丁度其後自分の會社の相當の地位のものが筆の名人の家に養子に望まれ、それを諾しての結婚披露の席上、私が祝辭を陳べる役目であつたので、私は紀州で見聞した事實を擧げ、持論の養子人材論を說いて大いに氣燄を上げたことがある。かゝる祝辭は變體のもので、養子の方

に偏して、養子を粗略にしてはならぬと、養家や其の親族に訓戒したやうなもので、稍〻失禮の感なきを得ないけれども、養子のためには滿幅の同情を傾けねばならぬ程の宿弊があるからの事だ。

死線徂徠

過去八十餘年の生涯のうちで死生の間に立つた事や、畏怖を覺えた事や、凄慘の感に打たれた事など記憶をたどつてみると、幸ひに餘り澤山はない。いく回も戰爭はあつたが、それに參加した事もない。兩刀を帶びた時代もあるが、斬り合つた事もない。まことに無事の生涯であつた事を喜ばねばならぬ。しかしその太平の幸民たる自分においても、多少の危難がなかつたわけではない。一步を誤つたら、この世のものでなかつたかも知れぬと思ふ椿事は、少年の頃郷里に越後府（水原において）を建築する時、私の家で用材を献じた。その材木を載せた車の上に壯丁に抱かれて、自分の乘つてゐたその車が建築場附近急勾配の橋を過ぎる時に、自分は

保護者の僅の懈怠のため、その手を離れて車より墜ち、墜ちた刹那に車は橋をすべつた。それが不思議に抑止されて壓死をまぬかれたのは、自分が佩びてゐた小脇差が墜ちるとともに鞘ばしり、丁度車の輪を遮つたので、さすがに、重量のある車體が止つて格別傷もうけずに助かつた。脇差は曲つてきずを生じたが名刀だけに折れなかつた。この刀は助命の記念に後ちに修理して、今も大切にしてゐる。これより先き戊辰の戰爭には、避難して鄕國越後西蒲原の吉田新田といふところに、所有田畑を監督するため田家があつたのを幸ひとして、そこにゐた。然るに大洪水の襲來で信濃川が氾濫し、深夜堤防が破壞したから、堤下にある田家は一とたまりもなく水に沒するといふ騷ぎで、平生より備へてある船に倉皇載せられ、辛うじて門を出たが、半夜濁流に漂うたのは小兒ながら恐ろしかつた。茅屋がどんどん流れて來るやうな悲慘な光景を翌朝目前に見た時には暗夜にこんなものに、わが乘船が觸れたならば忽ち溺死するのであつたらう、と思ふと悚然たらざるを得なかつた。新潟新聞社に赴任の時、妻を伴ふて清水越の雪路を踏んだ。毎度通過の峠だから道は十分承知の事と、妻に合力を附けて先きにやり、自分は道伴れと共に雪路をたどつて行くと本道よりいつしか外れて妙な谷間に踏みこみ、終に斷崖絕壁のところに至り道が絕えたので進退谷まり雪下に溪流があるので樹に攀ぢねば、溪流にぬか

る處もあり實に窮した。幸ひに二時間餘を經て救ひのものが來たから助かつたが然らずんばどうなつたかも知れなかつた。思ひ起す毎に餘悸を覺える。越後で政爭の激甚であつた時に反對黨の奸計で誘ひ出され、夜中新發田の清水谷の濠端を乘車して通過の際、三四の劍客に前後から襲はれ、車もろとも濠へ投げこまれた時などは、幸ひ負傷をまぬかれたけれどもマカリ違へば、隨分危ないものであつた。

敢て危難といふでもないが悽慘の感に打たれたいろ〳〵の場合を考へ出すと、なんといふても往年の大震災、それに伴ふ大火災は一生涯中比類のない大變であつた。幸ひに自宅は火災をまぬかれ親類に死者もなかつたけれども、門內の空地に疊を敷いて二夜そこに明かした事を思ひ出すと、戰慄せざるを得ない。大自然の威壓より生ずる畏怖をいへば、海洋中の濃霧ほど危險を感ずるものはない。支那より歸りがけ朝鮮海峽で出あつた濃霧は、十數時間の長きにわたりて咫尺を辨ぜず、船の衝突を恐れて各船より打鳴らす汽笛や、銅鑼の聲は悽愴の感を一さう深からしめた。別府へ行く途中でも同じ事に出會つたが、それは短時間であつた。北海道へ渡る時に颶風に逢つた事もあるが、船に案外強い自分はさまで危險とも思はなかつた。書生時代山のまだ開けない時に富嶽に登り、途中烈風に遇つて進退谷まりヤツと六合目にたどりつき、

まだ人の氣のない石室の戸を明けて、じめ〳〵した土床に一夜を明かした時などはなによりも心配に堪へなかつたのは食料が盡きんとするのに、食料のない二人の登山者が來り投じたので、それに餘裕のない食料を頒たねばならない事が生じ、一だんの困難を感じた事ありこれも危險のうちに數へねばならぬ。幸ひに二人の合力が烈風を冒してある地點まで、食料を取るために下山した。そのものが幸ひに登つて來たから助かつたが、それが薩摩飛脚であつたらどうしたであらうか。信州の御嶽に登つた時山中で一夜を道者の多數と群居したなどは、むしろ滑稽であつたが淺間の噴火口にたどりつき、噴烟の止息に乘じて坑中を下瞰し、硫氣で黄ろく彩られた重疊の山を見おろした時は、眞に悽愴の感に打たれた。旅も昔は今と違つて妙に心細い感じをひき起したものだが、木曾の棧道を黄昏時に通過した時や、木曾路から甲州路へ出で、二日間漠々たる人里遠いところを通過した時などは、血氣時代でも凄味を覺えた。しかし賊にも狼にも襲はれなかつたのは仕合せであつた。

何人も多少畏怖の感をまぬかれないのは、鑛山の坑道であらう。エレヴエーターで暗中何千尺も下る時などは地獄におちるやうな心地がする。空氣が薄くなり冷かになり、氣息が奄々として瀕死の時のやうな氣がする。自分は足尾の山も、夕張の山も、佐渡の金山も入つてみたが、

どこにもおなじ感があつた。坑道と似て否らざるものは暗渠を舟行することである。暗いことは坑道も同樣である。一條の水道をたどるので、前方から來る舟が衝き當りはせまいかとの虞もある。一時間もかゝるほどの長い水路だから、矢張り坑道の如く冷氣も襲ひ來る。船の前面に提灯を吊してあつて、燈火の水に映ずるのは快感を起しさうで却て凄味を起さしめるものである。これは琵琶湖疏水のために出來た暗渠で往年わざと通過してみた事がある。燈臺もなんとなく畏怖を起さしめるところである。暗中螺線の階子を拾つてだん〳〵に登るなどは、探偵小說を想ひ出さずにはゐられない。登りつめると案外に風が強く、回轉する燈の周圍には鐵柵があつて安全になつてゐるのに、ここに直立すると、なんとなく全體の塔が動搖する如き感じがして、不安の思ひのあるのは慣れないためでもあらうが、强風の時などはどんなであらうか。燈臺守の境遇に哀れを感ぜざるを得なかつた。殺氣漲る工場に臨んで訓示をする時の感じも、一種の凄味がある。自分は印刷爭議の節體驗したが最も悽慘の感に打たれたのは、決死の職工が同盟罷工を裏切つて輪轉機三臺を動した時である。この決死の職工は、前夜トラツクで貨物の如く積まれて工場へ運ばれ、翌日業務に就いたが、不穩の空氣の漲る間になすかゝる行動は、どんな隣援を外部からひき起さないにも限らない。いふまでもなく輪轉機は四隣に震ふ聲を發

するものであるから、罷業職工に對しては一種の挑戰である。いく百の職工が襲ひ來らないにも限らないのである。それに對して相當の防備をしたといふても、手薄のものであつた。また自分は工場神聖論を飽くまで主張して、場内に警官の入る事を謝絶した。いよ〳〵輪轉機を動かす時に、自分は社長としてその工場に臨み簡單に激勵の演說を試みた。それが濟むと、三臺の機械が汽笛と共に運轉を始めた。この工場は薄暗い陰欝の室であるが殺氣が手傳つて眞に名狀の出來ない悽慘の氣に打たれた。

終りに臨んでもう一つ書くべきは獄舍生活である。いくら獄則が昔と違ひ、獄舍が改善されたといふてもコンナ不安の場所はない。社會と全く杜絶されてゐるから祕密のところであり、罪惡の淵叢である。兇徒を取扱ふ獄卒も一種違つた人間である。この中でどんな虐待をうけても、たとひ殺されたにしても殺され損である。こんな脅威も犯罪を矯正し懲罰するの方便でもあるのだが、牢に慣れない間の不安は實に名狀し難いものである。あの普通より高い黑塀、そこの門が開いてそれに吸ひこまれた刹那の氣味のわるさ、あたかも鯨の口に飛びこんだやうな趣がある。瑣細の事を擧げれば以上の如くであるが、さて畏怖の最も大なるものは戰爭であらう。國を賭して戰ふので勝敗があらかじめ知れぬ。萬一負ければ國が亡びるのである。しかし一個

人に畏怖を感ぜしめるには戰爭は、餘りに大き過ぎる。自分などは戰爭に參加した經歷はないが、戰爭に出會つた事は内外大小いく回もある。戊辰の戰爭、西南戰爭の如き内國戰は皆小なるものだが、大戰は日淸、日露それから世界の大戰、今次の大東亞戰、皆大規模のもので、ありていにいへば畏怖の念が起らない。敵愾心が畏怖の念を壓したといふやうな事もあらう、が事態が餘りに大であると、茫漠として畏怖の念が起らないのであるかに思はるゝ。幸ひに日本は戰爭に負けた例はないから、潛在的自負心が畏怖を制するかも知れぬ。事實戰爭よりも、戰爭の端を發しはせぬかと憂慮せしめる國患には、却て畏怖を感ぜしめた。かの湖南事件などがそれである。露國の皇儲が大津漫遊の折その警護に當つてゐた警吏が皇儲に斬りつけたといふ椿事は、あとがどうなるものかと、わが國の朝野を擧げて戰慄した。ありていにいへば自分なども、その混沌たる國氣裏に新聞記者として筆を把つてゐたが、一時は全く畏怖を感じた。なんといふても非は日本にあるので、どう先方が出て來ても仕方がないからであつたのだ。自分の如き單調の生活に畏怖を多く感ずる如き事のなかつたのは、むしろ幸ひといふべきだが、私とてもいひ得ない畏怖を天變地異以上に感ぜしめられた事が、ないでもない。それは多くは人心の離反、騙詐に關する事で、昔からいふ如く人心の嶮は山よりも嶮、水よりも嶮といふが最

も畏怖を感ぜしめるものは、この方面にあるのだ。

川柳の語る尼寺

昔鎌倉時代には佛教が盛んで、人を濟度する趣意で女人を保護する尼寺があつた。それは鎌倉の松岡東慶寺である。今一ツは足利の滿徳寺である。兩寺とも今日は頽廢に歸したが、その盛んな頃は全然行政權の及ばない所で、幕府もそれを度外に置き、苟くもその寺に驅け込む女人があれば、良人でも親族でも奈何ともする事が出來なかつた。その寺が二ツとも秀頼の妻子に因緣のあることや追々弊が生じて幕府が干渉したことなどは、自分が放送局に頼まれて處女放送に吹き込んだことがある。その筆記は自分の既刊隨筆に收めてあるから、一切それを繰返さないが、爰には種々の川柳を引いて、脱走婦人の寺生活の狀態を聊か云ふに止める。

駈込み婦人はどんなものであつたかと云ふに、有夫の婦人が多く、それが夫婦喧嘩の揚句、或は家庭の不和から、離緣を欲してもそれも許されず、已むなく最後の手段として駈込みをや

つたものである。川柳に「すは鎌倉の大事ぞと仲人來る」とあるのも「道中記何にするのか嫁は買ひ」とあるのも「奥の手は鎌倉道を知つてゐる」と云ふのも、皆逃げ仕度を語るものである。最初の寺法は三年寺住居をすると離緣狀を貰つたと同じで自然に緣が切れるので、三年目には大手を振つて、出てくるのである。川柳に「三年の戀がさめると離緣なり」とあるのも「婆婆中にこわいものなき三年目」とあるのも「松風を有髮の尼で三とせきゝ」とあるのも「去り狀を有髮の尼になつて取り」とあるのも「二度目には娘で通る渡し舟」とあるのも「狀一本とるに嫁三年かゝり」とあるのも、皆在寺三年を語るのであるが、期限にも沿革があつて三年を縮めて足かけ三年としたのは住職の粹な取計らひであつた。初めは有髮のまゝ在寺を許したが、後には幕府の干渉で剃髮せしめることにもなつた。讀經も强ひられ鐘も叩かされた。「かんきんに花咲く聲や松ケ岡」とある川柳や「撥の手に撞木は惜い松ケ岡」とあるのも「ふんどしも絹なら取れと松ケ岡」とあるのも「魚物をばたち物にして緣を切り」とあるのも「精進けつさいして去り狀をとり」とあるのも皆比丘尼生活を語るものである。勿論唯形式だけ尼の眞似をしたのみで、心に何の感化を受けた譯では無つた。何んにしても男の全くない所で住持も勿論一生男を持たぬ尼公である。川柳の所謂「松茸のありそうでない松ケ岡」である。住持尼公の

心事はと云ふと「つま持たぬ身がましかやと尼公いひ」尼公もナゼ良人を持たぬがましだぞと不審がつてゐる。「住持さまばかりは男をらみせず」と川柳のいふごとくであるが、住持の尼公は絶對にそれを許されない。そして還俗をする弟子のみを持つてゐる。川柳の所謂「還俗をする弟子をもつ松ケ岡」である。なんにしてもこの寺は川柳に「尼寺は男の意地をつぶす所」であり「松風の音で寄手を吹戻す」所である。

駈込女人は幾許あつたか分らないが、盛んな頃には可なり澤山にゐたやうに思はれる。皆食料持參だから、合宿所のやうなものである。それ等が夜分枕を並べて寢た光景はどんなであつたらうか。彼等は互に何を語つたであらうか。川柳子は如才なくいろ〳〵云ふてゐる。「松ケ岡寢そびれた夜のぐち競べ」と云ふのも「松ケ岡相身互の癪を押し」と云ふのも「松ケ岡似たことばかり話しあひ」と云ふのも「松ケ岡にこ〳〵出ればべそ〳〵來」と云ふのも「心ない枕の多い松ケ岡」と云ふのも「鎌倉にねばる枕のあらばこそ」と云ふのも、彼等の寢臥の狀を語るもので、嫉妬、憤怨、罵詈、それが互に交換された寢物語りであつたことは想像に難くない。

鎌倉は東京に近いから川柳も存してゐるのは多く松岡東慶寺を語るもので、滿德寺に就ては川柳がないが蓋し似たものであつたらう。鎌倉にはその頃二三の茶屋があつて、駈込女人の爲

めに物を世給したり、親族からの通信を取扱つたり、代書人となつたり請人ともなつたのだ。初めは一家の風波のため據ろない女人を保護するに始まつたものだが、追々惡弊を生じ、亂行の揚句身をよせるやうなものが出來、淫奔のものが寺法を亂したので、幕府も風紀上默過しがたく、種々干渉して遂には有名無實の避難所に成り果たのである。

箱根の舊道に雲介歌を聽く

時は大正四年八月の末、娘を伴ふて箱根の塔の澤にゐた。娘が籃輿で舊街道を經、蘆の湖に行きたいといひ出したので、久方振り舊街道を經るも一興、籃輿に乘つて舁夫から唄を聽くのも面白からうと娘の請ふに任かせて、舁夫を傭ふたが、今は昔の唄を心得てゐるものは老人のみで、それも僅かに一二人存するに過ぎないといふので、辛ふじて六十からまりの舁夫を得た。それに若い舁夫が加はつて朝の七時半旅舍を發した。駕籠に乘るは湯本迄下るを便とし、度々訪ふた事のある玉簾瀧のある地區に沿ふて發電所附近に出で、それより道形もなしをらざ

る拳石、足を嚙むの地を踏み羊觴たる細逕をたどつて行くに、漸くにして一條の窄路あり、これは電氣會社の專用道路にて、水を引く鐵管は今歩しつゝある道の下に蜿蜒として設けられてあるのを見た。左方は懸崖で眼下に川あり谷底に十數軒の一部落をなすものあり、この川が須雲川で部落は同名の宿驛である。舊道を經るときは必由の宿驛だと舁夫語る。漸く行けば、樹木の殊に鬱然たる所に至る。細逕をたどりて行くに、一茶店あり一飛瀑あり、俗に勝五郎初花に因みありとする初花瀧がこれである。境狹けれども幽邃の趣あり秋季紅葉殊によしといふ。さもあるべし。湯本より舊街道を經ず、特に電氣會社の道をたどりたるはこの瀧を見せんとてなり。この瀧より十丁餘りも行きたりと覺ぼしき所に、新たに作りたる家屋の軒をならべたる一部落あり、所謂畑宿にて昔諸侯參勤交代の際には、人馬輻輳して繁榮箱根町に次ぐ所なりしといふ。近年火災のために寺社の外悉く燒失して今漸く復興したれど、僅に戸數十軒を數ふるに過ぎず。一亭に憩ふに、床の間に明治天皇東幸の砌御休憩の處、と署したる標札が置いてあつた。これに見ても當時、この宿驛の街道有數の處であつた事が知らる。これより舊街道に出づ。道はすべて石をもつて敷きつめられてあるのに氣が附いた。これは文久年間公武合體の政策により將軍家、皇妹和宮の降嫁を請へし折、大修理を加へたといふがこの道がすなはちそれ

で、敷石は三島にまで及んでゐるといふからなか〳〵の大土功であつた。今は交通が稀疎で、敷石の間隙に草生ひ延び頽廢の感はあれども、豪雨を經るも谿谷に變せずいつまでも道形を保つてゐるのは敷石のお蔭、といはねばならぬ。明治十七年の頃この邊を通過した折は、道の兩側に大樹があつて、樹枝天を遮り陰鬱の氣は行人をして悽愴の感に勝へざらしめたが、今は樹木伐られて路傍に腐朽の根を存するのみである。舁夫の語るところによれば、今杉並木の存するは僅に湯本三枚橋附近と元箱根町の或る部分とのみにて、三枚橋より畑宿間の並木は明治四十年頃、四萬五千圓許りの金に換へられた。そして三枚橋附近にいさゝか存してゐるのは、岩崎家が惜んで風致のため自から買ひうけたのだといふ。畑宿から道いよいよ嶮にして、さいかち坂、入曲坂（雲介はこの坂をヨコナメ坂といふ）、樫の木坂などがある。舁夫の語るを聞くに、昔大名通過の際雲介長持を擔ふてこの邊に破損を生じたとしても、道の嶮岨に免じてお咎めなしに濟んだといふ。またよこなめ坂は寒中滑つて雲介の困じた事甚しかつたので、長持の底の四隅に馬鞋を取りつけ、地上を引きづゝたものだなど舁夫語る。輿中の娘はこれ等の話を聞いて興に入り、雲介歌をも所望するに任かせ、舁丁中の老人おかしき調子に歌ひ、若きもの和して且つ走る。その歌一つ二つ。

「こゝは名代の樫の木坂よ、下に見へるは畑の茶屋」

昇丁の談によれば、雲介歌は元來長持を昇く時の歌で駕籠歌でないと。この歌なければ足拍子が揃はず肩をかへる時合圖を缺き、甚だ不便なりと。さもあるべし。樫の木茶屋に憩ふてまた發す。この邊に狼谷、笈が原などいふ所あり、十二丁行き甘酒屋あり、また憩ふ。昔は兩側に數軒の茶屋ありしが今は僅に一軒を存するのみ。これより二十丁行き元箱根町に達す。この日朝來雨を催したが、こゝに來て小雨駕籠の上に落ち來り、見渡せば連山雲を呑吐して雲煙の景おもしろく、馳眺に忙はしき間に昇丁の足はいよ〳〵進んで、箱根神社の表門のありし處へ着き。これより石を疊みたる坂を下つて蘆湖々畔の一亭に着す。時は午前十一時。亭に入りて間もなく豪雨到る。歸路は新道に依りたるが故に記載を略す。今時雲介歌を聽きながら箱根を籃輿で過ぎ、昔を偲ぶのもまた一興であつた。

箱根の荷物

昔諸大名が參勤交代で驛路を旅した際、どんな荷物を携帶したかと云ふと、甲冑武器は勿論、食器から寢具、諸般の調度類、國への土產物等、一ト世帶の道具を運んだのだから幾十の長持が行列に殿して續いた譯だが、好事の大名になると、大切な茶器や書畫などをも携帶し、慶長頃のさる大名はその平生珍重する石燈籠を携帶した例もある。伊勢のさる大名の家臣で可なり身分のあつた侍は、鰻が好きで旅中到る處に鰻を求めて自から調理した。そこで荷物の內には調理に必要なる一切のものを收めた。錐や庖丁などは勿論だが、俎や行燈や醬油樽まで持參したと云ふから當時は、厄介な荷物が多かつたのである。

大名が馬鹿々々しいものを持つて歩いた長も著名のものは雲介仲間で「長門のカネ棒」と呼ぶものであつた。乃ち長州藩の荷物の內に鐵棒を入れた長持が三棹あつたからこの名があるのだが、その實石地藏が入れてあつたと云ふことだ。ナゼそんなものを持廻つたかと云ふと、何

か過怠があつて藩を困らせる爲幕府が命じたのだと云ふ説もある。この重い荷物は通例四人でかついだが、箱根へ差しかゝると、二人で擔がなければならぬことになつてゐた。平地を四人でかつがせながら、街道一の難所を二人でかつがせることは無理な話だが、妙なことに難しいことをやつてのけようとの功名心に驅られて、強い雲介が自ら望んでかついでから常例となつたと云はれてゐる。

雲介仲間で厄介視した荷物は、郡山の「八の字」と云ふのである。郡山侯の紋は鳩が向ひ合つてゐるので、この名がある。この定紋のある長持には何が入つてゐるか分らないが頗る重量のあるものであつた。隨つてこれをかつぐものが強力を賞贊さるゝので、名譽の爲めに好んでこれを擔ぐものがあつた。その一人は小田原在の百姓で唄半と呼ばれたもので、これが上手にかついだ。この男は長持唄が上手で、それを唄ふと長持が輕く上つた。この男の唄つた唄は「郡山とは、たが名をつけた、山ジャないもの、里だもの」と云ふのであつたが、それが君侯の耳に入つて、面白ろいことを云ふとほめられて終に宰領役に引上げられ後には立身して士族の列に加はつた。

雲介仲間で「紀州のお中拔」と云ふのがある。これは臺所道具を納めた長持で、格別重くは

ないが、駈け足で迅速に運ばねばならぬ。なぜ迅速を要するかと云ふと、殿様が朝飯を召し上つてお立になるとサツサと臺所道具を片づけて、それを擔いで殿様が晝食場へお着きになる前に、そこまで駈け付けねば、晝食の支度に間に合はないからである。外の大名は二通り臺所道具を携帶したから、あらかじめ先に持たせる便利があつたが、紀州では一ト通りに限つたから、斯る面倒があつた。大急ぎであるから人足の草鞋がぬげても穿き直すことも出來ず、殿様でも供勢でもヅンヅン拔て駈け出すのが公然として許され、殿様もこの長持が來ると脇へ避て通されたと云ふことだ、お中拔の名のあるはこの故である。その當時諸藩から禁庭や幕府へ種々の献上物があつた。宇治の茶などは隨分鄭重に運ばれたもので、それを擔ぐものはひどく威張つたものだ。生魚などの運搬になると迅速でなければならぬ。無論晝夜兼行であつた。生ま物献上の一例は、越前から幕府へ寒鱈を献上におよんだことなどである。この鱈をかつぐ人足も一種の唄を唄つた「ヨイタラ、オタラジヤ」「ヨイタラ、オタラジヤ」と連呼して、献上品をほめながら運ぶことが例となつてゐたが、ふざけた人足共は「ヨイタラ、オタラジヤ、ナンタラコトヂヤ」と云ふたので、宰領方に大目玉を喰つたなどの笑話もある。

以上は亡友宮崎三昧が或る雲介から聞いて語つた一端である。

地方の家庭美附失業對策

いつぞや或る雜誌に都下上流の家庭の風儀や特徴を連載した時、私は其の雜誌に、地方豪家の家庭をこそ寧ろ都下に紹介すべきである。田舍の家庭には頗る美風があつて、都人士の學ぶべきものが少なからずある。何故にそれを列擧して參考の資料としないのかと勸めたのは、廿年許り前の事であつたが、私は今日猶同じ冀望を有つてゐる。言ふまでもなく家庭は一小天地で、其の風紀の善惡良否は、社會に大影響を及ぼし、大きく云へば國家の盛衰隆昌にも關係を及ぼし、此上もない大切な問題である。

然るに近來の風潮を見るに、都會は益々萬能の府となつて、あらゆる事柄の型は都會から發し、其の善惡に拘らず、地方はそれに學び、それに倣ひ、唯及ばざることを恐るゝの趣がある。都會はさながら金甌無闕の樂土でゞもあるかの如く、地方人は之れにあこがれて、日々夜々之れに趁り就くものが多い中に、地方の素封家などで居を都會に移すものも少なからずある。亦

勞働者も同じく都會地に憧憬(あこが)れて都會に來り集まる擧句(あげく)失業に泣き、田舍には却つて勞働者の缺乏を感ずるやうな仕末で、實に困つたものであるが、勞働者の事は後に說くとして、先づ地方の素封家に就て云ふと、此等が續々都會に來ることは由々しき大事である。彼等が都會地に移るのは、强ち地方に在る邸宅を捨てゝ移るのではなく、東京に別莊を構へる氣でもあらうが、其の地方を去ることの影響は甚だ大なるものがある。極端に云ふと、地方に於て祖宗以來涵養された家庭の美風を全く破壞し去るものとも云へるのである。近來地方に小作爭議が頻々と起つて、大地主は其の煩に堪へず、それを避ける爲めに東京に居を移すことが已むを得ないと云ふであらうが、實は小作爭議は一時的の葛藤で、之れを阻止するの道は、寧ろ大地主が依然居村を離れず、父祖以來の溫情を小作に注ぐに在るのである。此の溫情ほど兩者を結束するに力强いものはない。然るに大地主が邸宅を空しうして留守となり、朝夕見るものは番頭、手代に過ぎぬとあつては、小作が他人行儀になるも勢ひの自然で、爭議を益々助長するものではあるまいか。

地方の富豪の家庭、殊に大地主の家庭に於ては、小作を他人とはせず、家庭の準社員として扱つてゐる所が少なくない。これが實に美風で、地主小作間の關係を圓滿に保つ所以もこゝに

あるのである。全體地方は都門に比すれば保守的で、父祖以來の家法が儼乎として守られ、その家法の前には家の主人も頭を下げねばならぬ。隨つて長い關係を有する小作も、因襲上、家法とあれば我儘も云へないことになつて、爰に平和があるので、地方富豪の家庭美はさま〴〵あるけれども、私は時節柄之れを先づ擧げねばならぬ。

地方の家庭には、敦厚恭謙の美風がある。これが保守の生み出す美德で、地方家庭の權威も誇りもこゝにあるのだ。所謂る舊家と云ふ所には、如何に主人公が年若く當世流でハイカラであつても、家風を破ることは、一家眷族や周圍の環境が容易に許さないので、田舍に居ればそれが續きもするが、都會に移れば卽日都會化して、そんな美風は忽ちに失はれるのである。

田舍は都會地に較べれば何事も不便勝である。別して邊陬の地に於ては、都門とは非常の懸隔がある。隨つて此の不便に打勝つ爲めに多少の勤勞を要する。その勤勞は、老若男女の別なく、擧家共同して執らねばならぬ。卒然として考へれば、甚だ厄介であるやうだが、實は趣味もそれから生ずるのである。東京のやうに何から何まで不自由不便が無くては趣味も索然たらざるを得ぬ。例へば、來客があつて酒食を饗するにも、電話をかければ立ちどころに辯ずる。裁縫を必要とすれば仕立屋が來る。汚れ物は洗濯屋が持つて行く。外に出るには電車あり自動

車がある。栓をひねれば水も出で、燈も耀き、瓦斯も出る。家人は幾んど勞することなく、坐しながら何もかも辨じ得る。如何にも調法で、地方人の羨むのも無理はないやうであるが、實は趣味の問題になると全く零(ゼロ)である。事に當つて多少工夫を要し、それが爲め多少勞することもあつてこそ趣味も起るものである。

田舍の家庭に來客があつたとすると、主婦は襷がけで臺所に立働く。野菜を畑から抽き來ることもあり、貯へて在る干魚や漬物を出したり、兎もすれば主人自から魚漁りに近邊の河に出かけるもあり、藏から膳椀などを取出したり、適當の器具を選り出したり、相當面倒があつて、そこで調理が出來、客に薦めると、客は、食物の物質的價値の外に一種云ふ可からざる趣味を感するのは、此の料理には家人の溫情が籠つてゐるからである。大抵田舍の豪家には、長く其家に傳つてゐる特別の料理法があつて、それが客人を喜ばせる。味噌、醬油にしても漬物にしても、家傳來の釀し方や漬け方があつて、おのづから特色もあるので、溫情の外に手製の料理には專門料理屋の及び難い處がある。

以上は唯客來の際の應急の事を云うたに過ぎないが、田舍の家庭はなか〴〵經營多事で、僻陬の地になると、一年の計を爲すには貯藏が必要で、いろ〳〵貯藏品を作つて置かねばならぬ。

多くの家庭は養蠶をやる。紡績もやる。反物も織る。茶も製する。果物を乾したり漬けたりもする。茸を漬ける。菓子を作る。蕎麥を切る。葛粉を作る。兎もすると家傳の藥まで作る。なかなか多端で容易でないが、しかし家庭の趣味はそこに在るのである。

便利は人の好む所で、世上の人心が翕然それに趨るのも敢て怪むに足らないが、しかしそれには程度がある。何事も人任せで我れ關せずであつては、自己を全く沒却するにも至るのである。極端の例ではあるが、昔し羅馬の全盛時代に、或る貴人は贅澤の極を盡し、行住坐臥凡べてを擧げて侍者の手に委し、自己は微塵の勞も執らずしてゐたが、終には心身共に昏濛し、侍者に對して自身が坐つてをるのか立つてをるのかを問うたと云ふ話がある。玆に至つては全く醉生夢死である。一體趣味などと云ふ事は、多少勤勞の伴ふ事に存するものだ。何等手を勞せずして色々の慾望を滿足せしめても案外に興がない。幾何かの勞を經たものでなければ眞の趣味は感ぜられぬ。然るに東京の樣に、何でも便利づくめ調法づくめとなつては、一點の餘裕も餘韻もない、寧ろ殺風景と云ふべきものである。

現に東京に於ても多少こゝに氣が付いて來て、何うかして少しは劇甚なる物質的萬能の社會を脫したいと云ふ考へからして、其仕事場と家庭とを異にする事が行はれつゝある。之れは仕

事の繁劇に追はるゝ餘沫が、家庭の趣味を減損することを警戒する爲めである。其他閑地に邸宅を營み、或は少しく隔たりたる處に別莊を建てるなどは、つまり田舍の家庭の風を都會に實現すべく試みるものだ。餘りに調法すぎ、殆んど機械的生活の無趣味に當惑して田舍風にやつて見たい氣が起つたのだ。言換へれば、餘り人任せは面白くない、少しは自からやつて見ようと氣が付いたのに外ならぬ。併し此等は極めて少數で、滔々たる大勢は寧ろ地方の風と反對の方向に趨きつゝあるので、實に惡傾向と言はなければならぬ。

東京に於ては、一歩戸外へ踏出せば劇場あり寄席あり、百貨をならべた大呉服店あり、淺草の如き常住不斷の見世物などもある。處が田舍の天地には斯樣なものが少ない。しかし田舍には又田舍相應の年中行事があつて、種々の催しが季節々々に行はるゝのが田舍の特色で、之れこそ傳へるべき價値のあるものだ。凡そ此種の慣習は、古ければ古い程趣味のあるもので、西洋でもかくの如き古俗は成るべく保存に努めてゐる。今日の時勢に副はぬなどと云うて打破するは眞迦の骨頂である。

京都を一地方と見れば、玆には最も歴史的のおもしろいお祭りや年中行事があつて、如何にも盛んなものだが、假りにそれは別格のものとして、邊鄙な田舍に就て見ても、年中行事は幾

んど普遍的にあつて、除夜、歳旦、重三、端午、七夕、皆それ〴〵行事があつて、土地に依つていくらか趣を異にしてはゐるが、何れも興味のある慣習である。尙土地に依つては藏開き、惠比壽講、天神講などさま〴〵あつて、家庭を賑はすことが一にして足らない。或る季節には鎭守の祭りもあり、寺詣りもあり、一家には法事もする。此等は、小にしては家庭の歡樂であり、大にしては一町一村の社交である。此等のお祭り騷ぎが田舍生活の單調を破り、周歳營々の勞苦を慰するものでもある故に、田舍では身分相應費用惜しまずに立働く。例へば中元なれば精靈棚を設ける。切子燈籠を作る。それを作るには、多くの場合、家人が大工となり、經師屋の眞似までしてやつてのける。端午なれば武者人形を飾り、幟や吹流しを立て、凧を揚げる。もと男の兒を祝ふ爲めであるけれども、壯丁も參加して暢氣の天地を作り出す。すべて此等の事には、男は外部に婦人は內部に一家を擧げて部分々々を擔任し、共同的動作を取るのだから、自然共同的歡樂も起るのである。男女何れか一方が傍觀してゐるごとき、片手落ちの事は田舍には有り得ない。そこにも田舍家庭の美が存するのである。

一家團欒といふことは家庭に於ける最大の樂事であるが、都會に於ては、生存競爭の爲め已むを得ない事情もあるけれども、幾んど事實に行はれ難い。一家の男女それ〴〵が、異なる業

務に當つてゐるやうな境遇に於ては、家族一同が食卓を共にするやうなことは減多にない。然るに田舍の家庭に於ては、或る特別の場合を除いては、團欒が寧ろ通例で、家族的情味は甚だ豐かである。流石の都人士も、これだけは羨ますには居られないのである。

今日の如き繁雜な移り替りの劇しい世の中で、純眞の家庭美を何處に求むべきかと云はゞ、私は都門にありとは言ひかねる。都門はあらゆる名流の淵叢であるから、無論、範とすべき家庭もあるであらうが、都會化の勢は眞に猛烈であつて、何物をも輕佻浮薄に導かずんば已まない概があつて、立派な名門と雖も此の時疫に罹らないものは幾んど無い。何と云うても、まだ地方には純眞な家庭がある。地方は都會地に較べると保守氣分が漂うて、淳朴の風氣はまだ亡びるまでに至つて居らぬ。

地方に於ける素封家は、さながら昔しの大名のやうなもので、多くの田園を領し大なる邸宅を構へ、曾ては大名が駕を枉げて金を借りに來たなどのプライドを有し、饑饉の歳には救恤をつとめ、或は家塾を開いて鄕黨を敎育し、一鄕の公共事業には率先事に當るなど、居然たる鄕曲の大黑柱で、一村の利害は專ら其の家に繫り、其の家の歷史が卽ち村の歷史であり、村の興廢も亦其の家の隆替に依ると云ふ至密の關係があつて、一鄕はさながら領主の如く之れを仰い

だものである。斯る家にはおのづから英主も生れて、子孫の爲めに家憲を定めた例も少なくない。或は日本の代表的富豪の家憲に倣つたり、或は學者、高僧などの說に聽いて定めたものもある。家政萬般の事から、緣者の事、家僕の事、延いては一鄕の事にも及び、經濟的に倫理的に定められたる家憲は、今日見ても如何にも立派なものである。長い間の奉公事蹟は石に刻まれてゐるもあり、寺宮に額として揭げられてゐるもある。一鄕は其家を見ること寶物の如くで、若し其の家運が傾きでもすれば、さながら己れが家の非運を歎ずる如くに惜しみ且つ悲しむ。これが舊家の一得で、成り上りの家を賤しむとは全く反對である、斯る舊家は一鄕の統治上頗る大切で、國家から見ても最も貴重な細胞である。

田舍の舊家に家庭美のあるは右の如き由來に基くもので、決して偶然でない。併しながら、滔々たる都門の誘惑は、地方の素封家を驅つて都會に移さんとしつゝあつて、頗る危險に瀕してゐる。今に於て地方の良家庭を存續する道を講じなければ、恐らく還からず亡びるであらう。彼等素封家が東京に住居を構へる、其初めは、別莊を置く位な氣でもあらうが、これが抑々都會化する第一歩で、父祖の築き上げた良家庭を破壞するの亂階である。是れは決して素封家個々の得失の問題でなく、地方豪族の東京に移るは、地方を衰頽に導く所以であり、經濟上にも

風紀上にも非常の影響を及ぼすことに想ひ到ると、何としても之れを喰ひ止めねばならぬ。畢竟地方の素封家に自重心がないから、自から輕んじて死地に就くのである。私などは國策上目下重きを地方に置くの宣傳が非常に大切であると思ふ。田舍の家庭美を宣傳して、都人士に之れを習はしめんとする如きは、實は僅かに其の一端たるに過ぎない。

以上は專ら地方舊家の家庭美を禮讚したので、要は其の美風を都門の家庭に移し、それに倣はせたいと云ふのである。同時に禮讚に値する家庭を破壞から救うて、保存したいと主張するのである。併し、問題外ながら、昨今社會の一大問題となつてゐる失業の事が以上說いたことに絡んでゐるので、勢ひ筆をこれに著けねばならぬ。失業の原因は、大體日本の人口が一年に百萬も殖えるのに、一方產業は追々機械化し又合理化して、勞働の需要を減ずるから、勢ひ失業者が起らざるを得ないのである。加ふるに世界大戰後不景氣が續いて、百般の產業も不振であることが原因に相違ないが、私が特に田舍の家庭問題に關連して云はねばならぬことは、地方の農民が雨笠風蓑で糞土に親しむのをつらしとして、都門に憧憬し、易きに就きたい一心で、耒耜を捨て、漫りに都會に趨ることが、都會に勞働過多となり、此の悲況を生ずるのである。大震災の擧句復興事業が多端であつたから、不景氣の中にも勞働者を相當遣ひこなしたけれど

も、追々復興が出來るに隨ひ、勞役の過剩を生ずるは當然の事で、政府が緊縮方針を取り、放漫の事業を中止するとなつては、失業は益々起らねばならぬ筈である。然らば此の失業者を如何にせんとする。絶體絶命となれば、失業者自身故郷へ歸る外はないのだが、一旦都門の空氣に觸れ、所謂る都會化したものが、郷里へ還つたとて百姓たり得べきでない。さればとて國費を以て之れを濟ふべきでもない。又無産黨の主張する如く、富者の利益を殺いで之れに與ふべきでもない。働き得る能力者に對し斯る事をなすのは絶對に當を得ないこと絮説を要しない。どうしても彼等に産業を與へて、彼等自身をして活きるの道を立てしめねば、眞の救濟策と云ふことが出來ない。其の對策を案ずることは、喫緊であると同時に至難である。先づ政府として爲さねばならぬ方策から云ふと、外國の輸入品を制限して重に國産品を用ゐしめる方略を講じ、國産の奬勵をなすことが最も大切である。併し、それには相當便利な方法があらねばならぬ。大工業家が大資本を卸して業を營むのは暫く措いて、日本のやうな國では、差當り中小の工業の起ることが寧ろ國情に適してゐる。然るに此等中小の工業を營まんとする者は資本が豐かでないから、みづから工場を建てることが出來ない爲めに、折角志があり技能があつても、他の工場に雇はるゝ外に方法が無い。若し外國の如く共同興業所があつて、その一部分を賃借

することが出來るとなれば、工場を自から建てるにも及ばず、土地を買つたり借りたりする必要もなくなり、蒸氣でも電氣でも動力は皆其の興業所に具へてあるから、それを入用だけ賃を拂へば經濟的に用ゐることが出來る。又斯る興業所には鐵道も引入れられてゐるのが通例であるから、製品の運搬にも便利がある。乃ち僅かに機械を据付ければ、あとは賃を拂へば何でも辦ずる。そして斯く大規模に設備のある所は割合に何もかも賃が安いのが例であるから、從來收支の償はない事業も始めて利益が上るに相違ない。隨つて個人經營の幾多の工業は、翕然として之れに就くは必然の事で、獨立經營が始めてポシブルになつて來て、其の實驗を積んだ者の内から、追々自から大工業を起すものを生ずるに至るであらう。日本今日の小工業といふものは自宅に營まるゝものが多く、實に散漫たるものであるが、若し此等を一所に纏めて共同せしめ、ら、相當に事も擧るであらう。又斯くなれば、金融の道も生ずるであらう。而して此等を共同せしめるにも亦共同興業所の必要を感ずるのであるから、資本家は最早躊躇なく丸ビルよりも更に幾層大なる建物を郊外適當の地に興すべきだ。恐らく其の建物の内の幾千の工場は直ちに塞がつて、資本家も大いに酬いらるゝに相違ない。

尙政府がなしつゝある事業の内で適當に取捨し、ある事業を民業に委するのも一策であらう。

例へば電話の架設の如き、今は政府事業となつてゐるが、豫算に制限されて需要の多い割合に擴張が遲々としてゐる。之れを民業に移せば進歩は著しいものがあつて、同時に多數の從業員を要することにならう。

此他河川、港灣、道路等の土木事業、田野開發の事業等、大切な仕事は地方に甚だ多くある。適當の方法を以て此等の經營をなすことは、設令ひ多くの費用を要するにしても、國家永遠の利澤をひらき、併せて勞働者に業を授けることにもなるので、合理的の失業救濟法はかゝるものので無ければならぬ。此他過剩の人口を調節するためには、移民が必要であると共に、雲霞の如く寄せ來る朝鮮勞働者を制するの法も無ければならぬ。地方民が中央に集中する事を防ぐの法も往く々々は講じなければなるまい。同時に地方開發の爲め土着人をして其の鄕土に落着かしめる方策も無ければならぬ。此等の事を一々細說するのは此篇の目的でないが、農村の爲めに差向き必要と感ずるものは副業を奬勵することである。大體田舍の風は年を逐うて奢侈に流れつゝあるから、到底今までの生産のみでは生計を營みかねる事情もあるから、新たに生計を助けるものが無ければならぬ。從來とても副業は樣々あつて因襲的に營まれてゐるが、其の規模が甚だ狹少で、多くは一鄕の用を足すに過ぎない。偶々心あるものが較々大きな計畫をなし

ても、運搬、販賣の法が宜しきを得ない爲めに失敗に歸するものが多い。農家相應の副業はいくらでもあるが、之れを有利にするには、銘々個々が思ひ々々にやるごとき今日の流儀ではゆかぬ。産業組合を組織して統一的共同的の働きを取らねばならぬ。例へば鷄卵を販ぐにも、西瓜其他の果物を賣るにも、取纏めて之れを積出すやうにしなければならぬ。それが爲めには倉庫も要る。何よりも必要なのは之れが管理の衝に當る適當の人を得ねばならぬ。現に愛知縣などでは、此の副業經營が相當に進んで、收利も莫大であるといふが、それには相當の仕掛けがあつて、從來の個々散漫の遣り口を改め、統一的に多量のものを湊合して市場に送り出す法があるので效を奏してゐる。各府縣共に差當り愛知縣に學ぶべきである。副業は一町若くは一村の各戸が力を注げば驚くべき巨額に達するもので、爰に大和の吉野の箸削りの好例がある。吉野は杉材の名産地で、酒樽は此の杉で作る。樽を作つた擧句自然に出る屑は莫大のもので、もとはそれを焚きものにしたものだが、廢物を利用して、吉野では割箸を削ることを始め、各家の副業となつた。小學兒童が此の簡單な工藝を敎はつて、もとは丸箸まで作つたのが、何故かそれは止んだが、普通の割箸は今でも作つてゐて、小學兒童の手に成るものが全體の半分以上も占めてゐると云ふ。そして其の産額は一年十二億、此金額百二十萬圓に達してゐる。斯る簡

單な工業、殊に廢材を利用しての結果として一年百二十萬圓の收穫を得るに至つては、立派な業と謂ふことが出來る。畢竟各戸が之れを營む習慣があるからの事だ。殊に小學兒童を從業員に充てる事がよい習慣である。此の箸削りは各家庭で敎へるものらしいが、實は學校に於て一科として敎へてもよいと思ふのである。箸削りに限らず、兒童にふさはしい副業を小學時代に一科として學校で敎へ、餘暇にその業を練習的に營ましめることは差當り殖産を助け、やがて成人となればそれが相當の業となるのだから、吉野の習慣は他の地方にも倣はせたいものである。

以上の外、種々の工藝品で從來地方の名物と云はれてゐるもの、若くはこれから新たに工夫さるべきものも、共同經營でやれば、亡びんとするものも活き、新たに工夫さるゝものも直ちに市場を得ることになる。如斯き副業の内には女子の手を待つものも少からずある。又田圃に立働くことを厭ふものに適するものもある。兎角今日の憂は農民が勞を厭うて安逸に就かんとする風が漲つてゐる事だ。此頃聞いた話しに、私の鄕土の或る地方では、百姓が邊鄙の地から人を傭うて耕作せしめてゐると云ふ。其の賃錢は一日二圓を拂つて、已れはと云へば一圓八十錢の賃錢で他の勞役に就いてゐると云ふ事を聞いた。懶惰の風が斯くなつては困りものであ

る。若い男女も互ひに土臭い配偶を得ることを嫌つて一意都門に趨るの風があるのも亦困りものである。今は女子の職業がいろ〳〵開けて來たから、都會に來なくとも、田舍に事業さへ起れば、都會に於けると同樣それに有りつき得るので、田圃の糞土と親しむ計りが唯一の仕事でない。否、耕作以外に然るべき仕事が出來ねばならぬ。私が切に副業を云々するのも此故であるが、地方人を、土地に安んじて又樂しんで土着せしめるには、結局、敎育の法を改めねばなるまい。農村に於ける敎育は農村相當のもので無ければ、農民が晏如として鄕土に土着する事を望み得可きでない。滔々たる時勢病は農村を侵して其素朴なる風儀も習慣も都會に誇るべき家庭をも泯滅に歸せしめんとしつゝある。今日爲政者の最も意を用ゐるべきは此點にあらねばならぬ。

講中

むかしも今も地方で何々講と云ふが所々にある。今の言葉では何々團と云ふごときもので、

或る申合せでいろ〳〵の目的をもつ同盟であつた。自分の幼少の頃村に天神講と云ふがあり、廿五日には少年同志が順番に自宅で菅公祭を催したことがある。頼母子講と云ふのも一種の金融機關で、いろ〳〵の目的で一團となつて或る金額を定時に集めて、差當り資金を必要とするものに先取權を與へて或る纒まつた金を供給した。今では寄附金募集と云ふ處だが、此の講は相互關係で人の爲めにもなるが自分の爲めにもなる方法であつた。講中の内で最も多かつたのは、神社佛閣の參詣を目的とするものであつた。伊勢講、金毘羅講などさま〳〵の名がついてゐるが、此の講で旅費を作つて團體で參詣することが普通であつた。何百里もある遠方へ田舍の人達が旅行し得たのは此の講のお蔭である。此講は一種の懇親會の如き性質もあつた。互ひに馳走などして交つたものだ。此の講には人數の多寡で大講、中講、小講など云ふて、大きなのは一村擧げて講に加はつた例もある。越後では瓦無盡と云ふがあつた。これは瓦を購入することが目的で、草屋根を瓦ぶきにすることがそれに由つて行はれた。念佛講など云ふものは珠數クリ講とも云ふて、一家の隱居や老婆同志の間に行はれ、別に資金を集めるやうなことはなく唯だ同一信者が自宅や或は寺に集まり、葬式には參列する位で、コンナ事が自然親睦を結ぶ緣ともなつた。旅行を目的とする講社にも規模の大なるものがあつて、自分の若い頃東海道筋

の宿屋は皆一新講と云ふに屬してゐた。今はコンナ事は多く廢滅に歸したが、地方の金融機關として又親睦機關として旅行其他の事業機關として面白い成立であつたが、今の時勢にはめて復興したら、片田舍などには有利であるまいか。

盆おどり

自分の幼少の頃は、田舍はどこでも、盆踊りをやつた。此の時はすべての男女は解放の時で、平生戸外に出ない深窓の處女も變裝して踊に加はつた。一家の主婦も老婆も皆變裝して出た。踊りは單調であるから誰れも踊れる。大規模の踊りとなると、櫓を設けて、音頭取や歌手は、その上で歌ふ。樂器と云ふても太鼓と笛などである、自然此の踊には醉漢も加はる、亦相思の男女が混雜に紛れて相擁するものもある。變裝をして居るので戀人と誤認して隣家の婆さんと手を携へるごとき滑稽もある。これが兎も角すると男女の媒介して結婚の因をなすこともある。彼等は剛に乘じて人無き墓場などで野合することもあるが、兎も角も解放された男女の樂みの

デーであつたのだ。盆踊は陽氣のもので酒席にも行はれ、十數の藝妓が踊り出すと客も總立で踊り、老妓が太鼓を叩き三絃を鳴らして歌ふので一時皆夢中になつたものだ。新潟の酒樓でしば〳〵これを見たが、自分の記憶では長岡の酒席の踊はチト變つた所があつて、一段興味があつた。それはどこかの座敷で踊りが始まると、いつしか他の座敷の客や藝者もやつて來て參加する。尙ほおかしいのは、其の家の家族や下婢や料理番下足番などまで追々加はつて來てなかなか大勢のものになつて、頗る賑ふ。これが元祿時代街頭で誰れか踊り出すと、通過のものが皆それに加はつたといふ昔の形を其儘に實現したもので、古典的であるやうに感ぜしめた。酒席の盆踊には樽を太鼓の代用とするのが習慣で、寧ろ代用品に趣味があつた。東京あたりの來客は殊にこれを喜んだ。

村居の爐邊

時節柄十二月の末田舍の火爐を思ひ出す。町屋でも臺所の隅に六尺四方位の火爐はあるが、

町場の火爐は多く炭を焚くもので榾を焚くのは農家の火爐だ、趣味を覺へるのは榾や割木を散々に焚くのに限る。自分が村居の頃の爐は大きなものであつて、冬分の夜には能く此の爐を圍んで暖を取つた。大鍋をかけて馬鈴薯やクキ菜や栗などを煎で、家族が團欒すると云ふよりも、使用人などゝもに圍んで四方八方の話をした。時々外から訪ねて來る人があると、此のまどひの中に加へることが通例で客もそれを喜んだ。いろ〳〵の人々が集まつて、其中には獵者も漁者もあるやうな仕末で、それ〴〵から漁獵の話を聞くのも一興であつた。坐ながら漁樵問答をやるの思ひがした。時には濁酒を溫めて供したこともあり、自分はまだ幼少で酒など飲まない時分だが、叔父はよく此の爐邊に飲んだ。其頃豚を飼つた頃で、豚の仔を寒の防寒の爲め鳥籠に入れて爐側に置いたこともあつた。亦三四の書生連と百物がたりと云ふを試み、爐を圍んで、恐るべき妖怪の談話を交へて、線香を奥の座敷の床の香爐に立てゝくるやうな戯れもやつた。暗中だから可なりコワかつたことを思ひ出す。降り積つた屋上の雪がナダレル聲を聞くのもしば〳〵であつたが、此の爐邊のまどひは當時のクラブやうのもので、いろ〳〵の人に會した。坊主や醫者なども時に來つて仲間に入り、雜多の談に渉つたが、概ね雪害の談であつた。どこの家でも夜番と云ふものがあり通宵不眠であつたが、これが爐の主人で、皆が散ずる後は此男

がひとり主人であつた。あの頃郵便が開けたばかりで、配達夫が來ると、其の勞をねぎらひ、爐に請して暖をとらせ、差出す郵便も此の配達夫に托することが常例であつた。此火爐に集まるものにいろ〳〵のものがあるが就中草鞋穿きのもの、雪靴のものが足を投げ出すなどが一風景であり、烟の濛々として揚るのを一向氣にせず、杉葉などを焚く時は咫尺も辨じないほどになるけれども、銘々ムセビながら苦情を云ふものもないのも亦一風景である。榾にもさま〴〵あつて薪材の長尺のものが多く用ひられるが、直徑五六寸の大材などは長時間焚へてゐる。白樺はパチ〳〵の聲を放つて陽氣のものだが越後には無かつた。

富士山へ登つた時の事を思ひ出す。烈風に遇つて頂上に到る能はず五合目の石室に一夜宿したが、こゝにはまだ人は來てゐなかつたが、火爐があつて薪が積み重ねてあつた。此の高山の薪は高い價値のあるものと知りながら、寒氣凜烈で、薪をたき暖をとることが何寄の幸福で、無闇に焚いて暖を取つたのは愉快であつた。自分は風を引くのを恐れて、一夜薪を焚き爐邊に寢ずに夜を明かしたことを思ひ出す。翌朝も風があつたが、つとめて登攀して八合目に達すると此處はいろ〳〵の登山口から登るものゝ湊合する處で、石室の主人がゐて火爐に火を焚いてゐたから、いきなり草鞋足で踏み込み大きな鍋が掛けてあつて味噌汁が沸いてゐたから、それ

に辯當の殘飯全部を抛りこみ、二日目に初めて溫食したので、餓虎のごとく貪り喰つたことを思ひ出す。

書齋の掃き寄せ

西園寺公望公と國民葬

國家唯一の元老西園寺公は昨十六年十一月廿四日を以つて興津の坐漁莊に薨去された。享年九十二、公は公家出身の傑物で、岩倉公と共に長く傳へるべき人である。戊辰戰爭の際には仁和寺宮を奉じて我郷里越後に來られた時は十九歳で、自分の家や妻の實家などに立寄られ、自分の家へは「靜以修身」の額面の揮毫を遺された。當時十歳ばかりであつた自分は、公が座敷の椽に立つて居られた風姿を見たが、其後遂に一回も謁する機會を得なかつた。公の經歷などは大概知つて居るが多く世に知られてゐるから、それをこゝに書くにも及ばないが一つ二つ自分の知ることを書きつけて見る。公が戊辰の歳越後に來た時には、東條琴台はまだ高田藩にゐて、「明史稿」の校正をやつてゐた。公が琴台に會した折、明史稿の話しが出たが、公は早く此書を讀んでゐて、話中に此書物に觸れたことを云はれたので、琴台はビツクリしたと云ふ話がある。當時此書物の日本に來て居るのは極めて少なく、それが爲め高田藩で翻刻をしたのであ

るのに、公は早く之れを讀過してゐたのである。

自分は幼少の頃自宅で公を見たきりだが、緣因話を云ふと、先考が宮內省に奉仕した時の仕事は、主として辭令などを書くことが務であつたが、其事のなかつた日は西園寺公反譯の奈破崙傳の淨寫であつて、幾年も書きつゞける程分量があつたらしい。これは天覽に供するためで、其の用紙に罫があつて欄心に「富春」の二字が刻されたものであつた。公が自由新聞を勅命で退き、其後ナポレオン傳の反譯に從事したと傳へられてゐるが、これは公に生活費を與へるためであつたらうと察せらるゝ。

自分の妻の實家和泉久澄の歌集を出版した時に公に題字を書いて貰つたことがある。友人石渡敏一が公に親しかつたので、それに賴んで出來たのが歌集の冒頭に「一片之氷心在玉壺」の八字である。公は和泉家を會つて訪ふて勤王の業績を賞せられた緣故があるので其揮毫を乞ひ得たのである。

自分が讀賣新聞在社の時、政治家訪問の擔當記者が數名あつたが、公を訪問の擔當者は藤野房次郎であつた。其人の語る所では多分などは何時訪ねても、火燵に入つて居られて、そこへ延いて談せられたと云ふた。無性で寒がりであられたらしい。それでゐて國際上の儀禮になる

と近衞公の談のごとく如何にも旅格であつたらしい。全體服裝にはやかましやで日本の衣服などにはおのづから通人風の嗜好があつて、藝妓なども公の好みを通人と許した位であつた。若い頃は自由新聞で見なる德大寺侍從長を困らせた位ラデカルの人であり、外國に公使となつた頃は磊落豪放で、いつも佛蘭西に遊びに出かけてゐて、急の用に間を缺き困つたと大隈侯がこぼされたことを記憶する。佛蘭西の某樓の硝子を破壞した時損害を求められたが、その賠償が餘り安いと云ふて、わざと幾枚も破つて賠償したなどの豪放の逸話も殘つてゐる。

西園寺公を葬るに國葬儀を以てするは何人も豫期したことであるが、何故に公の葬儀を機會に、國葬の形式に新體制を用ひないのであらうか。大禮服着用でなければ、式場に入る能はずと云ふことが最早時勢に添はない。略服でも宮內省に入ることが出來る今の世の中に、四角張つた形式のみが禮でもあるまい。少數のものを式場に入れるよりも大衆に參拜を許すことが、寧ろ死者に對する禮であるまいか。國葬に於ても有資格者の參拜の後には公衆の拜を許すのだが、暮ましく資格を論じて公衆との差別をつけるのは、曾つて自由主義を主張した園公の本意でもあるまい。園公は結城紬の平民和服を着て平民風俗の美を數寄者に賞された人である。何故權も八もあらゆる階級を打まぜて、參拜を許さゞる、新體制主張の近衞公が委員長であるか

ら、特に此事に思ひ到るのである。往年大隈侯の葬儀には吾等は新案の國民葬を以つて葬儀を行ひ、幾十萬人の熱誠を集めて成功した時、吾等は國葬儀も國民葬に倣ふことが遠くあるまいと當時期待した。其際幾十日かを經て山縣公の國葬があつたが、大隈侯のに比して頗る寂寥を感じたので、一層國葬儀を改むべきを思つたが、實は今度こそ之れを改むるに最もよき機會であつたのに、それを逸したのは返す〴〵殘念である。衣冠束帶の公卿出身の貴族の葬儀に平民的の禮を以てしたならば、それこそ政治の新體制の範ともなるであらうに。

松平賴壽伯

讃州は自分の憧憬の地であることは別項の如くであるが、こゝに憧憬の人がある。それは舊領主松平賴壽伯である。伯の人物に就ては、爰に絮說を要しない。其の華冑界の傑物で、各方面に聲望のあること、現に貴族院議長であること、濟生會の總裁であること、其の他馬匹や蠶絲等重要の諸團體の總裁として、往く所として可ならざるなき聲望を有せらるゝことは何人

も許す所である。自分が斯人に憧憬をもつのは此故である。自分が五十年來關係のある日本圖書館協會は總裁德川賴倫侯の歿後、久しく首腦を缺き、其後任には衆望松平伯に歸し、前年自分よりも內意を聞いて見たときは、多忙の故を以つて辭退されたが、此度再び伯に請うて遂に其受諾を得た。伯は元來教育事業に熱心の人で、舊領內の同事業は伯の力に由つて發展し現に校長となつて居らるゝ學校もある。此程聞けば本年は伯の先祖の三百年に當るので、それを記念する爲め、縣立圖書館を設ける爲め出資すると云はれてゐる。今次國策新體制を行はんとする時に方り、圖書館事業も一段の擴張を要するが、此場合伯を總裁に仰ぐことを得たのは、ひとり自分の喜びのみでなく、會の爲めに大いに祝福せねばならぬ。

中村敬宇翁

中村敬宇先生が歿せられたのは明治廿四年六月で、近かく記念碑を建る擧があつて、自分其の發起人に加はつてゐるが、先生を知つてゐる者は皆な自分の如き老人であらねばならぬ。自

分は先生の經營された私塾同人社には一切關係をもたないが、東京大學で先生の敎を受けた一人である。明治十三四年の頃先生は大學の聘を受けて漢學を受持たれた。先生の敎授法は一種變つたもので、講義をするでなく、字を敎へるでもなく、讀ませて自から文章の妙を味得させると云ふ方法であつた。敎科書は史記と詩經であつたが、先生の云はるゝには史記中の名文は高祖本紀であるから、此文を幾回でも讀めばおのづから文に通ずると云はれて、每々同じ處を幾回も讀ませ、時には自分も讀まれたが、字義などには無頓着で一向お構ひなしであつた。亦詩經に就ても講釋をする代りに、其頭支那で五經全部を英譯した尨大な書物を自身携帶されて、それを吾等に交付し、先生は漢籍に就て支那音で朗吟されると、吾々は英譯を讀むのであつた。先生の敎授法は斯の如きもので、十分漢學の素養のあるものに文や詩の味を自得せしめると云ふ、高級の敎授法であつたが、素養の十分でない學徒には、先生の期待は全く外れたと云ふの外はなかつた。先生は又詩を課せられたが、綺語を弄した詩には全然筆を着けづ其儘にして返された。先生はどこまでも眞面目な德行の人であつた。いつも洋服を着けて敎場に臨まれたが、冬分などは寒氣を厭ふて、臘虎の帽子を室內でかぶつて居られた。自分は級長で無つたが、自分の名を記憶して居られた爲めか、時々自分に宛てた端書が來た。それには必らず假名で用件

を書かれた。宛がら小學兒童の手紙のごときものであつた。先生にある時難字を質問したことがあるが、先生は率直に倦れも分らぬどうぞ字引をひいて下さいと云はれたことを思ひ出す。よく敎場へ信夫恕軒老がやつてこられた、それは文稿を携へて先生の直しを請ふ爲めであつた。當時先生は大文章家と云はれ、諸方から文を賴むものが多く、なか〳〵忙がしいので、石川鴻齋に代筆を賴まれたことが時々あると鴻齋の塾生であつた菊池晩香から聞いたことがある。先生にはいろ〳〵反譯されたものがあるが、西國立志編、自由の理などが尤も世に行はれた、中にも前者は洛陽の紙價を高からしめた程流布し、遂に演劇にまで仕組まれた。原著者のスマイルスのセルフヘルプは本國よりも遙かに日本に流布したのは、先生の譯に因るので、其の熟語が皆な適確で名文であつたからである。此書は先生が、德川氏が靜岡に隱退中、扈從して同處にある內、反譯されたもので、曾つて其草稿が友人某の手に歸し、予は其の箱に識語を錄したことがある。

敬宇先生在世當時漢文家の大家は三人あつた、中村敬宇、重野安繹、川田剛の三人の內敬宇先生が就中第一とされた。先生の文章の不朽として殘るものは敎育勅語の草案であらう。先生は耶蘇敎を奉ぜられたが、先生は之れを奉ぜずとも德行の人であつた。明治時代に何人にも有

德の人として仰がれたのは先生であつた。先生ほど教化に盡瘁した人はない、あの頃街頭に紙芝居をやるものがあつて、それを覗くと、閨房淫靡のものであつたので、風俗を亂すとあつて幾たびも、其の繪を買ひ取られたので、果ては紙芝居師も感ずる所あつて、廢棄したと云ふ逸事がある。

先生の同人社には行つて見たことはないが、嘗つて同人社に接して一段高い處に數月住したことがある。小日向水道町で米澤侯の系統の人の家を半分借りて住んだことがある。此家は相當立派なもので、庭に池があり、水道よりの水を受けて、その水が崖下に落る、そこに水車があつて、それを經て同人社の池に落るのであつた。此の池の中に先生の書齋があつて、多くの書籍が藏され、火防のため特に池中に書齋が構築されたと聞いてゐる。自分が先生の宅の崖上にゐたことも何かの因緣であらうか、コンナ事も今思ひ出さるゝ。

大隈侯と操觚界

早稲田大學新聞の記者が訪ねて來て、大隈侯に就て何か語れと需められた。侯に就て語るべ

きことは甚だ多い、維新の元勳として世界の偉人として特に早大の總長として。併し先づ以て侯と操觚業に就て語ることにしやう。

侯は新聞紙のフレンドであつた、亦新聞の指導者でもあつた。

侯程新聞記者を喜び愛した人は無かつた。侯は客を喜ぶ人であつたから毎朝幾多の內外人に應接して半日を消された。其客人中で尤も多かつたのは新聞記者であつた。新聞には種々の色彩があつて、所屬の黨派もさまざまであつたが侯はそんな區別に頓着なく、どれもこれも快よく書齋に引入れて、縱橫に論議された。他の客人も坐に在つて傍聽するのが例であつた。一記者が去ると他の記者が來る。侯はそれに對して亦語られたことを繰返すやうなことは無かつた。亦往々五七の記者が連れ立つて來ることもあると、それ等を全部引き入れてそれ相應の談話をされ倦むことがなかつた。

侯は如何なる題目に就いても一家の議論を有してをられた。それが滾々として口を衝いて出るので、其の淵源の深きを端倪し得ないものがあつた。若しそれ外交、財政などの重大な國家問題が起ると、侯には早く定案があつて、堂々天下に先つて披瀝され、歸趨をチヤンと明示して國民を指導された。これが國民外交となつたことがどれだけあつたか知れぬ。又政府を鞭撻

して國策にどれだけ資したか知れぬ。ある時は侯一個人の說を外國に電送したこともあり、外務省が時々侯を訪ふてその意見を外國に電送したこともある。外客の日本に來るものは霞ヶ關を訪はず、先づ早稻田に侯を訪ふことが多かつた。國論を手ッ取り早く聞くのは侯を訪ふに在ると思はれたからである。

侯が在朝在野にかゝはらずその言說の重んぜられることの一端はこれを以ても窺はれる。

毎朝の新聞は例として侯の言說を一段、二段は必ず揭げた。事實侯の言說は各新聞を賑はすものであつた。都下の新聞に揭げられた記事が各地の新聞に轉載されて、それが全國に普及した。讀者は何よりも先に侯の言論を讀んだ。僅に數日侯の言說が出ないことがあると讀者は寂寥を覺えたものである。早大の敎授や學生等も新聞に依つて毎日總長の聲を聽いたものであるが、それが侯の死と共に永久に無くなつたから、新聞紙は第一の讀みものを缺いたかの如き感があつた。

これほど侯と新聞とは密着の關係があつた。凡そ維新の元勳で長命の人は、伊藤山縣等いろ〳〵の人があるが、新聞と密接の關係を有した人は斷じて他に無いのである。

或る人は新聞をうるさく感じた、或るひとは新聞を蛇蝎視した。それは何故かと云ふに、侯

の如く時事に對して咄嗟に意見を陳る能がなかつたにも由るが、假令意見があつても。それを世に問ふことに吝かであり、往々反駁を來すのを快よく思はなかつた等種々の理由にも據るのだが、兎に角新聞記者を喜ばなかつたことが其の最大因であるに相違ない。

此點に於て他の政治家は侯ほど垢ぬけがして居らぬ、どこかに官僚垢が附着してゐるから、西洋の政治家の如く新聞記者を喜ばないのである。

大隈侯の詞を藉りて云へば、洗禮を受けないからである。侯は强藩閥の間に介在して相當の劬勞を積まれたので、官僚垢が全く脫けた、それを洗禮と云ふのであつて、侯無かりせば苛刻の新聞條例の改正も出來ず、今日のごとく新聞紙に言論の自由は無かつたのである。

明治十七、八年頃の新聞紙條例は今日の人々が想像出來ないほどの苛刻のもので一寸した筆の走りが直に罪を構成し、新聞の發行停止となり禁止となり、或は機械の沒收となり、制裁は營業權にまで及んだ。

實に不合理極はまるものであつたが大隈侯首相の時に改正されて今日の如きものとなつた。侯の此點だけでも長く新聞社界にウオルシップされるだけの人である、況や亦侯ほど記者に同情のあつた人はない。

自分は曾つて「侯を新聞記者としたら」と云ふて、觀察を下したことがある。その結論は侯を以て卓越無比の記者だといふた。全體新聞記者に必要なる資質的條件は種々あるが、國務の內最も複雜である外交と經濟に通曉して居ることが最大要件であつて、此等の問題に對し豫じめ定見があり、事が起ると咄嗟にそれに對する說を爲す丈の能力の具備が最も大切である。新聞事業は其日々々の事業で何か問題が起つても取調べてからと云ふ餘地は無いので、必ず卽刻を要する、然るに卽刻それに應ずるには胸に成算が無ければならぬ。

然るに外交と經濟は專門知識を要し、何れの新聞社においても多くはこの方面に卓越の人を缺いてゐる。全然その人が無いとは云はんが、甚だ少ない、況して一人で兩刀を使ふ人は最も少ない。然るに侯はこの兩面において維新の難局を處した經驗があつて、兩者に尤も通曉してゐたから、如何なる場合においても事が起ると卽座に適確の說がある。

新聞記者として尤も難とする二件については侯は尤も得意とする所であつて、何事にも記憶がよく數字の如き最も記憶に難いものまでも、ハツキリ覺えてゐらるゝからその議論は浮薄でなく適確要を得ることが常であつた。

侯は終生外國の土を踏まない人であるけれども外人の日本に來るものは必ず侯を訪ふを例と

してゐるから其應接の間に得る所の知識は洋行者に比し遙かに優るものがあつた。

內地の諸問題についても、侯を日夕訪問する各方面の人々は其の最も斬新で洗鍊された意見を陳するから、侯の頭腦は決して古くなく、侯の靈妙なる頭腦の陶冶で原作よりも遙に光彩ある說となつて現はれる。斯の如きは皆新聞記者たるに必須の事であつて侯の位地に由つてのみ得らるゝことが多く何んに寄らず聽くべき說のあるのは此故である。

但だ記者として侯に缺く所のものは筆である。侯は幾んど一生を通じ執筆せずに頑張り通されたが、其代り侯の雄辯宏辭はおのづから大文章となつて現はれ、人を惹きつける力は筆よりも遙かに强かつた。

大隈侯は上叙の如き新聞記者たるべき資質を有し、晩年二三十年に亘り、侯の論說と談話は全國幾千の新聞紙を賑はした。侯は操觚者の總師と云ふも決して不可はない。自分の亡友で山田一郎と云ふのが頗る健筆で、每日都鄙七八ヶ社に論說を寄せたので、犬養木堂は天下の記者と云ふたが、侯に於てはそれに幾倍するものがあつた。侯に對してこそ天下の記者の尊稱を呈すべきである。

上叙のやうな新聞を愛好する大隈侯に、利害關係のあつたのは報知新聞で、侯の個人雜誌も

あつたが早稻田大學の機關紙は無かつた。これは是非無くてはならぬと自分も高田君と計畫したこともあつたが、遂に出來なかつた。然るに今日早稻田大學新聞と云ふ機關紙が校內に發刊されてゐる。未だ日刊とまで進展しないが追々と立派に生長するであらう。侯の在世の時にこれがあつたら、侯はどんなに愛撫され、每號高論卓說を連揭されて、嶄然操觚界に雄飛したことであらうに、思へば侯の在世時に與らないことが遺憾であつた。併しこの新聞紙は天下の記者たる大隈總長の學校に生れたことを思ふて、飽まで努力して進展しなければならぬ。

尙ほ我早稻田大學は新聞記者の製造所であるかの如く、全國の津々浦々に至るまで記者と云へば、早稻田出身等が迎へられてゐて、新聞界を橫斷してゐるのは壯觀であるが、これもこれ天下の記者たる故總長を戴いた緣因に由るものと云へ得るであらう。

矢野龍溪

自分が新潟新聞の記者となつて赴く時、暇乞にゆくと龍溪は眞じめの顏で、場所柄甲冑の用

意をお忘れなくと云はれた、甲冑と云ふのはサツクの事であるから自分も一笑した。龍溪の人柄は如何にも立派な溫厚の人であつた。演說も度々聞いたが、演說をする前には必らず腹稿を練り、演壇に立つても、ゼスチユアも苟くもせず堂々たるものであつた。此人は何んにつけても周到の研究を經なければ、手を下さない持重家であつた。おかしな話しだが藝者と狎れるためには、豫じめ春水の梅曆を讀み、藝者に對する態度や應答を研究すると云ふ人であつた。大隈侯に對しては高等秘書官とでも云ふべき役をつとめ、重要の文章が此人の手になつた。御巡幸の際有栖川宮に呈した大隈侯の憲法私案も、此人が草案したのであることは、自分直接に聞いてゐる。大隈侯が條約改正の局面に當つた時も、龍溪は其の左右に侍して必死の力を極めて侯を助けた。自分は其際越後にゐて新潟新聞の記者であつたが、危急の場合の報告通信が、あの人の自筆に書かれて、一日二三回も來たことがあつた其の精力に驚かされたことを思ひ出す。其の名著「經國美談」は當時大いに流布して若人の血を沸かしたもので、自分なども全部記憶してゐたので、高田事件で獄に下された時、同囚の爲め、每夜連續說き聞かせて同囚を喜ばしたこともある。其後「浮城物語」も出たが、其の主人公は卽ち龍溪其人で、南洋あたりに軍艦で橫行する筋は、恰かも現時の南洋の雄飛を豫想したものゝ如き觀があつた。亦「新社會」と

云ふを著して社會主義をほのめかしたことがある。幾んど最初の社會主義ものであつたやうに思ふが、德富蘇峰翁は此作を評して、金蒔繪の菓子器に爆彈を盛つたやうなものと云ふた。龍溪はいろ〳〵の事に理想の持主であつた。報知新聞社を經營しては、新聞を社會に重からしめたが、洋行して彼の土の新聞を研究して歸朝してから、一層其の所信を發揚し新聞の面目を革新した。

石黑子爵

醫者で本業に成功せず却つて啓蒙行政家として成功した人が澤山にある。明治の初年には大村益次郎、寺島宗則が共に刀圭家から出で、大村は兵部卿となり寺島は外務卿となつた。其後自分の交つた人に三藪がある。石黑忠悳、後藤新平、長谷川泰の三人は、自ら藪と自白しながら大なる足蹟を殘した。三人の內石黑子爵に就いては、特に此文に追憶を錄するから、それは後に廻はして、後藤伯は板垣伯が岐阜に遭難の時に、名古屋の病院長として馳せ參じて治療した人で、それが他日國務大臣になつた。長谷川泰は西洋醫術の一般に行はれなかつた時に濟生學舍を興して廣ろく天下に醫師を供給した。自分自身秀でた醫術を施したよりも遙かに國家に功勳があつた。三人共互ひに懇意であつたから、石黑子の事を書くのに交渉があるので、追々其の逸事が出てくる。

石黑子は此頃九十六歳の長壽を保つて歿せられたが、今の國務大臣は乃ち子爵の長男である。子は越後の人で、其の少壯の時は鄕里に家塾を開かれたこともあつたと聞くが、恐らく寺小屋式のものであつたらう。其の門下の人に井上圓了がある。此人に甫水の號があるがそれは鄕里浦村の「浦」の字を分割した號である。鄕里に在つた頃の子爵に就いては、委しいことを知らないが、片貝村の豪家で、保命酒の家元として知られてゐる大塚益郎の家に寄宿した頃、帳面づけをした經歷があつて、其の帳面が今も珍藏されてゐる。其頃子爵は醫者の大家となるには十年の研鑽を要するが、それは待ち遠いと云ふので、曾ては接骨醫とならうと志したこともあつたが、信州松本城に佐久間象山を訪ふた時、其の志を告げたら、象山が其志の小なるを叱したので、それから奮起したと云はれてゐる。

子爵が象山を訪はれたのは出京の途次信州から立寄つてのことで、象山には屢々面會して其

都度教を受けて居らるゝ。其の詳細は子爵の隨筆に錄されて居るからこゝには略するが、子は確かに起身の端を象山の薫陶に由つて發してゐるのである。子爵は早くから軍醫となり、遂に軍醫統監にまで昇進され、陸軍の醫制や赤十字社などに大なる功績を樹てたが、日清戰爭の時廣島の大本營にあつた時、軍醫統監の大名を耳にして重患者が續々診察を請め來るものもあつたが、子爵は皆謝絶して診察せず、患者に向つて俺れは治療が下手だ、いらない命があれば診てあげてもよい、まだ自分の外に後藤新平と云ふヘボ醫者も來て居るが、それも命を惜まない人でなければ見せてはならぬと云ふたのを、隣室に居り合はせた後藤が聞いて苦笑したと云ふ逸事もある。子は醫行政の大家で治療醫ではなかつたのである。

或る時、後藤伯が石黑の私邸を訪ふたら、取次の執事が閣下は御不在だと云ふたので、後藤は癪に障はつて、「歸られたら後藤閣下が訪ねた」と言へと云ふて立去つたと云ふ逸事もある。こんな逸事に由ると石黑子は尊大の人であるかと云ふと、それは全く反對で極めて謙讓で、人に對しては圓轉滑脫で、人を下に置かぬやうな態度の人であつた。自分など訪ねても必らず玄關まで送り出し、外套などは必らず親ら着せらるゝ鄭寧な人であつた。

子爵は多趣味の人であつたが殊に茶道に趣味があり、多く茶器や書畫などを集められたが、

佗びと質素を旨として茶室を半圓庵と名けられた。其の庵號の由來は、茶室内のものは、すべて何から何まで價半圓のものだと云ふことを意味したもので、此の茶席には宮樣方にもしばしばお客にお招きしたこともあつた。

子爵は周到の人で、自分から人に寄せる手紙の複本迄取つて置き、一年の末には往復の信書の統計を作る人であつた。いつぞや獄中の象山が牢守に塵紙に書いてやつたものを自分に寄せて來て、子爵に跋を書いてもらつてくれと頼まれたことがある。子爵はこれに對し、いく度も稿を改め其都度手紙を寄せられ、其の鄭寧なことには一驚を喫したこともあつた。

子爵に講演を乞ふたことが自分として二度ある、一は文明協會で文化發祥記念會を催した時、子爵は上野公園に明治初年病院を設けんとした時、某外人の注意で、他日公園とするに障碍となるからとの注意があつて沙汰止みとなつた、いきさつを仔細に演說されたことがある。亦子爵は大橋佐平の記念に、私立の圖書館を設けよと其子に慫慂され、其爲め大橋圖書館が今も九段下に世益をなしてゐるが、そんな緣故でいつぞやの圖書館の大會に子爵の講演を乞ふた時は、藏書家岡本況齋の逸事を語られたが、子爵は老境に入つても音吐朗々として齒切れのよい音聲で壯者を凌ぐ愉快の辯舌であつたことを想ひ出す。

兒玉將軍がまだ士官學校在學中僞病をつかつて、お尻に牛肉を挾んで、痔疾と號したのを看破したのも子爵だと云はれる。子爵は長谷川泰と懇親の間柄で長谷川が常に自身を本郷の立ん坊と自稱したのを、子爵は面白いと興味をもつて「多珍房」の印を自刻して與へられたこともあつた。

早稻田大學の隣地の高い丘陵が子爵の別莊地で杜鵑を聞くの好適地として誇つて居られたのが、早大の學校が段々盛んになつて來ると時を報ずる鐘の聲で杜鵑は寄り附かなくなつたので、最初の頃しばしば苦情を鳴らされたことなどを思ひ出す。

子爵には種々の隨筆があつて短篇のものがいくつか出版されてゐる。「耄錄」と題するものだけ自分の記憶にあるが、どれもおもしろい逸事が書かれてある。晩年薄田貞敬に自傳を書かせられたが、子息が見て、こゝもかしこも削りたいと云ふて、折角脂肪のある部分を削られたので面白くないものになつたと筆者は歎聲を漏らした。

佐久間象山の遺事

象山は達識の人で、早く開國論を主張し、それがために守舊の徒に忌まれて横死した。吉田松陰が國禁を犯して外國船に投じた事件の背後にも象山がゐて、松陰に外國見學を奬勵もし贊成もした。その證據となる書簡は今も京都の尊攘堂に藏してある。象山は松陰の脫出に連坐して獄に繫がれたが、獄中にも空しく日を送らなかつた。當時は頗る外交困難の際で當局はひどく困つたが象山は「春秋命準」と云ふ一書を編した。その書に據ると「春秋」は一部外交の書である。どんな場合に處するにもこの書にチヤント手段方法が備はつてゐる。外交家は宜しくこれを準繩として事を處すべきであると多くの例を分類して、この場合はこれあの場合はあれと一目瞭然搜索に便するの書を作つた。象山の逸事を語るものは曾てこの事に言及しないが、自分はその寫本を有してゐる。國際公法などゝ云はずに春秋を外交の規範とした所に象山の見識がある。象山は立派な漢學者だが、多くの漢學者はその學問を殺してゐるのに象山は常に活用してゐる。曾て礮卦といふ書を著はして、易を以て砲術を論じたことがある。この書は象山

自筆で自分の交はりある醫家宮本仲氏が所持してゐたが、惜いかな大震災で亡びた。象山は漢學者であると共に外國の學にも通じてゐた。あの人の書齋には多くの原書が架上に並べてあつた。ある懇意の人に象山が世話になつたので、何か禮をしたいが、何か欲しいものがあらば、遠慮なく云ふてくれといふた。その人は沈思の末先生は澤山に望遠鏡を御所持だが、一ツ御割愛をと申出ると、象山は斷りをいふて、望遠鏡は澤山に所持して居らぬといふと、その人は象山の背後の架上の物を指し、あれほど澤山あるではありませんかといふたのには象山も一笑を催し、これは望遠鏡ではない西洋の書籍であるといふた逸話がある。當時の洋書は今よりも背が金でゴデ〳〵飾られてあつたので、これを望遠鏡と見誤つたのは無理も無かつた。象山のハイカラであつたことは書齋の模樣でも一端が窺はれるが京都で暗殺された時は騎馬であつたといふが、ハイカラの先生西洋馬具などを用ひてゐたので守舊家に睨まれたのかも知れない。象山の殺された折、懷ろにしてゐた紙入は内容と共に今も尊攘堂に保存されてゐるので、曾て一覽したこともあるが、二三の書類の中に一通女の履歴を書いた、なまめかしいものがある。それは妾を迎へるに就ての調書であると批判されてゐるが、この點も先生なか〳〵モダアンである。象山は曾て越後へ來たこともあつて、橋山堂といふ新潟の醫者の家に招かれ、石川侃齋の

畫幅の壁に掲げてあるのを見て新潟にこれほどの名畫家があるかと驚歎し、遂に割愛を得て旅宿に歸り、直に筆を把つて長篇を作り橋山堂へ寄せたその詩は侃齋をして九鼎大呂より重からしめたものであるが、その詩書は曾て自分の所藏であつて、阪口五峰の北越詩話に收めてある。象山は新潟へ來た折に、自分の家にも來た。そして家祖岱海堂の遺著「擡言仲氏易」十冊を示したが、象山は家祖の易學に造詣の深いことを激賞して、序跋二篇を書いてくれた。それは今も家に珍藏してをる。當時は象山の書など餘り珍重しなかつたらしく、他に二三枚書いたものなどは臺所の襖に張つてあつたことを思ひ起す。

臥虎山の故侯爵

臥虎山の侯爵とは故德川賴倫侯の事だ。賴倫侯は舊和歌山藩主で其の居城を臥虎山と云ふた。侯は此の城名を雅號として麓城と稱せられた。侯が臥虎が一字であつて欲しいと、種々の字引を引かれたとは、なか〳〵辛苦の事だが、ツイ搜がし出された。音が何と云ふのか忘れて仕舞

つたが、一字で臥虎の字があるとは珍しい事だ。侯は亦竹に趣味をもたれた。虎と竹とは緣因があるからの故でもあるまいが、好んで竹を集められた。あらゆる種類の竹と諸般の竹器をも多く蒐集された。或る時、汽車の同乘客に異樣な竹製のシガレット・ホルダーでシガーを喫してゐるものがあつたので、それが欲しくなつて、京都でそれを搜索すると運よく見當つたので、喜ばれた時、同伴の夫人に笑はれたことなどは時々聞かされた話である。

侯は多方面の趣味家であつたが殊に侯の趣味は科學的であつた。侯が天然紀念物保存會の會長として種々の行蹟を貽されたことも、其の趣味の一端を語るものである。いつぞや圖書館關係者多數と侯の大磯の別莊高麗園に招かれたことがあつた。此の別莊は山から森林帶をなして東海道の公道に突出して、其の森林の中に一條の道路があつて山の別莊に道引かれてゐる地形であるが、道の兩側四五町の處に、種々の雜草が繁茂してゐた。よく見ると皆な異なる草で日光を好むものは日の當る所に、日光を忌むものは日蔭に植ゑつけられて、水を與へるために處々に堀井がある。これが侯が此別莊を中心に三十里圏内の雜草を幾千種蒐集されたものであつた。唯に此道の兩側のみでなく庭園にまで續いてゐて、全く雜草の植物園の觀をなしてゐた。本座敷に通つて先づ目に入つたものは、襖に畫かれた繪が皆草花で、其の草花にそれぞれ學名

が書かれてゐた。尙裏山に登つて見ると、餘り廣くもない處であるが、樹木鬱蒼として深山幽谷に入つた趣があり、爰も水が湛へられて、大きな山椒魚が飼養されてゐるのを見た。この動物も追々絕えんとする天念記念物であることは云ふ迄もない。此の山中には茶店があつて田舍爺に擬した店番が居り、構造はすべて田舍の茶店を其儘に模造したもので、柱隱しに海拔五十幾尺とあるなどを見て一笑した。獵師の家などもあつたが覗いて見ると、熊の皮が敷いてあつて獵銃が壁にかけられ、宛ながら獵師の住居を髣髴せしむるものがあつた。これが大體侯の趣味を物語るものである。

侯の趣味は何と云ふても圖書に在つた。侯の心血を灌がれたのが南葵文庫で、あの文庫は一私人の文庫として匹儔の無い壯麗のものであつた。此の經營の爲めには自ら足を擧げて、歐西諸外國の圖書館を視察された。館藏の圖書の内には、紀州家累代のものもあつたが、江戸に關するものが特に多かつた。館の庭園には松浦武四郎が多くの記念木片を集めて巧みに構造した一疊敷の書齋を讓り受けて置かれたのも、侯の趣味にふさはしいもので、これが文庫の一名物であつた。此の文庫は公開されて閲覽者が常に堂に滿ちた。文庫では、時々名家を招いて講演會を開かれ又種々の物を陳列して學術を稗補する展覽會も開かれた。

侯は自家の文庫を經營されたばかりでなく、遂に全國幾千の圖書館を包羅する圖書館協會の總裁に推された。侯は自家の文庫經營中は謙遜して總裁の就任を聽き入れられなかつたが、其の經營の成つた後は快く諾された。此の總裁程名總裁は無つたと自分などは今でも追慕してゐる。侯は圖書館事業に殆んど全身を委ねられた。多くの總裁は虛位を擁するものであるのに、此の總裁は幾度か足を擧げて文部當局に苦言を呈する事をすらされた。侯は協會の幹部を相手に談笑することを喜ばれ、何かの會は必らず總裁邸に於てし、種々の御馳走に遇つて深更に及んで辭することが常であつた。多數の會合になると、侯は最も力を歡待に籠め、毫も費用を惜しまれなかつた。侯の別莊高麗園に會した時などは、百人程を容るる家を急設せられた事すらあつて、皆々勿體ない事だと感激した。侯は圖書館の大會が地方に開かれると、遠近の別なく、必らず臨席されて、講演された。東北の山形、北陸の新潟、九州の熊本、博多、唐津、等々、自分が隨伴した所も幾個所かある。斯樣の場合には例として盛宴を張つて土地の有志を迎へられた。侯の旅行に多くの費用を要したことは言ふまでもない。

圖書館の衝に當つてゐるものは館長始め貧乏に於ては決して引けを取らぬものであつたのに、統率者たる總裁は不釣合な名門富饒の人で、生涯熱心に此事業を輔導されたので、圖書館がそ

れが爲めに大なる發展を遂げたかを思ふと、總裁の恩惠を忘れんとしても忘れることが出來ない。總裁は晩年宮內省に奉仕して宗秩寮の總裁になられてから、公務の繁劇のため屢々お目にかかることを得なかつたが、在りし日の侯を偲ぶと、種々の事が思ひ出さるゝ。

侯はいろ〳〵の場合に、自身意匠を凝された、種々貴重の物を贈られた。旅行中には到る處寫眞を取られたが歸京されると、その寫眞を帙形の箱の蓋裏に貼りつけて記念として銘々に贈られたことも一再ならずあつた。吾々はそれ等に對して何の返禮をしたこともなかつたが、只一度あるのは、曾つて同人二十人が目黑の羅漢寺に會して心經の寫經をやつたことがある。和田萬吉氏が其肝煎をやつて表裝の上、高麗園へ招かれた時これを捧呈した。其日席を設けて銘々に何か書けと命ぜられた。銘々遠慮するから詮方なく和田君と相談して自分先づ紙の首端に高麗園雅集と横書し、和田君は總裁の長身を釋尊に擬して中央に畫し、會衆の面々を羅漢に擬して、それぞれの似顏を畫して、銘々をして、自分に似た人物に署名させて責を塞いだことがある。

侯は兩つながら喜んで受けられたが、今それ等の事を思ふと全く夢を辿るの思ひをなす。

小栗上野の事

幕末維新ゴタ〳〵の際に惜むべき人を失つたことは愛惜に堪へない。就中小栗上野を殺したことは如何にも無殘であつた。自分はナゼ殺したかに從來解けざる疑ひがあつた。今度上野の首級を埋めた普門院の僧が、上野の傳を著しそれを海軍省で出版したものを讀み、初めて了解を得た。此の著者は阿部道山と云ふて長らく上野の研究をした人で、其傳中には上野を斬つた原保次郎翁(貴族院議員)を訪ふて其頃の事を尋ねてもゐる。格別罪狀のあるのでなく、上野が舊領に引上げる時愛重した大砲を持こんだことが官軍の恐怖的誤解となり、罪滅しに罪狀を作つたものであるらしい。亦た其の大砲を覆ふて運搬したので、それが幕府の在金と誤解されて、こゝに金幣埋藏說が起り、著者はしば〳〵埋藏發掘の山河に接したことも書いてゐる。上野は勘定奉行で幕府の藏相であつたから、斯樣の浮說も起る筈である。兎に角幕末達識の士と云へば、上野以上の人は少ない。早く外國に使して彼等の兵備を觀、幕末財政困難の時、衆議を排

して横須賀に造船所を起し、海軍の礎をなした經歷は滅さんとして滅し得ざる功績である。上野は人に向つて幕府が潰れても土藏附の廢屋を渡したいと云ふたとあるが、國家の將來をも考へて此の事業を起したか、どうかは知らないが、兎に角幕府のため努力したことは確かである。幕徒で保身を得たものに勝海舟があり榎本武揚がある。其の保身を得た爲めに明治政府に重く用ひられたが武士道からすれば、臣節を全ふしたものでないと、當時福澤が正論を吐いてゐる。上野のごときは之れを豐公の石田三成に比すべきであつて、上野こそ臣節を全ふしたもので其の遺業は國家防衞の百年の計をなし、今日盛んに上野の死を惜むに至つたのは無理もない。

上野が幕末の難局に當つて軍務と財務を處したことは、大隈侯が維新當初の難局に方り外務財務を處したのと甚だよく似て居る。兎角達識でなければ群小等の異論を押し切ることが出來ない。敵の廟堂に多かつたことも上野と大隈は甚だ似て居る、その兩人が偶然親族關係を結ぶに至つたのも妙な緣因と云はざるを得ぬ。侯の夫人は小栗家の出であつて、前年越後に夫婦が遊ばれた時、新潟で會つて奉行として來た、先代の墓を展し其寺にも參詣され、上野歿後その遺族を一時かくまつた新潟の藤井寅一郎を延いて當時の模樣を聞かれた時は、自分が其の紹介者で藤井は余が妻の姉の嫁した家であつた。其時上野の妻は懷妊中であつたが、追々隱匿が

知れかゝつてくると、會津に遁れたが、產み落した女子は三井家の三野村に養育されて、矢野文雄の弟貞雄に嫁し其家を繼がしめたのは大隈夫婦である。傑士同士が斯く結びついたのも奇しき緣因と云ふべきで、大隈侯は常に小栗の惜しむべき政事家であつたことを賞揚された。

自分は小栗の功績を發揚すべく、往年蜷川新博士が小栗の緣者であるのに思ひつき、薩長功罪論を執筆せしめて、其內に小栗を評論してはと思つたが、其際はまだ時期が早くつて、計畫遂行が出來なかつたが、普門院の僧道山が著したものを讀んで、大いに益を得た。道山は知らない人だが、一書を寄せて同感を表したのも自分の喜びの餘りであつた。

田中正造

鑛毒問題で名を博した田中正造は衆議院に於て吾等の僚友であつた。田中が此の問題で議會に怒號することが每年一回若くは二回位必發の年中行事であつた。いつも美濃の卷紙に演說を書き取り、それを提げて演壇に上るので皆々田中の登壇だと云ふて、長々しい演說を忍耐して

聞いたものだ。いつも傍若無人に激越の語を吐いたが、彼れは不思議な精神的存在であつた。彼れは憤懣の餘り、狂人らしくもあつたが、熱狂彼れが如き議員は彼れを外にしては無かつた。自分は田中の熱烈の訴を大隈內閣が取入れて、古河の會社に百萬圓の除害工事を命じた時、改進黨から選ばれて委員三名の內に加はり（大村和吉郎岩崎萬次郎）實地視察に足尾鑛山に出張し、朝から夕刻に至るまで新工事を視察し、同時に全山の施設を見たことがある。此時は既に除害工事は政府の命ずるまゝ出來てゐた。坑內に入つて見たのも此時が初めである。時を異にして渡良瀨川流域の鑛毒地を視察したこともある、田中が怒號するごとき慘々たるものであつた。自分は田中とは懇意であつたが、同時に古河の會社に勤務して後に總務となつた昆田（文二郎）とも莫逆の友であり、自分等が山に行く時にも、種々斡旋したものは此人である。自分の關係は右の如く板挾みの觀があつたが、自分は公平の觀を持してゐた。鑛毒の害は飽迄除くべきだが、鑛山事業も中止すべきでないと思つた。實は鑛山に對して百萬圓の除害工事を命じたのは日本に於て創始の事であつたが、其の工事の出來上つたのを見ると、有毒の山には當然の設備であつて、山には一段の値打を添へた觀があり、どの山にも除毒のために斯る設備があつて欲しいと思はせた。これが我等の黨に對する視察の報告であつた。此の除害の工事の設計

を作つたものは（堀田達太郎）でこれも亦吾等の友人であつた。山主古河市兵衛とは吾等は妙な因緣から、實は亡友の岡山兼吉が其會社の顧問であつた事から、其門下の昆田も入社して後には理事長にもなつたが二代目の古河に授爵の御沙汰を拜したのは、大正天皇御卽位の時で、自分が時の總理大臣大隈侯に進言した結果奏請されたのであつた。田中正造の事を錄するに當りいろ〳〵の事を想ひ出す。

鈴木牧之翁に就て

越後の人で雪の爲めに名を成した人は、唯だ鈴木牧之翁あるのみだ。越後の雪深き處は長岡もあり高田もあり魚沼もある。而して長岡高田に雪の爲め名をなした人がなく、ひとり魚沼に名をなした人のあるのは、魚沼が、特に雪の深い故でなく、牧之翁が雪を廣く天下に紹介したからである。翁は風流を好む富豪の人であつたが、唯だ雪を掴んだ爲めに、其名は全國に擴がり、其著は遠く九州にも流布し、不朽のものとなつた。

翁は雪を全國に紹介するに幾んど一世を費やした。其著述は敢て翁の筆に成つたのではないが其材料は皆な翁の手に出で、此書を出版するまでに多くの歲月を費やし、勞することも亦少くなかつた。此著は設令ひ他人が書いたとは云へ、翁の著とするに何んの差支があらう。

翁は最初此書を著さん爲め、曲亭馬琴に囑し、後、山東京山に囑して終に成功を見た。翁は最初馬琴の筆で出さんとし、馬琴と深く交へた。其事は馬琴が翁に與へた幾多の長文の書簡に徵しても明かで、どの手紙を見ても數月若くは半歲間の自家の起居仔細に叙して其の懇情は親戚當ならざるものがある。翁はしば〳〵材料を馬琴に送つてゐるし、それを態々飛脚に托する序に、必らず何等かの越後の名產を贈つてゐる。就中自分が馬琴の手紙を讀んで覺へてゐるのは、カタクリ粉を贈つたことで、馬琴はこれを特に喜んだらしく思はれる。あたへ小量の割合に重量のあるものだが、飛脚も此荷物には可なり苦しんだであらう。餘談は扨て置き、馬琴は執筆は諾しながら數年を經るも、自家の著述に忙殺された爲め、終に果さなかつた。翁は遂に辛抱し切れず、京山に托すに至つたが、京山は馬琴の若かりし時師事した山東京傳の弟で、之に托したとて文句は無い筈だが、文人の間には妙な感情があつて、馬琴は餘り快よく思はなかつたらしいのを、翁がなだめて、其間を調和し、馬琴が案じた北越雪譜の標題を採ることにして京

山が編纂することになつた。これが此著の成功した所以である。

京山は囑を得て馬琴の如く放漫に年を送ることなく、繪をかく子息をも伴ふて越後へ下り、實地の風土を視察し、其の見聞を子息に書かせて草稿を作り、雪の話の外に種々の挿話を取り入れて、版刻してこゝに始めて翁宿昔の志が成つた。若し京山無かりせば雪譜は遂に世に出でなかつたかも知れぬ。

此の著述は一地方の雪の隨筆に過ぎないが、始に全國に流布して遂に第二篇も出すに至つたのは、京山の趣向が大衆に投じたからでもあつたらうが、まことに大成功で、雪と云ふものを全國に紹介せんが爲め翁の翼望が達したので翁は定めて滿足したであらう。

翁は雪國の富豪の家に生れ、風流を好んで自ら俳諧もやり、之れを以つて四方の文人とも交はり遂に北越雪譜を以つて名を博した。

越後に富豪が多く、詩歌を善くするものも少からずあるが、翁の如く、北越の風土を世界に紹介するの志がなく、ひとり翁をして名を擅まゝにせしめたのは、翁の努力の然らしめたことで、翁の功を多とせざるを得ない。

明年翁の百年に方り、翁の姻族より、翁に對する所感を徵せられたので、聊か所感を錄して

責を塞ぐとする。

山田奠南を憶ふ

私が明治十七年越後の高田に赴き、「高田新聞」の創刊に筆を執つた時、亡友山田奠南（喜之助）は私を餞して、長篇の一詩を寄せた。それは唐紙全紙に書かれ、書もよく出來てゐたから、高田で一幅に表裝して、常に編輯局に掲げてゐたが、いつしか失せて、後年思ひ出して搜したけれども所在が知れないので、せめては其の詩の書抜きがほしいと、創刊頃の「高田新聞」を調べてもらつて僅かに得た。奠南は單に此詩を私に與へたのみでなく、私の號を春日山に因んで春城と撰んでくれた上に、印まで刻させて贈られた友誼があるので、私としては此一篇の詩を棄去るに忍びない情がある。詩中に私の敢て當らない溢美の句もあるから之れを隨筆に收めるのは氣が咎めるけれども、こゝに收めて置かなければ、或は亦失ふ虞れもあるからと思うて、敢てこゝに收めることにした。其詩は、

送市島子謙之高田

子謙膽大而氣雄。決然振袂將遠行。酒三杯歌三疊。折柳其奈別離情。知君野性不可羈。
焉能屈身把青紫。知君久抱屠龍劍。一揮試截斷橫路豺狼與虎兒。同窗嘗講泰西文。
才子群中最推君。丈夫畢竟耻瓦全。奮爲清明策奇勳。長風萬里吹短髮。高歌一曲氣鬱勃。
去矣明朝官道春。風光卻屬激昂人。

私は此の詩を讀むにつけても、轉た亡友を憶ふの情に堪へざるものがある。此頃故紙を檢して大學の同窓時代共に向島の植半に對酌した時、自分に寄せた一長篇を得た、これも失はんことを恐れて玆に存して置く。

風颼々兮雨蕭々、紅櫻含林燈頻挑、吾友市島子謙氏、磊落風流此人是、同窓共講海外書、才子群中欲博譽、霜葉訪秋廢寺晚、春宵弄月花下宴、雖然交誼如斷金、丈夫曾恥說我心、此夜無端情轉切、悲歌慷慨氣壯烈、有時雄辯誅姦邪、青燈影暗鬼神號、有時快論當世務、凄雨打窓聲更高、話頭一轉又再轉、千緒萬縷無盡期、君家祖々多文學、雄視北方衆所推、我家風流傳衣鉢、穆々園門修緝熙、海內多故桑田變、男兒何爲應物戀、祖業灰塵不足言、猶喜燼餘有筆硯、一身天涯斷飛鴻、更驚感慨與君同、莫謂多清

才子病、最易斷腸是英雄、聞君一夜心中語、得知君家風采與我似、聊綴長句貽他日、
同情同感兄弟擬。

貧南の素性は記憶にないが、此の詩にあるが如く、富家に生れた故か、些しも大坂的臭氣がなく、漢字素養があつて、物には打算的でなく、自分とは氣の合ふ友であつた。官は初任權少書記官に任じ、後衆議院書記官長、司法次官に歷任した。

同獄の友人を喪ふ

帝國通信社の創立者であり、長く其社長であつた竹村良貞が歿した。自分はいろ〳〵の友人をもつてゐるが、共に牢獄に繫がれて、辛酸を與にした友人は唯だ斯の人のみである。互ひに舊夢を語る機會もなく、吾々に先んじて歿したのも私に取つて大なるショックで、今を距る五十餘年前私が竹村に迎へられて高田新聞を創刊し、間もなく高田事變が起り、其事に連座して種々の被告事件を生じ、八個月を刑期とする繫獄の不幸に出會つたことは今は幾んど人に忘れ

られてゐるが、自分と共に其事に關し何事も熟知してゐた人は竹村であつた。竹村は法律上、私と共犯者であつた。卽ち當時の高田新聞の社長は自分で、竹村は印刷人であつた。旣往の新聞條例では、紙面の上の責任は一に編輯人にあつたから、頻々たる被告事件は、編輯人の擔任で、都鄙の新聞社は豫じめ入牢の人を作つて編輯人に宛てゝゐたが、其後條例が甚しく嚴になつて、紙面に署名するものは、其名義の何たるに拘らず共犯を以つて論ずる事となり、吾等は此の條例の第一の犧牲となつたのである。

當時は官民軋轢時代で、又言論の壓迫が最高調に達した時であつた。條例の峻嚴を極めたのは治安を名として官吏を擁護することであつた。隨つて今時考へれば、一笑にも値しない事が、事官吏に關すると、それが官吏侮辱となつて刑法を以つて問はれた、吾等が頻々と罪を得たのも實は此の兒戲に類する如きものを取り上げて有罪としたのである。高田事件と云ふものも實は檢事補堀某と高田警察署長赤木某の立案した○○で、一時高田の天地を騷然たらしめたのは、福島事件や加波山事件などが前にあつて、それに擬した○○の國事犯事件であつたに過ぎない。事は自由黨に關してゐたが、斯る騷擾時代に起つた高田新聞は默過が出來ず、主義達ではあるが、自由黨の寃を論じたり、事件取調の經過を評したりしたのが、禍をなして繫獄の不

幸を得たことは返す返すも馬鹿々々しい事であつた。

吾々の被告事件は輕禁錮に値するものと重禁錮に當るものと三四件あつたが控訴の結果として刑期八ヶ月を獄中に送らねばならぬ事になつた。此の八ヶ月の兩人の道行は餘り簡單でなかつた。季候を云へば眞夏と嚴冬に係り、獄舍は新潟の獄と長野の獄に跨がり、兩獄の待遇に寛猛もあつて、最初は辛辣の地獄で、後は寛大の天國であつた。今當時を振り返つて以上を細說すると、高田の分監に四五日收容されて新潟の本監に移されたので、三日許り旅をすることになつた。當時はまだ鐵道の無かつた頃で、警官附きの旅であつた。此の旅行では到る先々警察のつめたい留置所に泊められたが、愈々新潟に着する前夜、護送の警官の厚意で、長岡の普通の旅館に宿した。實は高田を發する時多くの知人が送りにきて、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○翌日新潟の本監に入つた。

新潟の監獄に就て云ふべきことがいろ〳〵あるが、最も吾々をして驚かしたことは、高田事件の○○○○○○○○○○の被害者である赤木某がいつしか監獄の典獄となつてゐたことであ

る。陰險なる彼は、必らず吾等に何か報復するだらうと、心窃かに期したが、案の如く吾等に課するに外役を以てした。ある時は橋梁の架け替に使役され、或る時は土砂を運ばされた。何れも吾等の力に堪へないことであつたが、特に典獄の命だと云ふから訴へることもなく汗と涙とで辛うじて濟ましたが、隨分つらかつた。典獄の意は先づ吾等を苦しめて、而る後樂な仕事に廻はし以つて恩を賣らんとする肚であつたことは數日の後に分つたが、其時はかねて控訴した事件が原裁判を破棄して長野裁判所に移さるゝ時であつたから、其翌日新潟監獄を離れたが若し新潟監獄に八ケ月居たならば、少なくとも健康を害したに相違ないと思はれた。新潟監獄は其頃建築されて間もなかつた時で、なま木の松板で在監囚は皆疥癬にかゝつてゐた。疥癬に罹る位は覺悟であつたが、陰險なる惡鬼の配下に居ることが如何にも不安であつたが、幸にしてそれを離れたのは吾等の尤も喜びとする所であつた。

新潟の監獄を離れて一夜新潟警察署の留置場に宿つた。此の夜である、自分の室にゐた或る者が破獄を企てた。自分は後果を恐れたが、幸にそれを果さなかつたが、後に聞けば二三日後に脫監したそうである。吾等は又警察官に護送され長野まで數日の旅をやり、薄闇い冷かな警察の留置場に幾夜か宿つた。此の旅中に吾等は新潟監獄の酷使に憤慨して、政府に反抗の氣を

激成したが、同時に自愛の大切であることをシミ〴〵感じて、自肅の必要を竹村に說き、前途にどんなことがあるかを氣遣つた。

然るに長野監獄は吾等に取つては天國であつた。恰度此頃長野の縣知事は吾が郷里の先輩大野誠であつて、吾縣の人々が多く此縣に來てゐた中に、自分の親戚も可なりの地位にゐた。それ等の事が吾等に幸ひして、監獄では吾等に對して特別の待遇をやつた。控訴の判決があつて後までも清閑なる監房に人交へずに兩人を收容して眞夏を過させた。これも誠に仕合であつたが、遂には何か仕事がしたくなつて、自から進んで驅役に就いたが、獄內に寫眞工場があつて、自分は俄か寫眞師となり竹村と共に此の工場に移された。机二脚を與へられ、寫眞の用のない時は讀書をやつて暮らしたが、時には○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。追々寒くなるので典獄は私を呼び出し、椅子を與へて丁寧に挨拶の後自分に監獄に關する意見あらば吾等の參考に書いて呉れと囑せられた。自分は兼ねて其志もあつたので、早速に諾して一二の參考書を請ひ受けたが、それは萬國囚獄會議錄と云ふ尨大の書物であつた。此の囑託を受けてから、自分の室は事務室附屬の小使部屋に移され、竹村と机をならべて、自分の原稿を竹村は每日謄寫し、刑期の滿つる迄に脫稿したのは數冊の監獄論である。

長野監獄に移つて吾等の仕合に感じたのは、以上の如き理解ある待遇を受けた外に此の監獄は新潟のそれに比すると構造も羽翼制となつてゐて優等であり、木材が乾燥してて惡疾を生ずべき濕氣のなかつたことが何より仕合であつた、獄中の瑣談はいろ〳〵あるが、竹村と一夕談話を交へたら、定めし左の如きことが必らず談柄となつたであらう。それは目だけを擧げて詳説を略するが。

新年三日間、四人に芝居と相撲を許した事、芝居も相撲も全く本物で、芝居は土を運ぶ車附の箱を重ねて作り、幕を始め衣服は皆紙で作られてゐたが、平生どこに隱されてあるかそれが謎であつた。相撲も娑婆のものと些しも違はない銘々の工錢を祝儀に與へること迄本物であつた。吾等出獄の時送別會が催されたが、これも銘々の工錢で酒以外の物を買ひ集めて賑かにやつた。上田の富五郎と云ふ博徒の親分が入獄してゐて、自分が書物を敎へた關係から百ばかりの乾分が自分と竹村にいろ〳〵のサービスをやつたこと、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、等々。

これ等の事は其の境にあつたものが互ひに談ずれば興味もあるが、唯一の同獄の友人を失つ

て見れば、自分が談じても受答をする人もなく、亦自分の話を補ふ人もない。嗚呼、

野口英世博士改名の由來

日本が稀に生んだ世界的細菌學者野口英世博士は、惜いことに病菌の研究に斃れたが、博士が幼名清作を英世と改めたことに絡んで近頃面白ろい話がある。博士は福島縣の猪苗代湖畔の貧家に生れ、その小學時代から世話をした小林榮と云ふ人がある。此人は博士が外國に在る間、家に殘した老母に何くれとなく深切を盡した人で、自分もいつぞや遇つたこともあるが、此人が熱海に在る坪內博士を訪ふて云ふにはあなたのお若い時著はされた書生氣質の內に、野々口清作と云ふ放蕩の醫學生が出てゐるが、その名が餘りに野口英世の舊名清作と似てゐるので、お尋ねをするのだが英世を御存知であつての事かと云ふと、野口英世がもと清作と名乘つたことなど夢にも知らない博士は驚いて、野口博士は著名な學者で今日こそ名前を知るが、あの小說を書く頃は、そんな人の存在すら知らない自分が、その人を取り入れる筈はない。全く出鱈

目の偶中であると云ふと、小林も勿論そうでありませう。あの頃は野口はまだ十歳ほどの小兒であつたから無論御存知の筈はない譯だ。併し爰に申上げねばならんことは、あなたのあの小說が野口を玉成する端をなしたことであると云ふので、博士は不審顏して耳を傾けると小林は語をつゞけて云ふのに、野口が東京に游學中病に罹つて入院した時無聊を慰す爲めに、あの小說を飜讀すると端なく、野々口淸作が出た。それが己と同じいやうな姓名で、矢張り醫學生であり、且つ放蕩兒だとあるので、何となく氣にかゝり、眞逆自分のことでもあるまいと思ひながら、諷刺を受けたかに思はれて、クシヤ〳〵してゐる所へ、私(小林)が見舞に行つたので、段々譯を聞くと、これ〳〵だと云ふから、私も笑つてそんなに姓名が似て居るのを氣にするなら、一層名を改めるがよからうと云ふので「英世」と改めたのはその時である。考へて見るとあの小說中の同名異人が放蕩兒であると云ふに刺激を受けて、野口が發憤の端を發したかとも思はれると語つたので、靜かに聽いてゐた逍遙博士も案を拍つて喜び、その事實は全く立志傳中のものだと云ふたとは、熱海で逍遙博士から親しく聞いた話であるが、野口博士を識る自分には最も興味をそそると共に、書生氣質は自分等同窓の樂屋話であるとまで云はれて居ながら、旣に忘れ切つて野々口淸作と云ふ名があつたかどうかも覺えないのに、妙な事があつたものと

思ふた。坪內博士は野口の改名の次第を少年用の脚本に仕組まんと早く考案を運ぐらし、野口博士に就ていろ〳〵問はるゝまゝに語る所もあつたが、その脚本は出來ずに終つた。

佐藤功一博士

昨十六年の六月廿三日突如佐藤功一博士の訃に接した。博士は早稻田大學に深い關係があり早大が理工科を開設した時に、外國で研學を卒へて來學した人で、建築には一大權威であり、多くの都下の大建築で博士の手を經ないものはない位で、早大の諸建築は勿論悉く博士の設計に成つてゐる。博士は頗る日本趣味の人で、建築にも日本趣味が採用されてゐる。博士は多才多能で、畫を書き俳句を詠じ彫刻もやり、到らざる處なき能を有し皆堂に入つた。自分は長い間趣味の友人であつたが六十八歳で歿したのは眞に惜むべきである。想ひ起す大隈老侯の逝去された時、余は葬儀を總管し、君をして日比谷の告別式場の結構を司らしめたが、君の設計は細かに失する所があつて、或る部分を撤せしめなどした。君は不眠で此の工事に努力した。時

は嚴寒の際で、君は過勞の爲め日比谷で咯血して斃れた。自分も場に在つたから直ちに見舞つて見ると、君は某茶亭に横臥して居り、其家の土間には血痕未だ其儘に淋漓として存し、凄愴の感に打たれた、漸やくにして君の細君が來たから自分は退いたが、君の運命は頗る危殆であつたので、ひとり心配したことであつた。幸ひに君は其後健康に復したが、君の宿痾は往々君を惱ましたが、今度は別な病症であつたらしいが、體質が肥滿に過ぎたので、危險の身體であつたが、まだ前途のあるのに逝去されたのはひとり早大の損失のみでない。

伊原青々園

突如伊原敏郎の訃到る、伊原は青々園と云ふた。劇道で名を博し文學博士を贏ち得た、劇で博士となつたのは此人が最初であらう。自分は劇に趣味を有つてゐないが、近かく十年ばかり安田推園の團樂に毎度交つた。此人は都新聞に筆を把り、同新聞の劇評は此人あるが爲め重きをなした。氏は晩年酒を癖して茶道の人となつた。劇出の關係から出物にも趣味があつた。年

は七十二と云ふが、喉頭癌で歿した。以上書き了ると、伊原の懇意の人が左の如く語つた。それに由ると本人不治の病に罹つたことを知らず、一向平氣で死ぬ一二日前まで客に接してゐた位であつたと云ふ。伊原は松江の人で第一高等學校に在學中は、上田敏博士と同窓であつたと云ふ。早くから劇評を書いたが、あの人を文壇に紹介したものは、齋藤綠雨であつたらしい。隨分貧乏時代も續いたが、ながく精力絕倫で一時は三人の妾を蓄いたと云はれ、晩年も妻妾が一家に居つたそうである。酒を癖てから茶を好み、それが病因をなしたかに思はれる。二度目の妻が經營につとめたので、二十數軒の貸屋をもつてゐたと云はれる。酒を豪飲しても翌日は平氣で執筆するので、毎夜二時三時迄、雜筆するが常で、いろ〳〵の著述を企だてながら、纒めずに半途に歿したのは惜むべきだ。

江部淳夫氏

江部君が私の還曆を祝する爲め他の友人と共に紅葉館に私を迎へて、其席上祝賀の辭を述べ

られたのは既に二十數年前の昔となつた。爾後其會は繼續して今も私の誕辰に一年一回、開くことになつてゐるが、その會の發起人たる君の早く歿して、私が君に就いて追憶文を書くことになつたのは洵に意外の事で、老少顚倒を思ひやると、殊に感慨に堪へないものがある。江部君は元僧籍にあつて名を淳心といふた。淳夫といふのは後に改めた名である。私の宗家が多額納稅議員として初度の貴族院議席を有してゐた頃、私は勸めて在職紀念として、學生の養成をなさしめた。其時募に應じて越後から東京に來たのは乃ち江部君で他の二三子と共に、大學に入り其の業を卒へしめたのは、斯る因緣に由るのである。君は勤勉で學才があり、常に同輩を拔きその成績頗る見るべきものがあつた。君が卒業近くの恩師は建部豚吾博士で、今尙存命である。君、業成つて後支那の雲南に赴き、一年ばかり教鞭を採つたこともある。其の歸朝するや、或る豪家から養子にと望まれ、私も多少斡旋したこともあつたが終に成らなかつた。併し君は其後、古河鑛業會社の長老蒲生氏の女を迎へ、一女子を擧げられたのは君の幸福であつた。君が熊本の高等學校の教授として赴いたのは、妻帶の後で、自分は圖書館協會の用で、德川總裁を奉じて初めて熊本に入つた時、二三玩具を齎し君の居を訪ふた事を想ひ出す。

私は熊本で君に招かれ或る酒樓に飲んだ一夕の歡は殊に愉快を覺えて、今も忘れ難い趣があ

る。此夕は深更まで舊を話し身の天涯にあることを忘れたが、實は他鄕の酒樓に相會したのは、これが初めで又其の終りであつた。其の後、土佐に高等學校が創設せられ、君は初代の校長として赴任した後は、相會する機會もなく、遂に重患に罹つたことを聞きしも行く能はず、其訃を聽くに及んで眞に斷腸に堪へなかつた。

天、若し君に藉する幾許の春秋を以てしたら、君の才學は學位をかち得たのみならず、學問上に傳ふべき多くの業を貽したであらうに、如何にも惜しいことであつた。君が東京に在るや、常に宗家とわが家の間に往來して家族は皆、家庭の人と許してゐた、私自身も心祕かに吾が身後を托すべきは斯人と期してゐたのに、何事ぞ君は私に先立つて去つた。

樋口一葉全集の刊行に際して

樋口一葉全集の出版に際して、自分は先づ推奬文を書く資格があるかと自問自答して見て甚だ覺束ないと感じたが、併し女史と自分と全く緣故が無い譯でもないと思ふた。それは何かと

云ふと、女史は亡友坂本三郎と深い關係があつた（此人は早大が早く生んだ法學出身で、司法官を經て晩年秋田、山梨二縣の知事となつた經歷がある）。或る時坂本が語るのに、私は一葉と許嫁の間柄であると云ふた。此頃一葉は既に文壇に相當名を出してゐたから、自分は一場の戯談として聞き流してゐたが、其後女史の日誌の出版されたのを讀んで見ると、許嫁の事が委しく書かれてあつて、或る事情の爲め婚約が成立しなかつたこと迄筆が及んでゐるので、坂本の話が事實であることも知り、それが動機で女史の作のいくつかを讀むと共に女史の境遇も知り得たが、女史の作を讀んだ即時の感を率直に云ふと、これは下に置けない文だと先づ驚き、自分が滅多に許さない敬服の二字を以て評した。それも其の筈間もなく女史の小説は當時の文壇の雄と云はれた紅葉、露伴の兩文豪と雁行の地位を占むるに至つたからである。

此の才媛は筆にこそ天惠があつたが、物質的には惠まれず、家庭は常に窮苦の間にあつて女史は一時行商までして家計を扶けた。多分其の作品に或物は生活の糧となつたのであらう。想像するに彼女は幾度か深夜暗燈の下に血と涙を搾つて、筆を走せたであらう。女史は生涯嫁せず清白を守つて墓に入つたが、眞に同情すべき哀れな境遇で、其の歿年の二十五才であつたことを思ふと涙なきを得ない。併し女史は此の短生涯に全集五冊をなす程の多作を遺した事を思

ふと其の短命であつた原因も自から分るであらう。

女史の文章に就ては夙に世の月旦で定まつてゐるから吾々の呶々を要しないが、大概女流の文章は器用に書かんと爲ても基礎的素養に乏しい爲め、或は冗慢に流れ或は纖弱に失し、才媛などと稱せらるゝ女流の筆には、往々衒氣が潜んでゐるが、女史の筆は此等の弊は絶對になく、眞率流露が其の特色とも云ふべく、小説の意匠の如きは敢て奇を弄せざれども、描寫が周匝で意到り筆隨ふ所に讀者を魅するの妙がある。凡そ女流の文には其の女性である爲め幾パーセントか割增をして評價する傾きがあるが、女史の文に限りては斯る世辭的割增は無用である。女史は實に近世に於て女流作家中群を拔く明星とすべきであらう。不幸短命で終つたが、其の作品は今次發行されたこの全集に由り、長く後世に傳はるであらう。

山鹿素行

つれ〴〵に山鹿素行の傳を讀んで見た。素行は德川家光時代の人で、慶安に由井正雪の事件

があり、明暦には江戸に未曾有の大火災があつた。此頃まだ大阪陣より餘り程經ぬ時で、軍學などが行はれた。由井正雪も軍學者であつたが、其の亂を企てるに當り、未然に鎭壓された。山鹿素行も亦軍學者であつて、其門に入つた人に有力な大名が少からずあつた。徳川氏から見れば危險人物であつたに相違ない。由井正雪と思ひ合はせると、危險視せざるを得なかつたであらう。山鹿は由井の如き叛心は無つたが、徳川氏には謀叛以上に恐るべきものがあつた。山鹿は日本の國體を正しく解して、國體明徴を主張した人で、この精神は徳川政權を存續するに大なる敵であつた。彼れが多くの大名を門人に持ちながら罪を得たのは此の爲であつた。彼れは當時徳川氏の城砦とした朱子學を排し、儒者の空論を斥けて實行を主とした。其の幾多の著書は極めて穩健のものであつたが、官祿を食まざる身分として其の說く所は自由であつた。彼れが自由意思で書いた聖教錄には、當時の學者を怒らしむるものが多かつた。又徳川政府の忌諱にふるゝ所も絕無ではなかつたので、彼れは赤穗の淺野家にお預けとなつた。淺野家には素行が以前仕へたこともあり、淺野侯は門人でもあつたので、之れに預けたのは頗る寬典であつたが、格別罪もなくして十年間赤穗に貶せられたのは、此人の不幸であり、又當時の幕府が此人を如何に憚かつたかゞ思ひやらるゝ。彼れはそれほど學識品操に於て當時勢力があつたので

ある。國體明徴を說いたものに、橘以南があり賴山陽があるけれども、それは皆幕府の末路に屬し、最も早く唱道したのは實に山鹿素行である。

河村瑞軒と越後

河村瑞軒は大なる事業家で其の事業の一班は新井白石の書いた奥羽海運記や「幾內治河記」などを讀んでも知れる。奥羽の海運を開くには越後にも多少の痕跡を存してゐる筈だが、それは僅かに新潟市史に左の如き記事があるに止まる。

〔新潟市史〕新潟市役所藏御用留

寬文十一亥年十二月二十一日、御城米船破損之節

湊取扱方の儀に付御公儀より被仰出候御書附

覺

今度羽州延澤、大山、漆山領八木御城米として江戸へ相廻候間、難風の時分浦々にて兼て被

仰付のごとく相守べし。萬一船破損せしめ濡米これあるに於ては、紛失せざる樣に之を取揚べく、浦邊の所々に、河村瑞賢手代差置候間手寄の所へ早速注進致し、之を相渡すべく、浦役有之湊たりとも御城米船の儀に候間、之を取るべからず、惣て何方より相廻候御城米たりとも難風又は船破損の節精を入べし。猶御勘定所より可相觸者也

寛文十一亥年十二月二十一日

内　膳
但　馬
大　和
美　濃

江戸より羽州まで
羽州秋田より江戸まで
浦々湊中

右の新潟市役所御用留は特に越後關係の河村瑞賢史料とは云へぬが彼の海運關係史料として見逃すことの出來ぬ貴重なる文書である。

米の取扱保護に就て斯る文書が存してゐるが、これまで瑞軒と越後に就て他に何も文獻が無

つたが、此頃雜誌高志路に田中臺一の記する所に據ると、瑞軒は高田藩の爲めに殖産を指導して鑛山採掘、新田開墾、港灣修築等を興した事蹟が擧つてゐて、越後には容易ならざる關係のある人であることを知つた。詳細は高志路四月號に讓るが、河村が此等の事業に携つた頃の高田の城主は、松平越後守光長で、德川氏の三家に次ぐ親藩で其の家老に小栗美作守が殖産興業に熱心であつた爲め、河村瑞軒もそれを扶けて種々畫策したのである。瑞軒が光長の懇篤なる招きに應じ、江戸から高田に來たのは、延寶二年で卽ち彼が西廻海運に成功した直後で、正に五十七歲、高田に止まること三ケ月と云はれてゐるが、マサカ三ケ月ですべての事業が成功したとは思はれない。多分三ケ月が序幕で、隨分長く高田藩に關係があつたのであらう。鄉津灣の築港、八階山の銀鑛採掘、新田開拓等、これが爲め高田藩表高二十六萬石が、內實三十六萬以上に上つたのは河村のお蔭に由るものである。

吾鄉の大數學家

前年、元帥海軍大將伊東祐亨伯が、越後小千谷に有名な算法家佐藤虎三郎なるもの〻あるこ

とを石黑子爵に語られたのが動機で、佐藤の夥多ある算學の著述の內から、特に「算法圓理三台」が引き拔かれて、其の內容の價値を專門家の審査に待つことゝなり、三上義夫氏は學士院に於て審査の結果、此書は本邦諸算書中代表的のものであつて、同時代の外國人に之れに匹敵する程の研究をなせるものなしと判じ、頗る學界を驚かしたことがある。此の算法書は小千谷の富豪西脇濟三郎氏に因つて覆刻され、當時學界に頒たれたが、私は數學に暗いから等閑に附し去つた所、此頃吾が鄉里越後の水原に石川坎山といふ大算學者があつて、門下生は四千人を數へたと云ふ事實を、或る記錄に讀み、石川と此の圓理三台の著者佐藤の間に何か脈絡がありはしまいかと、急に思ひ立ち、先頃歸省した際に、新潟の圖書館から圓理三台と、それに附屬する、著書の傳を借り受けて調べて見ると、果して大なる脈絡があり、佐藤は石川の門人で其の高足で其の後繼者であることが知れ、石川坎山の偉さが益々明かになつた。

石川坎山の事は算學史に一應の經緯は書いてあるが、委しいことは今鄉里に知る人がない。唯私の外戚で叔父に當る熊倉美雅といふが、矢張り坎山の門人で、算學に精しかつた。此人が先師の門人を扁額に錄して鄉祠八幡宮に獻じた時の題識の稿が存してあるので、それに聊か坎山の事がある。乃ちそれに據ると、坎山は諱は和、小宇倉八、後七右衞門と稱した。江都に遊

び、西磻長谷川氏の門に入り、留學十七年、備さに算學の蘊奧を極め、其晩年業を受けるもの四千人に上り、千葉胤秀、佐藤解記（卽ち圓理三台の著者）は實に天下の達算と稱せられたとある。更に圓理三台の著者の傳の內に坎山の事歷が收めてある。それに據ると、坎山は初め業を日下誠の門人望月藤右衞門（初の名鐵太郎）に受け、後初代長谷川善右衞門に學ぶとある。此初代が卽ち西磻であつて、二代長谷川は初め坎山に師事し後に長谷川を繼ぐに至つた。長谷川氏の學統譜には坎山は別傳の筆頭に置かれてゐる。坎山が當時算學界の牛耳を取つた長谷川派社中に如何に重きをなしたかゞ窺はるゝ。坎山は文化十三年より六年間四方を周遊して各所の算學家と學術を鬪はしたと云ふ事、竝に嘉永三年に歿した事、共に佐藤の傳によつて知る所である。

扨て佐藤虎三郎は、初め諱を忠助と稱し後に解記と改め、字は子精、雪山と號し、數齋、通機堂等の別號もある。文化十一年正月に生る。家は代々金澤屋菊右衞門と稱し、縮布商であつた。雪山は次男であつたので、分家して藥種商を營み、傍ら家塾を開いて學徒を敎授した。雪山は不幸なる人で屢々妻を失ひ自身も僅かに四十六歲で安政六年六月に歿した。併し非常の精力家で其著書は幾十種の多きに及んでゐる。坎山の門に入つたのは天保五年で、師より早く其

の學力の非凡を認められ、坎山の師の歿した折は伴はれて墓參の爲め江戸に出で、坎山より諸大家に紹介し、後に自家の後繼者と定めた。此の兩人は共に吾が縣の誇りとする人物である。

淡窓と旭莊

廣瀨淡窓と其弟旭莊は關西に於ける詩人の雄なり、淡窓の詩は淡なるに長じ、旭莊は濃に長ず、旭莊自ら兄弟の詩品を評して云く、兄の詩は高野豆腐の如く、余の詩は鰻の蒲燒に似たりと、評し得て妙を覺ふ、旭莊又云く、高野豆腐を煑るに淡に失すれば味を失ふ、鰻を調理するに濃に過ぐれば俗に墜す、調理妙を得ること難しと、これも亦穿ち得て妙を覺ふ、吾れ旭莊の詩を讀む毎に、才氣橫溢、其人を想ふに、風采颯爽、淸俠の氣眉宇に溢れんと、何んぞ圖らん、其人矮身近眼、村氣掬すべしと。

誇大妄想狂と思はれたヒツトラー總統

文藝春秋の七月號に松波仁一郎氏の「獨乙の最惡時」と題する記文中にヒツトラー總統の在野の時の事が錄してあるが頗る面白ろく感じたから、こゝに拜借して其の一部分を拔書する。これはヒツトラーが囚人として裁判所に引出されて取調べを受けた記事である。此の裁判長は松波の同窓法官である。ヒツトラーは世界大戰の揚句獨乙が敗れた後で、其頃兵卒であつたヒツトラーが戰敗に憤慨して善後の爲め政府を顚覆せんことを企だてた。それが爲め逮捕されて法廷の取調を受けた、其時松波は其裁判長たりし人を訪ふて、被告の申立を聞いた一端を陳べてゐるが、ヒツトラーの申立は裁判官を驚かして國籍を問へば國籍をもたぬと云ひ、職業を問へば國家建設業と云ふたので、裁判所では、妙な奴だ、或は狂人であるかも知れない、誇大妄想の狂人でもあらうと、裁判所でも妙に考へてゐたと云ふのが、裁判官が松波に語る所であつたと云ふがそれが則ち今日の英雄ヒツトラーで、獨乙敗戰の後十七年を經て復讐戰と先づ佛蘭

西を降し、更らに英國に及んでゐる。當時裁判所に於て此囚人が揚言した法螺は、着々事實となつて、今日あるを致した。英雄の法螺は空言でない一例とするに足る。

ヘルン

ラフカデオ・ヘルンは研究と著述に專念して交際などに時間を費やすを厭ひ、人と交はることを好まず、強いて人が面會を求めると、冒瀆だと云ふた。横濱で懇意の關係があつた、マクドナルドが人に賴まれ兎もすると人を紹介するのでヘルンは之れを厭ひ、或る時寄せた手紙の内に、マクドナルドを責めた言葉に、君は譯もなく瓶の栓を拔く人だと云ふた。これは面白い言葉で、折角蘊蓄した思想や文藻は沸騰性の液體の如きもので、栓をぬけば發散してメチャメチャになると云ふ、意を寓しておるのだ。シャンパンでもビールでも一旦ぬけば氣が失せて仕舞ふ、矢鱈に栓をぬかるゝは罪なことだと。

キチナー元帥と陶器

上田恭輔氏の陶磁研究を讀んで教へられることが少なくないが、卷末にキチナー元帥の事が書かれてあり、それがおもしろいから、其の要略を左にしるす

此の元帥が英國皇帝の御名代として支那日本に來た時、奉天では案内役が上田であつた。此元帥の趣味は陶磁であつたので、到る處名器を欲しがつて上田を困らせた。奉天で清帝の御物を見た時垂涎のものがあつて、元帥は上田に向つて一品位貰ひたいと言ひ出されて困つたが、コンナ位置の高い人だから支那でも贈ることにしたが、それは貴重の頗る大きな花瓶で、之れを荷物として運ぶに、元帥は坐邊より離すことを肯んじないのに、滿鐵も閉口したと云はれる。朝鮮でも李朝のものをならべて見せたが李朝ものには望がないので貰はれる難を免かれたと云はれる。日本で難を蒙つたのは住友家で、住友と岩崎などの富豪が其の秘藏のものを見せ、マサカと思ふてお望のものは差あげると挨拶をしたので、最も貴い住友家の青磁

の香爐を拔き取つたと云ふ。上田は此の人と同趣味であつたので、道中常に陶磁の話が出て、よい物を見れば欲しがり、やらねば機嫌を損ねる、極めて厄介ものであつたが、しかし鑑識に富んでゐたと云ふ。

キチナー元帥は英國で勳功の大なる人だが、世界大戰に獨の潛水艦の襲擊に罹つて死んだ人である。

釋尊の風貌

釋尊は如何なる相貌の人であつたかと云ふと、傳はらないと云ふのが本當である。釋尊が涅槃に入つてから幾百年を經て、ギリシヤの藝術が印度に入つて、こゝに始めて釋尊の像が、ギリシヤの哲人ソフヲクレスの相貌を摸して、作つたと云ふのが始めで、その前には釋尊の像と云ふものは絕對にない。但だ釋尊の經歷の彫刻などに傳つてゐるものは、いくらか掘り出されてあるけれども、釋尊の身體に關するものは避けて現はしてない。これは崇敬の餘りことさら

避けたものであらう。其の經歷を現はしたものは菩提樹があり、蓮花があり、鐵鉢があり、石座などがあつて、これが釋尊をシムボライズしたもので、泥中より蓮の生へ出たものを釋尊の誕生をシムボライズしたものと云はれ、鐵鉢でも石座でもそれが釋尊の生活をシムボライズしたものと云はれてゐる。釋尊の涅槃の圖の如きは、いつ頃から畫されたか知らないが餘程後世のものであらう。

酒豪樽次の事

世界の酒顚傳に收めてもヒケを取らない我邦の酒豪は水鳥記の地黃坊樽次其他の酒徒であらうが、樽次の事蹟などは嘗て調べたこともなかつた。後世樽次の酒戰に倣つたものもあり、隨つて水鳥記に擬したものもあるが、往々架空のことを誠しやかに書いて好事家に一杯喰はしたものもある。德川期のノンキ時代には戲むれの宣傳が行はれて、蜀山の如き通人ですら、眞に受けてその隨筆「一話一言」に收めてゐる位だから、地黃坊樽次の酒戰なども、ウツカリ信じ

られないと思つたこともあつたが、樽次は實在の人で、酒戰も事實であることが知れた。

森銑三氏は、雜誌「集古」に、享保十一年三休子といふ人の「梅花軒隨筆」を引き、委しくこの人の事蹟を書いてゐるが、その大要を擧げると、次の如くである。

大塚の地黃坊樽次は、茨木春策といふ儒醫で、酒井雅樂頭忠淸に仕へ、三百石を領した。儒は林道春、醫は吉田策庵に學んだので、師の名を一字づゝ取つて春策と名づけたといふ。武州大塚の屋敷で左傳を講じた時、江戸中の多くの學者も聽講したといふほどの大儒であつたが、元來酒井家の主人が代々下戶で、酒を呑む家來を喜ばなかつたが、春策ばかりは例外として扱はれた。ある時主人より春策に經書に就てお尋ねのあつた時、春策は不快の面持であつたのを、主人公早く看て取り、例の持病が起つたのであらう、早く酒を飲ませよと左右に命あり、一升鍋に酒を沸かして與へたのを、御前にて一氣に飲みほし、それより御質問に對し、水の流るゝ如く辯舌爽かに、お答へに及んだ。病用の時も、病家に就て先づ酒を望み飯椀に五六杯傾けてから脈を案ずるのが例であつた。

春策が豫て武州川崎大師河原稻荷新田の庄屋池上太郎左衞門底深といふものが大酒であると聞き、十三人の酒友を伴ふて、川崎に赴き、二三日逗留して長夜の宴を張つたのが乃ち水

鳥記の著のある所以で、その席に列した八王寺の百姓喜太郎こそ水鳥記にある醒安の事だ。

この者水野隼人正忠直の厩へ、常に馬草を運びくるものであつた。主人この百姓の酒豪であることを耳にし、ある時呼寄せて家中の上戶に相手をさせ、喜太郎に强飲をやらせたが、喜太郎は醉後席を起つて居らなくなつたから、搜索したら厩にうづくまつてゐたので、どうしたと尋ねると、折角の御馳走醒ましてはならぬとコンナ靜かな處にジツトしてゐたが、もはや酒は醒安だと洒落をいふたとある。

以上は梅花軒隨筆の記事を摘錄したのだが、森氏の考證に據ると樽次の姓は茨木ではなく伊原城が本當で春策は春朔であらねばならぬといふてゐる。その享年は不分明だが歿年は寬文十一年四月七日で遺骸は谷中三崎の妙林寺に葬られた。水鳥記はさる大名に請はれて書いたもので、寬文七年五月京都で出版され、又江戶にも出版されたが、菱川師宣の繪のあるのもある。樽次には三人の子があり、妾腹の子が豪酒であつたので蜂龍の大盃はその子に讓つたと梅花軒隨筆にいふてある。爰に附記を要することのあるのは小石川戶崎町の祥雲寺に「南無三寶あまたの樽を飲みほして身は明樽にかへる古里」と刻した墓がある。多くの書物にはこれが樽次の墓とされてゐるがこれは誤りで、矢張水鳥記の酒徒の一人である、三浦新之丞樽明の墓であるのが

混じたのである。この人は小笠原信濃守に仕へたもので、墓には歿年を「延寶八庚申正月八日」と刻してゐるから、樽次でないことが直に知れるのである。

外人に日本の女性を語る

日本ほど立派な女性史をもつてゐる國は世界何れにもないのだに、それが深い雲霧に鎖されて一向に發揮されない。曾てある外人に日本の女性を語れと言はれた時に、これほど答に苦しむものはないと感じた。外人は多く日本に誤解を抱いてゐるが、日本の女性に對しては最も多く誤解を有してゐる。彼等は、日本の女性と言へば、直ちに藝者のことを言ひ出して、さも藝者が日本女性の代表でもあるかの如く考へてゐる。

外人は一概に思へらく、日本の女性は久しく男子の壓迫を受け、屈辱其性をなし、無學、無藝、無氣力で、ただこれ産兒の機械に過ぎないと。今日こそ婦女子が頭を擡げ出したから、いくらか實相が知れて來たやうだが、外人に本當のことのわかるまでには、まだ少からぬ年月を

要する。

二三年前人見孃が陸上競技で世界を壓倒したのを見て外人は驚異の目を見張つたが、兎もすると、それは偶發のことの如くに思はれてゐる。實は外人をのみ咎め立てする譯には行かぬ。日本人ですら日本の女性美をよく知つてゐぬといふのは、日本の女性は久しい間ネガティーヴの教育を受け、內を治めることがその任務とされ、表に現はれないことになつてゐる。どんな良妻賢母でも、內に潛んでゐては評のしやうがない。又潛んで出しやばらず、己が長所などを外に現はさないことを以つて高い婦德とされてゐた。

長い間の釋敎や儒敎や武士敎育などが、陶冶に陶冶を重ねて、一種固有の德性を涵養したが、これが頗る複雜で、一寸說明に困るが、大體日本の女性の性格は西洋のと異つて、陽性でなく陰性であつた。ポジティーヴでなくてネガティーヴであつたから、一向に目立たない。日本の女性ほど損の立場に居たものはないのである。

しかし、隱れて當然の任務を盡すものは實に貴いものである。打算的でない所に神の如き尊さがある。日本婦人の如く、嫁した家を、己が生家より、より以上に大切にするものが何處にあるか。良人に對して淸節を守り、舅姑に事へて從順であるものが何處にあるか。兒女を撫育

するに全力を注ぐ極端の母性愛が何處にあるか。武家時代には良人を勵ますため自害した妻は少からずあつた。良人の變節を怨み一家の恥辱を慨して自殺した烈女も矢鱈にあつた。そして事に殉ずる婦人は名聞のためにするのでないから、家の名譽のためその事の現はるるを欲しなかつた。隨つて書置一通でも傳はらないが、しかし、奥床しい貴い精神がそこにあるのだ。

以上のごときことは、日本の家庭組織や封建制度を知らない外人にいくら說いても到底解り兼ねた。私は外人の問に答へて日本婦人ほど勤勞に堪へるものはないと言うた。農村に稼ぐ男女の勞働ほど勤勉のものはないが、女子は勤勞に於て決して男子に讓らない。そしてある勞働には男子よりも女子の方が大なる役立ちをなしてゐる。其例としては海中に身を投じて魚介や海藻を捕獲することが女子に限られた作業であることを言うた。婦人と宗教に就ての問に對しては、中將姫を擧げた。あの純眞の妙齡の婦人は、風波の多い貴族の家に生長して、生さぬ母に虐げられたが、それにも拘らず、佛の化身とまで言はるるほど美德を顯はした。この事蹟は支那にまで聞えて、繪卷物にその一代記が圖され、それにはこんなことが書かれてゐる。このやうな貴い婦人が支那に生れず、海を越えた向う岸に生れたことは實に羨ましいと、極度の讃辭を呈してゐる。耶蘇教の盛んであつたその昔——日本の女流が如何に殉教に壯烈であつたか

を、いろ〳〵の事實で語つたが、この點だけは外人も聊か心得てゐて直ちに首肯した。

更に文藝に就ては、昔の宮廷には優れた女流文藝家の多くゐたことを擧げた。これ等の女流はみな詩人で、咄嗟に和歌の應酬が出來、これ等作家の書いた、七八百年前の文藝書が不思議に多く存在してゐることを語つた。當時宮廷の書記は女流が司り、天子の仰せを蒙り、いはゆる女房消息を書いたものはこれ等の女流であることも言うた。殊に紫式部の「源氏物語」は大部の續つた小說であるが、あれほどのものが一時代の世界の何處にあるかを誇つた。他の藝術方面では、女優が舞臺に上つたのは恐らく日本が始めであらうと言うた。それは足利氏の末にお國が初めて歌舞伎を演じたのが日本の演劇の始めであるが、世界の演劇史に於ても女優の舞臺に上つた嚆矢であらうと說いた。

果して私の說いたことが外人に理解されたか、實は甚だ覺束ない。一體東洋の女性は西洋のそれと全く異なる習俗に養はれたものだが、其内にも日本女性ほど複雜な薰化を受けてゐるものは無い。極めて其の大略を語るとしても實は容易でない。元來日本には固有の祖先教があつて、祖先を崇拜し、其の血統を貴び、家の名譽を何よりも重しとする風教がある。それに加へて儒教が入つてくる。佛教が入つてくる。それが祖先教と投合して一種複雜の風教をなしてゐ

るが、儒教は何を教へたかと云ふと、さま〳〵あるけれども、大體はネガテイーヴの教育である。殊に女子婚嫁の後七去を說いたのも儒教の薫陶である。婦が貞節を破つたり、舅姑に孝を盡さなかつたりすると、皆離婚の理由とされてゐるが、甚しきは子なきものは去るとして、それも七去の一になつてゐる。一家和合の爲の「夫唱婦隨」を教へたのも儒教である。女子の經典「女大學」は、要するに儒教を女子に應用したものに過ぎぬ。

佛教は女子をどう見て居るかと云ふと、女人を罪あるものとし、邪淫のものとし、不淨のものとし、三界に家無きものとしてゐる。斯く見るから寺域内に女子を入れなかつたこともある。高野山など、長く女人禁制であつたことは周知の事實である。女子は斯の如くして儒教にも佛教にも壓迫されたごとくであるが、決してさうではなく、儒佛共に女人の惡德を矯めることに共に效があつた。溫良恭儉、貞淑優雅の日本婦人の美德は斯うして養はれたのである。日本には、決して他の東洋諸國のやうに女子の自由を奪つたり、奴隷の如く驅使したりするごとき風習はない。外人は一概に日本婦人は卑屈であるかに思ふけれど、それは他の東洋諸邦のことであつて、日本の女性にはそれは無い。日本の女性は、剛健なる男子に反して、どこまでも女性らしい溫柔氣質に教訓されてゐる。較々委しく云へば、身體のたしなみが教へられ、羞恥が教

へられ、謙讓從順が教へられ、優雅の振舞や、物の哀れを知ることが教へられてゐる。勿論嫉妬やおてんばは戒められ、どこまでも良妻賢母たらしめんとしたのが昔しの女子教育で、それが九十パーセント位は成功してゐる。しかるに戰國時代となると、或る階級には封建的武士教育が加はり、柔和たるべき女子は一面に犧牲的精神があらねばならぬとされ、良人を勵ますために自殺したり、主君を救ふために已が子を殺したり、どんなつらいことがあつても武士の配偶たる體面上堪へ忍ばねばならぬことが教へられた。卽ち複雜の薫陶の上に更に一層の複雜を來したが、これが決して女性の品性を害せず、確かに一層美性を陶冶することになつた。日本女性の、他の東洋諸邦の女性と異つて、卑屈に陷らないのは、一は此の封建的武士教育に據ると云はねばなるまい。武士は或る特殊階級であるが、士風は一般に及んだから、一般女子も同じ感化を受けたことは云ふまでもない。斯の如くして日本の女性は世界に稀れなる秀逸の婦德を有するに至つた。

外國人が兎もすると日本女性が喜怒哀樂を露骨にあらはさぬのを不審に思ふのも無理はないが、實は以上の如き複雜の教養が然らしむるのである。西洋人は、至親と別るゝ場合は、停車場のプラットフォームで稠人の中でも互ひに相擁して接吻をやる。然るに同じ場合に日本人の

冷淡に見えるのは何故かといふかるが、日本の女性とても哀別離苦の人情に變りはない。唯だ露骨でないだけのことだ。所謂る泣かぬ螢が身を焦すと俗謠にあるごとく、堪へ難い情を抑へる所に非常のつらみがある。全體日本女性は喜怒哀樂の情を露骨に現はすことを失禮とされてゐる。殊に他人の面前に斯くすることを忌む。武士道に於て最も然りとする。忍は儒佛兩敎から大切な倫理として訓へられてゐるが、武士道の敎に於て更に一層强められてゐる。日本婦人殊に上流社會の婦人の面貌にエキスプレションを缺くのも此故である。進退擧止が、如何なる感情激發の場合でも莊重婉雅を要し、情に激して擧措を亂すことが、女性の禮法に於て最も非とされるのも同根源から來たもので、「忍」の一字は一擧手一投足にも忘る可からざることとなつてゐる。隨つて日本女性の擧措進退を見て遽かに其心情を忖度し難いことがある。兎角婉雅を要する女性には露骨の擧措は禁物で、日本女性の態度言說に餘韻があり、その態度が控へ目で、物を云うても總べてを說かず、多くは人の推測に任すが、そこに言ひ難い妙味がある。要するに日本の女性は智德共に優れて居る。唯だ久しい間常に鎖されて外部に立たなかつたから、種々の點に發育が抑制を受けたに相違ないが、今日の如く解放されて見れば、日本女性は外國女性に對して、何の點でも讓ることがないのみならず、外國の女性に全然缺けてゐるある幾多

の貴むべき特質を有してゐる。兎角我邦の短所として兩性とも自國を卑下し、外國の事とし言へば何でも模倣する癖があるが、米國あたりでは、旣に婦人の我儘や惡德を持て餘してゐる今日、我傳統の女性美を閑却して彼れに趨るなどは沙汰の限りである。偶々外人に我女性を語り、聊か感ずる所を書きつく。

復讎と宗敎

前年大分縣の耶馬溪に遊んだ時、例の巖窟のトンネルを經たが、土地の人から此のトンネルを開いた人はあなたの國の人だと云はれて一驚を喫したことがある。其の開鑿者は越後出身の僧でもとは頸城邊の士人で人を斬つたので、身を隱匿して遂に僧となり罪業消滅の祈願から自ら一人で此の巖窟を鑿り割つてゐると、仇を探してゐる若ものに廻り逢つたが、僧はわるびれず、いつでも打れるから、切めて此の巖窟の貫通まで待てと云ふと、仇なる人もを同化し敵打を放棄して共同作業で貫通の目的を達したと云ふのが、此の開鑿の歷史である。自分は己が鄕國

の事ながら、幾百里も隔る九州で初めて此の事實を知つた。又同じやうな敵打の話が、自分の郷里で熟知の岩船郡湯澤溫泉の松岳寺の緣起にあることを知つた。それは文化年代の事と云ふが、濱松の城主井上大和守の家臣曾根忠三郎と同藩の染井良左衞門と何かの行違から双傷沙汰が行はれ染井を殺して忠三郎は逐電して湯澤郷の松岳寺に辿りつき住職碩恩和尙に接して大悟して僧となり、後にその寺を繼承して桂音和尙と云ふたが、ある歳雪中で行き倒れの若士を救ふた、それが卽ち仇を尋ねてゐる染井の悴良之亟であつた。此の良之亟も救はれて後に發心して僧になつたが、後に敵同士であることが知れ互ひに煩悶してゐる內に、良之亟なる良音が、煩悶に堪へかねて、井戸に入つて歿した。然るに昭和九年此の古井戸を修理した所、井底から大小三萬餘の經名を發見したので、如上の事實を確かめるに至つたと云ふ。これも敵討の話で、共に鄕國の事に關し、恩讐を超越した結末を語る所まで似てゐるが、耳寄りの事實としてこゝに揭ぐ。

自殺禁止の困難

日本の事が日本の文獻になく、却て外人の書いたもので敎へらるゝ事が往々にしてある。和田克德といふ人が著した「切腹哲學」を讀んでみると、アストンのブルユー、ブツクに出てゐるといふてそれを譯出してゐる。すなはちこの事も外人の文獻に依つて敎へらるゝ一例である。その譯文は左の如くである。

時は明治二年（西紀一八六九）維新後の日本を如何なる方面に推進せしむべきか、に就ての國是會議が廟堂に開かれた事があつた。その時一委員小野淸五郎に依つて、切腹の廢止の建議案は提出され、その運動は卷起されたのであつた。斯くて議場に於ては、贊否兩樣の意見が兎も角も討論された事は疑ひない。この時に於ける國是會議委員の總數は二百九名であつたのであるが、採決の結果は實に百九十七票の差を以て脆くも、否決されてしまつたのである。而して贊成者は僅に三名、他の六名は贊否何れの意思をも表明しないで投票を棄權して

しまつたのである。叙上の問題に關しての討論に於て、次のやうな事が高唱されてゐる。「苟も切腹なるものは、我國民精神の殿堂であり、道義實行の表現である」、「我帝國に於ける一大裝飾である」、「國家組織の支柱である」、「至純な名譽心の養成と國家の支柱とも目さるべき士分階級間に流露する、美はしき感情交流の源泉を培ふものである」、「宗教心の支柱であり、道德心の拍車である」と。

因襲といふものが如何に強く、且つ恐るべきであるかは世界に類例のない切腹に對し、明治維新になつてすら執着心が頗る盛んであつた事が、これによつて窺はれる。小野清五郎は切腹廢止論を唱へたためであつたか、その後間もなく刺客の毒刃に斃れたといはれてゐる。明治三年に新律綱領を定めた時でも、自刃を自裁と文字を改めたのみで士族の子弟には屠腹を許した。明治六年改定律令を制定するに迫んで初て終身の禁錮をもつて自裁の刑に代へた。これから法律面より自殺刑が除かるゝ事になつた。

三浦鳩村集中の三話

吾郷里越後の水原に代々醫業で門戸を張つた、三浦氏は、自分等の先輩に鳩村と號する詩文を善くする人があつたが、自分は偶然此人自筆の詩文稿を所持してゐる頃日閑を得て讀過すると、興味ある小話が二三ある。原文は漢文だが、今左に和譯して掲載する。

信州に小民三藏と云ふものに一子あり、性無賴で博奕を好み田畑を失ひ困窮の極失踪す、一子三助をのこす、其母三助を三藏に托して實家に歸へる、此の三助父の失ひたる田地を回復せんことを欲し東都に出てゝ力役數年漸やく若干の貯金を携へて歸鄉の途中某旅舍に投ず、其家盜賊を事とするものにて一夜脅かされて貯金を奪はる、三助泣く〳〵江戸に戻るの決意をなし去らんとするに方り舍主の盜は流石に氣の毒に思ふたか、一刀を取り出して與へた、江戸に歸つて舊主にありし次第を物語り、刀を出して示したれば、これぞ某名工の作で、百金の價に賣れたので、三助喜んで歸鄉の途亦もとの旅舍に宿し思へらく、得る所の金は失ふ

所を償ふて餘りあり、餘金は舍主に返すを可とすと、由つて主人に此事を語る、主人は名刀を知らずして與へたるが、此の若者の餘りに正直なるに驚き細かに其の素性を問へば吾子なることが知れ、盜もこれより發心して其行を改めたりと云ふ。

芳原に一娼あり、容姿艶麗唯だ遺尿の失あり、或る遊客之を知らずして之れを相手にして眠る、醒めて衾茵に濕氣を覺へ尿臭を感ず、客は竊かに吾が爲す所となし、其濕氣の乾くまで臥して起きず、漸やく乾きたるを機會に起き、錢湯に至れば、偶々友人あり告ぐるに前夜芳原に某妓を擁したることを語る、友人笑つて云く多分小便を漏らしたるならんと、其人驚ろき且つ怒つたが、それは自分の隱し居ることを摘發したるならんと思ふたからであつたが、實は其友人は敵娼の失を云ひたるにて、此娼の遺尿は當時有名で、此記事の筆者は當時東都在留中でわざと芳原に此娼を訪ひしも其際は既に在らざりしと云ふ、

越後三條町の一商寒中新潟に到らんとし羽織の下に獸皮を被り溫を取る、獸皮尾を存し羽織の下に少しく垂れ下りあり、偶々カゴ屋の新潟に歸へるに遇ひ、賴んでそれに乘る、轎夫等

尻毛を竊かに見、此客は狐の化物ならんと速斷し、カゴの戸を堅く縛して、さてひそ〳〵この狐を如何にして殺すべきやを協議す、輿中の商窃かに失笑し、轎夫に告げて曰く、化けの皮が現はれては遁るゝ道なし唯だ吾れに寶物あり、それを呈すべきにつき、命を助けよと云ふて與へたものは字變りの錢であつた、客は說明して云ふ、此錢は君等が欲するものを忽ちに辨ずる、其時は唯だ此錢を一拋するに在りと、轎夫等それを信じて客を許す、後轎夫等某樓に登り妓を召し遊樂を極めていざ勘定となると其錢を疊の上に投げたが、幾度しても一箇の錢だけで何も出ないので、始めてだまされたことを覺つたと云ふ一笑話、當時はよく狐にばかされたと云ふ話が流行したが、これは作り話にあらざるが如し、

黃金

一客來り談話中偶々政府が黃金塊買上の事に及び、自分も釣りこまれて左の如き漫談をなした。曰く黃金は俗なものだが、貴いものである。自分なども或る時代に黃金を喜び、今は政府

の買上に應じて賣却したが、曾ては重量の頗る大なる懐中時計を持つてゐた。長い鎖が欲しいとあつて、特に小林時計店に作らせた金鎖は帶に二タ卷出來るものであつた。自分の亡友に山田穀城と云ふがあつて、雅號を花作と云ふたが、此人は佐渡出身でコガ子花咲くと云ふ所から此號が生れたのである。蜀山人と狂詩の雄を爭ふた關西の人に銅脈と云ふがあつた。これは外部は金で芯は銅だと云ふので、今いふ「メン」入りの句スフ製の句など〻云ふのと同じ意味である。昔しの金座のあつた所は日本橋區の花屋敷と云ふあたりだ。今は金貨を手にすることはないが、自分の小兒の頃には二朱金をよく手にした。大隈侯の奥樣は金貨を好んで集められたが、其の死後熊子さんから遺物として二十圓金貨十枚を贈られた。これも政府の徵發に應じて差出したが、二百圓が七百幾十圓かになつた。自分の小兒時代は家がまだ富んでゐたので千兩箱がいくつも庫に在つた。小判なども標本的にいろ〳〵の時代のものが保存されてゐたことを覺へてゐる。德川時代には小判を骨董的に集めることが行はれて、大名や商家には相當あつたものだ。近藤重藏が金銀圖錄を著はすにつき材料として大名や富豪から借りた小判を近藤は返却しなかつたなど云ふ說もあつた。自分の祖父の時代には往々小判を東京から越後へ運搬することがあつて、其の事を擔任した店員は、可なり困つたらしい。當時は途にゴマの蠅が居るの

で、それを避ける爲め饅頭を入れる箱に納めて、虎屋饅頭と假裝して道中したと云ふが、何分にも重量があるので、雪中など其足跡が雪に沒したので大いに氣をやへたと云はれてゐる。

佐渡は自分の縣の內であるが、謙信時代から金を產出して今に迨んでゐる。昔し精錬法の幼稚であつた頃どんなに金が他の金屬に混合して外國に流れ出たか知れないと云はれてゐる。坑內から出る莫大の鑛石の中にも金が潛在してゐるのを精錬せず海に投じたものも少からずあるであらう。此金山は今三菱に歸してゐるが今頃になつて人家の土を買上げてそれから金を取つてゐるのは昨今の事だが、佐渡の土には砂金がまじつてゐるそうで、昔し謙信時代佐渡の土を惜みて舟に積んで持去つたことのあつたのは事實ではる。

昔し三衡時代の奥羽には多く金を產し、其爲めに三衡は平泉で京都に比すべき程の都を經營し、其黃金を時々朝廷に獻じたので、上國の金の裕かなりしは此時であると云はれる。黑川眞賴翁の美術研究によると此時代の京都の蒔繪には、最も潤澤に黃金が用ゐられてゐると書かれて居る。奥羽の金が影響したものに相違ない。

自分は大阪で金貨鑄造のミントを見たことがあり、又金貨を貯藏する日本銀行の地下の金庫を見たこともあるが、金貨も餘りに澤山見ると、貴重にも感ぜられなかつた。ミントの金貨を作

る光景を見ると、丸で煎餅などを作ると一般に感ぜられ、日本銀行の金庫に入つては、金貨に驚ろくよりも金庫の餘りに大なるに驚ろいた。地下の金庫のある所は厚い石壁に包繞され、外より掘つて入ることが防がれてゐる堅固さの用意に驚ろいた。

自分は金塊の大なるものを一見したことがない。足利義政の金閣寺は名こそ立派だが、一向金ピカのものでない。豐太閤が豪奢の餘り征韓の際の大本營に行つた金の茶湯などはどんな善美のものであつたか、當だ想像するのみである。格別大とも思へないが名古屋城の一角に輝くシャチの一双などは、外國の博覽會にも出し、歸路舟が覆沒して、やつと揚げたが、近年盜難れ罹つて或る部分が削り取られた歴史を有してゐるが、あれなどが先づ代表的の大塊であらうか。軍用の爲め金が豐臣徳川などに貯藏されたことは隱れもないが、それはどんな風に置かれてあつたか、或は天守閣の土臺に用ゐられてゐたなどの說もあるけれども自分は目睹しない。五代友厚が大隈侯に寄せた手紙の内に、岩淸水八幡を賽した時、純金の雨を受ける樋を見て驚ろき、其の金塊で以つて維新政府の窮財政を補ふに足ると書いて居るが、或る時代に黃金を惜し氣もなく用ひたことの一端が窺はれる。

いつぞや大阪の天滿の橋が新築された時、時の建野知事が祝典用に鴻の池に就て金屏風一双

を借りんことを需めた所、鴻の池では生憎半双さへないと云ふて斷つたので、知事は大いに怒り鴻の池とも云ふべきものが金屏風一双なしとは、人を馬鹿にすると云ふたが、鴻の池では後に金紙の屏風であることが知れ、それなら幾らでもあると云ふたので、建野も口が明かなかつたと云はれる。同家には純金無垢で紙ならざる屏風が半双あることが知れた。京都の大丸には金屏風が百雙あつて、並松屏風と云ふてゐる。皆群靑で松の繪があるからで、いつぞや大隈侯が烏丸の下村邸を訪づれた時雨天であつたが入口から奥の座敷迄此屏風を立て廻はして侯を驚かしたことがある。

黃土

支那の燕京に遊んだ時先づ禁禁城を旅館のベランダから見て、其の屋瓦の黃色であるのに目がついた。どこを歩いても黃塵が襲ひ來り、カフスなどは忽ちに黃色に汚れて、一日に幾度も取換へねばならなかつた。鐵道でも料理屋でも汗を拭くタウルを出すが、皆黃色を帶びてゐる。

黄河の水は其の名のごとく百年同じ色で嘗つて變らぬ黄色であり其の河の注ぐ所は黄海である
が、矢張黄の字を離れない。人種も亦黄色人種である。自分など地質學的知識のないものはう
つかりしてゐるが、支那の土壤の多くは黄土である。河の黄色であるのも其爲めである。支那
の帝室が黄色を貴ぶのも農作の本地が黄土であるからの事だ。研究家の説に據ると支那の黄土
の面積は日本全土の二倍あると云ふてゐる。此土を化學的に研究して見ると、農作に適當の成
分があつて、日本の如く肥料を要しない。唯だ成分を融解すればそれが肥料となるのだから云
はゞ水が肥料であるやうなものだが、此水が缺乏してゐるので、支那の農家の欲する所は水で
ある。隨分農家は井を掘つて地下水を用ゐてもゐるが、それが充分でない。此土壤は穴居など
の工作にも適する土で、方々に立派な穴居がある。これは一種の建築で、木石の代りに土が材
になつてゐるので、此の土で築かれた穴は、天井も壁もシカリして崩落するやうなことがない
ので、珍重がられてゐると云ふ。日本がこれから支那に先がけて互ひに共同して事業を起すに
はいろ〳〵のこともあらうが、到底日本人は勞役で彼等と戰ふ譯にはゆかぬから、日本は一歩
進んだ文化をもつて、彼等に耕作を敎へる位地に立たねばならぬ。最も必要であるのは、水の
給供である。乃ち灌漑溝渠に資本をかし智惠をかし、彼等の農作を助け、其の不毛を開拓する

に在るのだ。支那には何千年の耕法もあるから、必らずしも新奇の法に改めさせるに及ばぬ。
唯開發に彼等の力の及ばないものを助成することが、支那人を歸依せしめる差當りの便法でも
あり、兩者提携に實功を擧げる捷徑でもあるのだ。

木綿

今は純粹の木綿が無くなつたが、木綿のまだ日本に輸入されない前の事を考へると、衣服の
料は、絹の外、麻の時代があつた。麻の時代には藤蔓やからむし、楮などが材料になつてゐて、
高貴な料として麻が用ゐられてゐた。薩摩上布が麻の反物の上品とされ、越後の小千谷縮も名
高かつた。此等の原料を考へると、皆ステーブル・ファイバーである。曾つては此の反物で常
服が作られ、又裃も作られ、宮女の十二一重などもこれで作られ、蚊帳や疊の緣もこれで作ら
れてゐるのみならず、夏期の暑候になると此のファイバア出來の衣服が涼を取るために用ゐら
れ、白麻の洋服やシャツが調法がられて、昔しは四季共に此服を着け、今の朝鮮の人も四季共

此服を纏ふてゐるのを見れば、昔しの吾等の祖先の事が偲ばれる。麻や藤や楮の織物はコハ張つてゐるから、之れをやわらげる爲めにきぬたに打つた時代があつて、之れを打つことが家庭の仕事であつたので、きぬたはどんな家にもあつたが、今は棄られて捜しても無い。コンナ夏に喜ばれる涼味のあるものを肌に着た時代は人間の皮膚が丈夫であつたのであらうが、ある時には紙子の衣服も着た。熱海の名產には紙のこよりで織つた反物もある、これ等もステーブルファイバア組の織物である。こんなことを考へると、スフ入りの反物を一概に厭ふべきでもないが、純粹でなく何か交つてゐることを壓ふのは人情で、絹に木綿の交つてゐるのを綿入れと云ふて排斥した時代もあるので、純綿を戀しがるのも無理はない。木綿が日本に來て常用さるゝに至つたのは可なり古るい時代であるが實に此の輸入は衣服地の一革命を來したとも云ふほど、大なる幸福を齎らしたもので、木綿の特徴はあたゝか味があり、やはらかで膚さはりがよく、どんな色にも染まり、價がやすくて、普遍的に行はるゝ素質がある。肌着でも腰卷でも足袋でも絹よりも却つて喜ばれるのは、やはらかで暖か味があり、よく洗濯も利くなどの便利もあるからだ。此の原料は概して熱帶地のもので、原料は他から取つてゐるが、此の織物はすべて他の反物を壓倒してゐるのは偶然でない。此の產業が日本に盛んになつて紡績事業は實に世

界の第一位にまで進み、此業の爲め日本の婦人の多數が始めて職を得て居るのだ。私はコンナ事を書くにつけ、木綿や綿が缺乏すると、如何に其の有難味を感ずるかを私の獄中生活に徵せざるを得ない。それは左の如くである。

獄中の綿と木綿

冬夜一旦寢に就き起きて自ら酒をあたゝめ一醉更らに寢に就くのが或る時の習慣で、これが護寒の一法でもあつたが、今は病痾のため酒を絶對に廢してゐるが、往々寒氣に堪へ兼ねることがあつて、五十餘年前長野の牢獄に在つた頃を思ひ出す。長野は雪は多く積らないが寒氣は激しく鄉國越後の比でない。入獄したのは夏秋の頃であつたが、冬の嚴寒を獄中に送ることになつたので、あらかじめ冬を送らねばならぬことに苦慮した。併し幸の事には、別待遇を受けて日中は事務室に隣る小使室に置かれた。こゝには大なる火爐があつて、湯も沸いて居り、火氣は室に漲つてゐて、毫も寒さを感じなかつた。此の室には獄吏の爲めに床屋が置かれて、髭

をそり髪を斷ることも出來た。自分は典獄から著述を囑されてゐたから机も備へてあつた。日々獄吏から揮毫を頼まれ、監獄では余の印章まで取寄せて提供したから、自分も圖に乘つて、毛氈若くはケツトを請求した結果、ケツトを張りつけた藁布團を提供された。それからは此の布團の上に坐することになつたから、別して幸福であつたが、夕方監房に收まると、煎餅布團一枚で睡らねばならず、これがツラかつたが、案外寒くなかつたのは寢卷の無い代りに、晝間着してゐる衣服のまゝ寢たからである。しかし、此の爲めに毎朝下繻絆を檢すると幾十の獄舍特色の大きな虱がゐた。だから毎朝居室に入ると、先づ繻絆を火爐の上にかざして虱退治をすることが常であつた。此の虱は大形のもので、どうして一夜の内にからだにつくものか不思議でいまだに其の解を得ない。監房は虱を生ずる程不潔でなく、濕氣などもないのに、虱の沸くのは何んの故であらうか。冬期の獄内の衣服と云へば、モヽ引と、單衣繻絆と、綿入の上は着と半纏一枚だけで、皆膝に達するまでのものである。これ丈の防寒衣服で凌げないわけもないが、綿入も半纏も充分綿が入つてゐないから、自分は感冒を氣遣つた。或る時同房の囚人が滿期で出獄したから、其の布團の綿を少しばかり拔き取つて、監房を出てから、半纏に其綿を造り添へた。こゝに斷て置くのは、囚人が去る時には布團を自ら持つて出るのが法となつてゐて、

監獄では格別調べをしないのである。一時に澤山の綿を拔き取る譯にも行かないから、同囚の去る場合幾たびも同じことを繰返したので、自分の被服は可なり厚いものになり、溫みも益したが、毎晩監房に入る時、看守臺で衣體檢査をやるのが例で、此場合に或る看守に認められたが、別な看守が何か耳語したので咎め立をせずに通過した、多分特待の意を通じたのであらう。コンナ事で自分は綿つくりの法を覺へ、縫ふことも自らした。自分は此事で始めて綿の大切味を覺つたが、こんなことで寒を凌ぎ感冒に罹ることもなかつた。雪の降る夜房内に睡てゐて、いつ目をさましても、房外降雪のなかを看守が徹宵見廻はつて佩劍の聲を耳にした、その時自分はシミ〳〵自由の尊さを感じた。看守の境遇は囚人らよりもはるかにツライに相違ないが、彼等がそれを意とせず、雪夜勞苦を厭はないのは全く自由の身であるからの事だと感じたことがある。今は純綿は容易に手に入らない時代でスフの入らない木綿を得ることも困難である時、以上のごとき舊夢を忍ぶのも偶然でない。

獄内では洗濯をすることが許されてゐたから、自分も他囚に頼んで一二度洗濯をやつたことがある、衣服を初めヘコ帶でも手拭でも皆ベニガラ染であるが、よく洗濯すると薄紅梅になる、自分も免囚の古手拭を貰つて、それを充分洗ひ清めて下着に張りこんだことのあるのを

思ひ出す、これを繻絆の背中に二三枚縫ひつけると、それでも暖をとることになる。現時純綿は容易に手に入らないが獄内で早く木綿の大切味を體驗したことをこゝに追記しておく。

（十二月八日記）

石油の思ひ出

福澤翁は「油斷大敵、家事忙々」と云ふたが、これは注意しないと火事になると云ふたのだが、油斷は全く大敵で、油が無くなると戰爭が出來ない。軍の勝敗は石油の豐乏にある、油斷は大敵である。日本で石油を製造し初めたのは自分の少壯時代で、自分の生れた鄕國越後は天智天皇の御宇の頃から知られてゐる。自分の生れた郡の黑川と云ふ處は中蒲原の栖目木など云ふ所には、古るくから油が出て居る。それは眞黑で臭くつて、草生水の名が通つてゐる。右の如く越後が原油の產地であるだけに、石油の事には利害關係はないが、多少の關係がある自分の叔父は我等が村居時代極めて小規模に黑川の原油の精製を試みたことがある。又東京に住し

てからも先老と叔父が木挽町に精製したこともあつた。自分が新潟の記者時代に他日大財產家となつた中野貫一と眞柄富衞の兩人が石油の借區を侵されたといふので、行政訴訟の文書の作製を賴みに幾んど毎日尋ねて來て、可なり煩らはされたが、渠等は到頭訴訟に勝つて中野は暴富を博した。其頃中越後の素封家が殖產協會と云ふを起し、自分も與かつたが此會が實地に產業を起したのは石油事業で、尼瀨の採掘が效を奏し、それから追々方々に採掘して日本石油會社は他の會社とも合し、今は日本最大の會社となつてゐる。黑川の草生水の精製を試みたものに文化頃、江戸に中川儀右衞門と云ふ人があつた。此の人は千疊敷の紙を作つたことで著名であるが、何んにつけても工風があつて、惡臭のある原油の臭氣を去り、火早やい危險を取除いた燈油を作つたが、舊營業者の苦情で賣ることが許されなかつたと云ふことが神田文化史に載つてゐる。亦幕末維新の境頃に越後の濱手の豪家平田安之亟と云ふが病を治するため長崎に赴き、米國醫に診察を請ふて其治療を受けつゝある際、アメリカの富を致したのは石油の開發に由ると聞かされ、其の採掘法の大略を醫師が語つたので平田は是非越後の油田を見て貰らひたいと請ひ、長崎より越後へ伴ふ爲めわざと汽船を購ひ、且つ其頃の日本の法律では外人の內地旅行にヒドイ制限があつたので、特に人力車を工風し、此の人を載せて大勢が車を挽いたり押

したりして制限内に辛ふじて往復して、原地に就て採掘法を敎はつたなどの逸事を自分は早くから耳にしてゐる。佐田介石がランプ亡國を主張したのは自分の若かりし時代だが、今は油斷亡國で、產油國が諸國の羨望の的となつて、小邦の油田國は其寶のあるため强國の壓迫を受けて、國の獨立が保てないやうになつてゐる。昔しは石油事業は山師のなすことと卑下され、人は石油の臭氣ある人を忌んだこともあるが、それが逆に石油臭い人が金持として貴ばれ今は石油王が世界の覇者とまで仰がるゝに至つた。今は石油萬能の世界で、石油が無ければ足もとまり輸出入も止まり、戰車も動かず、機械工業も停止せねばならぬが、幸にして今次の大亞細亞戰で、石油の大產地を制壓して、今後は石油缺乏を憂ふることが無くなつた。

軍艦の紛失

紛失といふことはドンナ微物でも心持のよいものでない。軍艦の紛失となるとどんなであらうか、自分は明治時代卽ち明治十九年軍艦畝傍が、折角フランスのシャンチエー造船所で造ら

れて、日本へ回航の途上消息を絕ち、今まで其の殘骸の一片すら見ることが出來ないことを思ふて轉た殘念に堪へない。此艦には受取の爲め出かけた吾が海軍の將校を載せフランスの海軍將校も同乘してゐたのに、此等の人々の運命も否として知ることが出來ない、此艦の造築には三年の日子を費し、百六十萬弗の大金をかけたもので、砲三十を裝し長さ五十三間餘の大艦で、當時我邦優逸の戰艦であつたのに、途中で無くなつたことを聞いた當時の國民はひどく惜しみ且つ悲しんだが、この艦のことに就いて當時種々の說もあつたが、築造に缺點のあることが傳られた。それはバランスが取れないこと、舟底を二重にしなかつたことなどで、當時これを見た專門家は其の運命を危んだなど云ふ說も立つたが、それはあとの祭りで、他人の依存に由つて軍艦を作ることなどは、云はゞ危險の事であることは、此の紛失事件に鑑みてもわかる事で、吾帝國は之れに懲りて漸やく自力で構造する計畫を立るに至つた。偶々紛失の大なるものはと、自問自答して想ひ出したのは此の軍艦の紛失事件である。

雷

雷は偉大の力を有つてゐるもので、落下すれば物を焚き人畜を損ふ。人は之れを恐れて避雷針を屋上に設けたり、白晝蚊帳の中へむぐりこんで避ける。しかし統計に據れば雷の多く鳴る時は穀物が多産であると云ふ。あのエレキの量は實に多大のものであることは分つてゐるが、之れを利用して人間に役立たせることがまだ工風されない。科學が進歩しても雷に對してはまだ研究が幼稚である。雷と云ふものはドンナ物かと云ふと、鬼神の人が身邊に幾つかの太鼓を徒らしてゐるといふ想像だが、これは佛敎から來た想像であらう。元來雷といふ字は雨下の田であるが、篆字に溯つて見ると、雨下に回の字を書き、或は田字を書くのが本當で。回は運るである田は車輪の形貌で共に回轉を意味してゐるから、意義が存することがわかる。エレキを回轉するものと見たのであつて、太鼓を打つと見るよりも寧ろ優つてゐるやうに思はれる。日本は雷が尤も多く鳴ると云はれてゐて此の恐るべきものに最も親しみがある。狂言にも雷が原

野に墜ちて怪我をした時に醫者が通りかゝつて、針を以つて治療してやつた、雷公は喜んだが、醫師が治療代を請求すると、雷公は今持合はせがないから、追つて持參して貴家を訪問すると云ふたので、醫師は御免を蒙つたと云ふ巧妙なユーモアが謠はれるに至つた。人間で雷を名にしてゐる人がある。力士の雷電があり、田中智學は巴雷と號し大槻は如電と號した。雷電を祀る神社もある、此社から避雷の護符を出してゐる。雷を恐れて雷鳴を聞く前からそれを前知して身がすくむと云ふてゐるものに自分の知人で三村竹清がある。かつて柳亭種彦が門人の仙果に寄せた手紙を藏してゐたことがある、種彦の妻はひどく雷を厭ふたことが書かれてあつた。彼れの妻も竹清一流の人であつたらしい。菅公が時平の讒に遇ふて歿後雷になつて荒れ廻はり、清涼殿を襲ふたと云ふごときは菅公の寃罪であらうが、菅公の怨靈を當時恐れたことは事實で、其怨靈を鎭める爲め歿後間もなく菅廟が設けられたことにも徵せらるゝ。

氷塊

今は人造の製氷があるので家には冷藏庫が据付けてあり毎日氷塊を配達するから、三伏の暑

候氷に不自由を缺かぬ。腐敗し易いものは冷藏庫に入れる。水でも酒でも之れに入れて冷すことも出來るが、人造製氷の出來なかつた當時、乃ち自分の幼少の頃は、よく天然の氷塊をザルに入れて賣りに來た。一錢か二錢買つて食したものだ。どこの山から採つたものかよくも融かさずに賣りに歩いたと思ふ。いつか淺間山に登つた時には壯丁に出逢つた。それは氷を得るためのもので、山の割目に繩梯を下げて氷塊を採るのであつた。斯くまでして採つた氷塊は人里に賣れば價が貴い筈だが、それほどでもなかつた。此の當時越後あたりでは雪を圍ふて居つて、雪を食料として賣つた。しかし此の圍ひ雪は食料としてよりは魚介の防腐の爲め多く用ひられた。高田の田端邊の魚屋や料理屋の穴藏にはどこでも雪が一杯に這入てゐて、魚介が其上に置かれた。氷水が都下の街頭に賣られたのは人造製氷が出來た後で、其前は氷水と云へば雪を和した水であつた。自分は雪國の生れから夏時圍ひ雪を見ても一向珍としないが暖國から越後へ旅行する人などには珍らしかつたに違ひない。大隈侯が越後へ行かれた時自分も隨從したが、長岡に一泊さるゝことゝなり最初大野屋と云ふが宿と極まつたが自分が檢分に出かけると、主人の云ふには生憎庭が出來てゐないから急に作るとしても日が足らないと云ふから、自分は一案を投けて此の庭一杯の雪の山を築け、これこそ越の雪で九州人の目を驚かすに足ると云ふた。

實は雪の價は安いもので十圓若しくは十五圓も出せば山なす雪が運びこまれるので、拙ながら急に應ずる名策であつたが、侯は町の實業家に宿されたので此の案は無用に歸した。併し侯に雪庭を見せたかつたと思ふた。

瓢

瓢は酒客の愛重する骨董で、誰れやらが其の三德を戲れに頌した詞に云く。

瓢よ、汝眞瓜の位もなく、西瓜の暑をはらふ德もなし。しかれども氣の輕く中空しうして無慾なれば、仙人も汝を友として酒を入れて腰に携へ、あるは駒を出して樂しめり。汝瓜に似て庖丁の難にあらざるは智也。鯰を押へてのがさしむるは仁也。羽柴公の馬印となりて强敵をくじくは勇也。汝の性は善なりと云ふべし。

くら〳〵とくらす樣でも瓢箪の
胸のあたりにメくゝりあり

瓢は愛國の士藤田東湖に愛せられて、其の作「瓢や瓢や」の歌は盛んに有志の人に愛誦せられ、夫の正氣歌と共に奉皇の志氣を鼓舞し、以て維新大業をなすに力があつた。其の功何ぞ三德に止まらんや。

豐太閤が瓢を馬印に用ひたのは面白い思ひつきであつた。彼れは一勝毎に一瓢を加へて遂に千瓢を博した。「瓢や」の歌此の事を假りて志氣の作興に供したのは偶然でなかつた。

此の酒器の酒客に喜ばるゝのは、不思議にも其の態度が酒客とよく肖て居る、卽ち、酒あれば危坐し、酒無ければ斃ると云ふは、酒客の態度で亦瓢の態度である。羽倉簡堂の瓢の讃に云く、

未醉喜汝重。既醉愛汝輕。一重又一輕。瓢也善送迎。

瓢と酒客の相似たることこれのみでない。瓢は多量の酒を盛れば盛るほど、酒客の如く其の肌膚を赤くする。其の紅色を帶び光澤のあるのを人は喜んで瓢の上品とするが、妙なことには惡酒を盛つては赤味も出ず光澤も乏しい。瓢の色澤をよくするには盛るに醇酒を以てせねばならぬ。こゝまで嗜好が同じであることは一奇と謂ふべきだ。

愛瓢家の瓢に需める要件は、其の形貌にあり、其の大小にあり、其の斑にあり、其の色澤に

あるが、就中大切な要件は、其の時代を經てゐる點にある。何となれば、時代を經ざれば自然の色澤が生ぜぬからである。こゝを以て人工で古瓢を作る法が行はれ、或は烟を以ていぶしたり、一概に多量の酒を注いで色つけをしたり、瓢を堅くするため太陽にさらしたりするが、それ等は皆付け味で賞翫に値しない。これには滑稽な逸話がある。神山卽山と云ふ明治の詩人が一瓢を愛翫し、其の斑が星の如く散布してゐるので衆星と名を命じた。友人の長屋海田（土佐の人で海軍大佐で畫を善くした人）がこれを見て長文の書簡を寄せ貴下の愛品は惜しむらくは時代を經たものでなく、人工でいぶしをかけて古瓢に似せたもので、人工で古瓢らしくする行程は圖を以て知るべしと云うて、一圖を添へてゐる。此の圖には、中身を拔く所があり、酒を注ぐ所があり、煙で古色をつける所があり、拔き取つた種子を婆さんが拾つて土中に播き、瓢が早速生り下つたりする所まで、圖に現はしてゐて噴飯すべきものである。

昔、風流人の家には幾つかの瓢が吊されてゐた。酒品が當時甚だ惡しく、田舍には醇酒は無かつたから、旅客は必ず瓢に醇酒を盛つて携へた。山間などには善惡に拘らず酒と名のつくものが無かつたから、瓢は酒家には大切の器であつた。概ね好風景の處は酒屋に遠かつたから、瓢は風流客の好侶伴であつた。田能村竹田の詩に云く、

出無唱警入無蹕。惟、有、盈瓢、酒、似、泉。隨、止、隨、行、隨、處、醉。王侯不當半文錢、

役人でない身輕の旅行に、籃輿の中で行き〳〵瓢を傾ける愉快は、王侯貴人の知らない樂みだと云うてゐる。

右の如く愛瓢家は競うて佳瓢を得るにつとめた。いつぞや上野で愛瓢家の持寄り會があつて、瓢の番付も出版された。又、瓢には往々金字の銘があり、諸大家の讃辭が卷物となつて添はつたりもした。賴山陽などは酒客で而も長途の旅行を事とし、酒の品質を選ぶにやかましかつたから、瓢を自然に愛玩し、佳瓢を得るに相當骨を折り、時によると人の愛瓢を掠奪したり、亦師友に與へたこともある。紅葉山人の句に「賴襄が古酒に銘する醉書かな」とあるが、自分は「古酒」の二字に換ゆるに「瓢」の字を以てする方が適切であるやうに思ふ。

自分は山陽の愛瓢を幾つか見もした。亦一瓢を有してゐたこともあつた。それは廣瀨旭莊が山陽に贈つたもので、ある題字と共に旭莊が山陽に贈る識語も金字に書かれてあつた。それよりも尙ほ佳なる山陽の遺瓢を京都の鳩居堂で見たことがある。それは實に結構な瓢で、瓢の銘が「赤鳳卵」で、其頃の諸大家の讃辭を錄したものが別に一卷となつて添へられてあつた。自分は食指動き、讓らないかと掛合つたが、主人は拒んで云ふには、これは私の家の祖父の愛藏に

かゝり、山陽の需めにも應ぜず貸してあつたのが、山陽歿後戻つて來たもので非賣品であると云はれて自分は失望したが、其時他の一瓢を[illegible]して來て云ふには、これは姉妹瓢で「赤鳳卵」と名づけて居る。これでよければ割愛してもよいと云ふので、手に取つて見ると、賴潔の題識があつて、赤鳳卵に比すれば聊か劣つてはゐるが、赤色を帶び玲瓏たる光澤があつて、獲易からざるものであるから、遂に購ひ得て渴を醫した。賴潔の題識に云く、

鳩居堂主人藏一古瓢。曰赤鳳卵。原係山陽先生愛玩。頃日又購一瓢。形酷似前者。名曰赤鳳卵云。余爲祝曰。鳳凰瑞應鳥也。雄曰鳳。雌曰凰。今也併有雌雄二卵。洵爲奇瑞也。若夫靈驗。主人每月把酒相對。陶然自得焉。余所不能窺知也。

賴潔題匣面併誌□□

丙午之八月

以上は酒器としての瓢を語つたのだが、瓢は種々のことに用ひられる。ある地方では、婦人が米を瓢につめて腰に下げ、神社佛閣を參詣の折、錢の代りに米を少量づゝ捧げる風俗がある。瓢の大きなものになると、或は火鉢としたり、炭取りとしたり、屑籠にしたり、さまざまに應用されてゐる。實は瓢は曲げものゝ先輩で、原始的の曲げ物で、よく柄杓などに應用されてゐる。伊勢あたりで、瓢簞屋の看板をかけてゐる商家は、皆曲げ物屋であると云ふが、これなど

は確かに、曲げ物の祖は瓢であることを語るものである。

瓢簞から駒が飛び出したなどゝは仙家の寓言であるが、こゝに不可能の事を事實うまくやつてのけた話がある。松江の大茶人松平不昧侯の家中に小林如泥と云ふ名工があつた。これは殿様の自慢の工匠で、毎度城中で殿様同士の會合に此の工人の自慢話が出た。或る時同僚の諸侯から、どうか瓢の中に紙を張つてもらひたいと請求された。不昧公は諾したものゝ頗る難題に感じ、歸邸後如泥を召して商量すると、如泥は別に驚きもせず、たやすく受合つて、直ちに暇をもらつて松江へ歸り、早速製紙場へ出かけて紙の原料のグダ〳〵となつてゐるものを瓢に注ぎ、滿遍なく固着するやう幾回も瓢を轉々してそれから乾しあげた。如泥はそれを持參して殿様に謁を請ひ、其の目前で瓢を割つて見せたら、如何にも瓢の内面に透き間もなく紙が貼つてあるので、侯も驚かれたが、同時に折角の苦心のものを、注文者の前にこそ割つて見せるべきに早まつたことをと顧念されると、それは御心配に及ばぬ、今割つたのは見本で本物は別にあると云うて、他の瓢を献じたと云ふ。其の手續の種明しをすれば何でもないことだが、紙漉に氣がついただけが如泥の働きである。

枕に就て

花朝の簫、月下の笛、霜夜の砧、爾に依つて能く聞く幾多の音とは成島柳北が枕に題した詩である。春の短い夜、秋の長い夕べ、シト〳〵と降る春雨を聽くのも、庭にすだく蟲の音、夜半の鐘を聽くのも、皆枕が媒介で、四季さま〴〵の聲が枕を傳はつて來る。枕は人間の最重要部の頭腦を安置する具で、人の魂魄が何かに宿るとすれば、枕が尤もそれに庶幾いものであらう。寢具は人に安息を與へるものであるが、中にも枕が尤も大切のものである。されば枕を高うして眠るのを泰平の象としてゐる。人を安らかに眠らせる爲めに、古來いかばかり枕に工夫を凝らした乎、惡夢を避けるには獏に夢を喰はせるとあつて、枕に獏を圖したりもした。ビールの睡眠材とされてゐるホップといふ蔓草は、古く枕に裝置されたこともある。伽羅枕などいふものは、枕凾に香爐を裝して香を燻らし、婦人の綠りなす長髪に芳香を移したものだが、これも人を愉快に眠らせる用意であつたに相違ない。意匠は百端で、長崎の圓山の妓樓には楊貴

妃傳來の鶴の羽毛枕があり、夏時三伏の候には、陶枕や籐枕が工夫され、讃岐の高松藩の家老が曲亭馬琴に送つた枕も陶製で、今も存してゐる。物徂徠の遺枕は尙存してゐるが、それには戒房の說が錄してある。支那の旅行者の枕は革製のカバンの如きもので、重器や貨幣が收めらるゝやうになつてをり、日本の旅行用の枕にも、折り疊むで懷中し得るものがあつたが、今はゴム製の空氣枕が出來て、一層簡便となつてゐる。

若しそれ枕の得難い時には、假寢に手を枕にし、肱を枕にし、旅行く人の野宿には草を枕にし、樹石を枕にし、舟人は浪を枕にし、讀書人は書籍を枕とする。書籍の內で細長い一形式を具した「枕本」と名くるものがあるのは、枕に代用するものである。軍人は戰場で戈を枕とし、獄中の囚人は木屑を枕とする。多數の雲水僧を宿すには、どこでも坊主枕の不足を感じ、長い材木を蒲團の下に忍ばして枕に代用することもある。

更に枕に就ての瑣事を擧げれば、自然、ヒギュアに枕の用ゐらるゝことや卑猥の事にも及ぶ。卽ち忠節の士は城を枕にして國に殉じ、橋は江に枕すと形容するが、墨江には現に枕橋といふのがある。枕詞は日本特有の掛け詞で、これに因つて和文が美裝されてゐる。枕を名とする名高い本には淸少納言の「枕の草子」があり、平賀源內の戲著に「長枕褥合戰」がある。遊戲に

は腕力を角する枕引があり、盜の一種に枕搜しがある。種々の營業のある中に枕商賣もあつて、旅舍と娼樓の枕には常主が無い。結婚當夜の枕が新枕と呼ばれ、閨房の喧嘩に枕が動もすると武器となる。都々逸子笑つて曰く、投げた枕に咎はないと。曾ては屋根船の棚に双枕を備へたこともある。之れを目して直ちに風紀に害ありとするは日本特有の神經性であつて、國に依つては一向平氣である。支那の畫舫には必らず二つの床が敷かれ、双枕が並んでゐる。畫舫ばかりでなく、支那の政廳の應接所には同じい設けがあつて、主客枕を並べ、倦めば臥して語る習慣がある。コンナ莫迦げたことを擧げれば敷限りもない。

枕は安息を與へる具であるが、往々安息に導き得ない場合もある。閨房の孤枕が如何に寂寞を感ぜしめることか。紅涙は滴々枕を濕ほし嫉妬の恚は焰の如く燃えあがる。閨怨は常に睡魔を逐うて煩悶の極に達せしめるものである。萬感の枕に集まるは旅中に多く經驗することで、罪ある人、憂ある人は、旅中にあらずとも枕で安息を得ない。しかし煩悶もさまゞで、詩人は枕頭に詩を得、藝術家は往々不眠の境に妙案を得る。英雄の大業も枕頭に案を得たことが決して少なくはあるまい。賴朝の覇業、豐公の雄圖、豈亦不眠煩悶の境より拈出されたものにあらずとせんや。常人は枕頭多く空想に驅られ勞して效がなく、英雄は醉後美人の膝に枕して容

易に濟民の策を立つ。暗き牢屋に氷の如き枕と親しむ憂國の士が回天の業を策することのあるのも、世界決して其例は乏しくない。

西洋の詩人は睡眠を溫柔の褓母というたが、枕にも應用が出來る。病者に對する枕は、看護婦よりも、或る意味に於て醫師よりも大切な役目を司る。長病人の晝夜間斷ない褓母はこれであつて、熱を解くには水枕があり氷枕もある。病人が枕に別を告げる時は、病の癒えた時と絶命の時であることを思ふと、枕は人間の壽命に關することが至大である。吾々は更に枕が人類の繁殖に關係あることを思ひ、更に枕があらゆる階級、貧富と云はず幼若と云はず、平等に溫柔なる褓母の職務を司ることを思へば、吾等は枕を禮讃するの念を禁じ得ない。

酒意

龜田鳴齋の戲墨にコンナのがある。

かりの世をかりの世なりとあだにすなかりの世ばかりおのが世なれば

けふものむべしあすものむべし

禪僧は共に酒を譚するに足る、峨山和尙の酒の頌を見よ。

一合にして禪機僅に到り、五合にして春風駘蕩たり、飲んで一升に到れば、雲間月現はれて寒潭魚躍る、

但得酒中趣、空杯亦常持とは、酒客の眞意氣を道破した語である。偶々今昔物語を讀み會心の小話を得た。云く利德と明德と云ふものあり、互ひに往來して相會すれば必らず杯を擧げて樂しむ、或る時利德が明德を訪ふた。明德は不在であつて、いつものやうに互ひに飲みかはすことが出來なかつた。利德は遺憾に思ふて、其家から杯を借り、庭の淸流に就て一杯を酌み、それを傾けて去つた。明德が歸つて來たから家人が其事を告げると、明德も杯を手にして流を汲んで、利德のなしたのに倣つたと云ふ。酒は無くとも酒の趣はある。古人の風流倣ふべき歟。

日々是好日

曾つて禪僧に倣ふて日々是好日を說いた時、左の古人の句を想ひ出した。

紅花黃樹、春不如秋、白雪青松、冬亦勝夏、春夏園林、秋冬山谷、一心無累、四季良展、

婦人は一家の碇

ある人は一家の夫婦關係を說き、婦は一家の「いかり」であると云ふた。其の說明は聞かないが、これは譬へ得て妙だと思ふ。いかりは碇で舟を不動ならしむる器である。舟を或る地點に繫泊する時には、碇をおろすことが通例である。一家の安定を保つには、何か動搖を防ぐものが無くてはならぬ。婦人は常に家を守るものであるから、家の動搖言ひ換へれば、家の破綻や

滅亡などに終始注意を拂ふものは婦人で無ければならぬ。家の破滅は概ね良人の失策や投機や放蕩などに原因するが、之れを抑止するものは、家庭にあつては婦人であらねばならぬ。夫婦間には時々波瀾が生じ、それには他人に知らし棄ねるやうなことが原因をなすものもあらうが兎に角夫唱婦隨のハメを破つて、婦が良人の命ずることを聽かず、爭ふ時に起るので、卑近の例を取れば良人が夜遊びにうつゝをぬかし、それが延ては破產に導くやうなことがありとすれば婦人は默過が出來ず、言ひ諍ふて諫止するなどは、よく家庭にある出來事であるが、これが卽ち碇の任務で、一家の動搖を止めなければ、一家は或ひは破壞するに至るも知れない。碇は音「いかり」で怒であり、嬌嗔であり、婦人の嬌嗔は或日は嫉妬をからんでゐるかも知れんが、此の嬌嗔に出遇つては、良人も勢ひ狂態が抑制せられて、いくら夫婦喧嘩をやつても落つく處に、嬌嗔が効を奏し動搖を止める碇が其の役を達する。「いかり」を婦人に譬へたのは、二重の意味で好譬であると自分は思ふ。

孤獨

人間はもとソシャルの動物で、孤獨が本來の面目でなく、人と人と互ひに相依り相扶けて生活するのが、自然の姿である。然るに世間に孤獨を餘儀なくさるゝものがあり、孤獨を喜ぶものがある。一家眷族を失ふて營々孤立のものが前者で、世の繁劇を厭つて山に隱れたりするものが後者である。尙ほ孤獨にも永久的のものと暫且的のものとある。そして世に尤も多いのは前者にあらずして後者にある。前者は倣ふ可らざる孤獨で、吾等の問題となるのは後者の孤獨である。

暫且的の孤獨に就き、何人も直ちに思ひつくものは、西行や芭蕉の如き詩人であらう。彼等は唯々風呂敷包一ツ背負つて淋しく野を歩むが、彼等は孤獨を樂むものである。西行芭蕉のみならず、羈旅の人は皆な孤獨の生活者である。或は刑辟に罹つて獄舍に繫がれ、或は謫所に日を送るものも孤獨の生活者であり、僧房にあるもの、病あつて病院にあるものも亦孤獨生活者

である。事務に繁劇の人が喧囂を避けて、時に閑地に就くのも孤獨を欲するからで、別莊などいふものも實は孤獨を樂む處である。彼等は別莊内に特に坐禪室を設けたりしてゐる。鳥尾得庵や渡邊無邊俠禪の熱海の別莊にはそれ〴〵座禪室がある。淡嶋椿岳の家には、四方の壁に杉の林を畫した闇室があつて彼は時々入つて思索した。種々の研究家は思想の紛亂をおそれて、時々家人と離れて獨居する例が少くない。ラフカデオ・ヘルンなどは、客の來り訪ふのを大いに嫌つた。横濱に在住した某外國の友人が、動もすると人を紹介するので、ヘルンはいつも迷惑に感じ、或る時などは紹介者に對し君が時々人を紹介して自分の思索を妨げるのは譬へば沸騰性の液體のビンのキルクを拔き去ると同樣だ、折角思索したことが之れに由り烟散すると云ふて詰責したこともある。一世を聳動する思想や著作、百代に幸福を與へる發明などは皆概ね獨居の產物である。仕事をする人は誰れ彼れの別なく、一日の或る時間孤獨ならざるを得ない。會社や工場に働く人は其の擔當事務を行ふ間は沈默して孤獨であらねばならぬ。孤獨は決して山に隱るゝ事のみでなく、日々何人も經驗する事である。

孤獨は必らずしも處を選ばない。心的孤獨はどんな所でも成り立つ。古歌に「世を棄てゝ山に入る人山にてもなほ憂きときはいつち行くらむ」とある如く、閑地は必らずしも掃憂の所で

ない。問題は心の孤獨である、心の靜寂である。どんな騷然たる所でも心靜かなれば、西哲の言ふたごとく神のさゝやきが聞こへる。或る友人は「私は人に對してゐる時よりも、唯一人で居る時最も多くの人に對する」と云ふたが、これも心靜かなればいろ〳〵の故人を想ひ出すことを云ふたのである。古語に「感中有レ寂、寂中有レ感」とあるが、感は寂を生み寂は感を發する、卽ち感寂一如である。

併し靜寂も動の刺戟を受け靜心停頓を生ずる。茶人の客に對する時は清寂を旨とするが、其時は頭腦の最も敏活に動いてゐるときである。武將がうまい軍略を案出する時は砲聲を聞く時でなければならぬ、と云はれてゐる。自分の識る詩人僧が、或る僻陬の寺の住職となつた時、貧乏ぐらしに詩でも作らふと考へたが、境地が餘りに寂莫で、一詩も出來なかつたと言ふたこともある。西歐の哲學者が其の大著を出さんとする時、一切世間と絕緣して著作したが、後世の批評家は、世間と交つてゐた時の作に比すると、遙かに劣ると云ふた。哲理ですら尙斯くの如くである。

遁世は孤獨の極端で、これを以つて其の行を高しとした時代もあつたが、動もすれば遁世の一輩と同視され勝ちの良寛禪師は、彼等を罵倒して

身を棄てゝ世を救ふ人もますものを
學の庵にひまもとむとは

と云つた。また漢詩人は兎もすると仙人めかしいことを言ふが、小野湖山などは、流石に人間らしい事を言ふてゐる。

不須江上着二漁簑一　不用山中鎖二薜羅一　老卜閑居何處好　東京城裏故人多

自分は極端の孤獨を排するものであるが、ある時亡友文學博士和田萬吉から突如一丈位の長簡を寄せよと云ふてきた。平生懇意で、無駄な往復をしてゐる仲だから、當時案じつゝあつた孤獨の說を、やたら書き散してやつたら、其手紙を見て三日目に歿したので驚いた。彼は白玉樓永遠の孤獨となつたのである。自分の心にもないことが皮肉となつたことを悔ひたが、最早駟も亦及ばなかつた。

燈臺守

燈臺守は其の任務が大切で、其の勤務が難澁である割合に、兎もすると閑却されたり忘れられたりする、頗る割りのわるい任務である。燈臺は、多くの場合人里を離れて、人と交際も成り難い位置に在つて、其の任務に當る人並に其家族は、無人島に流滴されたかの如く月日を送らねばならぬ境遇で、而かも燈火を遠く船舶の目標とし指揮とするもので、人命の繫る所であるから、如何なる大風雪の惡天候の日でも夜でも其の司る所を惰ることを許さぬ。實は人間の勤務の内でこれほど同情すべきものはない。燈臺守は極端の云ひ方ではあるが、生き埋にされてゐるかの如き境界である。自分も二三の燈臺を訪ふたこともあるが、そこに行き其の務の人に會する毎に坐ろに涙を催さぬことは無い。どこの燈臺にも先年皇太后陛下より賜はつた御同情のある御歌が掲げてあつて、陛下の御仁慈がこゝに及んでゐることに感激せざるを得ないが陛下は今度神奈川縣の劍崎燈臺に臺臨あらせられ、親しく御慰問あらせられた。此の一事は全

國の燈臺に通ずる御仁慈で、其職に在るものは宛から地獄で佛を拜する如き喜びであらう。聖恩が往々人に閑却され、何人も慰問を忘れてゐる所に、特に臺臨を賜ることは、如何にも貴き覺召として深く感銘せざるを得ぬ。前回臺臨の時に御内帑金の下賜があつたのを基として各燈臺にラジオを開始し、これにより寂寞を慰し又人間と道を通ずるを得て、燈臺守は仁慈の恩惠に浴するを得たが、今次も彼等の福祉の爲め御内帑金を下賜されたと承はる。

明治天皇の御製

明治天皇の御製を拜讀する中で、時鳥の歌二首に殊に唯ならぬ崇高の寓意の存するのに敬服した。

時鳥きく人もなき山にしもかへりて聲を惜まさりけり

あしひきの山時鳥ふた聲となのらぬ心たかくもあるかな

初めをつゝしめ

何事も起首が大切であるから、其始めを愼まねばならぬ。ゲーテの言ふたやうに、チョツキの最初の釦をかけ損ふては、最後の釦をもかけ損ねばならぬと。最初のやり損じは、終に取り返しがつかない。

養生の要訣

「養生の要訣は少の一字」にありとは貝原益軒の養生訓にあるが簡にして要を得て居ると思ふ、此訓戒は老人に尤も適切である。何んでも過ぎたるは、養生にならぬ。少こそ養生の道として選ぶべきだが、願くばこの下に一字を加へたい。それは「精」である、大にして粗ならんより小にして精なるに若かずと云ふが、小精の據りどころで、自分は偶々小精を書齋の號としてゐるから、養生の要訣は小精の二字に在りと云ひたい。

古歌を藉りて自ら嘲る

「老」は珍客ではないが、如何にも寛宏のお客で、自分のやうなものでも嫌はずに訪ひ來る。嫌ひではあるが、粗略にもてなしてはならぬ。成尋法師の歌に

數ならぬ身にさへ年のつもるかな「老」は人をもきらはざりけり

毎々揮毫を頼まるゝ時に、拙なく醜くきを感じて思ひ出すは、俊基卿の和歌である、

芥ゐてきたなき溝の水莖はかき流せどもしどろもどろに

若樹の下には笠をぬげと云ふ諺があるが、これは後世恐るべしの意が寓されてゐる。老人は青年を侮つてはならぬ、他日どんな大人物にならんも知れぬ。西行の歌に

昔見し宿の小松に年ふりて嵐の音を梢にぞ聞く

とあるのは此意であらう、

人間の本能は鬱勃して制することがむづかしい。仙人でも婦人の白肌を見れば、仙術を失ふて空より墜つと云ふ。僧正遍照の歌に

名にめでゝ折れるばかりぞ女郎花已に墜ちにきと人に語るな

遍照が馬に騎りて女郎花を折らんとして落馬したのは久米の仙人と同一對である。

人間に「涙」のあるは、萬物に優れてる一徴とも云ふべきか、悲哀を感ずれば涙先づ墮つ、これを奈何ともすることが出來ない。古歌に云く

何事も心にしめて忍ぶるをいかで涙のまづ知りにけむ

眞理は手近かに在り、實は平凡のものである。人間に超越するものは眞理でない。藝術の人も段々奥儀を究むれば、幽谷にはなく却つて明朗なる人衆に在る、劍聖柳生十兵衞はそれを道破してゐる。

なか〳〵に人里近くなりにけりあまりに山の奥を尋ねて

一茶の句に

翌もありあさつてもあり今の世の露を露とも思はざりけり

とあるのは、今となつて自分の年の上にしみ〴〵感ぜらるゝ。若い時は兎に角、此の老齢で病に罹つてゐる今日、爲すべきこともなく唯だ一日〳〵と生を偷んでゐる境遇に於て、殊に此句に同感である。蜀山は七十歳の時に左の如く詠じた。

くひつぶす七十年の米粒の數限りなき天地の恩

と云ふたが、自分八十三年くひつぶしてゐるのみでなく、時局は白米を喰ふことを許されない時にも、尙白米を毎日くひつぶしてゐる天地の恩の宏大なることを思はねばならぬ。

ばか〳〵し死ね〳〵〳〵とよしきりのあした夕に來つゝ鳴くらん

これも一茶の句だが、自分にもよしきりの聲が死ね〳〵と聞こゆるぞ是非もなき。

曙覽の歌

自分は橘曙覽の歌を好んで讀むが、左の如き竹と水の歌は尤も自分の愛誦するものである。

ありとある竹に風もつ谷の奥水の響をそへて鳴りくる

阿隈の巖に根ばふ竹と竹なびきそ回る水を挾めて

澗めぐり流るゝ水をはら〳〵と靡きおくりてつゞく竹かな

詩や和歌の題に風竹と水竹などゝあつて、詩人も歌人もいろ〳〵詠んでゐるが、眞の趣を道破したものは甚だ少ない、寧ろ繪の方に成功したものがあると思ふ。實は激湍に竹があつて其竹が風に觸れて左右に靡き、風力に由つて激しく動く時、激流と其の勢を爭ふて强壯の觀を呈し、凄じい聲を發するは、竹の風致最なるものであるが、誰れの詩にも和歌にも之れを形容したものをまだ知らない。曙覽の歌は敢て豪壯の言葉を用ひないが、讀んでゐると、竹と水とが爭ひ其の響を聞くごとき思をなす。第二歌の「靡きぞ回る水を挾めて」とあるのも、竹が亂れ動いて縱橫し、水路が爲めに狹まると云ふのも實景で、狹の一字が此歌の眼である。曙覽の和歌はどんなのでも豪快の氣象に滿ちてゐて、自分の愛する所もそこにある。

野村望東尼の和歌

野村望東尼の安政地震を詠める歌に

平らけき屋うしなへる世の中をゆり改めむ天地のわざ

とあるが、去年の大地震の折にも、識者は此災難を天譴としたことを想ひ出すが、現下國防の爲め新體制を要するとき、西洋依存の有害の舊思想舊體制を打破する時にも、此和歌を想ひ出さゞるを得ない。

幼兒を詠める和歌

幼兒を詠める和歌で、其の眞情を穿ちたるものは少なくないが、左に二三を擧ぐ。

大いなる聲してよべば大なる月いでにきと子のつぐるかな　茅野　稚子

ものをだにまだいはぬ子も萬代とよばへばやがて手をあげにけり　御　製

同じこと問へかへしつゝをさな子があそぶうちにやもの學ぶらむ　御　製

思ふ事おもふがまゝに言ひいづるをさな心やまことなるらむ　御　製

生れ出て乳房したふや稚子の世に物思ふ初めなるらん　有功卿

坪内逍遙博士の和歌

筐底より坪内博士より贈られた寫眞一枚を發見した。これは今より廿數年前甲子の元旦高田博士と同伴坪内氏の熱海の別莊双柿舍を訪ふた時、三人が柿樹の前に立つての撮影で、寫眞の背後に坪内氏の和歌が錄してある。それを見ると、高田も自分も四十八歳の時であることが分り、和歌は友愛の情を寓してゐるから、今昔の感に堪へず、こゝに其和歌を留めておく。

冬さりて人目かれぬる山里も
君を迎へて春めきにけり

あるしまうけなき宿ゆゑに
あたゝかき冬日のみこそ君をもてなせ

外に出てゝ影うつさせむ四十あまり
八とせ添ひぬる三つの影そも

まゐらせむいへつともなき老柿の
影をたにこそとりていね友　甲子歳端せうえう

尾崎紅葉佐渡の句

尾崎紅葉が佐渡に滯在中假りに契りたる女に別るゝ時「汗など拭いて貰ふて別れけり」の一句があつて喧傳してゐるが、近松が「博多小女郎」に、小女郎が宗七の汗を拭ふた、あだ文句

を想ひ出して、斯る情緒の句をひねり出したのであらうか、今は問はんとするも山人既に亡し。

味ふべき警語

相馬御風の個人雜誌に左の如き警語がある。

一、石は冷たいものだとは常識だが、夏最も熱いものは石である。

一、私は人と對してゐる時よりも唯一人で居る時最も多くの人と對する。

一、自省はとかく行動を鈍らせるが、自省の裏付けられてゐない行動ほど危險なものはない。

わかもと

自分が昨今毎日三回食後に口に入れる保養劑は、わかもとである。これはビールの糟が原料であると思ひ、自分が今酒を絶對に廢してゐることを思ふ時、ビールの糟を藥料として用ひてゐると思へば、まだ酒に全く緣が切れないと、喜びの念がないでもないが、今は酒が飲めない。僅かに其糟が口に入ると思へば、老後の淋しさを感ぜざるを得ない。併し更らに思へば糟など云ふて輕んずる譯にゆかぬ。當世はやりのホルモンと云ふ强壯劑は實は十八歳位の童貞の男子の小便の內に多量に存する。まだホルモンなどの名のなかつた頃、八十歳の老婆が之れを飲んで四十歳位の若さを保つたと、早く本草綱目に載つてゐる。小便が若がへり劑として禮讃さるゝのにビールの糟だと云ふて卑しむべきでもあるまい。

嘲罵の稱

柳亭種彦の足薪翁記に俗語に何々坊といふのを一々考證して、皆嘲りの意を寓すとあるが、今三四の例を擧げると、誰でも知つてゐる言葉は左の如くである。

でくの坊　きかん坊　いやしん坊　立ん坊　しはん坊　どろ坊　けちん坊　つん坊　べら坊　寢坊　喰ひしん坊　うかれ坊　見え坊　あつがり坊　さむがり坊　おこりん坊

昔用ゐられた語で諸書に散見するものに、往々解しかねるものがある。柳亭の摘出によると

とられん坊（花柳界の通語）　とりん坊（同上）　とちめん坊（けちん坊と同じ）　づぼろ坊　やんちや坊　掃地坊（潔癖に過ぎたもの）　つくねん坊（ぼんやりつく〳〵案ずる）　とちめん坊（狼狽）　あほうばう　せちめん坊（けちん坊）　はだか坊（はだか虫と云ふに同じ）　さゝれん坊　阿修羅坊（何に云く、切捨になるあじゆら坊）　長床坊　いたづら坊　きたい坊

これ等の内には今通用しない語もあるが、今日俗間に勝手に坊の字を添へて用ひてゐる言葉

はすこぶる多い。じだらく坊は取締のないものをいひ、のんき坊は物に拘らぬ氣儘のものをいひ、やきもち坊、りんき坊は共に嫉妬深い者を云ひ、やせつぽは瘦た人をいふ。赤ん坊はこの範圍のものでないが黒ん坊は色くろきものを嘲る言葉白んぼうは癩病系で尋常の白と異なるものを貶する言葉、やき〳〵坊あせり坊は共に焦慮して落ち着かぬものをいふ。意は同じいが普通坊に主を添へていふ例へばなまぐさ坊主、道樂坊主、皆破戒の僧をいひ、鼻たらし坊主いたづら坊主は小供を貶するの言葉、三日坊主は物に飽きて永續せぬを嘲る言葉、强がり坊或は强がりん坊は虚勢を張るものを嘲るの言葉、のんだくれ坊は亂醉の酒徒、氣まぐれ坊主は放縱の徒、屁ぴり坊主は人前に放屁を憚らぬもの、この類を擧ぐれば尙多からん。

城

鳥羽正雄氏の「日本の城」と云ふを讀んで見た。之れに由ると日本の城の發達したのは織豐時代からである。其の前の群雄割據時代、更らにそれに先だつ時代には城はあつたが、それは

多くは柵と云ふ類で、天守閣を備へてゐるやうな整備したものでなかつた。更らに原始的に近いものとなると「チャシ」だの「神籠石」だのといふのがある。これは其の遺存のものに就て學者の說も區々であるが、矢張り當時の防衞のために設けられたものだと云はれてゐる。戰國時代に群雄が自から衞る爲めに作つた城は、粗造ながら澤山にあつたらしい。自分の居宅で城を兼ねたものもあり、保元平治頃には有力者が別莊を城としたことがあり、天子の宮殿も城の役目をしたこともある。しかし德川氏が一統の後は元和に一國一城令を發して多くの城が一つに統一された。それが爲め却つて立派な城が出來た觀がある。城は大概要害を主として山城が多かつたが、德川期の平和時代には平城の經營が多かつた。德川期の城には種々の雅名で呼ばれてゐるが、自分の鄕國の城の名を此書で始めて知つたのが二つある。卽ち新發田の城を舟形城と云ひ又狐尾城とも云ふたことゝ、高田の城を螺城と云ひ鰐城とも云ふたことなどは初耳である。又昔し武器として用ひたものに鍼菱のあつたことも初めて此書に由つて知つた。菱は棘のあるものだが、それを鍼や竹で作つて、戰地に散布しておくと人馬がそれを履めば怪我をするので、古戰記には往々菱をまくの記があるが、今迄氣が付かなんだ。確かに行軍を阻止するの障害物であつたらう。昔しから日本の城と云ふものはどれほどあつたらうか、此著者は五千

位と云ふてゐる。明治の初年城を無用視して民間に拂下げたが、政府が使用の見込があつて四十何所かを除外した。其當時一城の賣却値段は大抵二千圓位であつた。廢壞になつた城あとは多く公園となり、或は官衞學校などの敷地になつてゐる所が多い。今は城も漸やく保存すべしとして國寶として取扱はれることになつた。又城の建築術は全く日本特有のもので、此の建築だけは大工の設計でなく、軍學者の手に成り、城の各部に種々の名があるが、それも軍學者の命名である。城に立入ることを困難ならしむる爲め、構造に種々の工風を凝らした。尤も力を用ひたのは天守閣で、其の威容を作る爲め骨を折つたものである。天守閣は戰鬪用のみでなく、城主が或る期間居住の處でもあつた爲め、炊事も入浴も出來る設備があつた。隨分華麗な設備をした處もあつた。封建時代には名城の所有者は誇りとする所でもあつたが、轉封となると、それが他に歸し、或は沒收さるゝこともあつた。擴張も修理も、幕府の許可を得ざれば勝手に出來なかつた。

校正難

書物の出版に先づ校正は頗る重大事件である。著者自身が校正しても誤りなきを保し兼ねる。況んや他人の校正においておやだ。別して古書の飜刻などの場合においては校正は、頗る難事である。動もすると底本に誤謬があるから嚴密の校正においては、その誤りをも正さねばならぬ。わが國の如く漢文に書いた書物の多い國には、その書の覆刻の時校正が實に厄介である。なぜといふと訓點などに誤りがあつて、どうしてもそれを正す必要があるからである。古書には訓點に多くの誤りがないが、だん〳〵漢文が讀めなくなつて來ると、滑稽至極の訓點を附するからとても堪らない。校正家はこれを正さねばならぬとなると、相當の學識を要する。時には佛典を引いたものなどがあると、佛經知識がないと校正は不可能である。世に校正家ほど様の下の番持をやつて不利の立場にゐるものはないが、文學上これほど大切な役目をしてゐるものはないと思ふ。早大の圖書館に大石理圓といふ人がゐた。この人は校正の堪能をもつて

早く知られ、この人の校正を經たものには誤謬は全然ないといはれてゐる。自分の拙著七八冊は皆なこの人の校正に係り、疑はしい事があると徹底的に調べるといふやり口だから、自分はいつもその忠實さに傾倒してゐる。ある時この人から書物に誤つた訓點の多く附されてゐる一例を聞いた事がある。それは源平盛衰記の片假名本に、羅什門下の四哲を人名と心附かず强ひて、訓點を附してゐるからどう讀んでもわかり兼ねる。すなはち訓點を附したる原文は左の如くだ。

故生二肇融叡之倫一。演說蓮城、防二尙光基之類一、問難爭錚云々。

この文中生肇融叡は羅什門下の四哲、道生、僧肇、道融、僧叡である事を知らず、また防尙光基も四人の名で玄奘門下の四高足、神昉(防の誤刻)、嘉尙、普光、窺基をいふたのだが、それを知らずして訓點を施したのは噴飯に値ひする。なほ同じ様な誤りは林羅山の活版本、後素說には經卷の名に左の如き訓點が施されてある。

偶見二大梵一王問、佛決二疑經三卷一云々。

訓點者は「大梵王問佛決疑經」は經典の名である事を全く、知らないのである。佛典に關する事は假りに專門知識を要するとして、恕する事も出來るが、天工開物などいふ書物は有り觸れ

たものであるのに、それに天工開レ物と訓して書名と心得ないものがあり、經籍訪古志は名の高い書史であるのに、撰三經籍一訪三古志一、などゝ御丁寧に滑稽の訓點を附するものがあつて、この類は枚擧に遑ない。追々漢文修養が疎になるにつれて校正はます〳〵難きを感ずる。

活字因緣

一將功成つて萬骨枯とは、軍陣に多くの士卒を勞しそれを犧牲にして功は一將に歸することをいふのだが、この詩にはいろ〳〵の含蓄があるとも言へよう。巍然たる大廈高樓、其建築は某技師に依つて成ると言ふだけで、他の從業員の事は全く沒却されてゐるが、白煉瓦を一ツ一ツ積み上げねば、この大建築は出來ないのであつて、何萬何十萬の煉瓦を積み累ねる勞は宛から士卒の勞に比すべきであるのに、そんな勞は全く閑却されて功は一技師に歸するのが常である。活版などにしても煉瓦よりも何百分の一とも言ふべき細かなものをならべて版を作るので、採字植字の勞は容易のものでないが、それ等の功は表立たず閑却されてその係長位が僅に

認めらるゝ。自分などは印刷會社の社長をしてゐるから、多くの職工を犧牲にしてそれを己一人の功にしてゐるかにも見えるが、事實はその社長グルミ世に閑却されて、文學者や著者の犧牲となつてゐるものである。世の中に椽の下の力持と云ふ諺もあるが、全く活版營業などはそれである。印刷された圖書の著者こそ世間に、持て囃されたりするが、印刷會社長などが名譽を些しでも頒たるゝものでない。私は青年時代から、活字に經歷があつて一生涯それで一貫してゐるが、その爲め文化に對し相當の貢献をしてゐるけれども自分が心ある人から多少功績を云々さるゝのは圖書の著者若くば編纂人としてゞあつて、活版印刷者としてゞはない。實は損得論になると、これほど損なことはないのである。併し椽の下の力持をするものが無ければ、文化は決して起るものではない。誰も彼れも名と譽とのみに專らであつたならば、下回りの仕事は、誰が擔任するであらうか、椽の下の力持こそ實は事業の大部分をなすものであることを思はねばならぬ。勞働者の擡頭も實は當然の事である。勞働の功を認めない事は嘘である。

太陽の監視

英國は世界到る處に領土を有し、英人は常に誇り顔に我國は太陽をどこかに見る、太陽の沒することは無いと云ふ。實は北亞米利加が獨立して英國から離れたから、其の償ひに諸國を掠奪した結果で太陽の照さない所がないと誇る位だが、實は切り取り强盜の仕業である。これに就き某佛人が評してゐるのが誠におもしろい。太陽がどこまでも照してゐるのは、お天とう樣がわるものから目を放せないからだと、これは痛快の評である。その英國が今は離別されたアメリカと云ふ舊妻に助を乞ひつゝあるのは妙な廻はり合せと云ふべきだ。

氣宇の大を欲す

松岡外相近著「興亞の大業」は特に青年にアドレスして激勵し、其の氣宇の大ならんことを望んでゐる。其中に、左の一評がある。

日本の空は如何に清澄であらうとも、諸君の奔放自在な空想を天驅らしめるには餘りに小さく、日本の野は如何に爽かに、日本の水は如何に清冽に、日本の山峰は如何に秀麗であらうとも、諸君の若い瀑刺たる肉體に包まれた大きな野心を驅け廻らせるには應はぬ侏儒の運動場でしかない。大八洲國日本を老人達の隱居所たらしめよ、幼な子達の遊園たらしめよ、病み傷けるものゝ「サナトリアム」たらしめよ、そして日本を先祖達の安らかに眠る墳墓たらしめよ。

これは青年の天地は大陸である。明媚の山水に執着するなと激勵した言葉で甚だ面白いが、興亞の大業が成就して八紘一宇が事實に行はれた時は、宛ども西京が東都の別莊となつた如く

日本全土が山紫水明の好別莊となるであらうから、此の外相の話は必らずしも空言でない。嘗て朝鮮で好大王の勾高麗の大碑が堀出された頃、此の碑が三韓征代の事を語り、日本の上代史の好資料であるので、之れを日本に移すべしとの說もあつたが、此事を大隈侯に言ふと、侯は言下に止めよ、朝鮮は他日日本の公園になるから、矢張其儘にして置くがよいと云はれたが、それは合邦前の事で、果して侯の言はれたごとく朝鮮は吾が公園の如きものになつたことを想ひ起す。

陣中の隹癖

昨今の大衆小說はどれもこれも血腥い軍事小說ばかりで變つた意匠もないが、自分が讀んで面白く感じたのは二ツある。一は農圃から出た軍曹に土壤の可否を判ずる力と、それを鑑別することを趣味とする者があつて、到る先き〳〵ひまさへあれば、土地の肥瘠を調べるので、同僚にもそれが評判となつて、隨分危險の場合でも彈丸を物ともせず、土地の鑑定にうき身をやつしてゐると云ふことを書いた小說と、今一ツも矢張り土地に關するもので、此方は鄕土から慰問袋で種々の種子を取り寄せて、それをポツケツトに入れ置き、方々に蒔くのを無上の趣味とし、これも同僚間の評判を博した變り者であつたが、負傷して戰地を去る時には殘つた種子を隊長に提供してどこぞに蒔いてくれるやうに賴んだと云ふ小說、何れも相當面白ろく書いてあつたが、農民出身の兵には、コンナ特長もあるわけで、それを材料に取上げた所に着眼があると感じた。

田植唄

日本の俗歌に戀を語らないものは幾んど無い位である。田植歌などに戀歌が多い。實は仕事の庭が卽ち戀の庭であつて、田植の時に男女が結托の動機を作る。安藝の賀茂郡三津口などでは、田植には必らず未婚の男女がほゞ同數出る、其時互ひに唄ふ歌は

年に一度のうれしい田植、お前見に來た逢ひに來た

などで、男女の應酬をくり返し、日沒近くなると、男はそれ〴〵志ざす女の足元に苗を投げてやり、女の返事のある迄は根氣よく之れを續ける。女が其苗束を投返せば、すなはち戀の承知であり、男は女を家に送つてゆく。次の日からは二人は並んで田植をし、他の男女も苗を投げることをしない。斯くして勞作進行の間に戀が成立するのである。

靖國神社の擴張

靖國神社は今や國民崇拜の靈廟となつてゐるが、其の境内は自分の少年時代お名染の處で、しばしば後園に遊樂もし度々遊就館を閲覽し、ある時は坪内逍遙と聯燈下に露宿して一夜を明かしたことすらある。此處はもと田安家の舊趾で嘗て招魂社と呼んだ頃祀られた神靈も少數であつた。聖上の御親拜も大正天皇から始まつた位だが、今は廿萬ちかくの戰死者が祀られた。その祭祀が國家のもつとも重大のものとなつてゐる。此神域は事實狹隘で、大祭となると人の捌きがつかぬ。昔し此の神域の地區を定むる時、大村益次郎は十五萬坪の地區を畫した

が、それは當時に於て餘りに大に過ぎ不經濟であるとて現在の三萬餘坪に減じたが、今になつて見ると大村に先見の明があると云はれる。若し十五萬坪の地域を有し植林でもしたら、今は神々しい處となつてゐたであらう。自分は往年北京に游んだ時、天壇の廣大なるを見て、我邦の靖國神社の社域も此位無ければならぬと感じたことがある。天壇の境域には幾十萬の人衆を容るゝの地積がある、今吾が靖國神社の地域も天壇と齊しきものがあつても決して廣くはない。神社の大祭に大兵を入れ難いのも、群衆の入るを禁ずるのも餘りに狹隘であるからの事だ。すべて招魂の神社は戰爭のある毎に多少の經營を見るのがどこも同じことで、我靖國神社内に石燈や神門等さまの〳〵ものが出來たのは、皆大戰の記念であつて、其等の建設年號を調べて歩けば、おのづから維新以來の戰爭の歴史がわかる。卽ち國家が大きくなるに比例して大きな建造物が起つてゐるが、地區だけは、奈何ともしがたく、依然狹隘其儘であるが、これは國家が大きくなつたのに釣り合はぬ。此神社は出征人家族の神棚にも齊しきもので、何時何萬の家族が參拜に出かけても差支ない位の大きさで無ければならぬことになつた。天壇の如きものを作るのは今の時である。天壇には樹木は少ないが、我邦では蓊鬱の樹木が無ればならぬ。今の社内の後ろに庭園があるがそれは兒戯に齊しい家庭的のもので神苑の明治神宮のそれの如

く大規模のものたらざるを得ない。隨つて遊就館なども擴張されねばならず、遠來の參詣人の爲めに便宜を與ふる諸般の設備も起らねばならぬ。今次の戰爭が終るまでに尙幾十萬の戰死者の合祀を豫想するに於て擴張は最早議論はない。我將士に敢死國に報ずるの志氣を鼓舞するものの一は此の神社であり、これが闔國上下の崇敬する所で在ることを思へば決して忽諸に附すべきでない。德川氏の隆盛時代其菩提寺たる三緣山增上寺の境內ですら三十萬坪あつた。今の神域は餘りに狹く餘りに貧弱で橫山大觀がある筋から其描寫を依囑されそれを辭したと云ふが左もあるべきことだ。

產兒奬勵

昔しはマルサスの主張が國策に影響して人口の過剩を制限して、いろ〳〵の避姙法が行はれ、日本にも公然避姙の藥劑などが流布したが、今は反對に人口の增減が國の盛衰に關すると遽かに、早婚を奬勵したり多子に補給するやうな事になつた。久しい間佛國が人口が一年毎に減ると云はれ、識者は早く國運の衰退を憂へたが、遂に獨逸に負けた。日本も自分の若い頃五千萬と云ふたが、今は內地だけで七千萬となつた、植民地を含すると一億に上るであらう、日本の人口も急速度に進んだものだ。しかし今度支那事變に死んだ壯丁の數も少なくないから、それを補充するためにも多產を奬勵せねばならぬ。血氣の兵士を失ふことは其人を喪ふのみならず、其妻の姙娠も減るから人口を減殺する一大原因となる。統計家の言ふ處に據ると日本も段々に晩婚が行はれ出して多產を抑止する、工業が盛んになるにつれて、人が首府に集中する結果產兒を抑制する、其上に乳兒の死亡率が外國のそれに比して甚だ高率である等に依り、人口が漸減の傾向があるので、政府も氣をもんでゐるが、時局が都鄙共食糧難であるので、滿洲方面に出稼するものが多く、それに配するために女子の進出も相當あるが、一方には食糧缺乏があつて一方には早婚と多產を奬勵をせねばならぬ、デレマに落ちてゐるのが昨今の時風である。兎角多數の潑剌たる靑年が多からねば國運は進まない。今は老人の羽振りを利かせる時でないが、衞生の進歩から人命が長壽を保つことになつて、人が割合に長生し七十古來稀なりと云ふことが、今では古稀の人が珍らしくない。これ等の老人は人口を增加する上から見れば餘り有難からぬものとなつた。それは軍國の第一線に立ち得ないのみでなく、退いて子を產む能力もな

いものである。

以上錄し了つて結婚姙娠などにつきいろ〳〵の損德を思ひ出す。原始時代に產兒を生れたまゝ棄てたこともあつたと見へ、子を生むことを支那では子を擧ぐと云ふてゐる。此の擧ぐは捨てすに拾らひ上げたことが後に擧子を子を生むことに用ひるに至つたのである。支那には驚婚と云ふことが行はれた。どの天子の時であつたか、民間に秀麗の女子があれば皆な宮中に收めたので、それが爲めに民間では大恐慌を起し、大急ぎで結婚をして、それを防いだ。これを當時驚婚と云ふた。

朝鮮では早婚の風習があつて、成年前の男子が早く婦を迎へる。多くの場合婦人が年長である。これは早く子を欲するから起つた慣習でなく、家庭勞働の爲め婦人を要した爲めであつた。朝鮮の婦人は男子よりもよく働くので、どの家庭でも爭ふて婦人の勞働を得るにつとめた。

江戸時代に中條と云ふ墮胎屋があつて、墮胎を欲するものは此家に就いた。方法は種々あつたらうが、ホウヅキの根を胎兒に刺すのも一法であつたと云はれる。

早婚を奬勵するために、未婚の男子に重稅を課する國策が外國の或る處に行はれてゐる。

早婚を奬勵するには嫁具を制限することが一法であらう、邦俗には結婚に要する準備として、多くの嫁具を調へねばならぬことである。富んだ家は別だが、貧戸は相當これには惱む、甚しきは嫁具の資を得ん爲め、私窩子となつて稼ぐものすらある。大阪などでは現實行はれたことだ。嫁前に嫁具を家に陳列して近隣に見せるやうな習慣があるので、斯ることのあるのも已むを得ないが、嫁具に制限を施すことは貧戸の結婚には福音であらう。

亞米利加では友愛結婚と云ふが行はれ、男女情交のあるものが本結婚の前提として先づ行ふ結婚であり、勝手放縱の結婚である。此の關係に於て產兒を寧ろ拒むものであるから、姙娠を防止するので、これなどは人口增殖の國策とはならぬ。一種產兒を抑制するの法と云ふべきである。

古るい銀座の回顧

銀座の思ひ出は旣に私の漫談中にいく度か揭げたが、なほ追々思ひ出づる事が一にして足ら

ぬ。

自分が初めて東京に遊學したのは明治八年である。そして銀座に煉瓦家屋の出來たのは、それより一年前といはれてゐる。最も建築に着手したのは明治五年頃で、表通りから裏通り一等、二等、三等と等級を別けて建築が出來上つたのは明治七年で、自分の出京した時には出來上がつてホヤ〳〵の家屋が建て並び、恰も外國に行つたかのやうに田舍書生を驚かした。當時煉瓦の家屋が珍らしかつたので、この新開町を銀座といはず煉瓦といふが通り名であつた。時の政府は堅牢な家屋を建築するの範を示すために、特に帝都の入口に文化的の經營をなし、これがために百幾萬かの金を費し、それを年賦拂下げとしたのである。百幾萬の投資は當時とすると奮發であつたといふわけは、當時の國家の歳計は千四五百萬圓に過ぎなかつたのに、都會の一部分にこれだけの資を投じたのは、如何に當局者が文化に熱中したかゞ窺はれる。しかし自分が上京した頃は、明き屋が多かつた。煉瓦は窓が狹くて暗くて困る、冷へて困る、疊を敷くに尺が普通の家屋と違つて困るなどいふ苦情が、盛んであつた。それでも政府の勸誘で追々塞がつたが、その塞がるまでには、明き屋を利用していろ〳〵の見世物などが出た。なんといふても灰殼なものが先づこの家屋を利用したわけで、多くの新聞社は皆な煉瓦家屋に看板をかゝげ

た。

自分の始めて見た銀座は柳が街樹であつたか、どうかハツきりした記憶がない。或はやゝ後との事らしく思ふ。柳樹は銀座、殊に夜の銀座に風致を添へるものとして或る方面のものに、喜ばれたのが大震火災の後ち取拂はれたので、是非〳〵柳樹を復活せよと熱心に市長に上申したものもある。それに對し市が街樹を改めねばならぬ理由を細かに、說明した文書の存してゐるのを見ると、如何に柳樹に或る人達が執着があつたかゞ窺はれる。柳蔭は一種の風致をなすものに相違ない。あの頃の浮世繪を見ると、柳蔭や烟雨が大いに風景を飾つてゐる。今日でも文士連は銀座の生命は柳闇の野趣にあるなどいふてゐる。慣習は拔き難いものと今更ながら感ぜざるを得ぬ。銀座は銀貨鑄造の處を意味するので、もと駿河の府中にあつたのを慶長十七年に江戸に移した。その銀座の跡は今の銀座二丁目にあつたといふ。それが寛政十二年に蠣殼町に移されたわけで、實は江戸の町でもそれほど著名であつたのでなく、今の濱町すなはち本兩替町にあつた金座に對し新兩替町といふたのが、どういふわけか、銀座といふ通り名が出來て今では、銀座があるからには金座の名も回復せねばならぬ、と騷ぎ立つやうになつたのも妙な事である。しかし金銀萬能の世の中である事を思へば、それも敢て不思議はない。自分が內部

までよく知つてゐる京橋角にあつた日就社、讀賣新聞は今は銀行となつてゐるが、あそこがも
と向島に銅像の建つてゐる伊勢勝、すたはち西村勝三が始めて洋服屋を出したところが、西洋
から仕立職まで傭ふて來たが、まだ時勢が早過ぎたので失敗した。その後明治十年に日就社が
移つたが洋服屋であつた名殘りが、會計部にあり〳〵と存してゐた。それは何かといふと幅廣
の棚が一面にあつた一事だ。その當時自分も氣が附かなかつたが、あの棚はまさしく洋服地を
納め置くところであつた事が、うなづかれる。

自分が出京の前年だから、目睹はしないが、銀座に一番早く行なはれた馬車は二階建で、芝
口と、淺草の間を往來した。この馬車を原語そのまゝヲムニバスといふた。車屋は英國製のも
のを取寄せたといふが、僅に二臺しかなかつた、といふはチト貧弱である。當時の銀座通りも
隨分惡道であつたので、二階建の馬車を馳するには危險もあつてそれで差止めとなつたが、こ
の馬車が四頭曳であつたといふから、どこまでも英國式にやつたのだ。今日の電車、自動車で
もまだ二階建がないのに、當時早く用ひたるを思ふと、銀座には流石に突飛な灰殼があつたの
だ。この事を營んだものは　陛下の初度のお馬車の馭者を承つた馬の名人紀州由良の伊東八兵
衞といふ人であつた。これに次で鐵道馬車が起つた。それは自分も知つてゐる自分が讀賣新聞

に筆を執つてゐた頃、道を隔てゝ社前に松田といふ大衆料理屋があつた。その事はいつぞやの
思ひ出にもいふたが、この店でお客の下足が百番に達すると、下足番が聲高らかに呼ぶので、
その聲がわれ等のゐた編輯局によく聞こえた。兎もすると一日に三度位この叫びを聞く事があ
つた。ひどく繁昌した事がわかる。もう一軒大衆料理店千歳といふが、新橋寄り今の百品館の
あるあたりにあつた。これも松田と同式であつたが、松田よりは料理がよいとの評判であつた
けれども、松田ほどに繁昌せず、自分などは餘り出かけなかつた。

古るい銀座の夜店は案外盛んなもので、骨董店などに隨分掘り出しものがあつた。あの頃は
舊物打破といふ空氣が漲つて、家の貴重品でも無分別に道具屋に賣り飛ばした時代であつたの
で、心あるものは銀座の夜店を注意して見廻り、意外の掘り出しをやつた事が少なくなかつた。
今銀座で堂々たる構ひをしてゐる服部時計店の先代の主人なども、大道商人から產を作りあげ
たのである。天麩羅をもつて名高い天金などは、其頃如何にも小さな店で、客が膝と膝とを交
へて飲食するやうな家であつたがあれも夜間は、屋臺店を大道に出したものだ。また舊銀座で
店舗として人目を惹いたものは、岩谷松平の店で、薩摩がすりと岩谷自製の薩摩煙草のシガレ
ットを賣つたが、シガレットは盛んに賣れて、今の專賣局の煙草の如く一般に流布した。天狗

煙草を賣るから岩谷天狗の綽名もあつた。薩摩の國産を賣るからといふて、島津家⊕の紋を看板に用ゐた事が島津家の横鎗で、一時問題となつた。ところが島津家の定紋は十が輪廓に觸れてゐるのに、岩谷のは觸れてをらぬといふやうな分疏でともかくも事は治まつたが、岩谷はなか〳〵の山師で、殊に主人は大の好色家をもつて聞こえた。妾が十人も一家に同棲してゐると噂されたが、店に明眸の婦人がゐたのはその連中であつたかも知れぬ。かれは赤色の洋服を着け、馬車で市中を横行するのが常であつたが、無論宣傳であつたのだ。

煉瓦家屋の建築されない前の銀座邊は、どんなものであつたか自分などは知らないが、昔からこの邊に知名の人が多く住んだ。殊に藝術界の人がなか〳〵に多い。その一端を擧げると、山東京傳は銀座一丁目の東側に住し、弟の京山は南紺屋町にゐたが後ちに京傳のところへ移つた。文政頃には岸本由豆流が銀座一丁目、平田篤胤が三十間堀に各々住し、木挽町には狩野尙信、常信の家があつた。大西圭齋、大槻磐溪、山内香雪なども銀座に住んだ。北川眞顏は數寄屋河岸に、眞淵門下の才媛油屋倭文子は弓町にゐた。幕末時代紀文をもつて擬せられ春水が、梅暦の材料にした細木藤次郎香意(或は香以)は山城河岸に住した。明治になつてからは岸田吟香や、成島柳北(その妾宅は出雲町にあつた)などは銀座に、久米邦武は三十間堀に、橋本雅邦

は采女町に、篆刻家益田香遠は日吉町に、原胤昭は三十間堀河岸に原女學校を建た。また戸川安宅も銀座の住人であつた。銀座はなか〳〵人物の淵叢であつたのだ。

銀座の懷古

大島寶水氏の「銀座」という書にはいろ〳〵の人が追懷談を書いてゐるので面白く感じ、自分は銀座にドンナ關係があるかと默想して見るとなか〳〵關係が少くない。

第一は讀賣新聞の日就社に關係があつたし、又同社の向ふに松田と云ふ大仕掛の料理屋があつて毎日の辨當はこれから取寄せたものだ。時には出かけた事も屢々ある。田舍漢相手の安料理屋で皿のもりが多かつた。厠を立派に作つて地方人の膽を奪つたものだ。

友人高田早苗君が帝大同窓時代西紺屋町河岸に居つたので、自分は毎休日、朝から訪ふたものだ。必ず天金のテンプラが御馳走であつた。大隈侯も明治二十年に銀座の弓町に借宅して事務所を構へ、毎週、日を定めて早稻田から出張されいろ〳〵の人に爰で面接して居られたが、

自分も同所で多くの人に逢つてゐる。

又友人山田喜之助君が出雲町の藝者屋のマン中に辯護士の事務所を構へた。山田君もその頃は無妻で自分も獨身であつた。自分は九春社に毎日通つて執筆してゐたが便宜上、日中は山田君と同居したこともある。山田君の住居の背後に喜多川と言ふかなりな鰻屋兼料理屋があつたが山田君の物干しと先方の物干しが接してゐるので、いつも物干し傳へに出かけて酒を飲んだものだ。服部氏の九春社といふが、銀座の新橋寄の殆ど端れにあつて、服部誠一君が東京新誌其他の雜誌を出した處である。自分は東京新誌に關係は無かつたが、內外政黨事情と言ふ隔日に刊行の新聞を出した時、山田一郎君と自分が執筆を擔當し、經濟上の責任は服部君が擔つてゐた關係上この九春社へ半歲ばかり通つたことがある。こゝの編輯局が狹隘だつたので山田君の二階に同居してゐた譯だ。

增田義一君の實業之日本社が南紺屋町の河岸にあり、中村梧竹氏は在世中本通の伊勢幸といふ洋服屋の二階に居つた。

方面をかへて料理屋などから銀座關係を言へば、裏通りに伊勢勘といふ相當の料理屋があつたが、これへは讀賣新聞の編輯連と頻繁に出かけたし、大村屋と言ふ船宿へは小川爲次郎君と

時々出かけ、きつねと言ふ三十間堀の鰻屋兼料理も相當のものでこれにも出かけ、華月、湖月は勿論、種々の會合で出かけ、甘いものは本領ではないけれども十二ヶ月といふしるこ屋へも三度や五度は出かけたであらう。

待合は八官町に二三軒懇意の處があり、鍋町の風月には議員時代時に午餐(洋食)を取りに出かけ、竹葉へは幾回行つたか數へ切れぬほどである。自分が大隈伯後援會を設けて解散後の總選擧を指揮する會長となつた、その折の事務所は鍋町の辯護士守屋此助氏の家であつて、これへ二ヶ月ばかり毎日往復したが日々の辨當は此竹葉の鰻飯であつた。數へ來れば銀座にはなかなか淺からぬ緣故がある。

そして最後に自分の祕事を語れば、帝大學生時代坪內逍遙君と下谷の某亭に飲んだ時のことだ。深更におよんで宿るべき所がないので、やむなく、夜明けまで散步しようと下谷から步いて銀座を通り新橋に到つて、更に又同じ路を戻り九段に行つて芝生の上に臥し、天明に迨んだことがある。夜三時頃の銀座をかうも丁寧に步いたものは恐らく他にあるまい。

銀座暗黑面

自分は散策毎に足が銀座に向くが、暗黑面を探檢するには年を取り過ぎて濃厚なエロの享樂場に足を入れた事はない。しかし實地を踏んだ人から往々聞かされてゐる。路次式の横町に巢食ふてゐる。種々の「バア」には夫々特徵もあるそうだが通例男女が直に接近し、一杯のウヰスキーを煽るか煽らないかに古い馴染でもあるかの如く、ウエートレスが慣々しく物言ふて體を擦り寄せたり、テーブルの下で客と兩脚を交へたり、ともすれば抱擁したり、接吻したり互に口から口へ酒を移して飲んだり、飲食物を女からねだつたり連れ立て何れかへむぐりこんだり、或は「バア」に備へてある祕密室に寢こんだりする。そんな簡單な享樂場は江戸の繁榮時代……淫靡の最も甚だしかつた時でも、恐らくそんなに手取り早くエロの享樂を滿足し得る所はなかつたであらう。女郎屋にせよ待合にせよ、這入る瞬刻から享樂の目的の達し得る所はないのだ。この場に入るものには種々なる年輩の人がゐる。また種々の階級の人がゐる。血の氣の

多い青春のものゝ多い事は勿論だが、あながちそればかりでもない。チャンと家庭を有つてゐる立派な紳士達もこゝの客となる。毎夜のある時間一たびこゝに足を踏み入れねば氣の濟まぬ人達もある。勿論必ずしもすべてが春を買ふ遊蕩者ではない。只單に女に戯れるのを興とするものもある。かゝる簡單の享樂場が出來ては藝娼妓の營業も成り立ちかね、現に藝妓が轉業して女給となつたものが少なくない。追々はます〳〵多くなるであらう。これ等は嫖客を操縱するの專門技術を有つてゐる。普通のウエートレスはいくら容色があつても、客を掌中にまるめて飜弄するの技術を有つてをらぬ。この道にかけてはかれ等はA、B、C、を知るに止まる。それだから客が時間長く流連すると終に馬脚を露はす。かれ等の應接は萬遍一律で變化がないから、客に厭氣が生ずる。そこに行くと藝妓の腕はさえてゐる。機略があり氣轉があり客の胸臆を透視して應變の技を揮ふので、容易に馬脚を露はさない。直に客に許すかに見へても實はそうでもなかつたりして、客にも多少の手腕を要する。實はそこに興味もあるので「バア」に藝妓出身のウエートレスが幅を利かせるわけである。これまで待合遊びなどをしたものにいはせると、下司ばつてお話にならんと排斥するけれども、新式の通客にいはするとコンナ簡單で安直で便利であるものが、どこにあるかい。場に入ると行きなり二三の女が相手になり、初回

から熟交ある如く打ち解けて、膝をすり合はせ凭りすがつて隔てるところがない。そしてかれ等には去る時五十錢銀貨を一ツづゝ攫ますればそれで濟むのだと、なるほどそう聞けばこの新式の法には相當長所もあるやうだ。とかく人間の或る年輩には妻妾のみに滿足が出來ず、道草を摘まねば氣が濟まぬ時代があるから、いつの世でもそれを滿足させるために相應の事があるはずだ。今の世相の一端としてこんな事も漫談の材料とする。

汽車中の國際醜

自分の北京に游んだのは、奉天に日本圖書館協會の大會のあつた時で、奉天の會が終ると、同人多數の會員と別を告げて、自分は坪谷水哉と共に燕京を訪ふことになり、奉天から北京行の汽車に乘つた。語らうとするのは其の車中の事である。時は露國に革命が起つた後で、當時奉天は張作霖の麾下にあつたが、おかしな事には北京行の一等汽車の賃錢が、汽車賃の表に照らすと幾分か安いので、何故かと糺すと張作霖仁政の一端だと云ふを聞き奇異の思をした。汽

車は英國製で一等室も餘り綺麗でなく、一室二人を容れ、寢臺も備はつてゐたが、寢臺は吊られてあり、洗面所と圓は、次の室との中間に設けられて、兩室の共通となつて居り、ボーイが時に暖かいタオルを持ち來り、茶などを運んできても、茶には塵埃が潜んでゐて不潔を感じ、タオルも清潔でなく不快を覺へたが、此汽車には西洋人の外日本人は吾々二人切りであつて、車中日本語も英語も通ぜず、事を辨ずるに頗る困つた。食堂に入つても見たが、日本の麥酒などは全然なく、日本の勢力の及ばない所は、こんなものかと、心窃かにあきれざるを得なかつた。車内で不快を感じたことは、乘客の男女が通路を擁してトランプを賭してゐることで、ステーション毎に男女の客が相擁して何事か私語しつゝ逍遙を試み、食堂でも男女が酒を飲んで囂々を極めてゐるさまは、如何にも醜陋であつたが、漸やく氣が付いて見ると、此等の婦人は皆な露國の貴婦人達で、難を遁れて北京に至る道中であることが知れた。婦人の相貌は皆立派なものであるが、彼等は淫を賣つて生きねばならぬ運命にあつて、其の男性に對する媚態は正視の出來ない醜いもので、食堂で見た男女の如きは男性は色黑き印度人で、これに對しては流石の淫賣白人も、其の挑みに應ぜぬらしく、食事の勘定は、婦人より支拂つたことが認められた。幾人此種の女性がゐたかハツキリ知り得ないが十人位は居つたと思はれる。自分等の室に

隣る一室にも此等の婦人が若干ゐたと覺しく、半夜外から戸を叩く聲が聞へたのは、挑みに來る客であらうと思はれた。朝になつて水哉が洗面の爲め戸を排して隣室と共通の小室に入ると、水哉を驚かしたのは、全裸の女性が既に此處にあつたことであつた。彼等は恐らく車中に約して北京では夫婦らしく旅館に投ずるのであらう、それが露西亞の貴族のなれの果と思へば、哀れな情なきを得なかつた。彼等女性は多分身を以つて危險を脱したものであるらしい。東京に身を寄せて尼となつてゐる某ロシヤ婦人は殺害に遭はんとする刹那、最愛の良人に生別を告げ、身には唯だ高價のダイヤモンドがあつた爲めに遁げ果うせたと云ふ實例を考へても、彼等も多分同じ運命で、名譽も顧みるに遑なく、唯だ生きるため身を賣るのだと想像も出來るので、昔し平家方の貴妃達が敗軍の揚句、源氏の玩ふ所となつたことなどを思ひ合はせ、革命や敗軍が如何に恐るべきやをシミ〴〵と感じた。

愛馬デーの回舊談

愛馬デーと名づけて軍馬の功を感謝する日に、三部隊長に歴仕した勝山號を前頭に一千騎の軍馬が市中特定の所を行進し、二十萬の群衆が堵を築いて喝采歡迎した。馬は家畜の内で尤も從順でよく人に慣れ、重きに堪へて人の勞を省き、よく農業を助け、戰場に於ても輸送機關として重要の役目をつとめる等、今更馬の効能を陳ぶるまでもないが、今次の大戰爭に於て幾千頭の馬の功績の大なることが愈々分つたので、其の功績を表はす迄に至り、ラジオでも馬に關する種々の話で花を咲かせた。自分などは幼少の時農村にて馬に親しんだことはある。駄馬で旅行したことはあるが、騎馬の術を學んだことはなく、操縱の術は絶對に知らなかつた。然るに全然無稽古で三日間續けさまに騎馬の人とならねばならぬ事が起つた。それは往年改進黨の興つた頃の事だが、房州地方の有志に招かれ、小野梓君、砂川雄峻君とともに遊説に出かけた時の事であつた。當時はまだ房州地方に鐵道は一ヶ所も開けず、他の乘物もなかつたので、四

五ケ所開會の演說會に臨むに、地方人は騎馬を勸めて馬の用意をして呉れた。小野君も砂川君も騎馬の心得があり、土地の有志の一二も騎馬で隨行したが、自分のみは初めての經驗であつた。初乘で山陵を跋涉する旅行であるから、多少の危險があることを思はないでもなかつたが、馬術の心得が無いからと白狀するのもいやであつたから、素知らぬ振りで乘つて見ると、どんなにトボケてゐてもよく騎手の初心であることを知るものは馬である。多分手綱サバキなどで知れるのであらう。想ふに駄馬は人間を荷物同樣に考へてゐるらしく、之れに騎つても馬は從順であるが、乘馬は人間として騎手を扱ふから、駄馬の如く從順でなく、何となく騎り心がギゴチで、兎もすると馬が勝手なことをして騎手の命に從はぬ。コヤツ人を莫迦にしやがると人を怒らせるが、去りとて初心の騎手は如何ともすることが出來ない。よくある例だが初心の騎手を乘せた馬が、人の家に這入つたりして騎手を赤面させることがある。馬は初心の騎手をからかう氣味のあることは事實である。自分も最初からかはれたが、兎角二三騎にはさまつて或る會場まで無難に達した。此會場某寺と云ふは高丘の上に建つてゐる寺で、それに到るには幾十段の石階を登らねばならぬ。他の連中は皆な石段下からおりたが、自分のは、どう制しても止まらぬので、階段に沿ふて熊笹の發生してゐる所から、駈け上つた。寺の門前に吾等を

迎へてゐた連中は、わざと攀ぢ登つたのかと解して其の壯擧に拍手を送つたが、實は馬に驕弄されて斯る暴擧に出でたことを思ふと心窃かに恥ざるを得なかつたが、幸ひに怪我もなかつたので、自分はわざとやつたらしく裝ふたのは、内心つらかつた。どこへ行くにも銘々に定まつた、一匹の馬あるのみで、或る時は夜間馬上で數里を行つた。疲れた自分は馬上坐睡を催しつゝ山間を通過したが、既に二日三日と乘ると、自分が騎り慣れたと云ふよりは、寧ろ馬の方が騎手を知つて、コンナ素人を弄んでもつまらないと諦らめて、一切驕弄を廢して、居眠りの騎手を安全に乘せて歩るくやうになつたのである。自分の馬の乘り初は此時で、それから後二たび騎馬の經驗は無い。

力づくの品定め

傳統や系統や血統などに由らず、實力で優劣を定めるのは、相撲と淨瑠璃語りなどである。相撲に於ては尤も鮮かで、優勝を得れば番付面に直ちに其の實力が現はれる。亦餘の事は實力

ばかりで行かぬものが多い。偉い人の血統だからと云ふて、不相應の尊敬を博し、柄にもない立派の位地を博することがあり、藝術にしても名流の系統だと云ふて、拙劣な藝に多く價付けることもあるが、これは偶々其の藝を益々下落せしむる所以で、何流など云ふ長く傳統ある藝に初代と比して雁行まで行くものは幾んどなく、墜落の一方を辿つてゆく、だから流派の末流の藝には、優れたものはない。何んでも實力を標準として優劣を定めねばうそである。支那や露西亞は大國として恐れられたが、小國なる日本と力を均して見ると、兩邦ともに敗れた、して見ると大國として恐れたのは實は見かけ仆しであつた。實力を以つて優劣を判するならば、日本は確かに兩邦以上であると云はねばならぬ、最早傳統ばかりで通る世の中ではなくなつた。實力が物を云ふ時勢である。人にしても國にしても、自分は頃日淨瑠璃の名人傳を讀んでつく〴〵此の藝術が意外の人に由つて發達されてゐるので驚いた。恰度浮世繪師が妙な處からグン〳〵頭を擡げて、世に所謂る正統と云ふ畫壇と何も交渉もなく現はれ出たと出じく、淨瑠璃も又それと略々似たものである。一二の例を擧げると、近世の二大家摂津大掾と大隅太夫の師たる春太夫を始め、摂津も大隅も皆斯の道に緣もゆかりもない素町人から、唯義太夫を好んだ爲めに發展したのである。春太夫は泉州堺の瓦商大里屋の倅で體量三十貫もある男と云ふ

が、江戸に出て遂に立派な淨瑠璃語りになつた。相撲になるよりも淨瑠璃を好んだからの事だ。摂津も大阪の大工の子であり、大隅も大阪府下池田の鍛冶屋の倅で、共にづぶの素町人であり、摂津門下の越路も堺の餅屋の倅である。決して淨瑠璃の系統に何等の關係もなく、唯だ斯道が好きであるばかりに研磨苦辛して遂に大家になつたことを思ふと、大家は素性に由るものでなく、寧ろ自身努力の達成の結果であることがわかる。

小説の挿畫

今の小説の畫を作る人に問へば、小説の畫を作るほどツライことは無いと白狀してゐる。其の日に掲載さるゝ文章に合はせるやうに構圖をやることは全く畫家に對して、一種の强制である。心にも無いことを書かねばならぬとあれば、畫家には全然自主がない、手腕あるものがいやがるのは無理もない。それを考へると、北齋がときゞ〳〵馬琴と喧嘩したと云ふたのも無理はない。あの頃は今とは違つて、文章にあふやうにどこまでも瑣細のことまで圖にせねばならな

かつた。種彦の田舍源氏などは極端の例で、まるでパノラマ式で、繪が半ば文章の筋を補つてゐるが、畫家はよくも辛抱したものだ、挿畫家は全く獨立がなかつた。

大骨董

自分の知る人で趣味道樂の極點を行つた人が二人ある。一は横濱の原富太郎氏で、三溪園を經營し、豐公の遺構を園内に移した。他の一人は伊賀の川崎克氏で、自費を以つて伊賀城の天主閣を營んだ。原氏は故英雄の遺物を移して保存したに止まるが、川崎氏は天主閣を自力で建造した。其の富力を云へば、原氏は川崎氏の比でなく、他人の遺構を移す位は何んでもなく容易であつたらうが、川崎氏は原氏の如く富んで居らぬ。他人から木材を寄せられたのが動機で、愛藏品を賣却して、他人の寄附を待ずに終に成就した。共に趣味道樂の雄として擧るに足らう。原氏は故人となつたが多方面の趣味家で、自ら畫をよくし詩にも長じた。川崎氏も畫を作り陶器を自製し、殊に伊賀燒に妙を得た。世には名器名畫を多く襲藏する趣味家は少なくないが、

建築に趣味道樂を擅まゝにした人は二家に限る。骨董を道樂にする人はいくらもあるが、斯る大骨董を道樂にする人は世間甚だ少ない。

至言抄

語簡にして意長き至言を並べて見るといろ〳〵あるが先づ人の互ひに識り合ふのは「土偶誚木偶」で、壁に耳あり言語注意を要すと云ふが、「畫言雀聽、夜言鼠聆」と云ふ。情人同士は相手の短所を沒却す、所謂る「情人眼裏有西施」がよく穿つてゐる、又「いやな男の親切よりも好いた男の無理がよい」と云ふ語もある。坐して食へば、十の藏も忽ち空しと云ふのに、「坐喫山空」の語がある。人の情程力あるものはない、去れば「情に向ふ刄なし」と言ひ、亦「鬼の建てたる石の戸も情に明く」とも云ふ。人間の美德は恥を知ることである、「赤面は德の色」と云ひ、「慚愧は衆善の衣服」とも云ふ。酒を誡める語に、「海中よりも杯中に溺死多し」と云ひ、又「渴して死ぬは一人飲んで死ぬのは千人」とも云ふ。驕るもの久しからずと云ふが「蟻は羽を

得ると死期が近かい」。有閑婦人の誡めには、「鏡に親しい程家事に疎くなる」の語があり、人に對してさべり手になるより聞き手になるがよい「語る者は播種し默する者は收獲す」とは名言である。惡妻を有つよりは無妻の方が優しだ、「無妻に次では良妻」と云ふ語はそれを道破したのである。人間の性分は、三ツ兒の魂と云ふ程變じ難い「山河易改、本性難移」と云ふは之を云ふのである。親孝行は難いかな、語に云く「父十子を養ふて、十子一父を養ふ能はず」。胸中蘊蓄なき人多くは饒舌なり、空罐を車に載せて運ぶが如く、其聲ガラ〳〵と騷々しい、古歌に「そこひなき淵やはさはぐ山川の淺き瀨にこそ仇浪はたて」とあるは此意也。漫りに神助に依賴する莫れ、「舟子も力漕せざれば神助なし」。青年侮る可らず、古諺に曰く「若木の下には笠をぬげ」と後世恐るべきの故也。漫りに借金をすべからず、西洋の諺に「金を借りに行くものは憂を取りに行くなり」とあり、漫りに怒る可らず、誰れやらの俳句に、「むつとして歸れば門に柳かな」と眞顏の柳の句に「爭はぬ風の柳の糸にこそ堪忍袋ぬふべかりけり」と柳の態度こそ怒を制するものである。ベーコンは「人の心には死の恐れに打勝つ情ほど弱いものはない」と云ふたが、併し死を意としない場合がある、ベーコンは亦「復讐は死に克つ、戀愛は死を輕んず、名譽は死を希ふ、悲哀は死に奢る、恐懼は死に先つ」と云ふた。美人は嬋妍の劍だ用心せ

ねばならぬ、伊太利には「美人の笑顏は財嚢の裂目」と云ふ諺がある。安眠の出來るのは心に曇りがないからである、佛蘭西には「曇りなき良心こそよき枕」と云ふ諺がある。人間の臭氣ある俗地には好風景の地はない。去れば「絶景に金つかふべき所がない」とは至言である。戀愛と嫉妬は雙行の心理である、去れば「嫉妬は戀愛の報酬であり」又「戀人の喧嘩は戀を二倍にするとも云ふ。美人ほど人を毒するものはない。伊太利では「美人の喉は開きたる墓場である」とさへ云ふてゐる。語に云く「從善如登、從惡如崩」と宜なる哉世間惡に從ふものゝ多きこと、登るは難く崩るゝは易きなり。人の或る目的を達するには最高峰に達せざる可らず、最高峰の登攀を成就するは最も難し、人の目的達成に挫折するものゝ多きは怪むに足らず。高慢ほど厭ふべきものはない、見よ稻の穗の充實するものは、其頭を下るにあらずや、空虛の穗こそ頭を上げて居ることを、西人の諺に「高慢の花は惡魔の庭に咲く」と又云く「馬鹿と高慢は同根より生ず」と。赤い色ほど人目を刺戟するものは無く威力を添へるものはない、去れば「高僧も緋の衣を衣れば退隱がいやになり」「女の股位を尊く見せるのは緋縮緬の褌である」と。昔し幾千卷の歷史を書かせた王があつて、餘りに浩瀚だと云ふて段々縮めたが、終に三語となつてしまつたと云ふ、その三語は曰く「生と苦と滅」どんな歷史でも縮めればこんなとこに歸着

する。

旅舍と茶代

日本の昔の旅に就き旅は憂きものつらきものといふけれども、それは一面を見た話で、考へやうによつては、旅ほど興味のあるものはない。毎日見るものが變化するのも一興だが、旅舍に泊つても一概にいぶせきものとすべきでない。僅ばかりの心づけをすれば、行燈の燈心を添へて直に輝き出し、風呂の使も早く來る、番頭や主人が叩頭して用をきゝに來る。手を打鳴らせば女中が打捨置かず顏を出す、さらに茶代を氣張れば、部屋も立派なところに替へてくれる夜具も立派のものを出す、僅ばかりの心づけで猫の目の變はるやうに意の如くなることを思ふと旅舍は決して不自由のものでないとある昔の人は觀察してゐる。今日でも茶代廢止の實際に行はれないのは理由のあることである。旅行に慣れない人は茶代の額を極めることに案外苦慮して、その面倒のあるのを厭ふて旅行を差控へる人もある。泊料は多く拂つても構はないが茶

代を拂ふ面倒を取り除きたいと言ふて、西洋旅館の風を羨み內地の旅行に洋風の旅館を選んで宿する人も追々出て來てゐる。しかしつく〴〵考へて見ると、洋風旅館もなか〳〵殺風景である。すべて事務的に出來てゐるから簡單には相違ない。何から何まで自分でやつてのける趣向であるから、茶代は不要の筈である。食事は食堂で取り、浴は自室で勝手に栓を捻つて浴槽に湯を湛へて自から辯ずる。盥嗽も自室でやり厠も自室にある。萬事便利に出來てゐるやうなものゝ一人旅などでは話し相手もない不時に酒を飲みたくもそれも一寸辯じかねる。深夜に歸つて來てもみづから鍵で戸を開き衣類を脫してもそれを整理してくれるものもない。西洋服なら室內の釘にブラ下げて置けるが、和服は一應整理を要する、ウエーターを呼んで疊ませることも洋室では厄介である。平素日本風の生活をやつてゐるものには、自辯主義は氣樂のやうでも島流しにでもされたかの如き感があつて、氣が暢んびりしない。そこで二夜三夜は洋風旅館で辛抱もするが、日本風の旅館があれば、自然そこに移つて疊に坐し饌の上で酒食し疊の上で寢て、保養をすることになる。日本旅館は不定の茶代や心付が要るけれども、不經濟と知りつゝそれに赴くのは、日本の因襲に擒はれてゐるからでもあるが實はそれ丈の愉快があるからである。相當の旅館には必ず客に受持の女中があつて、酒飯の給仕をする、衣類の整理をする、外

出の後には取亂したものを片づけもする、不時に客があれば酒食は立どころに辦ずる、夜間に歸つて來ても寢酒位は飲める、出發の際には荷物を作る手傳へもする、男子のウエーターに較べると柔味があつてよい、客扱ひに慣れてもゐるから細かい處まで屆く、女中には心付をやることは西洋旅館のウエーターに心付をするのも同樣であるけれども、實は茶代の厚薄が女中の品質や働き振りに關係がある。

日本の旅館には等級さま〴〵の室があつて、部屋に付て使用料が定まつて居らぬ、客の地位に依つて旅館が定めるのであるが、實を言へば茶代がそれをきめるのである一室に二タ間も附屬してゐるのと僅に狹い一室だけであるのと甚だしい徑庭がある。のみならず、よい部屋の調度寢具一切のものがそれ相應に吟味してあることも考へねばならぬ。地位に應ずる茶代を拂ふことの已むを得ない所以はここにあるのだ。亦地位あるものが敢て茶代を拂ふを厭はない所以もこゝにあるのだ。何も氣分の問題である、よい氣分を欲する爲めに價を多く拂ふても遺憾はない筈である。自分は嘗て汽車と旅舍の連絡を論じ、旅館は汽車の延長であると云ふたが、旅客に安息を與へるには旅館は汽車と異る所がなければならぬ。旅館は一時的家庭と見るべきものであるから、おのづから情味が無ければならぬ。そこになると西洋旅館は嚴正に汽車の延長

で宿泊の室も車中の室と一般唯坐席を大きくしたに過ぎぬ。車中の寢臺その物の如くである。いくら旅館は汽車の延長でも、そうまで車内と同一であつても困る。車中には心を許し難い他人ばかりで滅多に語ることも出來ぬ。旅舍に落着いてもなほ一室におさまつて錠を鎖し語るに人もなく、何をするにも車中の寢室の如くであつては、旅行は全く事務的に墮ち、樂みといふものがない。氣の霽しやうもない。經濟一方の論や事務家の旅行は全く別として、趣味の上から云ふと日本式の旅館は西洋のに優つてゐる。長く西洋にゐた人でも西洋の家屋には皆閉口して歸ることを考へると旅館に就ても思ひ半に過ぐるものがあらう。自分は西洋に出かけたことがない併し西洋旅館に宿泊した經驗は幾度もある、支那の燕京の北京飯店などは東洋一と稱せられ、日本にそれと比すほどのものは無い位壯大のものである。自分の室と定めた所は二十疊もある廣さで、寢臺もあれば衣類棚もあり、箪笥もあり、鏡や裝髪具もあり、物を書くテーブルもあり一切が備はつてあつて、寢臺は廣く清き雪白の布で覆はれ、雪白の蚊帳が吊るされてあつて、枕頭に電話機も据付けてある。室に隣つて一室が附屬しそれには浴槽があり、洗面所があり便器があり、陰部を洗ふ器まで備はり、日光は充分に入り、申分無い氣持ちのよい部屋であつた。それにしても全く自辨主義で、語らんとしても絶對に相手がなく、醉つて深更に歸

つた時などはもとより援けるものもない。五日間の宿泊で朝から晩まで外出を事としてゐたから別に寂寥を感ずる事も無く濟んだが、若し疾病などあつて臥したとしたらどんなものかと案じて見ると、矢張り日本の旅館の方が人間の情味があつてよい樣な氣持がした。奉天などでは最初西洋旅館に泊つたが何分窮屈でたまらず、終に日本旅館に移つて初めて暢びりした。

溫浴雜談

日本の風呂の歴史も溯れば古いものである。上代の風習その儘を傳へてゐると云はれる大嘗祭に三殿が設けられるのが恒例だが三殿のその一、回立殿はすなはち浴殿である。神事をみづから司らせらるる陛下は、神事に先だち入浴あらせらるゝが例となつてゐる。神事に身を潔めることが如何に大切であるかゞ窺はれる。所謂ミソギなるものも浴に外ならない。佛敎においても同じく浴を大切に考へ、之れを以て病を除く法として、極樂寺の忍性上人は十八間の大浴室を設けて風呂供養を行つた。これより先光明皇后はお手づから千人の民衆の垢を擦り落されたと云ふ著名な例もあるが矢張り風呂供養である。北條義時その他宗敎的に之を行ふた例は少なからずある。しかし風呂も遂には享樂の爲めにする事になつた。いつごろからと云ふことは分らないが、豐太閤が桃山に營んだ飛雲閣、それは今移されて西本願寺にあるが、その中に黄鶴臺といふ浴場がある。確か蒸し風呂式であつたやうに思ふがまさしく享樂的のものである。東寺の洗心寮などいふ風呂も初めは宗敎的であつたらうが、後には矢張り享樂的になつた。

風呂の形式もいろ〳〵あつて、今は幾んど皆溫湯を湛へた浴槽に身體をひたすやうになつてゐるが、昔は專らむし風呂が行はれ垢をするといふよりは、溫を取ることが主であつたらしい。湯氣を作るにも色々の法があつて、或は石を焚きそれに水を注いで作つたり、戸棚風呂など〻唱へて湯氣を籠めた密閉の室へ入る形式もあつた。風呂の入口にざくろ口と唱へるものが維新後まであつたが、あれなどもむし風呂の名殘りを留たものであらう。今でも田舍に種々の形式のむし風呂が殘つてゐる。釜の上に桶があつてその桶に人の出入し得る戸があるなどは一例である。風呂を享樂の具に供した事は、湯女が浴客に酒を侑め三絃をかき鳴らして興を助けた事實に徵しても知らるゝ。古るい繪に浴場の垢すり場に浴客が杯を傾けてゐるのがある。それが卽ち享樂を語るものである。土耳古は蒸風呂が有名で、今はそれに倣ひ日本にも相當にあるが、

昔の蒸風呂は朝鮮あたりの式に倣つたと斯道の研究家は云ふてゐる。近江と佐渡に今も殘つてゐる古風のむし風呂はおろけと云ふてゐるが、これなどは朝鮮系統のものかも知れぬ。

日本は火山國である爲めに溫泉の多いことは世界第一である。國民に溫浴の習慣のあるのは溫泉が豐富であるからだと人は直に言ふがそれは少しく說明が足らないので神道、佛敎共に身を潔めることを要求した爲めに世界に類の稀れなる風呂好きの習慣が、宗敎的に養成されたと云ふ方が寧ろ妥當であらう。

歩けく

今「ハイキング」と云ふ語がある。散歩のことでなく、やゝ遠距離を行くことに用ひられてゐる言葉であるが、今日は汽車電車などの便利があるから、ハイキングは必らずしも歩行のみを意味して居らぬ。自分などの幼少時代には、山ユサンと云ふて、附近二三里位の勝地へ、家族總出で、酒食を携帶して一日遊び暮す習慣があつて樂しかつた覺へがある。明治に入り東京

に來てからも、之れに擬した遊樂をやつたこともある。自分の村居時代と云へば、十二三歲の頃だが、二里程ある村塾に每日通學して敢て疲勞を感じなかつた。東京大學時代には遠足と云ふと、國府臺によく遊んだ、其頃はまだ兵舍が無つた。一日にては歸り兼ねる距離だから、市川あたりに一泊するのが例であつた。東京大學時代友人と五十日計り東海道中山道に旅行した時には、乘物を用ひないことを誓つて出發したが、此の誓が實行されてなか〳〵達者に歩るいた。東京への歸路甲州街道にかゝつた時は、一日十七里を歩るいた。此の十七里の內には笹子と小佛の險嶺もあつたが、一向平氣で踏破したので、途中道づれになつた態飛脚が、我等の健脚に驚いた位であつた。

當時吾れ〳〵ですら以上のごとくであるが、歩行を業務としてゐるものは尙更らのことで、昔しの紀州家の飛脚にお七里と名くるものなどは、晝七里夜七里一日十四里を歩るくを例とし、今でも木曾の舊問屋に七里帳と云ふ文獻が存してゐると聞いたことがある。何にしろ昔し交通機關の備はらなかつた時代、全國を膝栗毛で踏破し、北海道までも及んだ人々が澤山にある。商人などは必らず一度は長崎を訪はねば恥として、一代の內に之れを果すを例とした。亦各地に旅行を目的とする○○講と呼ぶ團體が起つて、遠地の寺社の參詣を盛んに行ふた。尙ほ又當

時文人墨客は遊歴と號して各地に其の藝を賣りあるいた。種々の研究などを目的として歩るいた人の内には、地理研究或は測量などの爲めに歩るいた人もあるが、尤も足を勞したものは蓋し僧侶であつたらう。僧侶は宗教上の戒から、山野跋渉を苦難の業として行ふた、例へば高野山あたりで阿闍利となるには幾年か毎日山を上下するの勞を積まねばならなかつた。又山伏など云ふものも、其の名稱のごとく、山中生活で天狗と健脚を競つたものとも思へる。兎角日本のどんな高山峻嶺に行つても、浮屠氏の足跡を印しない所は無い、神宮は必らず山麓にあるが浮屠氏の寺は山上にあり、奥の院と唱ふるものは山頂の尤も峻嶮の處にあるを例としてゐる。如何に佛徒が健脚であり、それが爲めに身體を鍛へて剛健であつたかゞうなづける。日本の多くの高山に道をつけたものは何人であるかと問はば、それは歩を厭はぬ僧に因ると云はねばならぬ。今は機械萬能で都會人の如きは僅かに家を出れば電車あり自動車あつて、行くも歸へるもこれに乘つて些しも足を勞することが無い。學校に通ふ學生も工場に行く勞働者も皆な此の機關に依るから、都會人は身體に運動を缺き、虚弱となりつゝあつて、戰場に臨んでも都會人は落第である。殊に山嶽地帶では物の用に足らぬことは今次の戰爭の實蹟に就て明かである。今やあらゆる事の體制を調へんとする場合、歩行奬勵の如き差當り交通機關の充溢を緩和する

爲めにも必要を感ずる。所在「歩るく會」が起り「歩るけ歩るけ」の歌の行はれ出したのも偶然でない。學校通ひの兒童の如き、先づ乘車を用ひないことにするが、此際に行ふべき喫緊の體制であらう。

スパイの今昔

防諜デーと云ふ日、間諜に油斷するなとラジオなどで宣傳してゐるので、昔しの間諜の事を思ひ出して見るのも一興たらずとしない。戰國時代互ひに敵狀偵察の爲め探偵を放つたことは勿論だが幕府が諸藩の動靜を探偵する爲めに行はれ、維新後も不平分子の動靜を知るために政府が行つた。今までのは皆な内地に行はれた偵察であつて、昔しは隱密と云ふた。自分は餘り此等の事實を多く知つても居ないが、徳川時代將軍家から誰れかに隱密を命ずると、命を受けたものは、家にも戻らず目的地に出發したと云はれ、變裝の必要あるものは、大丸呉服店などがそれを辨ずる所であつたと云はれる。北條時賴や水戸の光圀の微行の旅なども一種の隱密的

行爲と見るべきものであらう。又石川丈山などが京都に高臥したのも幕府の隱密であつたと云はれてゐる。維新匆々の頃、隱密がしきりに行はれ、相當の人物が姓名を變して方々を徘徊して豪家に寄寓して偵察をやつたことは、幼少の頃自分も知つてゐる。薩摩の武士で貴正と云ふ人が和歌や書をよくした人で、遊歷と號して自分の家に宿つてゐたが、此人などは確かに隱密であつた。多分會津の動靜を探る爲めであつたらう。其頃越後へ來た文人で其の紀行文は版に刻されてもゐるが今も其の本名の知れない人もあり、水原府が開けてからも、監察局などが置かれたが、偵察が重なる仕事であつたやうに思はれる。薩摩や佐賀萩などの亂の起る前にも偵察がしきりに行はれ、立派な人物が西郷や前原などと直接談合して、夫れとなく動靜を探つたこともある。斯る探偵政策は往々其爲めに刺戟を受けて亂を起した嫌がないでもないと思はせた位で、隱密の爲めに陷られた例もあるであらうと思ふ。幕末に倒幕勤王志士が奮起した時、幕府の捕吏が如何に活動したかは暗殺の頻々として起り、志士が身の置き所もなく、木戸公などが乞食にまで變裝して韜晦した一事に就ても想像が出來る。日清戰爭の前某友人が支那にゐて、或る日本軍人の麾下につき、定遠鎭遠の圖を模寫した事實などは、正しく軍事探偵の行動であつて、隱れたる彼の手柄であるが、彼れは此の圖を模寫してゐる間に、事が發覺すれば、

爆彈を拋つて圖と共に爆死を覺悟して、常に爆彈を左右に置いたと嘗つて彼れの直話を聞いたことがある。日露の戰爭の起る前に露將が長崎に游んだ時、某妓樓の女將が、露將に情交を許し、露國の他日の動靜を知つたことなども軍事探偵の行動である。此の妓樓に仕へた或る男子も軍事探偵であつたらしいが、露將退去の後、何れともなく立去つたと云ふ事實もある。日露の戰役に沖禎介等が鐵橋を絕つて露軍を阻止せんとして遂に果さず、露人に銃殺された顚末は委しく知つてゐるが、こゝに細說を避ける。スパイは自國の爲めにするものは不名譽でないが敵方の爲めにするスパイは許しがたい不名譽である。長田秋濤が露西亞のスパイと云ふ嫌疑を受けた時、秋濤を知る自分が當該裁判官に、內々分疏して如何に骨を折つたかを此場合思ひ出す。

戰國時代に日本の諸藩が國內の事情の外に知れることを恐れて封鎖的手段を取つたことに就てもいろ〳〵書くべきものがある、領內の地理を嚴祕に附したことも一例である。九州邊の諸國には地誌や地圖の刊行されたものが極めて少ないのも此故である。あの頃幕府に於ても詳細の地圖を發行すると直ちに絕版を命じた。どこにも委しい地圖はなかつた。大體僧侶はどこに流れこんでも九州邊には入ることが出來なかつたと見へて、藤澤の遊行寺僧だけが

木戸御免であつたと云はれ、全國の內情を心得てゐたものは此寺の僧に限ると云はれた。虛無僧などは面を掩ふて尺八を吹きながら各戸を訪ふて歩くものだが、あれらも探偵に恰當のものであり、事實探偵もあつたに相違ない。

耶蘇教禁止の長い間、其の取締に斯教流布の地方では違犯者を取締るに窮して、工夫したのは踏繪を人每に踏ませることであつた。何分にも精神上のことであるから、偵察は此の外に無つた。

昔しは隱し目付があり、其元に與力同心があり、其下に手代などがあつて、犯罪を探偵して多くの場合要領を得たが、これ等は今の警視廳下の探偵であるが、モツト大きくスパイをやつたものに、いろ〳〵の人があつて荷田春滿のごとき聞こえた學者も、赤穗浪士が打入る前に仇敵が家に在るか否やを知ることが尤も大切であつたが、春滿が大石に內報した書面をいつか目睹したことがある。

說客へス虎穴に入る

昔し支那の戰國時代に才辯あるものが四方に遊歷して合從連衡を說きまはつた。これを說客と呼んだが、實は高等スパイの如きものであつた。日本にも此說客が維新混亂時代にあつて、相當位置ある人が身を挺して西鄕などに面接して盛んに議論をしたことがあつて、其の筆記を一覽したこともある。これも偵察の一手段で、互ひに議論を戰はしてゐる間に自然相手の胸中祕を看破することも出來るので、說客は一種のスパイと云へ得る。昨今世上の談話を賑はしてゐる、獨の副總統格のヘスが身を脫して敵地に赴いたのは、其の本意何れに在るか判然しないが、彼れは理想家で、英國に和を說き成功を信じて敵地に飛び込んだと云はれる。彼れも亦一種の說客で高等スパイと見做さるべきものであらう。勿論本國の同意を得た譯でもなく、ヒツトラーと內々計畫的の行動でないにしても、彼れが狂人でない以上は、矢張死地に投じて虎の子を得んとした說客と見ることが出來よう。スパイにもいろ〳〵の相貌がある、其の稀有の一

例とするに足る歟。

探偵趣味

探奇獵異は人間の本能的趣味ともいふべきもので、意識しないでもこの趣味は何人にも潜在してゐる。人は意外のことを面白がる、人は祕密に耳を傾ける、人は犯行を探りたがる、人は冒險に興味を感ずる。犯罪には多くの場合女が纏綿する、冒險には往々義俠が伴ふ、ローマンスもありトラジデーもある。人の本能の動くのも偶然でない。婦人と犯罪の書物の割合によく賣れるもこの故である。多くの小説が題材を婦人と犯罪に取るのもこの故である。活動寫眞に探偵の喜ばるゝのもこの故である。かつて探偵小説家江戸川亂歩の探偵隨筆「惡人志願」と云ふ書を讀んで見るに人事のあらゆることを探偵の範圍に籠蓋してゐる、人と人との應對も互の胸の探り合である政治でも外交でも軍事でも實業でも探偵を離れたものはないと云ふてゐるが、一概に非とすることは出來ない。探偵と云へば犯罪捜索にのみ限るやうに普通解せらるゝけれど

も、廣い意味で言へば、探査である、稽査である。何事に處するにも多少の探査を要することは勿論であるから、探偵小説家の見解も敢て不當でない。如何なる人にも猜疑心があり疑念がある。隨つて探りを入れることは日常免れない常套事である。小説に仕込まれた探偵談は、奇異の最も高調に達したものであるから、巧みに書かれたものは、その趣向が奇拔であればあるほど讀者を緊張して卷を終るまで熱中せしむる。卒然として思へば不可解の事も解釋がつき、荒唐無稽の事が合理となる。近世の科學思想を應用しての構思だから、それが持て囃さるゝのも無理は無い。科學の無かつた昔において今日のごとき合理の探偵小説は無かつたにせよ、今言ふ探偵趣味の籠つた物語りや小説は決して少なくなかつたのである。復讐物語や御家騒動ものゝ浪人物語、武者修行俠客傳や、駈落物語、窃盗傳などは多くは常經を外れたもので探偵趣味が伏して人の興味をそゝつてゐる。これ等の物語や小説には今の探偵小説家が題材にしてゐるものが少からず具つてゐる。其れ等を蒐集して探偵用語辭典でも編纂したら興味があるであらう。

「春城談叢」終

18102

昭和十七年七月二十五日初版印刷
昭和十七年八月　十　日初版發行　（三千部）

出版文協承認號
あ10092

東京市立図書館蔵書

春城談叢　㊞　定價參圓

著者　市島春城（いちじましゅんじょう）

發行者　東京市京橋區横町三ノ五　福田喜三郎

印刷者　東京市牛込區鍋天町一〇八　塚田秀

配給元　東京市神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社

發行所　東京市京橋區槇町三ノ五　千歳書房
文協會員一一七、五二一
電話京橋(56)一、七八八
振替東京八、七七五

（東263）

昭和十七年七月一日　印刷
昭和十七年七月二十日　發行
（定價三十錢）

著者　千葉　哲
東京都豐島區目白町一丁目一八番地
發行者　日本出版配給株式會社
東京都神田區錦町二丁目
印刷者　藤田喜三郎
東京都小石川區表町一〇一番地
發行所　藤田書店
東京都豐島區目白町一丁目一八番地
電話小石川（八八七）一二三番
郵便振替口座東京一六〇三二番

（東京二〇三）